

Ice Time

アイスめえん

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

属性使いは総じて強キャラが多い……………筈！

目次

プロローグ

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

16

17

18

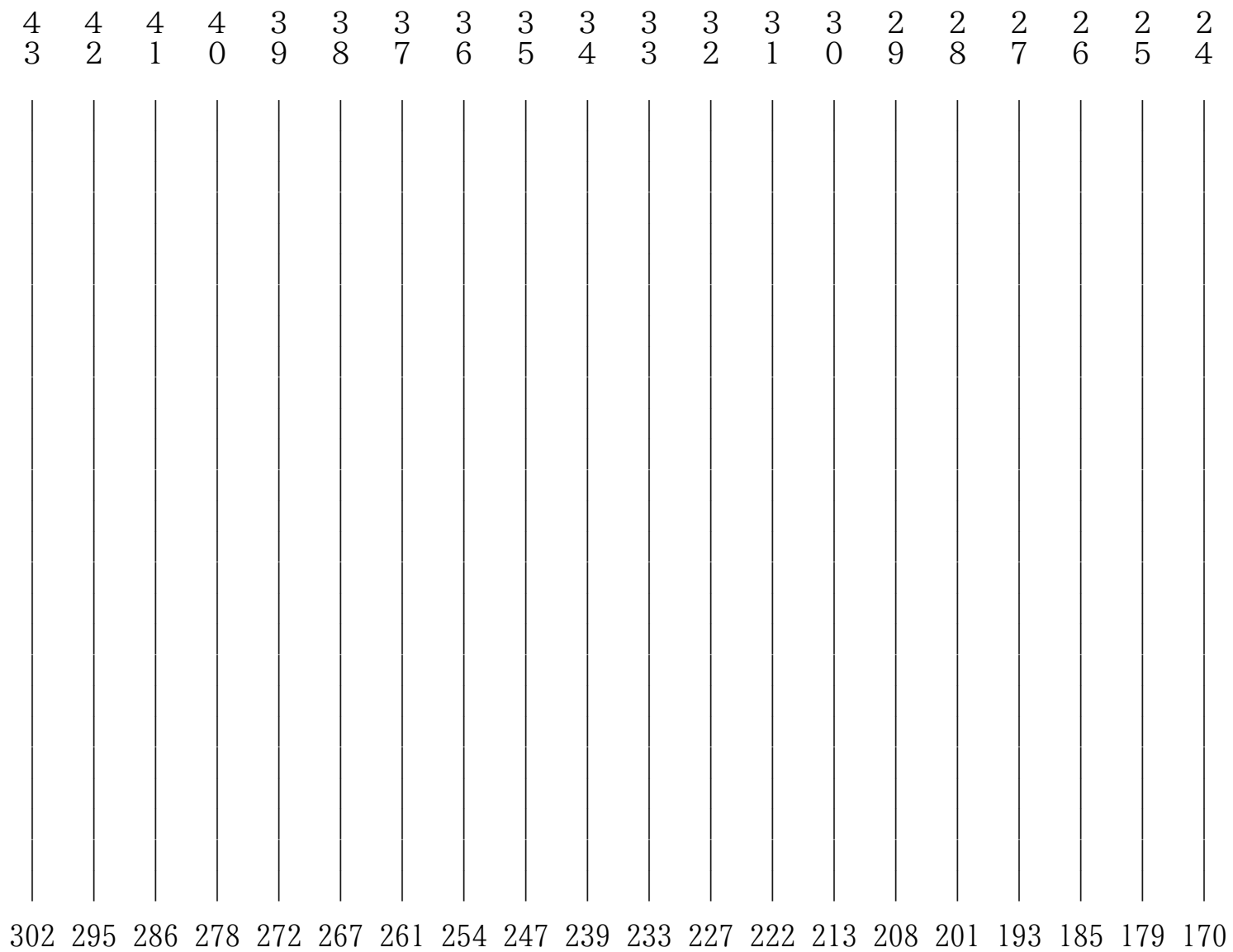
19

20

21

22

164 158 151 144 138 129 116 109 104 98 92 87 81 74 67 61 54 46 33 24 17 10 4 1



## プロローグ

「——えつきしつー……………さぶい」

鼻をすすりながら、首に巻いたマフラーに顎を埋めるようにして少年は襲い来る寒さに体を震わせた。

しかし、今が冬という訳では無い。カレンダーを見れば、五月の中旬。コートは愚か、マフラーなど巻いている人間など先ず居ないし、何なら初夏の季節という事もあり場合によっては半袖が役立つ時期でもある。

でありながら、その少年は通っている高校の学ランにマフラーを巻いており、その鼻の頭は赤くなっていた。小刻みに震える体が、その恰好が単なるポーズではないという事を表している。

実際の所、彼の体は冷え切っていた。それはもう、氷のように。

「オ、オオオオナカ、カカカスイタアアア……………」

「コキキキキ……………」

そんな少年の道を塞ぐように現れたのは、二対の怪物。

片やそら豆のような形をした肌色の肉の塊に、ボロボロになった歯をもった大きな口と白濁した目。赤ん坊のような発達していない手足を付けたようなモノ。

片や巨大な蠅螂のような見た目をしながら、四本の鎌と、ムカデのような口を備えたモノ。

この世の物とは思えない化け物たちを前に、しかし少年は背を縮こまらせるばかり。

「……………早く帰りたいから、退いてくれないかな」

言いながら、少年はポケットに突っ込んでいた右手を持ち上げその手のひらを怪物たちへと向けた。急激に冷やされた空気中のチリが、陽光に反射して光り輝く。

放たれるのは、極低温の冷氣。さながら、ブリザードのように広がり怪物たちは一息に飲み込まれていた。

白が駆け抜けた後に残るのは、氷の彫像。蒼い氷に全身を包まれ拘束された、哀れな怪物たちがそこに在るだけだ。

「ごめんよ。オレとしても、早く帰りたいからさ」

指のスナツプが一度鳴らされれば、途端に氷に亀裂が走り中身ごと粉々に砕け散る。

道路に砕け散る氷屑は、しかし解けるのではなく昇華するように中身ごと消えていった。跡の道路に水滴が残るような事も無い。

「……………つぷしー……………ううつ、寒い」

冷え切った右手をポケットに収めなおした彼は、マフラーの下で再びくしゃみする。厚手の生地 of 藍色のロングマフラーを二重にしていても、寒い物は寒いらしい。

体を大きく震わせて、彼は足早に帰路についた。

ただ、その歩みも十歩進んだかどうかという所で止まってしまふ。彼の足を止めたのは、道の真ん中で道を塞ぐように立つ少年のせいだ。

年のころは、冷えている彼と同じ位だろうか。深い紺の制服に黒い髪。仏頂面で、それでも真っ直ぐに最早睨みつけているといつても良い様な目つきで見えてきていた。

「ここら辺の呪霊を祓ってたのは、お前か？」

「……………じゅれいつて？」

「素人か……………呪霊って言うのは、お前が今氷漬けにして祓った奴らの事だ」

「！あの怪物には、名前があつたんだね……………成る程、呪霊か。君も見えるんだ」

「ああ」

「そつか……………初めてだな。オレの周りじゃ、こんな怪物たち見える人なんて居なかったから」

「だろうな。呪霊が見えて、触れて、祓える人間は少ない」

「少ない、ね……………それじゃあ、君の他にも……………つくし！」

「……………風邪か？」

「スンツ……………いや、ゴメン。力を使うと、体が冷えて仕方が無いんだ。そのせいで、年がら年中オレはこうしてマフラーを巻いていなくちやいけないんだけど」

寒くてさ、と彼は苦笑いを浮かべた。お陰様でと言うべきか、生まれてこの方半袖を一度も着たことが無い。夏場ですらも、場合によってはコートを羽織る事になる程度には体が冷えていた。

一方、相対した彼はとある可能性を頭に思い浮かべていた。

(天与呪縛、か？ 禪院先輩と似たようなもんだろ)

実戦経験も多く、指導を受けてきた彼の目から見てもマフラーの彼の力は目を見張るものがあつた。

純粋な出力も然る事ながら、威力、攻撃範囲共に優秀。周囲への被害も見られず、制御に関しても随分と優秀。

「……………とりあえず、時間あるか？ 会ってほしい人が居るんだが」

「え？ ああ、まあ……………じゃあ、オレの家に来る？ もう、日も暮れるし」

「良いのか？」

「うん、問題ないよ。オレは、一人暮らしだからさ」

「一人暮らし？」

「そうそう。ほら、オレってこんな体質だからさ。両親も気味悪がつてて高校に上がると同時に家だけ用意されて追い出されちゃった」

参つたよ、と笑うが普通は笑い事ではない。

「なら、お邪魔させてもらう。客が増えても大丈夫か？」

「大丈夫だって。まあ、そんなに広いアパートじゃないから少し狭いと思うけど……………あ、そう言えば」

「どうした？」

「いや、名乗って無かつたな、と思つてさ」

そう言うと、マフラーの彼は目を細める。

「オレは、雨里。うりきょうへい雨里京平。君は？」

「伏黒恵」

「そっか……………よろしく、伏黒君」

マフラーを少しずらして笑つた雨里に、伏黒は目を細める。

善人だ。呪霊に対する容赦の無さこそあるものの、穏やかな物腰は少なくとも彼の頭にある善人像にも上手く合致した。

それから数時間後、伏黒は後悔する事になるのだが、それはまた別の話。

道での邂逅を経て、雨里に案内される形で伏黒が辿り着いたのは年季を感じさせるアパートの角部屋だった。

曰く付きだったから安かったんだ、と雨里は事も無げに語るが憑りついていたのは幽霊ではなく、呪霊であった。

もしも、この部屋に住んだのが雨里でなかったならば被害の拡大につながっていたかもしれない。最悪、アパート一棟丸ごと呪霊の餌場になっていたかもしれない。

何はともあれ、招かれた室内は住民である彼の申告通り、狭い。

1Kの間取りだ。扉を開ければ台所スペースが確認でき、トイレと洗面台、風呂場が分れているだけマシといった感じ。

部屋の内装にしたってミニマリストという訳では無いだろうに、置いてあるものは最低限。変わっていると言えば、この時期までベッドの側に小さいながらも炬燵が置かれ、更にその隣には電気ストーブが置かれている点か。

普通ならば、直している品々だろうが雨里は迷うことなくストーブと炬燵の電源を入れていた。

「暑くなるかもしれないけど、御免ね。これ位してないと、寒くてさ」  
「……………いや、構わねえよ」

伏黒としても、彼の行動を咎める気は無い。というのも、この部屋に辿り着くまでの道中で彼の手を握らせてもらったのだ。

まるで、冬場の冷水のような冷たさだった。しかもそれが指先だけでなく、体を全体的に冷やしてくるのだから恐ろしい。

「お茶で良いかな？」

「いや、そこまでは……………」

「せっかくのお客様だからね。少しはもてなしの二つさせてよ」

そこまで言われれば、固辞する事が逆に失礼。少なくとも、伏黒はそう考え至り大人しくベッドとは反対側の炬燵の辺に腰を下ろした。

夜が近づいているとはいえ、流石に五月に炬燵の中へと足を突っ込



む気にはなれず少々座りにくそうに、彼は正座する。

程なくして、ガラスのコップに麦茶を、片や湯呑に湯気の立つお茶を注いで雨里は部屋の中へとやって来た。

「……………」

「どうかした?」

「…………いや、俺の方にも熱い飲み物が来るもんだと思ってな」

「ああ…………確かに、オレは熱いものの方が好きだけどだからといって、辛い物を食べながら熱いものを飲む、何てことはしないよ。飲み過ぎると、冷え過ぎちゃうけど」

そう言つて、湯呑を両手で持つて指先を温めている雨里は少し困つたように笑つた。

凡そ、十五年だ。それだけの時間、彼は己の体質とこうして付き合つてきた。それだけの時間があれば、ある程度は割り切れるようになるし、自分で自分の限界点も分かるというもの。

「それでえつと…………伏黒君」

「何だ?」

「その、呼んだ先生?…つていつ来るのかな」

「一応、住所はメールで送つた。ただ、忙しい人だ。どれだけかかるかは、俺も分からない」

「そつか…………」

「…………聞かないのか?」

「何が?」

「呪霊について、とかな。普通は、気になるもんだろ?」

「そう、だね…………うん、普通は気にするのかもしれない」

湯呑を置いた雨里は、少し目を細めて炬燵の中へと両手を突っ込む。

「でもね。もう、十年以上経つてるんだ。今更聞いても、ね?」

疲れたような笑みだつた。事実、彼は精神的に疲れているのだから。

幼い頃から呪霊が見えた。幼い頃から夏場であつてもまるで真冬のような寒さを味わい続けた。幼い頃から異能が使えた。

幼少期からの理不尽に対して、人は幾つかの反応を示す。

一つは、怒り。長年の不条理に対する感情。一つは、無視。ストレスによる自己へのダメージを緩和するための無意識な逃避。一つは、諦観。諦める事で全てを受け入れ飲み下す。

雨里の選択したのは、三つ目だった。

彼は、既に諦めた。その上で、全てを受け入れることにしたのだ。

両親からの理解、周囲からの理解、それら全て一切合切を諦める事で雨里京平という少年は、自分の人生に折り合いをつけていた。

暗くなつた部屋の空気。

「ははっ、あー、ごめん。別に、伏黒君を責めるわけじゃないよ。オレ自身、納得した上で呑みこんだんだから。どうあれ、体質や力との折り合いをつけるにはこうするしかなかったからさ」

「……………」

改めて、目の前の雨里を見た伏黒は、自分が他と比べても恵まれているのだと思えた。

彼も彼で壮絶な人生を歩んできた。だが、側には姉が居たし苦手であつても同族も居た。一人ではなかった。

だが、雨里は違う。この年になるまで同じく力を扱える人間とは出会つたことが無く、近所の人間は愚か家族からすらも疎まれている。

そこまで周りから悪意を向けられれば、人格が歪み切つてもおかしくはない。そして、己の力を誰かを傷付ける事に使う可能性も十分にあつただろう。

それでも、そんな被害が出ていないのは偏に彼自身の善性によるものと言ふ外ない。

「……………雨里」

「うん？なんだい？」

「お前は、呪術師に成る気はあるか？」

「呪術師……………呪霊と戦う人たちの事だね。伏黒君もそうだった」

「俺は、まだ高専の生徒だけだな」

「高専、高等専門学校かな。専門職なら、当然の措置だよ」

「お前が呪術師に成るなら、そこに通う事になる。東京と京都の二ヶ

所。雨里なら、前者だな」

「東京かぁ、都会だね……………呪術師、か」

自分の力の正しい使い方なのだろう、と雨里は何となく考える。いや、自分の力の使い方に正しいも何も本来は無いのだが。

やろうと思えば、雨里は両親は愚か街一つを氷漬けにすることが出来ただろう。

しかし、しなかった。

伏黒は、これを善性だと考える。だが、当人からすればまた別だ。純粹に自分の手を汚したくなかった、その一点に限る。勿論、見ず知らずの他人をその手に掛ける事に抵抗があった事は否定しないが、それでも大元を辿れば、その理由に帰着する。

「オレに務まるとは、思えないけどな……………」

自分の卑怯とも言えるような計算高さを自覚するからこそ、雨里の反応は悪かった。

呪霊を祓う理由といえば、目の前の道を遮られるだとか、襲われるだとか自分に関係したものであったから仕方なくだ。

それが仕事となり、自分以外の人間の為に呪霊と戦う事になる。果たして、その結果モチベーションが持つだろうか。

呪術師に成るかは、雨里の決める事。伏黒からは、これ以上何かを言い募る気は無い。

結局、そこで呪術師に関する話題は打ち切った。後は、趣味の事であったり、学校の事であったり他愛のない話ばかり。

そうして時間が流れれば、夕飯時。

「簡単なもので悪いけど」

「……………ラーメン、か？」

「麺はインスタントだけど、スープとトッピングは自家製だよ」

丼と、片手鍋をそれぞれ伏黒、そして自分の前に雨里は置いた。

促されるままに、一口含んだ伏黒はその眉を少し上げる。

「……………旨い」

「それは良かった。オレは、体質柄冷たい食べ物は食べられないからさ。こんな事ばかり凝っちゃうんだ」

笑いながら、雨里もまた麺を啜った。

冷え続ける体ゆえに、冷たいもの。或いは体温を下げてしまう食べ物、あまり食べられない。逆に、なべ物や辛い食べ物、温かい物を基本的に彼は食べている。

男子高校生の食欲ならば、ラーメンの一杯など直ぐに終わってしまう。程なくして丼と鍋はそれぞれ空になっていた。

「悪いな、晩飯まで」

「いや、オレが自発的に出したものだからさ。気にしなくていいよ」  
鍋と丼を手際よく洗って戻って来た雨里に伏黒は、頭を下げる。

やってもらって当然な事など、無い。仮に相手が自分からもてなしてくれたとしても、感謝の気持ちを伝える事は大事なのだ。

そうして時間は流れ、夜も更けてきた頃唐突にインターホンが鳴る。

「待ち人来たれり、かな?」

「お前に、客の予定がないならな」

「無いよ。オレの部屋にこんな時間に訪ねてくる客の予定何て」

言いながら、こたつより立ち上がった雨里は玄関へと向かう。伏黒も続こうとしたが手で制されていた。

果たして開かれるドア。その先に居たのは、全身黒尽くめに目隠しを付けた不審者だった。

「……………」

無言で、雨里は扉を閉める。自分の見たものが、未だに信じられなかったから。

後ろを振り返って目で問えば、その目は逸らされてしまっていた。観念して、彼は再び扉を開ける。

「えー……………貴方が伏黒君の担任の先生、ですか?」

「そうだよ。閉められちゃったから、どうしようかと思ってたんだけど。まあ、良い夜だね」

言いながら、不審者は扉の縁へと手を掛けて部屋の中へと入ってくる。

百七十センチ後半の雨里が見上げるほどの身長差。自然と威圧さ

れるというもの。

「……………狭いですけど、どうぞ」

「うーん、僕としてもそうしたい所なんだけど……………」

そこで言葉が切られ、目隠しを付けた顔が雨里へと近づけられる。

「驚いたよ。このレベルの呪力の持ち主なのに、今の今まで埋もれていたなんて、さ」

「はい？」

「恵にある程度の話は聞けたんだけど、都合が変わった。僕としても君をこのまま在野に放っておくのは無理かな」

「五条先生！雨里の意見は——」

「恵も分かるでしょ。彼の呪力はかなり強いよ。オマケに術式も相当強力。このまま、一般人の生活を続けるのはまず不可能。遅かれ早かれ、こつちに巻き込まれるだろうね。寧ろ、今までは運が良かったとしか言えないよ」

自分を置いて進んで行く話。雨里は首を傾げるしかないが、伏黒が何処か悔やむ様な表情をしているのが気にかかった。

それでもやはり、当人であるのに彼は蚊帳の外。

「とりあえず君、これから高専に転校しよっか。手始めに」

「……………はい？」

「……待ってください!」

事態が一気に転がり始める前に、伏黒は声を上げていた。

自分で呼んだ手前、強く言うのはどうかとも彼自身思うのだが、それでも呪術師に成るかどうかは雨里の判断に任せたいというのが本音。

「なに、恵」

「性急すぎます。何より、雨里の返事を聞いてない」

「そうも言ってもらえないよ。さつきも言ったけど、このレベルの術師が今の今まで見つかって無い事が最早奇跡と言うか、ある種の怠慢なんだよね」

「だからって……」

「第一、恵も気づいてるでしょ。このまま問題を先送りしても、もっと面倒なギャラリーを呼び寄せるだけだつてさ」

「……………」

五条にここまで言われて、伏黒は唇をかむ。

一端の呪術師として、彼もまた雨里の中に宿る力を感じ取ってはいる。そしてそれが、この先も強くなり続ければ個人の力ではどうしようもなくなる事も。

最悪、呪詛師として命を狙われる可能性が無きにしても非ずという事も、彼は理解していた。

黙ってしまった伏黒から視線を外して、五条は未だに頭にハテナを浮かべた雨里へと視線を向けた。

「えっと、君の名前は？」

「……………雨里、雨里京平です」

「そっか。それじゃあ、京平。転校の手続きをしようか」

「……………さつきも言っていましたね。急すぎませんか？」

「むしろ、僕としては遅すぎると思うよ。だって今も、ギリギリでしょ呪力抑え込んでるの」

「さて、何の事ですかね」

「残念だけど、こっちとしても話し合いでどうこうできるもんじゃないんだよね」

「……………」

飄々とした態度のままの五条に対して、雨里は目を細めると背中側に回した左手より僅かに冷気を流し始める。

彼のスタンスは、今の所専守防衛。相手が仕掛けてこなければ、自分から仕掛ける事は少なくとも人間が相手ならば、無い。

ただ、今回に限れば自分からさっさと仕掛けるべきだった。それこそ、周囲への被害を度外視した範囲攻撃、もとい部屋丸ごと凍結させる位はすべきだった。

「……………遅いね」

気付けば雨里の額に添えられている五条の指先。瞬間、彼の意識は暗転する。

崩れ落ちる雨里の体を小脇に抱える五条。そして、そんな担任へと伏黒は胡乱な目を向ける。

「……………強引過ぎませんか」

「かもね。本当なら、もっと相手の意思を尊重すべき……………何だろうけど、やっぱりそうも言ってられないかな」

「雨里の術式は、そんなに強いんですか」

「術式だけじゃない。呪力の量も半端じゃないよ。元々の素質だけじゃない、彼何か言ってたなかった？」

「……………体が冷えるって事位です」

「それだ。京平の天与呪縛は冷え続ける体。その代わりに、術式の精度と完成度がずば抜けてる。呪力に関しては……………まあ、今までのストレスかな」

五条の言葉に、伏黒は思い当たる節がある。

十年以上のみ込み続けた、不平不満とストレスの塊たち。呪力は、負の感情より発するエネルギーだ。その全てが呪力へと変換されて蓄え続けられてきたのならば、相当な量と言えるだろう。

「天与呪縛のお陰で、制御が間に合ってもこれから先で呪力の量が増えていけば間違いない抑えきれない状態になる。そんな状態で

力を振るえば、待っているのは暴走。最悪、街一つが凍り付いてもおかしくないね」

「……雨里の術式ですか？」

「そ。凍結呪法って言うべきかな。対象を凍り付かせる呪術で、割とポピュラーだね。本来なら、攻撃能力もそこまでのない術式なんだけど、ここで京平の天与呪縛が絡んでくるって訳」

「……………」

「納得できない？でも、こればかりは恵が相手でも曲げられないかな。彼の為でもあるからさ」

ぼん、と気絶した雨里の背中を、五条は軽く叩いてみせた。

非術師の家系に生まれた故に冷遇される術師は珍しくない。その結果、歪みが生まれる事も五条はよく知っていた。

\*

日本の主要機関のほぼすべてが集中する場所、東京。

大都会、の印象が強いがその実郊外ともなれば未だ自然の残る場所も珍しくはない。

「……………」

「ほらほら、早く行くよ京平」

気絶から目覚めた雨里は、あれよあれよと流されるままにこうして寺の山門のような校門の前にまで辿り着いていた。

「ここが、呪術高专ですか？」

「そつ。日本国内にも二校しかない片割れだよ。恵には、どの程度説明を受けたかな？」

「……もう一つの呪術高专が京都にある位、ですかね。呪術も、呪術師に関しての説明はほぼ受けてませんよ」

「そつか。まあ、呪術師っているのは、呪術を使って呪霊を祓う職業なんだけど……………その数は圧倒的に少ないんだ。この辺までは大丈



夫？」

「ええ、まあ……………」

「それは重畳。そんな数の少ないからこそ、呪術師は常に人手不足。だからこうして、力を持つてる人間をスカウトする事も珍しくないだけだよ」

「……………いつもこんなに、強引なんですか？」

「いいや？最終的には、呪術師になってもらいたいとは思ってるけど、ここまで強硬策をとる事は基本的でないよ」

「……………」

「じゃあ、どうして京平の件はこんなに強硬策で出たのか。答えは簡単、君の力が単純に個人の段階で留めきれなくなる可能性があったから」

「……………暴走するど？」

「そう。そして、術式が暴走した結果一般人を手に掛けた場合、君は呪術界全体からお尋ね者、呪詛師として追われる事になる」

「呪詛師？」

「呪詛師って言うのは、非術師を呪術を使って呪った人たちの事。事故だった場合は、情状酌量の余地があるかもしれないけど、君は無いだろうね」

「何ですか？」

「強いから。どの世界でも言える事だけど、上層部って言うのは権力が大好きなんだよね。そして、自分の今の地位を守る為に必死だ。そこに、自分の地位を脅かすような存在が現れちゃったら、飼い殺しにするか或いは、秘匿死刑だろうね」

「……………」

五条の言葉に、雨里は露骨に顔を顰めた。

今も、納得はしていない。していないが、ここまで言われてしまうと最早なるようになれと開き直らざるをえなくなる。

元々諦める事で自衛してきた男だ。この辺の切り替えも早い。

「……………秘匿死刑って……………許されるんですか」

「許す許さないの話じゃないんだよ。京平も自覚あるでしょ。生半可

な銃火器よりも、呪術は強いって」

「それは……………」

「ハッキリ言って、呪術で人を殺すのは息をするのと同じぐらいに簡単だよ。当然だよ。非術師よりも遥かに頑丈な呪霊にぶつ放すよ  
うなモノなんだから」

「だからって……………」

「だからこそ、だよ。呪術師を始末できるのもまた、呪術師って事  
さ、着いたよ」

話し込んでいたからか、雨里が気が付くよりも先にその足は止まっ  
ていた。

そこは、お堂のような建物。扉を開ければ、中は薄暗くろうそくの  
明かりが揺らいでいた。

「遅いぞ、悟。六分遅刻だ」

「まあまあ、そう言わないで。ほら、京平。挨拶、挨拶」

「あ、えつと……………雨里京平です」

「君が……………悟からの連絡である程度は聞いている……………その厚着  
は、君の天与呪縛か？」

「てん……………まあ、はい。オレは、真夏でも真冬みたいに体が冷えてし  
まいますから。あ、脱いだ方が良いですかね？」

そう言う今の雨里の恰好は、丈の長い厚手のモッズコートにいつも  
巻いているマフラー。スノーブーツという真冬のようなもの。五月  
の気候にはそぐわない。

「いや、構わない。動きに支障が無いのなら、な」

「動き……………」

「君はなぜ、呪術高専ここに来た？」

「え……………ッ！」

突然の問いに、雨里の思考が止まる。だが、その直後にほぼ反射的  
に彼はしゃがんでいた。

一拍置く事無く、先程まで雨里の頭があった場所を何かがあるすご  
いスピードで突き抜けていく。

突き抜けていった何かへと目を向ければ、視線とかち合うつづらな

瞳。

「ぬい、ぐるみ……………」

「それは、呪骸と呼ばれるものだ。さあ、質問に答えてもらおうか」  
問いのままに合わせるように襲い掛かってくる呪骸。

一瞬、五条へと視線を送った雨里だったが、助けてくれることは無いらしい。

どうにかこうにか回避だけに絞って躲しながら、雨里は頭を回す。もつとも、分割思考などろくにしたこともない為出来るはずもなく、呪骸の対処に追われていくことになる。

「ふう……………」

息を大きく吐き出して、体の力を抜く。イメージするのは、風に揺れる柳だ。

二度、呪骸からの突撃を躲した。そして、三度目の突撃に合わせて動く。

「——止まってね」

横をすり抜けるようにして、そのやわらかな表面を撫で一息に凍結させていく。

まるで冰山の中に押し込められたように呪霊は、その動きを止められお堂の床を滑って暗がりへと消えていった。

空白が、ここで生まれた。未だに戦闘に際した状態の雨里の頭はこのタイミングで勢いよく思考を回す。

五条に、無理やり連れてこられた。そう伝えれば、良いのかもしれない。だが、この案は雨里自身が思い浮かんだ時点で却下していた。

ここまで来たのだ。最早、雨里に呪術師に成らない選択肢はない。ならば、呪術師を続けるだけの理由が無ければいけない。

思い出すのは、このお堂に来るまでの五条との会話。彼は態々、術式の殺傷性に関して説いてきた。であるならば、呪術師とはそういう事も求められるという事は考えずともある程度把握できるだろう。

人を殺すだけの覚悟。それはそのタイミングにならなければ抱けるかどうかは分からない。だが、予め自分の中である程度の下地を整える事は出来る。

では、自分はどうするのか。

「―――必要な時に、必要な動きを実行する為に、ですかね」

「ほう。その心は？」

「こうして、力を持っているなら遅かれ早かれ巻き込まれる、と言われました。だったら巻き込まれた時、オレ自身が後悔しない選択を出来るだけの力が欲しい。そう思います」

全てを諦めるからこそ、諦める為の選択が必要になる。

「……………良いだろう、合格だ。ようこそ、呪術高専。俺は、夜蛾正道。ここ呪術高専の学長をやっている」

「あ、はい。よろしくお願いします」

「ああ。後の案内は、悟に任せている。そいつの指示に従ってくれ」

「分かりました……………よろしくお願いします、五条先生」

「オツケー。と言っても、寮に案内するだけなんだけど。授業に関しては明日からね」

「はい」

未だに嗅ぎ慣れないニオイ。鼻孔を擦ったそれに、雨里はゆつくりと瞼を開けた。

冬用のシーツに、羽毛布団、毛布まで重ねて湯たんぽを足元に仕込んだベッドの中で丸くなっていた彼は冷える体に鞭を打って、どうにかこうにか起き上がる。

彼が目を覚ましたのは、割り当てられた寮の一室。空き部屋が多いという事で一番日当たりのいい暖かい部屋を割り振ってもらったのだが、如何せん起きたのは朝の六時。日差しに関してはまだまだ期待できる時間ではない。

「へっぷし……………寒いなあ」

カチカチと歯の根が合わない冷えに鼻を吸って、雨里は足元の電気ストーブへと電源を入れる。

正直な所動きたくないというのが本音ではある。だが、動かなければ自分自身の後々に支障を来す為に動かなければならない。

芯まで冷える体を無理矢理動かして、ストーブが本調子を發揮するまでに一気に着替えていく。ここで役に立つのが、長年の経験というもので雨里は下着の類をベッドに仕込むようにしていた。

布団の温度で温められたヒート○ツクを二枚重ね。冷える前に貼るカイロを背中に張り、トレーナーを着て制服の上着を羽織る。ズボンも厚手の生地に変えられており、裾が絞れるように改造を施している。靴下は厚手の五本指ソックス。

ストーブの前で背を向けて座り込んだ雨里。因みに、背を向けているのは背中を温めると全身が温まると何かの本で読んだからだ。

程々に体が温まった所で、雨里は立ち上がる。そして、手を伸ばしたのは丈の長いピーコート。

制服の上からこれを羽織り、前を止めるよりも先に厚手のロングマフラーを手慣れた様子で巻きそしてストーブの電源を落として部屋の入り口へと向かう。

因みにこの間で、三十分近くかかるのは毎朝の日課だったりする。

部屋を出た廊下は、五月とはいえ朝早く。少し肌寒く感じてしま  
う。体の冷え続ける雨里にしてみれば、更に辛いと言わざるを得ない  
のが実情だ。

コートポケットに両手を突っ込み、マフラーに顔を埋めて向かう  
のはグラウンド。

「——来たか」

「おはようございます。今日は、夜蛾学長が？」

「ああ。悟は、出張だ」

待ち構えていたのは、夜蛾だった。

これから雨里が行うのは、呪力操作の訓練。ただし彼の場合、この  
訓練には最低でも準1級以上の監督者が居なければ行う事を許可さ  
れてはいなかった。

その理由は単純で、暴走を起こした場合に2級以下の術師では止め  
ることが出来ない可能性が高いからだ。

「まずはどの程度のレベルなのか見させてもらう」

「五条先生からの説明は無かったですか？」

「一応は、あった。だが、俺は自分の眼で判断を下す。まずはコイツを  
使おうか」

そう言っつて、手渡されたのはグローブを付けた猿のぬいぐるみ。

「呪力操作の呪骸ですよ」

「ああ。だが、その呪骸はより精度を求める物だ。一般的な呪術師で  
も、準2級程度ならば五分と持たずに暴れ始めるだろう」

夜蛾の説明を聞いて、自然と雨里の喉が鳴った。というのも、この  
手の呪骸の訓練はここ呪術高専に入校してから何度か行っつてはいた  
為だ。

そして、この呪骸のパンチは結構痛い。一発貫えば、悶絶する程度  
には。

今回の呪骸は、プロでも持て余すような存在であるらしい。雨里  
は、若干の怖気を覚えながらも呪骸に手を伸ばした。

一方の夜蛾もまた、注意深く目の前の生徒を観察していた。

学長となり、教鞭を執る事すらないものの彼もまた教育者。過去の

一件がしこりとなって残っていようとも、それでもやはり教え導く側の立場だった。

彼から見て、雨里京平という少年は有り体に言って不憫と言う外ない。ついでに、非術師の家に生まれた典型的な呪術師の境遇であるとも思っている。

元々、冷遇されやすい呪術師としての素質だけでなく、天与呪縛まで有しているのだから。

それは一種の、憐みなのかもしれない。

「ツーあ、つぶない！」

夜蛾の内心など知る由もない雨里は、僅かに揺らいだ呪力操作の結果暴れ始めた呪骸の攻撃を紙一重で躲していた。

彼は目がいい。少なくとも、両手で呪骸を抱えている状態からそのパンチを見切って躲す程度ならば可能だ。

時間にして、凡そ五分三十七秒。少なくとも、現段階の雨里の呪力操作のレベルは準2級の術師を上回っているという事になる。

増し続ける呪力を抑え込み続けるのもまた、その成長に一役買っていた。

実力の把握になったのか、夜蛾は雨里へと襲い掛かっている呪骸を止める。

「及第点といった所か」

「き、基準が高くないですかね……………」

「君の呪力増加率を加味すればの話だ。通常の術師ならば、入学間もなくこの水準なら逸材も逸材。だが、君は普通じゃない。凍結呪法そのものは持ち合わせている術師や呪霊、呪詛師が存在している。しかし君の場合は、それに加えての天与呪縛だ。自然、己の制御できる力量以上の出力が常に可能。ただ、そんな事を繰り返していれば早晩その体は壊れてしまう。何故だかわかるか？」

「えっと……………家電がショートするみたいなもの、ですかね？」

「概ねは、それで良いだろう。良いか、力に飲まれるな。常に、その力を己の手の内側で操作できるようになれ」

「己の手の内……………」

言われ、雨里はイメージする。

自分の内側にあるのは、大海。そこから、手を使って掬い上げるようなそんなイメージ。

無意識の内に、右手を上、左手を下に互い違いで掴み合う両手が体の前に持ち上げられる。

グツと力が籠められ、急激に下がっていった温度によって冷やされた空気が白い霧となって周囲に漂っていく。

口から吐き出す息も白くなり体も冷えていくのだが、集中している雨里は止まらない。

やがて力が緩み、両手が開かれればその手のひらには一輪の花が咲いていた。

「それは、椿か」

「え？……あ、花の名前ですか」

「意識して作った訳では無いんだな？」

「ええ、まあ……その、呪力の扱い方？みたいなものを試してみようと思ひまして」

たはは、と頭を掻く雨里だが、夜蛾はサングラスの下でその目を細めていた。

彼の手の中に生み出された透明な氷の椿の花は実に精巧で、たった一輪であろうとも高級ホテルで装飾品として取引されそうなほどに美しい。

何より、氷の純度も目を見張る。というのも、氷というのは不純物や空気を含めば含む程にその色は白みを増していく。逆に、不純物が少なければ少ないほどに氷は透明になる。因みに、圧縮によって空気を押し出された氷河の氷が青く見えるのは、氷の特性として赤い光を吸収しやすく、結果日光が青く見える為に氷もまた青く見える。

「……ならば、京平。次はこの呪骸を作ってみろ」

「呪骸を？」

「ああ。ただし、側だけを真似る彫刻ではなく呪骸として成立させてみる」

「じゅ、呪骸として……」



ゴクリ、と雨里は喉を鳴らして目の前に置かれた先程まで抱えていた呪骸を見下ろした。

氷でその見た目を象る程度ならば簡単にできるだろう。手遊びとして、氷を作っていた彼にしてみれば、容易い。

だがそこに、呪骸としての特性。即ち、無機物に呪力を宿らせ動くようにインプットする。

例としてはパソコンか。今まで雨里は、パソコンのハードのみを作ってきた。だが今回は、ハードとソフトの両方を自分で一から作り上げ、組み上げねばならないのだ。

難易度の跳ね上がった課題。しかし、雨里は一度息を吐き出すと集中し始めた。

夜蛾と出会ってそれ程経っている訳では無いが、それでも彼は生徒が最初からできないような課題を与えるような人間ではないと少なくとも雨里はそう思っている。

まず、小山のような氷を削り出し。そこから徐々に徐々に削りを加えて呪骸としての側を作り上げる。

「……………ふう……………次は……………あの、夜蛾学長」

「なんだ」

「呪骸を動かす呪力ってどうするんです？」

「呪力は、そのままお前の力だ。掌握しろ」

「掌握……………」

要領を得ない夜蛾の説明とも言えない言葉ではあるが、呪力というのは個人によって千差万別。そして、その操作の仕方もまた個人によって違う。エキスパートともなれば、無意識の内に、呼吸をする様に動かすことも出来るだろう。

ここで重要になるのが、感覚だ。これは言葉で説明できる領域ではない。

その言葉の裏を読み取ったのか、力を抜いた雨里は無意識の内に右手の指を一本だけ立てていた。

呪力がその指先に集まり、そして氷像の頭頂部へと触れた。

まるで、透明な水のたまった金魚鉢へと一滴のインクが落とし込ま

れたように呪力は象の中へと行き渡り、そして変化は訪れる。

見せかけの関節が震え、その小柄な体が立ち上がらんと動き――

「……………あ」

砕け散った。それはもう、木つ端微塵という言葉がそのままその場に現れたかのように粉々だ。

呆然と砕け散って氷屑となってしまった元氷像を、呆然と見下ろす雨里。呪骸に関してはエキスパートである夜蛾は直ぐにその答えを見出していた。

「器の強度不足だな。京平、君の氷は確かに見事なものだが、その後がついてきていない」

「後？」

「精製した氷は、時間経過と共に君の呪力が抜けてただの氷になってしまうという事だ。今までは、凍結と同時に呪霊の撃破によって氷を昇華する事でその点がカバーされていた。明確な、君の弱点だ」

「オレの弱点……………」

考えた事も無かった点の指摘に、雨里は己の両手を見下ろす。

夜蛾に言われた点を思い返せば確かに、そんな点が多々あった。

基本的に、氷で包み込めば呪霊は死ぬ。一緒に砕けて塵へと消えていくのだから、長々と氷を出して戦うような場面など無かったし、必要性も皆無。

だからこそその、弱点。そしてその点が、呪骸を作る場合に置いて足を引つ張っていた。

「どうすれば良いんですかね」

「意識を変えろ。見た目が氷であろうとも、呪力で作ればその壁は鋼にも勝る硬度を発揮できる。一度作って終わり、ではない。この認識を改めるだけでも、君の力は飛躍的に伸びる筈だ」

「意識を変える、か……………」

「イメージに関しては、残念ながら俺からいう事は何もない。術式へのイメージは、術者本人だけのものだからだ。君だけの術式を見出してみろ」

「……………わかりました」

コクリと頷き、更なる研鑽を目指す雨里。  
呪術高専から未だ一週間もたたない朝の一幕。

呪術高専の生徒は、生徒であると同時に呪術師でもある。結局のところ、最終的に呪霊が祓える段階に辿り着かねばならない為に、引率の有無など差異はあれども戦場へと放り出されていくことになる。

「はい、という訳で京平の初めての実地訓練に行こうかな」

引率の五条の軽薄な態度を前に、雨里はポカンと首を傾げ伏黒は眉根を寄せる。

雨里の呪術高専から暫く。そろそろ六月に変わりそうな五月の月末にそのイベント？は行われようとしていた。

「唐突過ぎます。急に何ですか」

「いやー、京平もこつち<sup>東京</sup>に出てきてまあまあ時間も経つたし、学長からのお墨付きも貰った事だからそろそろ実戦に移ろうと思つてさ」

「……………」一応、雨里は実戦経験ありますよね。2級を祓える程度には」「まあね。でもそれは、個人としてだよ。呪術師として個人で任務に就くことが多いとはいえ、それでも複数人で仕事を熟すことはゼロじゃない。何より、今の京平は4級術師。単独任務には行けないから自然と誰かと組む事になる。その時に、チームの戦い方つてのを知らないと困るしね」

まあ直ぐに等級は上がるでしょ、とは五条の言葉だ。

伏黒としても、彼の発言に否は無い。凍結呪法は、強力であるし体術などに関しても筋が良いのか悪くない。ここ最近は、水で呪骸擬きを作るようにもなった。術式の幅が限りなく広いのだ。

呪術師はイカレてなんぼだと言われているが、これは発想の飛躍こそが術式の効力範囲を広げる事に繋がるから。その点で言えば、雨里はイカレているのかもしれない。

一方で、雨里もまた考えていた。

彼の力は、面制圧に向いている広域攻撃を主とした術式だ。攻撃力に目を瞑るならば、ぶつちやけ高専程度の範囲ならば氷漬けに出来るだろう。

強力だ。だからこそ、チーム戦には向かない。対一、もしくは一

対多が主な相手。ついでに、市街戦にも向かない。

「…………大丈夫なんですかね。オレ、何か考えれば考える程集団戦も市街戦も向かない気がするんですけど」

「大丈夫でしょ。そう考えに至れるだけ、京平は考えてる。大丈夫、今回は僕もついて行くからさ」

ね？と問われれば、雨里の反論も閉じぎるを得ない。

考えているからなんだと言われそうだが、考え無しよりは考えている方が良い。そして、考えるという事は自分の力と向き合っているという事にもなる。

当人の気持ちはどうあれ、ただ抑えるのではなくその力をどう使うのか。教え子の確かな成長を感じて、五条は満足げにうなずいていた。

「さ、行こうか。今日の授業は、チームプレイ。忘れないでね」

\*

首都、東京。高層ビルが立ち並び、多くの命が息づく都市でもあると同時に、多くの感情も集まる欲望の都市でもある。

話は変わるが、大都市の地下には水害対策として広い空間が設けられている場合が多々ある。これは、降水量の多い日本の知恵。アスファルトの地面が増えた現代だからこそ求められるものだった。

「……………神殿？」

明かりがあっても薄暗い空間に、建ち並ぶ幾つもの柱。

僅かに湿ったコンクリートのせいか、湿度も高く感じる物のそれもまた神秘性のような物を高めている。少なくとも雨里には、そう思えた。

「首都圏外郭放水路。ここはその中でも調圧水槽って呼ばれる区域だね。ま、詳しくは個人で調べてね」

「ここに、呪霊が居るんですか？」

「そ。それじゃあ、京平に問題。どうしてここに呪霊が居るんでしょか」

「ここに呪霊が居る理由？」

ニヤニヤ自分を見てくる五条に、雨里は首を傾げた。

今回の任務は、2級呪霊の討伐。移動の車でもそれ位しか情報は貰っていないかった為に、速答のしようは無い。

故に、雨里は考える。

「……………この施設の使用用途は何ですか」

「都市機能で排出しきれない雨水とかの一時的な逃げ場かな」

「それと呪霊の出現の因果関係は？」

「あるかもしれない」

「そうですか……………」

情報はそれほど多くない。それでも導き出せる答えもある。

「……………雨、ですかね」

「お、良い線いってるよ」

「昔から流れる水は、禊とかに使いますよね？転じて、呪霊を構成する負の感情も雨と一緒に流れてここに澱みたいに溜まった。違います？」

「良い回答だね。初めて、恵に似たような質問をしたときなんて——」

「俺の話はどうでも良いでしょ。雨里、行くぞ」

「え？あ、うん……………」

少し離れて周囲の索敵をしていた伏黒が言葉を遮り、無理矢理話題を断ち切った。

困惑しながらも今回の任務は、自分たちの仕事であると頭を一度下げ先を行く彼を追う雨里。

空洞の中に、二人分の足音はよく響く。

「……………あの、伏黒君」

「なんだ？」

「ああ、いや……………今回の呪霊は2級相当だったよね。どの程度強いのかな、と」

「そうだな……準1級相当の呪霊から、術式を除いた状態、か。やるのは基本的に、肉弾戦。特殊な力も、あくまでも身体能力の延長線上が多い」

「成る程」

「ただ、知能はある。単純な罠を張ったり、な」

「……………じゃあ、アレも罠？」

言って、雨里が示したのは少し離れたコンクリートの柱の一つ。

見上げるほどの高さ。その位置に何かが絡みついていていた。

「フシユルルルル……………」

先端が二股に分かれた舌を外気に晒し、白濁したようにも見える濁った白い目が外敵を見下ろす。

細長い形状ながらも丸太のように太いその体。指先の丸くなった四本指に八対の手足。長い尾。

「……………ヤモリ？」

呟いた雨里。

そう、彼が言うようにその柱に絡みつく巨大なその姿は、化け物ヤモリにしか見えなかったのだ。ただその大きさが異常なだけ。

「……………」

「伏黒君？」

「構えろ、雨里。奴は……………」

伏黒が言葉を言い切る前に、事態は動く。

巨大ヤモリの口が歪な水音をたてて開くと、その内側が赤く光り始めるではないか。

間髪入れずに吐き出されるのは、紅蓮の業火。

反射的に式神を出さんと構えた伏黒だったが、それより先に青い壁が炎を遮った。

「……………つぶし……………はあ……………寒い」

隣を見れば、両手を床についた雨里が居りその両手を起点に氷の壁が生成されていた。

「ッ、下がろう伏黒君。無作為に突っ込むのは、賢明じゃない」  
「ああ」

氷の壁。その向こう側は仄かに赤く揺らめいている。早晚、突破されるだろうがそれでも下がる分には十分。

柱の一つ、その裏へと回り込むようにして二人は身を隠した。同時に、氷の壁へと供給されていた呪力が途切れ、ただの氷河へと戻った壁は瞬く間に融かされていった。

「……………あの、伏黒君」

「なんだ」

「明らかに、2級じゃないと思うんですけど。それとも、あの火を吐くのは火炎放射器でも仕込んでるのかな」

「いや、術式だろうな。炎を扱う術式か」

「相性最悪すぎるんだけど。言ってられないかな」

「恐らく、五条先生は俺たちが本格的に命の危険に陥らなきゃ、手を出してこない。俺たちでやるしかない」

「了解」

どちらからともなくの、グータッチ。からの柱の影から飛び出していく。

「凍結呪法・氷嘴ひょうし」

打ち合わせた両手を開けば、その間には複数のツララが現れる。

「行けっ！」

雨里が指示を飛ばせば、ツララはさながら砲弾の様に射出され巨大ヤモリへと向かっていく。

だが、その先端は巨体を捉えることは無い。

何とヤモリは、赤熱させた巨大な尾を振るう事によって迫りくるツララの尽くを打ち落とし、叩き伏せて、融かしてしまったのだから。だが、目晦ましとしては十分だろう。

「鶴ー」

ヤモリの背後より、怪鳥が襲い掛かる。

雷が、その巨体を刺し貫いた。

だがしかし、呪術戦が体格差によって差が生まれる事はあまりないとはいっても、今回ばかりは話は別だ。

白濁した目を見開いたヤモリがその大口を開いたかと思えば、燃え



盛る舌が一気に伸びて雷を放った鶴を叩き落さんと襲うではないか。辛うじて、その一撃は空を切ったものの鞭のような撓りと共に叩き付けられたコンクリートの床は大きな焼け跡を刻まれていた。

同時に、ヤモリも動き出す。鶴を完全に追い払った所で、巨軀を動かして柱から床へと降りてきたのだ。

下で相対すると、改めてわかるその大きさ。その口は大きく開けば人一人を縦に丸呑みできてしまいそう、そんな大きさ。

「ッ、凍結呪法・冰山刺<sup>ひょうざんし</sup>」

雨里は両手を床へと叩きつけた。その場を起点に、一気に凍結していく床は真つ直ぐにヤモリへと伸びながら、その表面に先端の鋭い多数の冰山を形成していく。

鋭い先端は腹側からヤモリへと襲い掛かり——貫かない。

「……………冗談でしょ」

雨里が頬を引きつらせるのも無理はない。

床から這うようにしてせり上がった冰山は、しかしその巨体を刺し貫く前にその先端が熱気によって鈍り巨体を押し上げるに留まっていた。それに加えて、ヤモリに触れた氷も見ると融かされている。

これは、相手が雨里の力量を大きく超えている、というよりも当人の力が届く範囲に理由がある。

射程距離二十三メートル。それが現状で、雨里の呪力が十全に届く範囲であり、同時に制御が可能な範囲。それ以上となると大雑把になつたり、今回の様に力が上手く伝わらずに術が完全に機能しない。

もつとも、今回はその点を差し引いても相性の悪さがあつたが。

「無事か、雨里」

「まあ……………本当に、相性が悪すぎる」

「同感だ。鶴の雷撃を受けても殆ど怯んでない。お前の氷もだな？」

「遠距離だと、罫が明かないかな……………直で触れば多分凍結出来る、筈」

「確実じゃねえのか」

「冷気を叩き付けるよりも、直に触る方が冷やしやすいのには確かなんだよ。ただ、相手に近づけるかどうかが問題でさ」

顎で示した先では、体を赤熱させて体の周りの空気を陽炎の様に揺らめかせた呪霊の姿があった。

触れるどころか、近づくと事すらも難しいかもしれない。

「……………近づければ良いんだな？」

「え？まあ、そうだね」

「……………一つ案がある。賭けになるし、何よりお前への負担がデカい。乗るか、反るかはお前が決めてくれ」

「よし、聞かせて」

「……………本気か？」

「生憎と、今のオレに浮かぶのは走って近づいて触る位だからさ。だったら賭けでもちゃんとした案がある伏黒君に任せるよ」

まさかの即答に、提案した伏黒の方が面喰う。同時に、呪術師とはイカレてなんぼという担任の言葉を思い出していた。

成る程、確かに目の前の同級生はイカレているのだろう、と。ただ、そのイカレの根底にあるのは一種の信頼でもあるのだから伏黒も無碍には出来ない。

そうして、彼の口から語られた作戦内容。その中身を聞いた雨里は若干目を見開いたものの、直ぐに笑みを浮かべて了承した。

「それじゃあ、手筈通りに始めようか」

そう言うと、雨里は両手の指先をそれぞれに合わせて歪な三角形を象った。

瞬間、せり上がる氷河の壁。

呪霊と二人の間を遮り、物理的にも視覚的にも切り離していた。業火が襲えども、今回の壁は雨里に近い。融かされるよりも先に凍結が上回り、炎も凍る。

そして入れ替わるようにして、片手を鶴に掴ませた伏黒が壁を飛び越えるようにして飛び出してきた。

二次元的な動きと、三次元的な動きならばその自由度は後者に軍配が挙がる。

特に今回の呪霊は、動きの遅さを全身への術式行使で隙を無くしているタイプ。要するに巨体故に動きが鈍く、尚且つ場所は柱の乱立す

る調圧水槽。場所が悪いと言わざるを得ない。

伏黒はその隙を突く。

かく乱するように空を飛び回りながら、鵜の雷撃で呪霊の注意を引きつつ、尚且つその場に縫い止め続ける。

吐き出される火球や、炎の舌が掠めてくる物のこれもまた、作戦の内。

「——大蛇ッ！」

伏黒は、現状二体まで式神を同時に使役することが出来る。

今は鵜とそして、もう一体。巨大な白蛇の式神がこの場に顕現していた。

大蛇の傍らには角度を調整された氷で出来たスロープのようなジャンプ台。いや、装填された氷の球体を加味すれば、発射台か。

大蛇の巨体が動く。遠心力を加えた全力の尻尾による殴打を撃鉄にして、氷の球体は強かにぶっ叩かれる。

スロープに沿って打ち出され空を飛ぶ球体。向かう先は、呪霊だ。物体が風を切る音は、当然ながら呪霊も察知する。勢いよく振り返り、その大口を開けて球体へと向けて業火を吐き出した。

一人人がすっぽりと入りそうだった氷の球体は、見る間見る間にその形を失っていきやがて消える。

呪霊の足りない頭は、これが相手の最終手段であると判断する。そもそも、高熱を発している自分に近寄れる敵は先ず居ないのだ。

残りの障害へと目を向けて、

「——チエックメイトだよ」

背中に軽い衝撃。

そこに立つのは、コートを脱ぎ捨てた雨里。両手を開いてしゃがみ込むようにして、打ち付ける。

「凍結呪法・万結<sup>バンケツ</sup>」

掌を起点に広がる凍結は瞬きの間に、呪霊の体を包み込む。

冰山と化した呪霊の体からは熱が完全に奪い去られ、機能停止。そして雨里がその上から滑り降りて床に着地すると同時にその巨体には氷もろとも亀裂が入り、崩れていった。

「……………つぶしーッ、イテテ……………寒いし、痛いし……………ふう」

揉み合わされる雨里の掌には火傷の痕が刻まれている。それが、ジクジクと鈍い痛みを発するのだが、同時に冷えていく体のダブルパンチ。

若干泣きたくなるような状態だが、泣き言は言えない。まずは脱ぎ捨てたコートを探そうと顔を上げて、

「わぷっ」

顔面にやわらかな感触。

痛みに我慢して手にとってみれば、それは脱ぎ捨てていたコートだ。

「手は、大丈夫か？」

「うん、まあ……………これ位は成るかなとは思ってたから。寧ろ、靴や服が燃えなくてよかったよ」

「……………悪かった」

「?なにが？」

「今回の作戦だ。無茶させて、悪かった」

「ああ、その事。別に気にしてないよ。オレだって無傷で済むなんて思ってたないし。何より、伏黒君も怪我してる。無茶をしたのは、お互い様じゃないかな」

ヘラリと言い切ってしまった雨里。その掌は赤くなり、皮膚が剥けている場所すらもある。

それでも、大したことないと彼は肩を竦めて、笑った。

かくして、初戦は幕を閉じる。これからは、雨のよく降る季節になる。

そして始まりの日も近づいてくる。

思ったよりも波乱であった初任務から暫く。今日も今日とて雨里は、

「おら、立て京平。まだまだ授業は終わってねえぞ」

「は、はい……………ッ！」

転がされていた。

彼を転がすのは一学年上の先輩、禪院真希。その手に握るのは、棍。元々、武具全体的に通ずる彼女だがそれでも長物の方が得意であり手合わせでも刀よりも長物を使う方が多い。

一方で、雨里はというと素手である。これは、彼自身の持ち合わせた術式を加味しての物。因みに、伏黒も同じく術式由来で両手を空けておきたいタイプなのだが、雨里の場合はその多様性を陰らせない為の措置である。

呪術師の術式は、想像力の飛躍によってその多様性を大きく変えていく。だからこそ、呪術師はイカレていなければならない、常道手段では常道の術しか行使できないから。

その点、雨里の術式は汎用性が高い。対象を凍結させて、氷を出現させるだけというシンプルなものであるからこそその側面。

そして、この点を加味しての素手だった。

「ぶっちゃけ、お前の術式なら触った時点で大抵の相手には勝てる。だが、そうもころころ転がされてたら触る前に死ぬのが先になるな」

「そ、そうですよね……………」

「おーい、真希ー。その辺にしてやれー。京平の眼が死んでってるからー」

「しゃけ」

容赦ない指摘に何度目か地面を転がっていた雨里の眼が死んでいと、横合いからの助けの手が伸ばされる。

二年の先輩である、狗卷棘とパンダの二人。

語彙がおにぎりの先輩と、パンダであつてもパンダじゃないパンダ先輩。キャラが濃いなどというものではないが、それでも悪い人達

じゃない。

「いくら」

「あ、狗巻先輩。ありがとうございます」

狗巻に差し出されたペットボトルを受け取って、雨里は口をつける。

散々動いたにもかかわらず、彼の体は汗一つ掻かない。息は荒れているというのに、マフラーもコートも外せないし、脱げない。ペットボトルの中身も、キンキンに冷えているというよりは人肌に近い程度には温い。

「相変わらず、寒いままか」

「つぶし！ずずつ……………ええ、まあそうですね」

「天与呪縛だったか？真希とはまた違うんだよな」

「はい。禪い……………いえ、真希先輩の場合は身体能力が上がってますけど、オレの場合は術式の強化と呪力の強化です。その代わり、年がら年中体が冷えていますね」

「その縛りはどうなんだと私も思ったけどな。まあ、その格好見ると……………なあ？」

真希が言う格好というのは、今の雨里。

運動用のジャージの上にマフラー、更にベンチコートを着た姿。既に六月に入って少し経っているというのにこの格好など、どこぞのダイエット挑戦者か、はたまたDMにしか見えない。因みに、ジャージに関して夏用の通気性が良い物ではなく、裏起毛の真冬でも一枚で十分な防寒性の高い物だったりする。

ここままで着込んで、雨里には寒くて仕方がない。

同じく天与呪縛と言えども、ある意味では自分の最も欲しい才能が嫌というほど伸びている彼に対して真希は何も思わなかったか？と問われれば、首を横に振る。

だが、まあ、こうして雨里自身の為人に触れてみればその嫉妬心も萎むというもの。

そもそも、縛りの内容も結構キツイ。主に、日常生活を送る上で、まず冷たい食べ物、NG。食べれば最後、歯の根が合わなくなっ

て唇は紫色になる。プールもアウト。温水だろうとそもそも上半身裸の水着の時点で鳥肌が立つ。

服装に関しても、今の雨里を見れば分かるように半袖、短パンなどの夏の装いは出来ない。もっと言うならば、少しでも薄着をしようものなら寒気で動けなくなる。

戦闘に関しては痩せ我慢を重ねざるを得ず、場合によっては戦闘終了、或いは戦闘中に動けなくなるかもしれない。

体温というのは、それだけ生物にとって大切なのだ。

「真希先輩？」

「……………どうした」

「いえ、ずっとここっちを見てきてましたから……………あの、何かしちやいましたかね？」

「気にすんな。こっちの話だからな」

座り込んだまま見上げてくる後輩の頭を混ぜっ返すように出鱈目に撫でながら、真希は笑う。

術師としては、真面な部類で愛想のいい後輩だ。可愛がりこそすれ、邪険にする予定は今の所在りはしない。

「さて、休憩終了だ。続きやんぞ、京平」

「お、お願いします！」

「程々にな」

「しゃげ、すじこ」

「お前らも、やるんだよ」

存外、雨里は先輩方に可愛がられていた。

\*

「は、はあ……………」

「は、はあ……………」

唐突なカミングアウトに、雨里の眼は点になる。

本日の予定は、呪霊の討伐。等級は2級相当。だが今回の付添人は伏黒や五条ではない。

五条の後輩であり1級術師、七海健人。独創的なサングラスにスーツ、ネクタイを締めたサラリーマンの正装のような格好をした男であり、その実力は確か。

ついでに、イカレの多い呪術師の中でもマシな部類でもある。

そんな彼との初任務に赴くことになった雨里が、ちよつとした世間話に呪術師に関する話題を含めれば、先の解答が返ってきた次第だ。

「あの、それじゃあどうして七海さんは呪術師を？」

「簡単な事です。労働はクソ、呪術師もクソ。であるならば、より適性のある方を選んだ。ただそれだけの事です」

「成る程……」

「覚えておいてください、雨里君。呪術師という職業は、正義の味方やフィクションのヒーローとは全くの別物であると。私たちは、掃除屋の側面が強いのだという事を」

滔々と語る七海に正面から見つめられ、雨里の喉が鳴った。

この世界に飛び込んで一ヶ月も経っていない。いや、飛び込む前よりその表面をさらう程度の関りは持ち合わせてはいたか。

一方で目の前の男は、自分よりも遥かに長くこの世界に浸かっている。当然ながらそれだけ地獄を見てきたのだろう。

雨里とて、自分自身がヒーローに成れるなどとは思っていない。いや、この自分の力に最初に気づいた時には、もしかするとテレビの向こうのヒーローのような憧れを抱いたかもしれない。

だが、現実を知った。どれだけ化け物が自分の目で見えていようと、周りの目には映らない。しかし、身を守る為に、誰かを守る為に振るったかもしれない力は、ただ只管に恐ろしいものとし映らない。

雨里だって言える。現実はいつだって、クソだと。その結果として、彼は全てを諦めて受け入れることにしたのだから。

考えに沈んでしまった雨里だが、七海もまた今回の任務に当たって彼の為人を先輩＋資料から得ていたりする。



典型的な、非術師家系出身の術者の境遇。ダメ押し为天与呪縛。思わず、その眉間に寄った皺を解さんと揉んでしまう程度には、七海にとって少々重い過去だった。

彼としては、もう少し落ち着いてから今回の件を振ってほしかつたと思う。

(いったい、何を焦っているのか)

七海が考えるのは、信用し信頼もしているが尊敬はしていない先輩の事。

確かに力があるのだろう。だが、子供だ。その事実もまた七海の気分を重くさせた。

そんな重苦しくなるような空気の中、二人がやって来たのは森の奥。

「……………洋館？」

二階建て、歴史を感じさせる洋館。庭も雑草が生い茂り、洋館の壁にも蔦がまとわりつく。窓から見えるカーテンも黄ばんでおり、破れている場所も少なくない。

「この館は、三十年以上前に捨て置かれ、無人です。長年管理される事無く放置されていたんですが、昨今のSNSの発展から、どうやら入り込む人間が出てきたらしく、」

「帰ってこない、と」

「その通り。雨里君、仮想怨霊についてはどれほどの知識が？」

「妖怪や怪談みたいな、老若男女問わずに共通の畏怖の感情から生まれた呪霊、でしたっけ」

「概ね、その認識で良いでしょう。今回の場合は、ネットによって煽られた恐怖と、実際に現地に行つて消息を絶つたという事実の二つが合わさっています。今でこそ、ネットの海の一部に過ぎずとも広がり切ればどうなるか分かりません」

「だから今回、祓うんですよね」

「正確には、君が祓うんです」

「……………オレ一人、ですか」

「私としても気乗りはしませんが、呪術師が推薦制である事は？」

「知ってます」

「今回の任務はその見極めを兼ねていますからね。私が祓ってしまえば、君の実力を見る事は出来ない。分かりますね？」

「了解です」

頷いて、雨里は一度息を吐き出した。

先程までは陰鬱と色々と考え過ぎていた。故の、一拍挟む。首に巻いたマフラーに顔を埋め直して、洋館の入り口、そのノブへと手を掛けた。

思いの外、すんなりと回った真鍮製のソレに成る程、これなら誰でも入りたい放題だ、と内心で納得する。

一歩足を踏み入れ、暗闇に目が慣れるのを少し待つ。

中は広々としたものだ。

埃が目立てども、確りとした作りの内部。木製故に腐れがあれども、入り口から出迎えてくるロビーは二階までの吹き抜けがあり、天井が見えそこには蜘蛛の巣の張ったシャンデリアも確認できた。

ロビー一階で確認できるのは、前方左右それぞれの壁に設けられた扉とその左右の扉が陰になるように配置された二本の緩い弧を描いて対象の階段。

放置されていた割には、綺麗。雨里の感想は、そんなもの。

「私はここで待ちます。危険を感じた場合には直ぐに退避する事。呪術師にとって大切なのは、呪霊を祓う事だけではありませんからね」「分かりました」

出入り口を背に見下ろしてくる七海に一度頷いて、雨里は前方へと意識を向ける。

呪霊の捜索で追うべきは、呪力の痕跡である残穢。これは呪術を使用した際に残る痕跡であるのだが、一部呪霊も残す場合がある。そして、残穢が残る場合の呪霊の等級は上にある。何せ、術式の行使が可能な個体なのだから。

幸いと言うべきか、見た範囲では残っていない。雨里は、右手に若干の冷気を纏わせながら床を軋ませながら一歩前へと踏み出していく。

カビと埃が入り混じった嫌な臭いだ。見た目だけの綺麗さで、木製の床や家具、壁紙の向こう側は確りと腐っているらしい。

そんな中を進む雨里が向かったのは正面入り口左手側。階段の陰になっていた扉だった。

メツキの剥がれたノブを回せば、軋みを上げて扉は開く。

南側に一定間隔で並ぶ窓と、その窓と反対側の壁には扉が三つの廊下が広がっていた。同時に、頬を撫でる鳥肌の立つような感覚。

初任務の際に相対した巨大ヤモリとはまた違う、まるで冷えるようなしかし静電気のような独特の気配とでも言うべきか。

いやな予感を若干覚えながらも、雨里は廊下へと足を進めた。

軋む床の音を聞きながら、最も呪力の気配が濃い場所。中央の扉の前まで進む。

「……………ノイズ音？」

ザリザリと耳の奥を引つ搔くような砂嵐の音が、扉の向こうから聞こえて雨里は首を傾げた。

イメージすると、テレビの砂嵐か。

だが、ここは無人の館。それ以前に、電気ガス水道のライフラインは全て断ち切られており、そもそもテレビが起動できるだけの環境が揃っていない。

確実に居る。そう考え、雨里は左手でノブへと手を伸ばして捻り、そして戸を引き開けると同時に右手から極寒の冷気を部屋の中へと叩き込む。

一切の躊躇なし。たつぷり十秒は冷気を注ぎ込んで、そして彼はやつと大きく扉を開けた。

中は、ボロボロ。床の木目は腐って一部には穴が開き、窓は割れているし部屋の隅に置かれたゴミ箱は元々鉄製だったのか錆び切っている。

何より目を引くのは、扉と反対側の壁に据えられた大型のブラウン管テレビ。

氷漬けとなった部屋の中、そのテレビの画面は未だに砂嵐のまま光を発していた。

「出てくるかな」

スパークするテレビを確認して、雨里は息を吐いた。

砂嵐の画面に影が差す。影は不規則に左右に揺れると、唐突にテレビの画面へと内側から叩くように黒い掌が現れる。

掌は、何度か画面を叩き、そして突然砂嵐の中へと消えた。

直後、真っ黒な手がテレビの画面をすり抜けるように突き出される。手は、テレビ自体も覆っていた氷もすり抜けていた。

果たして現れるのは、影法師。

テレビの向こう側に居た時のように、不規則に左右に揺れる。

「キ、ヒヒ……………キヒキヒヒヒヒヒ……………」

それは、笑い声なのか。影法師の頭であろう場所に唐突に三日月型の亀裂が走る。

「キィィィィィヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアツツツ!!」

絶叫。三日月のような亀裂は、口だったのかまっくろくろすけな外観の対比の様に真っ赤な赤色灯の様に怪しく輝いていた。

何より絶叫と同時に放たれた、紫電と音波による衝撃が雨里へと襲い掛かってくる。

咄嗟に両腕を体の前で交差して姿勢を落とし、氷もガードに回したが踏ん張ることが出来ずにその体は部屋の外、更に窓を突き破って草地の庭へと弾き飛ばされていた。

「ッ、危ないな……………」

ここ暫くの体術訓練が利いたのか空中で体を捻り着地した雨里は、自分が突き破って来た穴を睨む。

窓だけではない。壁その物が、影法師の吐き出した紫電と衝撃によつて粉碎、破壊されていた。その穴より、体を左右に揺すりながら、頭を小刻みに震わせつつ捻る影法師が現れる。

「キヒ……………ア、ア、ア、ア……………イダイィィィィィィィィィィィィ?」

「明らかに、2級じゃないと思うけど……………なんだか、デジャビユ?」  
言いながら、雨里は右の拳を地面へと叩きつけていた。

一瞬地面が揺れ、間を開けることなく地面から付きあがってくる幾つもの巨大な円錐。それは数を増やしながら、影法師の真下へと向





表面を覆っていた氷などまるで飴細工。その下の、プラスチックの側面や画面もその勢いを削いで阻むには至らない。

それだけではない、左拳がめり込んだ瞬間に前腕部に出来ていた円柱のギミックが起動していた。

パイルバンカー。杭打機とも呼ばれる、ある種のロマン兵装であり実用性には向かない。

雨里がこの手法を取ったのは自分の決定力の無さを自覚してからだ。正しくは、近接戦に置ける馬力の低さ。

遠距離からならば、氷塊を落としたり、地面から氷を生やしたりして攻撃できる。だが、接近戦ともなれば即死技と言えれば触れて直接凍結させる位。それにしたって、狙って触れねばならず何より雨里自身が求める破壊力とは方向性が違う。

呪力の強化だけではない一撃。考えて、ついでにアニメや漫画などに出てくるキャラなどを見たりして行き着いたのが手甲そしてこの即席パイルバンカー。

実戦投入は初だったが、思ったよりうまくいった。

元凶？であったテレビは、一度目の衝撃で半壊以上に壊されていたが続く杭の破壊力が上乘せされた一撃によって文字通りの木っ端微塵に。ついでにテレビの背後の壁も思いつきりぶち抜いていた。

「アギツ……!!？」

悲鳴の様な声が後ろから聞こえる。

首だけで確認するように雨里が振り向けば、不自然に固まった影法師の姿が。

その三日月のようだった口は歪み、その体は不規則に揺れる。そして、まるで風に吹かれた埃の様にその姿は掻き消えていった。

足の先まで完全に消え去ったその姿を確認し、内心で雨里は息を吐いていた。もしも予想が外れて、影が消えなかったならば戦いは更に激化することになったはずだったから。

ふいに、耳がとある音を拾う。

「アアア………」

「……小ぎん」

粉碎された壁と、テレビの残骸の向こう側、中庭となっていたであろう場所に小さな何か転がっていた。

手足を丸めた黒い影。目鼻立ちも、性別すらも分からない唯々ノイズが固まったような何かは転がったまま動き出す兆しもない。

「……………」

警戒は絶やすことなく、雨里はそんな影の傍らに膝をついていた。

「ヤ……………イヤ……………」

小さな子供にしか見えなかったから。呪霊を相手に何を、と言われるかもしれないが少なくとも彼はまだまだ甘さを捨てきれない新参者でしかない。

祓いはする。それでも、そこに優越感や享樂を見出したりはしない。い。

右手から放った冷気で完全に凍結させ、そして己の手で粉々に砕く。呪霊の消滅まで見送った雨里は、すぐには立ち上がることなく、その場で手を合わせていた。

その呪霊が一体どういう結果生まれたのかは分からない。分からないが、何となく雨里はろくでもない理由だろう、と。そんな気がしていた。

「お見事でした、雨里君」

「七海さん……………」

「少なくとも、君の實力は既に2級術師として十分。準1級への推薦を考えてもいいと言っても過言ではないでしょう」

「……………でも、七海さんはオレが2級以上の階級に踏み込むのは反対なんですわね」

「なぜ、そう思うんです?」

「勘ですよ。ただ、話していてそう思っただけです」

立ち上がった雨里の表情には、若干の憂いがあった。

七海は、今回の見極めのために彼の戦いをしっかりと一から十まで見ていた。その最後、呪霊に対して手を合わせたその瞬間まで。

呪術師の甘さというのは、致命的だ。特に、見境の無い優しさというのは本人を死地へと誘ってしまいう危険性がある。



体術、術式は十分。問題は精神面。少なくとも、七海はそう考える。これは何も甘さを捨てろというわけではなく、一種の仮面を身に着ける、という大人としての意見。

だがこれを、押し付ける気はない。仮に伝えれば、雨里は不格好にでも仮面をつけるかもしれない。しかし、それではいけないのだ。

不格好な仮面では、いずれ破綻する。その破綻に、自分はおろか周りも気づかなくなってしまう。

その結果の一つを、七海は知っていた。

大人が考えに耽っている場所から少し離れたところでは、子供は電話を受けていた。

「あ、五条先生。雨里ですけど………はい………はい………え？」

その一本の電話は、波乱を運んでくる。地獄へのカウントダウンは始まっていた。

新しい朝。希望の朝……ではないか。

「ふうー……………」

両手の指先をそれぞれに合わせた雨里は、長く長く息を吐く。その周りでは、デッサン人形のような氷の塊が合計で六体出現していた。

呪力が練り上げられ、雨里を中心として六芒星の様に先端が人形へと伸びてつながる。すると、氷の塊がわずかに震え始めた。

氷で象つただけの関節が、徐々に徐々に動き六体の彫像はまるで動きの悪いロボットの様に動き始めるではないか。

これは、雨里なりの傀儡術式の一種の形。氷の人形を創り出し、呪力を注ぎ込んで呪骸とする。

七海と共に行った任務を経て、晴れて2級となった彼だがその研鑽に終わりはない。

監督役の夜蛾や五条は今回居ないが、代わりにとある呪具を貸与されていたため、朝の特訓に精を出している次第。

それが、彼の右手首につけられた輪を二つ組み合わせたような見た目の代物。これは、等級としては2級相当。装着対象が、設定された出力以上の呪力を瞬間的に放出、且つ五秒継続した場合において対象の肉体を拘束、呪力を制限するというもの。

今回ならば、呪術による広範囲攻撃などを敢行した場合拘束されることになっている。

「……………あ」

呪力操作を誤ったのか、デッサン人形から更に発展させようとした氷の人形は唐突に亀裂を走らせて粉々に砕けてしまう。

砕けた氷屑を呆然と見下ろした雨里は、しばらくの間固まり、そして合わせていた指先を離した。

呪骸に必要なものは、入れ物である人形と核となる呪力。今回もそうだが、どうにも雨里は呪力の注入が下手だった。

もともと、呪術師として新米であることを差し引いても下手。イメージとしては、蛇口。彼の場合は捻りすぎ。

自分の体を呪力で強化することは、特に苦心していない。体の感覚で限界値が分かるからだ。

「もつと、氷の強度を上げるべきかな。もしくは、呪力を——」  
うーん、と首をかしげる雨里。この術が完成すれば、戦術の幅はさらに広がる。広がるのだが、その為には己の呪力に対する理解を更に深めるしかない。

マフラーに口元を覆って冷え切った手をコートポケットのポケットに突っ込みその場に佇んだ雨里。そんな彼へと向かう人影があった。

「お、アレがもう一人の同級生ってやつ？」

「ああ」

「めっちゃ、厚着じゃん。というか、アレってコートと……マフラー？六月に？」

「体質だ。お前の運動神経と同じ、生まれつきの縛りだからな」

「縛り？」

「詳しくは、本人に聞け……雨里」

「あれ、伏黒君？早いね……そっちの彼が？」

「あ、俺虎杖悠仁。よろしく！」

「初めまして、虎杖君。オレは、雨里京平。よろしく」

「おう！」

にこやかな虎杖と、同じく穏やかな表情の雨里が握手する。

その傍らで、伏黒は疲れたようなため息を一つ。

というのも、この虎杖悠仁。突っ走ると止まらない気質があった。

その結果、今回呪術高専に転入（○）をする事になってしまっている。

どうしてこうも自分の同級生は一癖も二癖もあるというのに見捨てきれない善人揃いであるのか。助けたことには後悔無いもの、考えないことはない。

「そういうえば、二人はどうしてここに？まだ授業には早いよね？」

「お、そうだった。五条先生が、最後の一人を迎えに行くから雨里を呼んで来いってさ」

「オレを？というか、新入生って四人だけ……」

「呪術師が少数派なのはお前も知ってるだろ、雨里。それよりも、行く

ぞ」

\*

若者の街、原宿。平日の昼間でも多くの人通りでにぎわうこの街で、しかし目立つ一団が。

「いやー、良かったよ。悠仁の制服も間に合って、さ」

「あ、うん。でも、伏黒とか雨里の制服とは形が違うんだよな」

「呪術高専の制服は、希望を出せばカスタマイズができるんだよ。術式によって術師の戦闘手段は個人差が大きいからね。因みに、雨里の場合は着てるコートが特別性。そのまま制服の代わりにもなるよ」

「そうなんだ……でも俺、希望なんか出してないんだけど」

「そりやそうだよ。だって、希望出したのは僕だから」

「ええ……」

「諦める虎杖、五条先生はそういう所あるからな」

注目を集めるのは、モデルも裸足で逃げ出す高身長に加えての白髪、全身黒づくめに目隠しをした五条。それから、男子高校生の平均身長程度で前を閉めたピーコートに厚手のマフラー、灰色のニット帽を被った雨里。この二人の奇抜さは群を抜いている。

ただ、天上天下唯我独尊を地で行く五条は周囲の視線など気にも留めないし、片や雨里も周りから変な目で見られることには慣れてしまっていた。

「お、ポップコーン売ってんじゃん。ちよつと買ってくるわ」

「あ、悠仁僕のもお願い。お金は渡すから」

「りよーかい。伏黒と雨里も何かいる？」

「俺は別に」

「ええつと、何か温かいのを」

「おっけー」

人混みの中へと消えていく虎杖の背中を見送って、雨里はポケット

の中へと仕込んだカイ口を握りこんでいた。

ほどなくして戻ってきた虎杖。その手には、ポップコーンの入ったカップとそれから湯気の上がる飲み物。それから、ダサイサングラス。あまりのダサさに、飲み物を受け取った雨里の頬がひきつるほどに、ダサイ。

「あの、虎杖君。そのサングラスはいつたい……………」

「あ、これ？いいだろ？そこの出店にあったんだけどさ」

「そ、そうだね」

人間的に、甘い感性を持つ雨里は嬉しそうな虎杖の顔を曇らせることなどできなかった。曖昧に微笑み、買ってきてもらった温かい飲み物の代金を渡して大人しく引き下がる事しかできない。

カップに口をつけながら、視線を前へ。

雨里の出身地も田舎というほど田舎ではないが、それでも東京の賑わいに比べれば一枚も二枚も落ちるのは否定できない。

そして、人が居るからこそ己の異物感もまた再認識することになる。

「はあ……………っふしー！」

体から力を抜けば寒気が走ってくしゃみが飛び出る。

「大丈夫か？」

「ずずっ……………うんまあ、いつもの事だからね」

「ええっと、天……………何とかだっけ？」

「天与呪縛な」

「自分で結んだものじゃなく、生まれた時からある縛りの事だよ。人にもよるけど、オレの場合は冷え続ける体が縛り。その代わり呪力の量や操作技能が高いっていうのがあるんだけど」

「もつとも、京平はまだまだこっちの世界には足を踏み入れたばかり。呪力操作の恩恵はまだまだ無さそうだけどね」

「それは、自覚してますよ」

男四人で和気藹々、とはいかないまでも険悪な空気はない。

そうして辿り着く待ち合わせ場所。目の前で起きるスカウトの現場。

「——ねえ、私は？」

「え、？」

今まさにスカウトを断られた小太りの男に絡みに行く、学ランにスカート姿の彼女。何というべきか、メンタルが強い。

「俺たち、アレに話しかけんの？ちよつと恥ずかしいな」

「チツ、お前もだよ」

「いやまあ……あはは……」

割と、虎杖も恥ずかしい格好といえは恥ずかしい格好であるのだがアホが増えたと眉間に皺を寄せるのは伏黒ぐらい。苦笑いして言葉を濁した雨里も似たり寄ったりではあるものの。

生徒たちの横で、五条はというと彼は彼で一般的な価値観からは離れた視点を持っている。自分からスカウトに対して売り込んでいくその唯我独尊っぷりも好意的に見れていた。

そうして、合流。

「釘崎野薔薇。喜びなさい、男子。紅一点の登場よ」

ビシツと自分を親指で示す釘崎に一方の野郎共の反応は芳しくない。

「おう、よろしく。俺、虎杖悠仁」

「………伏黒恵」

「雨里京平。初めまして、釘崎さん」

色めき立つこともなければ、いたって普通。伏黒に至ってはその端正な顔立ちの眉間に皺が寄っている始末だ。

（野暮ったい感じよね。小学生のころ、鼻くそ食ってそう。それにこっちは、カモメに重油かけて火をつけて遊んでそう。オマケに最後は、季節感覚バグってるのかしら？）

なかなか酷い評価。ただ、口に出していないために周りが訂正のしようもないのが質悪い。

「——行くでしょ、東京観光」

中身を飲み干したカップを捨てて雨里が戻ってくれば、そんな話になっただけらしい。

どういふ状況、と傍らの伏黒へと目を向ければ首を振られる。

「俺達には、関係ないだろ」

「観光……………ああ、実地訓練だね。二人の力量確認かな」

「だろうな」

「……………教えるべき？」

「ほっとけ」

五条とは初顔合わせな二人は、彼の中身が割と屑であることを知らない。そして、雨里と伏黒はそんな彼の中身がある程度知っているためにその言葉の裏まで何となく察している。

絶対まともに、観光などさせる気ないだろう、と。

\*

「嘘つきーっ!!!」

ギャンギャンと騒ぐ地方民二人。一方で結末の見えていた二人は距離を取っている。

「それじゃあ、このビルに居る呪霊を悠仁と野薔薇の二人で祓ってきてね」

「先生、オレ達は？」

「恵は病み上がりだし、京平が出ちやうとすぐに終わっちゃやうからね。あ、それから悠仁はコレ、持って行って」

「?なにこれ」

「呪具、屠坐魔。まあ、悠仁なら素手でもある程度戦えるかもしれないけど、保険だね。それから、宿儺は出しちゃダメだよ。ここら辺の呪霊全滅させても余裕があるからね」

「うん、分かった」

「宿儺って何の話よ」

五条の言葉に首を傾げた、釘崎。

そんな彼女に説明がなされるが、その内容は割と飛んでいる呪術師であつても、いや呪術師だからこそ引くようなものであるわけで、

「——特級呪物を飲み込んだ!？」

文字通りのドン引き。とはいえ、釘崎の反応も致し方ない。

何せ、どれだけ追い込まれていたとは言えども、千年物の死蠟。それも鋭い爪のある指だ。口をつけることはおろか、触れることすらも嫌悪する人間が居てもおかしくない。

そんな代物を、虎杖は飲み込んだ。その上、体の制御を奪われる事無く受肉させてしまった。

結果、両面宿儺の復活と相成ったわけだが、そこは保守が骨の髄にまで染み込んでいる上層部。即刻、秘匿死刑しようとした。だが、そこに待ったをかけたのが何を隠そう、五条だ。

紆余曲折経て、虎杖はこうして呪術高専の一年として編入することと相成った。

何やら言い合いながらビルへと消えていく二人の背中。残った三人は壁際によつて待つ構えだ。

「悠仁はさ、イカレてんだよね」

おもむろに、そう五条は切り出した。

「いくら呪霊が相手だつて言っても、生き物じみた相手に、躊躇なく向かっていけるんだからさ。ま、今回試されてるのは、野薔薇なんだけど」

「……………虎杖はともかく、釘崎は実戦経験済みじゃないんですか?」

「そうなんだけど、恵も知ってるでしょ。地方と東京の呪霊はレベルが違う。等級は同じだったとしても、人の垣塙から生まれる呪霊はずる賢い。だから呪術師はイカレてなきやね」

「でも、オレがついて行っても良かったんじゃないですか? 後ろから手を出さないなら……………」

「ずる賢さに自分で気づくのも授業だからね。京平も恵も、罫にはある程度気付くでしょ? その察知を、他人任せにしてたら肝心の本人のセンサーが育たない。それじゃあ、この先の業界じゃ生きていけないからさ」

殊勝にそんな事を言う五条。教え子二人はというと、そんな担任の言葉に感動——ではなく、意外にこの人考えてるんだな、程度



の感想しか抱けなかった。尊敬できない大人というのは、担任であろうとも変わらない。

ほどなくして、ガラスの割れる音が空から響く。見上げれば、ビルの上階の窓が割れ、呪霊が一体逃げ出そうとしていた。

「被います」

「……………」

「大丈夫だよ」

とつさに、それぞれ術式を発動しようとした二人を五条が手で制した。直後、呪霊が祓われる。

「よかった、ちゃんとイカレてた」

「……………それは、良いことなんですかね」

雨里京平の朝の特訓。彼が入学してから、ほぼ毎朝行われているこの特訓だが高専内では結構有名な話となっている。

(すつゝいい見てくる……………)

「……………」

今日も今日とて、自己研鑽。地面や壁などの何かに触れずとも、空間で氷を形成できるようにする訓練を今は行っているところ。

ただ、今日は切れが悪かった。

というのも、現在進行形でじつとりと見られているから。

見てくるのは、先日合流したばかりの同級生で紅一点な、釘崎だ。一つ補足をする、呪術師は己の術式を開示することはそれほど多くない。五条のような有名人ともなれば、著名な術式であったならば別かもしれないが。

これは、単純に術師にとつての生命線であるから。名前だけならばまだしも、中身も迄バレてしまえば発動条件にも差し障る。

ただ、何事も例外があるというもので、雨里はこちらに当たる。

何せ彼の術式は、中身を知っていたところで対処法が確立するようなものではない。ついでに応用範囲も広いために底知れない。

故にこうして高専内と言えども大っぴらに術式を扱えるというのものもあるか。

「……………つぷしー！」

冷え切った体に反応して、くしゃみが出る。どうにも、集中力にもガタが来ていた。

(今日はこの辺で止めとこ……………うん)

集中できない状態で、術式の行使はいたずらに体温を奪うだけ。というのも、雨里の凍結呪法は使えば使うほどに冷やしてしまう。ここに、天与呪縛のダメ押しとくれば、全身にカイロを張り付けても足りない。

「なに、アンタってただの一人サウナチャレンジじゃなかったのね」

寒い寒いと両手をすれば、いつの間にか離れて見ていた釘崎がすぐ

近くに来ていた。

第一声がこれは結構アレだが、言われた雨里は苦笑い。

「まあね。どうしても、薄着だと寒すぎて動けないからさ。おかげで、半袖短パンとは無縁の生活だよ」

これからもね、と笑えば鼻を一つ鳴らされる。

「はんっ……そんな寒がりが、氷の術式なんて皮肉が利いてるじゃない」

「そうだね。オレもそう思うけど……まあ、重宝してるのも事実だからさ。使い勝手も良いし、応用も利きやすいから」

言いながら、雨里が手を動かせばキラキラと氷の結晶が宙を舞って、そして消えていく。もつとも、釘崎はこの手の事でキャーキャー言うほどミーハーでもないのだが。

もつと言うなら、彼女はどうかやら雨里の反応がお気に召さないらしい。

「……少しは、反論してきなさいよ」

「はい？」

「だ・か・ら！ 気に入らない事とか！ 腹立つことには噛みついてきなさいって言うてんのー！」

胸倉を掴み釘崎は食って掛かった。

時間にすれば、限りなく短い二人の関り。しかし、その中で釘崎は何度となく、雨里の妙に一步引きさがるような、そんな反応を見た。

直近だと、同級生四人で懇親会ともいべき場になった際。

雨里は真つ先に引き下がると、どこであろうとも否とは言わなかった。

その姿が、釘崎には癪に障る。

「嫌なことは嫌ってハッキリ言いなさい！ 少なくとも、私は無理強いなんてしないってのー！」

「え、あ……と、とりあえず、釘崎さん落ち着いて……！」

振り払う訳にもいかず両手を上げる雨里。彼はなぜ、こうも釘崎が怒っているのかわからない。

この食い違いは、そもその二人の気質の違いによつて生じてい

る。

釘崎は、苛烈な性格であるし、直情型でもあるし、己の我を通そうとする精神的な強さともいべき面がある。

一方で雨里は、荒れる前に一步引く、常の譲歩を忘れない、そんな平和主義的な悪く言えば積極性に欠ける面がある。

どちらが良いか、と問われればどちらも一長一短。前者ならば、場合によっては周りと拗れる可能性が。後者ならば己のストレスを溜め込むこととなるのだろう。

「私が、私であるために。釘崎野薔薇であるために、後悔するつもり何て更々ないわ。そんな選択する気もない。だから、アンタもアンタであるために、雨里京平であるためにそう簡単に折れてんじゃないわよ」

「オレがオレであるために……か……何というか、釘崎さん、かつこいいね」

「当たったり前でしょ。私は、釘崎野薔薇なんだから」

「……オレとは、大違いだよ……」

「後ろ向き発言禁止！次、私の前で温いこと言ったら金づちでぶん殴るわよ」

「うっ……それは、嫌かな……善処するよ」

お手上げのまま目をそらした雨里に対して、釘崎は鼻を鳴らす。

彼女とて、特別何かしらの考えがあったわけではない。一つ言うなら、なよなよとした軟弱男に一発喝を入れてやろう程度は思ったかもしれない。

ただ、そこで見たのは軟弱男の術式。

見事なものだった。感心もした。であるのに、当の本人はなよなよとどつちつかず、というか意志薄弱。そもそも、そう簡単に引き下がるんじゃないやねえ、とそんな気持ちに頭に来た。

このやり取りが、後に誰かの命を救う……かもしれない。そんな一幕。

\*

「あの、五条先生。これから時間良いですか？」

休み時間、職員室にて珍しく声をかけてくる雨里に対して五条は笑顔で応じた。

「なんだい、京平。このGLGに何か用事、いや質問かな」

「えつと……そう、ですね。この本なんですけど」

五条の軽薄な態度に苦笑いしながら、雨里が差し出したのは一冊の分厚いハードカバーの本。

内容は呪術に関したもので、術式の様々な事が載っているというもの。

「術式順転と術式反転、それから反転術式に関して先生に教えてもらえないかと……」

「それは追々……いや、京平が言うなら、少し話そうかな」

座って座って、と五条は適当な場所から引っ張ってきたキヤスター付きの椅子を勧めてくる。

言われるがままに雨里が座れば右の人差し指を立てた。

「まず、術式順転から。これはそのまま、術式に呪力を流して発動すること。僕の無下限なら、術式順転で蒼が発動する。要は、術式を順当に発動すれば発揮される術式の効果が強化される感じかな。京平なら、氷を発生させる。凍結させることが術式順転になるよ」

「なるほど」

「次に、術式反転。まず、呪力がマイナスのエネルギーってことは分かるよね？」

「はい。それは、知ってます」

「術式反転は、自分の術式にマイナスを掛け合わせて作ったプラスのエネルギーを流すことで発動する。無下限なら、術式順転の場合は無限に収束する蒼が、術式反転なら収縮の反対、発散する赫がそれぞれ発動する。それから、反転術式はプラスのエネルギーを作ること。これで、傷を治せるのは傷を負うという状態が、人間にとってのマイナ

スだから。要はそのマイナスをプラスで埋めるから傷も治るって事だよ」

「……………五条先生も、出来るんですよね？」

「そりゃ、勿論。なんたつて、僕は最強だからね。因みに、このほかにも拡張術式なんてのもあるよ。これは、京平の氷の呪骸が当たるかな。要は拡大解釈によつて出来上がる術式だよ」

「拡大解釈……………ほかに、術式の種類つてあるんですかね」

「うーん……………あるっちゃ、ある。でも、これに関しては……………いや、言葉だけは教えておこうかな」

もつたいぶる様な五条。彼としても、教え子の飛躍を求めているし、強くなることに貪欲であることも止めるつもりはない。

だが、なまじ出来るからこそ、その見極めをしつかりとしなければならぬ。

現状五条が受け持つ一年生は、皆揃つて才能があるし、上へと昇り詰めるだけの素養も十二分にあると彼自身思っている。これは、親の欲目のような捕らぬ狸の皮算用ではなく、純粹に術師としての立場で考へての事だ。

宿讎の器、十種影法術、芻霊呪法、凍結呪法。術式だけで見ても相当強力。扱う面々も、雌伏を待たずとも雄飛できるかもしれない。

「良いかい、京平。これだけは約束して。もしも挑戦することになったら絶対に僕の目の届く範囲でやる事。そして、失敗の兆候が少しでも見られたら直ぐに術の発動を止めること。良いね？」

「は、はい」

「よし。それじゃあ、教えようか。呪術師の術式、その奥義は領域展開とも言われてる。呪術の極致だからね。この辺りは大丈夫？」

「はい。本に一応載つてましたから」

「よしよし。実はね、術式順転と術式反転を組み合わせる方法もあるんだよ」

「！その二つを、ですか？」

「そう。名を、虚式。イメージとしては、ゼロをその場に作り出す。収束しながら発散するような、そんなあり得ないものを術式によつて作

り出す。これが、虚式」

「虚式……それは、オレも出来るんですかね」

「それは、京平次第だよ。そもそも、自分に対してすら反転術式を使えない術師なんて五万と居る。硝子が重宝されるのも、そんな反転術式を高いレベルで他人に行使できるからさ」

「コツとかあるんですか？」

「その辺はねえ……ほら、硝子って感覚派だし。彼女曰く、ひゅーん、とやってひよいつ、だつてさ」

「ひゅーん、ひよいつ？」

雨里のイメージとしては、常に目の下に隈を蓄えながらもその美貌が衰えることを知らないクール美人が、高専保険医家入硝子という女性だったのだが、そんな彼女が頭の中でひゅーん、ひよい、何て言えばイメージとの齟齬に目が点になる。

固まった教え子に、五条は吹き出し、そして乱雑にその頭を混ぜ返す。

「ま、それも学生時代の事だからね。今ならもう少しマシな説明をしてくれるかもしれないよ」

「……そう、ですかね。感覚派の人は、大人になっても感覚派だと思いますけど……」

「だいじょーぶ。少なくとも、京平は出来るようになると思うよ。僕が保証してあげる」

「は、はあ………」

買い被り過ぎじゃないか、と雨里は思うが言葉は紡がない。諦め癖は未だに抜けていないが、それでも今はまだ進歩しようという一種のやる気は残っているから。

ただ、このやる気というべきか、彼のメーターの針がマイナス方面に振り切りかねない事態がこの先待っていることなど、誰も知らなかった。

\*

記録

2018年七月 西東京市 英集少年院

特級仮想怨霊

呪胎を非術師数名が目視による確認。緊急事態と判断し、高専生一年四名が派遣される

内、一名 死亡



その日は、朝から気が滅入りそうな曇天が空を占めており直ぐにでも雨が降ってきそうなそんな天気だった。

「四人そろって任務とか、初めてじゃね？」

「はしゃいでんじやないわよ、虎杖」

「は、はしゃいでねえーし！」

ギャーギャーと騒ぐ、虎杖と釘崎。これから任務であるというのに、緊張感に欠けていると言わざるを得ない。

とはいえ、任務前で余計な体力の消費は避けるべきこと、雨里はいつも巻いているマフラーに顎をうずめて苦笑いするだけであるし、伏黒は補助監督としてついてきた伊地知と任務の情報共有に勤しんでいた。

もつとも、そのまま放置し続けるわけにはいかない。呪術師の任務だけでなく、情報というものはいつだって知っている事と知らない事の差は大きいものだから。

「おい、はしゃぐな。今回の任務、分かってんのか」

「だね。少し落ち着いてよ、虎杖君、釘崎さん」

「アンタらもよ、伏黒、雨里！もつと、コミュニケーション能力磨いて出直してこいっつうの！」

「……………飛び火してきたね」

「チツ……………」

残る二人とも情報共有をしようとするれば、これである。伏黒は舌打ちを返して、雨里は苦笑いして両手を軽く上げた。

ただ、流石にこのままにして置ける状況ではないため、この場の大人である伊地知が一つ咳払いをすることでこの場を一先ず締めることとなる。

「んんっ……………いいですね、皆さん。今回の任務は、この少年院で確認された呪胎の調査、および行方不明者五名の捜索です。重要なのは、ここから。『窓』の報告から、今回の呪胎は特級相当の存在にもなりかねない相手です。もしも接敵してしまった場合は、真っ先に逃げて

ください。良いですね？」

「えーっと、俺っていまいちその、特級？ってというのが分からないんだけど」

「では、そちらを簡単に説明しましょう。呪霊には、等級が設定されています。一番下の4級から始まり、3級、準2級、2級、準1級、1級、そして特級。ここまでは大丈夫ですか？」

「おつす」

「続けますね。仮に、呪霊に対して物理攻撃などが通ると仮定した場合、4級は木製バットで討伐可能。3級ならば拳銃があると心強いでしょうね。2級ともなれば、散弾銃でもギリギリ。1級なら戦車でも心細く、特級ともなるとクラスター爆弾による絨毯爆撃と同程度の破壊力を有します。そして、呪術師にも同じく等級が割り振られていることを、虎杖君はご存知ですか？」

「それって、学生証に載ってる数字のやつ？」

「そうです。この場ですと、伏黒君、雨里君が2級。釘崎さんが3級となりますね。そして、この呪術師の等級というのは、同じ等級の呪霊を祓えて当然となります」

「ふーん………え？今回って特級だったよな」

「元々は、五条先生に回されるはずの任務だ。あの人は、現状三人しかいない特級呪術師の一人。もともと、高専で教鞭とっていられるような人材じゃない」

「その五条さんは、今回出張ですが………良いですか、皆さん。もしも、特級と遭遇した場合、*「死ぬか」* *「逃げるか」* この二つしか選択肢はないと肝に銘じてください。1級術師の中でも上澄みとも言われる方々ならば、対処可能かもしれませんが現状のあなた方では勝ち目がありません」

言い切った伊地知だが、彼の言葉に間違いはない。特級とは、それだけ規格外なのだから。

そもそも、1級の呪霊であつても2級以下の術師は一蹴されてしまう。特級は更にその上なのだから、勝つ負ける以前の問題と言えるだろう。生殺与奪の権利は、相手にある。

その後も、いくつかの情報のすり合わせと方針を話し合う中、少年院に服役する一人の母親が割り込んでくる。

善人である虎杖は別にして、伏黒は良い顔をしない。  
何故ならここは、少年院なのだから。

\*

踏み込んだ瞬間、空気が変わる。

「ッ、扉は!？」

焦った伏黒の言葉に全員が振り返れば、そこにあるのは出入り口ではなく壁。

「壁え!？」

「い、いいいい今、ここから入ってきたはずよねえ!？」

啞然と扉があつたはずの壁を見る虎杖と釘崎。一方で、眉根を寄せた雨里は若干の警戒を滲ませながら三十センチほどの氷の棒を創り出すと壁に近づき、その先端で突いてみる。

「……………隔離されたかな。領域展開となると、相手は特級(仮)から特級(確)になるかも」

「いや、多分領域展開じゃないはずだ。生得領域を無理矢理張り付けた未完成の領域じゃないかと思う」

「そうだと良いんだけど」

「……………最悪の場合、お前が二人を連れて逃げろ」

「!伏黒君?」

「……………」

不吉な言葉を言い残した伏黒は、玉犬を傍らに従えて混乱している二人の元へ。

問い質そうにも、彼のそばには虎杖と釘崎が居る。二人にまで、伏黒の不吉な言葉を伝えて余計な不安を煽る事など雨里には出来なかつた。

ただここで思ってしまうのが、足止めなら自分の方が向いているだろう、という犠牲の思考というあたり彼の精神性の歪みが見え隠れするというもの。

そうして、玉犬を伴った伏黒が先導。その後を、二人が続き、殿を雨里が務める並びで四人は通路を進んでいく。

「なあ、雨里」

「うん？」

「さっき言ってた、りょーいきてんかい？つて何なんだ？」

「領域展開ね。呪術の極致とも言われる、結界みたいなものだよ」

「……………ここも？」

「いや、多分違う。さっき、伏黒君も言ったけど術式が付与されていない。未完成の領域だよ、恐らく。ただ、油断はしないで。ここは言ってしまえば相手のテリ、トリー……………」

不自然に尻すぼみになった雨里に説明を聞いていた虎杖と釘崎は振り返る。

件の彼が見るのは、二人よりもさらに先。伏黒の背を超えた空間の先だった。

「……………」

広々とした空間だった。人の手では作る事すらも難しいであろう内観。

そして、その空間に転がる三つの肉の塊。内二つは、原形すらもとどめていない球体。もう一つは、上半身だけとなった男の体。

「……………遊ばれてる」

惨たらしい光景に、雨里はそう呟く。

呪霊が人間を襲うのは、その本能によるところが多い。それ故に、直接的である事が多く、そのまま捕食することも珍しくない。

だが、目の前の光景はどうだろうか。

原形を留めない球体。それも、ただ丸めたのではなく皮を引きはがしたり、内臓に手をかけて骨をへし折ったような痕が見受けられた。

食べるためでも、殺すためでもなく、己の欲求に従うままのその行動。それらを踏まえて、雨里は目の前の光景を「遊ばれている」と称

したのだ。

「——この遺体、持って帰ろう」

物怖じすることなく、死体に近づいて胸元の名札を確認した虎杖が、そう進言する。

他二つと比べて、上半身が原形を留めている死体こそ、どうやら少年院突入前に割り込んだ女性の息子であるらしい。

だが、これにいい顔をしないのが伏黒だ。

「あと二人の安否確認をしなくちゃならない。それは、置いていけ」

「振り返ったら、道が消えてる。ここに戻ってこれる保証何て——

——」

「違う。後にしろ、って言ってるんじゃないやねえ。置いていけ、って言うんだ」

「……………どういう事だ」

噛み合わない二人。互いが互いの胸倉を掴む状態にまで発展する。

「そいつは、二度無免許運転して捕まってる。それも、二度目の無免許で子供を撥ねた。分かんたら」

「分かんねえよ。遺体もなくて、息子が死にました、何て言っただの人になんて納得してもらえってか」

「納得する、しないの話じゃねえんだよ」

「ちよ、二人とも！今はそんなことしてる場合じゃ——」

「そうだね、少し落ち着——」

蟬谷に青筋を浮かべる二人を諫めようと動いた、釘崎と雨里。

だが、その言葉を言い切る前に二人の体は突如沈んでいた。

先に釘崎が、続くように雨里は床に現れた黒い影のような、淀みへと飲み込まれていく。

反射的に、伏黒は己の式神に姿を探していた。呪霊が接近すれば、玉犬が吠える筈であったからだ。

「なっ……………！」

そして、見つける。少し離れた壁にめり込むようにして、玉犬の頭部が突き刺さっていたのだ。確認するまでもなく完全に破壊されているのは明らか。

伏黒は、己の産毛が逆立ち、毛穴が開いて脂汗がにじむのを実感した。

「虎杖！逃げる——」

逃走を選択し、連れに声をかけようとして彼に喉が詰まる。

なぜ気づかなかったのか。そう問われそうなほどに近い。

絶望は、いつだって直ぐそこにある。

「——これは、不味いかも」

「——何よ、この数」

最初の試練は既に、牙を剥いているのだから。

孤軍奮闘四面楚歌。正しく、そんな状況。

「君らに割ける、時間はないんだよ！」

言つて、雨里は力強く床を踏みしめる。途端に、踏んだ足を起点に氷の円錐が無数に現れ、その鋭い先端が彼を取り囲む呪霊を貫いていく。

周囲を気にすることのない全体攻撃。これもまた、彼の術式の強みの一つと言えるだろう。

だが、この状況では焼け石に水としか言えない。

「多い……！」

まるで、空間そのものから生えてきているのではないかと錯覚するほどに、呪霊の数が凄まじい。

厄介なのが、4級や3級に交じつて、2級、準1級相当の呪霊が居る点か。ぶつちやけ、雨里の術式でなかったならば何度死んでいるかもわからない。

ただ、それ以上に彼を苦しめるのもまた彼自身の術式であった。

五条悟が己の術式によって脳が煮溶ける可能性があるように、雨里京平の術式もまた彼自身の肉体を冷まし続けてしまう。

既に吐く息は白く、顔色も青白い。体にはコート越しではあるが霜が降り始めており、ポケットにねじ込んでいる両手は赤くしもやけている。

それでも、雨里は生存を諦めるわけにはいかない。

ほんの少しだけ変わったのかもしれない。それは、他人に理由を求めてしまうという、直ぐにでも破綻するであろう気持ち。

だがしかし、今の雨里は気付かない。理由はどうあれ、戻らねばならないのだから。

「——雨里ッ！」

響いた声。振り向けば、入り口と思しき光を背に伏黒が立っていた。

「伏黒君！釘崎さんは?!」

「そつちは問題ない！こつちだ、早く！」

言葉は、そこまで。自分の体を床から弧を描く軌道で生やした氷柱で押し飛ばした雨里は、伏黒の隣に降り立つとそのまま入り口を分厚い氷河の壁で封じ込めた。

冷たい息を荒れさせて肩で息をする雨里が振り向く。

「虎杖君は？」

「……………虎杖は足止めだ」

「ッ！直ぐにでも——」

「少年院を出たところで、合図すればアイツは宿儻と変わる手筈になつてる。今戻つても、殺されるだけだ。行くぞ」

釘崎を背負つて前を行く伏黒。彼の判断は非情にも思えるかもしれないが、現実には則した意見でもあった。

何故なら、現状伏黒も、雨里も、釘崎も、特級を相手に生き残る事など難しいと言わざるを得ないのだから。その点、不完全と言えども、両面宿儻は特級存在。ぶつけるには、現状とれる選択肢でも最上だろう。

後を追う雨里もそんなことは、分かっている。分かっているが、それでも一人置いていくというのは、心に亀裂を走らせる。程なくして光が見えてくる。

「伊地知さん！」

「皆さん！ご無事ですか！」

気を揉んでいた伊地知は、傷こそあれどもちゃんと戻ってきた三人に一瞬だけ気が緩む。だが、直ぐにあることに気付いた。

「伏黒君、虎杖君は……………」

「……………虎杖は、残りました。俺たちが、少年院から出たところで合図を出す手筈になつてます」

それ以上の説明を、伏黒は切ると玉犬に遠吠えを支持する。

これで、中では特級同士がぶつかることになるだろう。

「……………」

負傷した釘崎を伊地知へと任せた雨里と伏黒は、再び少年院の敷地へと足を踏み入れていた。



「……………勝算は？」

「ない。ただ、虎杖は受肉したときに宿儺との主導権争いに勝ってた。その後に、五条先生も指を飲ませて確認している」

「……………」

希望的観測だ。だが、雨里は口を開かなかった。

勝つ負ける関係なく、彼だって同期が、友人ともいえるような相手が死ぬことなど望んでいないし、考えたくもないのだから。

世界は得てして、優しくない。呪術師の世界など、地獄が広がっている。

「……………小僧ならば、戻らんぞ」

絶望が、そこに立っていた。

\*

「ごほっ！げほっ！……………ッ、くそっ！」

数本の木をへし折って吹き飛ばされた雨里は、壁に叩きつけられるも意地で立ち上がると前へと駆ける。

突然に始まった、宿儺との戦闘。指一本ですらも対応できないというのに、今の宿儺は指三本分の力を有し、おまけにダメ押しすらもある。

ダメ押し、それは心臓を抉り出された虎杖を反転術式で心臓の再構築をさせるといふもの。

「鶴ー！」

「凍結呪法・氷嘴ー！」

紫電を纏った怪鳥と、その怪鳥を援護するように放たれる複数のツララたち。

それだけではない、伏黒も雨里も接近戦を仕掛けていた。

「くくっ、遠距離からだけかと思えば、術師本人が向かってくるか」

伏黒の左拳、雨里の右拳を受け止める宿儺には余裕しかない。

事実、余裕なのだろう。彼にしてみれば、目の前の二人など瞬きの間に殺戮可能なのだから。

今も、飛び上がりながら回転し二人をそれぞれぶん投げて、否投げ捨てている。

地面に叩きつけられる雨里と、宙を舞う伏黒。状況的にも直ぐに立て直しを図れたのは後者の方だった。

空を飛ぶ鶴に己を回収させ、更に別の式神を己の影を媒体に召喚する。

空中にあつた宿儺の体。そこを地面から強襲したのは、白い鱗に文様の刻まれた大蛇。その体を啜えて一気に空へと昇っていく。

「良い術式だ。手ぬるいが、なっ！」

玉犬と同様に破壊される、大蛇。だが、先程のジャンプよりもさらに高所に、その体は放り出されることになる。

追撃が、迫っていた。具体的には、地面から氷柱を一気に伸ばし、その上に乗って拳を構える雨里である。

ただ拳を振り抜くつもりではない。いつぞやの任務で創り出した氷のパイルバンカー機能付きの氷の手甲を既に装備済み。

「シッ！」

振り抜かれるは、右拳。着弾と同時に、機構が作動し直撃時以上の衝撃が宿儺を襲う。

だが、

「——手ぬるいなあ？もつと、呪いを込めて打ち込んで来い」

止められた手甲による一撃。その氷は、握る動作で破壊されてしまふ。

「このようにな」

「ッ！ぐっ………!?!」

目線以上に右腕を持ち上げられた雨里の胴体へと、宿儺の右張り手が叩きつけられる。

咄嗟に左腕でガードするも、ガードした手甲は碎かれ、その骨にも亀裂が走る。更にそこから、二度、三度とガードを躲され叩き込まれる張り手。

ぐったりと俯く雨里。その口の端からは、一筋の血が流れる。

「何だ、もう終わり——」

だからこそ、宿儺も油断した。いや、元よりこの場の戦闘など彼にしてみれば手遊びでしかないのだから、油断も何もないか。

顔を見てやろうと落下しながら引き上げた右腕。自然と、両者の顔は近づき、

「なめ、るなッ……！」

呪力の込められた頭突きが、その鼻っ面へと叩き込まれる。

黒い閃光を伴って。

「貴様……！」

「ごまあ、みろ……！」

思わず放してしまった左手により、雨里の体は重力に引かれて落ちていく。そして、横から攫う大きな影が一つ。

「生きてるか、雨里」

「げほっ………どうにか……」

鶴によつて落ちてきていた雨里の回収を済ませた伏黒は、前を睨みながら問う。

地面に降り立つと同時に蹲ってしまった同級生は、もはや戦えるかも怪しい状態。自分の方も呪力をかなり消耗している。

一方で、降りてきた宿儺はというと、不意打ちの頭突きで曲がったのか鼻を弄りながらも、その体に蓄積したダメージは毛ほどもないだろう。

「……までだな……」

そう内心で零すと、伏黒は傍らの鶴へと指示を飛ばす。

大きな翼が翻り、その足が掴むのは蹲ってどうにか立ち上がろうと藻掻いていた雨里の背中だ。

「頼んだぞ」

主の言葉に一声鳴いた怪鳥は、その翼を動かして空へと昇る。そしてこの間、伏黒は宿儺を牽制し続けていた。

「自ら戦力を削るか。それで？貴様は、俺に何をさせてくれる？」

「……」

嘲笑うように問うてくる宿儺だが、伏黒は沈黙をもってこれに返す。

彼は、己の力量を正確に把握しているつもりだ。そして、これから行おうとしているのは己の切り札であると同時に、諸刃の剣。何より、悪癖ともいえる性根を形成してしまった一因でもある。

構えられる両腕、高まる呪力。

文字通りの捨て身。そしてこれは、周りに誰かが居た場合には躊躇わなければならぬ手段でもあった。

嗤う鬼神。覚悟を決めた式神使いが相對し――

\*

風の吹く音が、鼓膜を打つ。

暗い視界を訝しんで、目を開けてみればそこに広がるのは――

「吹雪………？」

瞼の闇と相反するような、数メートル先すらもはつきりとは見通せない白い壁。

銀世界の中、雨里京平はただ一人雪に埋もれるようにしてそこに大の字で転がっていた。

記憶を思い出そうにも、頭はぼんやりとされていて働かない。体も、まるで末端から中央に至る全てが鉛で構成されているのではないかと思えるほどに重く、指先一つ動かない。

この間にも吹雪は収まるでも激しく成るでもなく吹き荒れ続けており、彼の体は白の中へと埋まっっていく。

なぜ自分がここにいいのか。その答えは、彼の内側から生じることはない。

ただ不意に、吹雪が途切れる瞬間が訪れる。

雪に半分埋もれて霞んでいく視界の中、彼はとあるものを自身の頭

の先に見た気がした。

氷の礎の上に聳える、二階建ての青白い氷河によつて形成された巨大な建造物。

その大きな影は、再び吹き始めた吹雪と霞んで暗くなつていく視界によつてはつきりと確認することはできなかつた。

吹雪は止まらない。

意識が深い場所から浮かび上がってくる。深い眠りから覚めるときの様に。そんな感覚。

「……………ん……………」

薄く目を開ければ、最初に視界に飛び込んできたのは暗い天井。視界の端では、ゆらゆらとオレンジ色の光が揺らいでいる。

とりあえず、身を起そうと体を動かし、そして雨里は枕に頭を預けたまま首を傾げた。

「動けない……………」

そう、動けない。指先など、もともと血の巡りが悪く冷え切っている末端などは別として肩や、そもそも体を起こすことなども今は何故だかできない。

徐々にだが調子を取り戻してきた頭も不思議を訴える。とりあえず、この状況の打破を狙って雨里は術式を使おうと呪力へと意識を――

「ツ！寒っ!？」

突然の悪寒。同時に、室内が凍結する。

ほんの少しのつもりだった。その筈が、まるで蛇口を急激に開いてしまったかのような違和感と共に術式の半暴走を引き起こしてしまったのだ。

意味が分からない。雨里は目を白黒させながら、どうにかこうにか直近の事態について思い出そうと頭を回す。

ただ、その思考は唐突に打ち切られることとなる。

「……………お、起きたみたいだね」

「……………う？五条、先生……………」

片手をあげて部屋へと入ってきたのは、いつもの不審者ルックに軽薄な態度をを隠しもしない五条だった。

「二日も寝てた割には、元気そうだね。よかったよかった」

「……………二日?？」

「そ。少年院の任務からね。まあ、三人の中でも一番怪我が酷かった

んだから当然と言えば、当然かな」

「少年院……あの、五条先生」

「うん？」

「皆は、無事ですか……？」

その問いを、五条は予想していた。だが、いざ面と向かって問われると少々困ってしまう。

違和感を覚えさせない程度の間を挟んで、彼は口を開く。

「恵は打撲と、それから骨に罅が入ってたけど、硝子のお陰で完治。野薔薇も頭を少し怪我してたけど、こっちも完治してるよ。悠仁は……」

「……いえ、何となく分かりました」

五条から顔を逸らした雨里は、天井を見上げた。その目じりから一筋だけ、涙が流れる。

「夜蛾学長も言っていました。呪術師に悔いのない死はない、と。そして、後悔は生きている者の特権だとも。分かっているんです。悔やんだところで過去は変わらない。IFの積み重ね何て意味なんてないつて。もしも、あの場でオレも残ったとしても役に立てたことなんてない。死体の数が増えるだけだったって」

「……それで？京平はどうするの？」

「……」

目隠し越しに二人の視線はかち合う。

「進みたいです……二度目が無いように」

自分のためには、頑張れない。ならば、誰かのために頑張ろう。

危うさはある。自分で納得して、自分の理由として揺らがらないものであるのならば良いのだが、根幹が歪んでしまうと人はたやすく崩れてしまう。

五条は、そんな人間の様子を実際にその目を見た。

二度目の失敗はしない。そう心を決めて、話を切り出す。

「それじゃあ、強くなろうか。大丈夫、京平は強くなれるよ。何て言っただって、黒閃を成功させたんだからさ」

「こくせん？」

「黒に閃光の閃で黒閃。打撃との0.000001秒以内に呪力が衝突することで発生する現象の事だよ。威力は、通常打撃の2.5乗。2級以下の呪霊ならこれだけでも倒せるし、特級にだって致命傷を食らわせられる。もつとも、狙って出せるものじゃないんだけど」

「……………それが？」

「この黒閃の効果は、純粋な体術の破壊力アップだけじゃない。より、自分自身の呪力への理解にも繋がるんだよ」

「はあ……………？」

「一度、自分の呪力に意識を割いてごらん」

言われて、雨里は目を閉じる。

へそを起点に起きている呪力の流れ。某ゴリラな術師曰く、呪力を流すという認識を超えることこそ一流への第一歩。

目を閉じて、自分の内側を探っていた雨里は、不意に極寒の冷凍庫にでも放り込まれたような冷たさを覚える。

「ッ……………！」

指の先から凍り付くような感覚。明かに、目覚める前に比べて呪力が強くなっている、そんな気がした。

「これって……………」

「京平の場合は、天与呪縛の効果もあつて呪力量と操作に強みがあつた。それが更に黒閃によって研ぎ澄まされる。もつとも、ここからは京平自身の制御の問題になるんだけど」

「制御？」

「自分が何でここに、しかも拘束されているのか、不思議じゃなかった？」

「それは、まあ……………」

「理由としてはね、単純に京平自身の呪力が外に溢れるほどだったから。どうやら、黒閃の経験を経てから直ぐに気絶しちやっただけで蓋が開いたんだけど、閉め損ねた結果かな」

「蓋を……………」

「ま、イメージイメージ。大切なのは、京平が今、強くなるためのスタートラインに立ったって事だよ」



「スタートラインに……………」

「それじゃあ、まずは手始めにその封印、壊してみようか」

「……………はい？」

「大丈夫。封印そのものは、大した強度はないし壊したところで怒られたりなんてしないよ」

言われ、雨里は再び自分の内側へと潜り込む。

一度目も二度目も自分の状態についていけずに驚いてしまった。だが、その状態さえ認識してしまえばこっちのもの。

宛ら、呼吸をするような自然さで操作される呪力。

雨里の呪力は、絶対零度。あらゆるものは、その世界の中では停止、ないしは限りなく停止に近づく。

そして、凍結し互いの結びつきの弱まった対象は、限りなく脆い。拘束するバンド型の封印に冷気が走り、そしてバンドだけが凍り付く。

碎ける拘束。起き上がる体。

「……………凄いな」

呪力操作の精度の格段の上昇。それを、雨里はいま身をもって体験し、そして実感していた。

現段階で、彼自身の所感でしかないが密着状態であったとしても対象を選別して凍らせる事ができるだろう。

凍結の速度もかなり早い。

「それじゃあ、皆のところに行こうか。恵も野薔薇も二年生と体術の特訓中だからさ」

「特訓？」

「そ。近々、京都姉妹校との交流戦があるんだよね。京平も、そこに出るんだよ」

「交流戦って……………戦うんですか、呪術師同士で」

「殺しは無しだよ。その代わり、何でもありな呪術合戦。自分の今の実力を測るには、ある程度の指標になるんじゃないかな」

五条の言葉を受けて、雨里自身考える。

冷えていく体は変わらない。今も、外は夏日であるというのに寒気

すらある。この部屋の気温が外よりも低いことを加味してもだ。  
力の一端は、既にその手の中にある。

\*

雨里が目覚めたのと時を同じくして、伏黒、並びに釘崎の二人は二年生に扱かれているところだった。

「もう少し、踏み込んで来い」

「ッ……………」

長物に見立てた棒を振るう伏黒と、そんな彼の攻撃を容易く捌いていく真希。

二人から少し離れた場所では、今現在進行形で釘崎がパンダに足を掴まれぶん回されているところだった。

「にやああああああ!?!」

「ほおら、猫みたいに鳴くなら着地しっかりしろよー」

「ツナマヨ」

呪骸としてのパワーを遺憾なく発揮すれば人一人振り回す程度なら造作もない。その分、機動力には若干の難が残るモノの明確なパンダの強みだ。

一方で、釘崎はというと彼女の術式は割と強いが、その分当人の格闘能力には弱みがある。これは呪力の強化などを含んだ上での評価。ぶつちやけ、身体能力お化けな虎杖や、幼少の折より五条の手ほどきを受けることができた伏黒とは土台からして違うのだからこれは致し方ない。

べっしやりと地面を転がされる釘崎。空が青い。

「おニユーのジャージ、ドロドロにしゃがって……………」

「いや、ジャージなんて汚れてなんぼだろ。運動着なんだし」

「しゃけ」

「ルツセエ！態々デザインにまで拘って買った一品だつての！愛着も

沸くわ！」

ギャンギャン喚く釘崎。そんな彼女を尻目に、伏黒と真希の手合わせもまた一端の落着を見せていた。

「くっそ……………」

「まだまだあめーよ、恵。もつと死ぬ気でかかって来い」

「……………禪院先輩は——」

「名字で呼ぶな」

「……………雨里と鍛錬してましたよね」

「まあな。つつても、アイツも術式は無しだ。お前と同じく、な」

「……………アイツは、どの程度動けるんですか」

「そうだな……………まあ、得物は無しだ。京平の場合は、一つの呪具に固執するよりも、氷で次から次へと武器を作って振るう方が強みが生きる。それに、アイツは目が良い。私の振るった大刀の刃先を目で追える程度には、な」

真希から見て、雨里は非常に恵まれている。術式然り、潜在能力然り。その上、動体視力なども良ければ強くなるうえでの下地は十分すぎるというもの。

現総評とすれば、真希の中では伏黒よりも雨里に軍配が上がる。もつとも、どちらも未だに発展途上。何より伏黒には、悪癖がある。

一方、自分で尋ねておいてアレだが、伏黒自身思わないことが無いわけではない。

自分が同年代で最強、とかそんな自惚れはない。そんな気持ちを抱くような性格ではないし、何なら自分は無意識のうちに周りよりも戦う理由に劣ると考えてしまう節がある。

先の少年院での宿讎との戦闘。伏黒としてはダメージレースをした場合雨里の方が酷い手傷を負ったと考えている。

左前腕の骨折。内臓損傷。肋骨の三番、四番骨折。頭蓋骨の額部分にも罅が入っていたし、その他諸々細かな擦り傷や切り傷も大量にあった。

明らかな重症だ。特に肋骨は、変な折れ方をしてその先端が内臓に刺されれば大出血を起こしていたかもしれない。でありながら、彼は最

後の最後まで立とうとしていた。少なくとも、伏黒が無理矢理鶴で撤退させるまで気絶もしなかった。

(足りねえ……！)

現状で満足したことはない。したことはないが、最終手段を明確に持ち合わせているせいかわ黒はどこかで引く、次の誰かへと繋げるような戦い方をする。

だが、今回で露呈してしまった。それでは足りないのだと。置いて行かれるばかりでは、ダメなのだ。

「もう一本、お願いします」

「良いぜ、来いよ」

最初の再会は、もう間もなくだ。

黒閃を経験したか、否か。術師の大成は、呪力や術式のみならずこの経験の有無もものを言う。

「凍結呪法・凍骸<sup>とうがい</sup>」

両手の指通しだけを合わせて呪力を練り上げる雨里。彼の前に現れるのは、いつぞや挑戦していた氷の人形だ。

ただ、その見た目は進歩を見せており、デッサン人形のような姿から高専の制服を着たのつぺらぼうの氷人形となっている。

この造形に感嘆の声を漏らすのは、呪骸であるパンダ。

「ほお、やるな京平。正道ほどじゃなくても、ここまでがつつり人形作れるようになったのか」

「やつとここまで、って感じですけどね。オレとしては、もう少し詰めていきたいです」

「上昇志向なのは結構だけでも、交流戦も忘れんなよ?」

「それは、はい。大丈夫です」

「ま、京平は一年の中じゃ体術はマシな方だからな」

「……その噂の東堂さん?はそんなに強いんですね」

「まあな。去年は、憂太が快勝したらしいけど。ぶっちゃけ、現状の東京と京都の高専生の中じゃ化け物だな。うちの場合だと、京平か恵を充てる」

「出来る事なら一人で抑える、ですよね?」

「そゆこと。棘の呪言もあるけど、そっちは実力差で効果がまちまちだからな」

見た目の奇抜さに反して、確りと先輩やっているパンダ。ついでに、夜蛾を除けば本人が呪骸であることも手伝って、この手の教導は一番向いているともいえる。

京都姉妹校との交流会。もとい、交流戦へと向けて今やるべきことは新たな力の獲得、ではなく基礎の見直しが主だ。これは、交流戦までの時間と、それから鍛え上げるべき一年が術式に関してはある程度扱えると判断しての事。

「——ぶへっ!？」

「ツナマヨ?。」

「おーい、野薔薇ー。言つとくけど、棘は割と肉体派だぞー。油断すんなよー」

少し離れた所で狗巻に軽く投げられた釘崎へと、パンダはそんな言葉を投稿かける。

やはりどうしても、性別の壁は超えにくい。いくら呪力で強化できるといえども、やはりその下地がボロボロでは直ぐに破綻してしまう。

釘崎がポイポイ投げられているのも、受け身の一つもまともに取れなければお話にならないからだ。

そも、才能ありきの呪術界隈ではあるがだからと言って一芸のみで生きていけるほど温くはないし、そんな者は実戦でアツサリと命を落としてしまう。

手札の多さは、そのまま自分の身を守るための手段の多さ。そして身を守るということは、生き残る手段でもあるのだから。

「んじや、俺らも組手やるか」

「はい。お願いします、パンダ先輩」

「ふふん、先輩の威厳を見してやんよ。あ、今度は人形三体を維持したままな?。」

「了解です」

\*

伏黒は、考えていた。

強くなるとすれば、彼の場合は式神の調伏をすればいい。というか、彼の場合はそれしかないし、オリジナルの拡張術式はどうしても本来の術式と比べると出力に劣る。もつとも、破壊されても手駒が減らないのは利点ではあるが。

一体の調伏は、少し前に終わらせた。それでも、完全に破壊された大蛇の件を考えると手札の幅が広がったとは言えない。

式神だけでは足りないのだ。だからこそ、こうして近接戦闘における技術を磨こうとしている。

「禪院先輩は、呪具を幾つか持ち運びますよね。普段、どうしてるんです?」

「急になんだ。というか、名字で呼ぶんじゃない。で、呪具か。パンダに持たせてる」

「……」

「そんな顔すんじゃないよ」

「普通の顔です……術式の関係上、俺としては両手を空けておきたいんで。長物もそうですけど、刀も鞘に納めるロスがありますし」

「呪具を収められる呪霊飼ってるやつも居るよな」

「それこそ、レアだろ。むしろ、私が欲しいつつうの」

「その点アレだよな。京平の術式は、場所選ばずに武器だけじゃなくて壁とかまで作れるんだから、応用の幅が広い」

「オレがどうかしました?」

パンダの言葉に反応したのか、雨里が三人の元へと寄ってくる。

「お前の術式は万能だ、って話」

「そうですかね?」

「そうだろ。武器、壁、範囲攻撃。オマケに今は、人形まで作ってる。ま、その分苦労してるのも知ってるよ、俺達はな」

言って、大きなパンダの手がすっぽりと雨里の頭を包み込む。

確かに強力な術式を雨里は持っているだろう。だがそれと同時に、天与呪縛も受けている。

体が冷える。ただそれだけだと言われればそれまでだが、この夏日の元で裏起毛のジャージにベンチコートまで着込んで汗一つも流さないのは異常そのもの。

常人ならば、気が狂う。ついでに、その体も既に異常をきたしている。

その一つが、汗の有無。雨里は、どんな気温でも汗をかかない。こ

れは、冷え続ける体が冷却を必要としないため。一応、冷や汗などは出るが体温調整のための汗はまず出ない。

話が脱線する中、ふと伏黒は己の影へと手を伸ばしていた。

特段理由があったわけではない。ただ、目の前の彼が柔軟な発想で術式の解釈を広げていく様子を眺めていたら、自然と体が動いていた。

「――」

触れた指先が、わずかに影の中へと沈み込む。宛ら、水の中へとその手を伸ばしたかのようなそんな感触だ。

その時、伏黒に電流走る。同時に、これこそが術式への認識の拡大か、とも理解できた。

「禪院先輩」

「あん？」

「何とかなりそうです」

顔を上げた彼の表情は、不敵そのものであった。

\*

周囲には森があり、敷地内にも森のある呪術高専。

「すすずし……」

「程々にしないと、夏バテするよ釘崎さん」

「休憩中だから良いの……」

芝生の上に転がった釘崎へと、微弱な冷気を掌から放って当てる雨里。

極低温を放つ事ばかりであった彼だが、黒閃の経験はその温度の變化幅を大きくする事を可能としていた。今の温度は、冷蔵庫の冷氣程度の温度であり外の気温と火照った体が合わさることで、ちょうどいい温度というやつである。

一応、これも雨里の鍛錬の一環でもある。少しでも加減を間違え



ば、釘崎を氷漬けにしてしまおうし、逆に加減が過ぎれば彼女からの催促が飛んでくる。

休む二人の近くでは、今まさに真希に打ち据えられる伏黒の姿が。

「はあ……………はあ……………」

「少しはマシになった、か。オラ、寝てんな」

呪具、というか武器の扱いに関してはこの場で真希が一番上だ。体捌き、もとい体術こそが土俵である彼女にとってそれらが劣るとするのは致命的でもある。

一方で、伏黒もまた生来のポテンシャルを十全に発揮しているとは言えない状態であるのがもどかしいというもの。

「休憩だ。金渡すから、京平と野薔薇と飲み物買ってこい」

「……………何でもいいですか」

「おう。先輩からの奢りだ」

行ってこい、と送り出された伏黒。その足で向かうのは休憩中の二人の下だ。

「禪院先輩からだ」

「真希さんから？……………小銭だけ見せてどうしろつてのよ」

「自販機に行くぞ」

「ぱしりって訳ね」

真希さんのためなら仕方がない、と釘崎は起き上がり続くように雨里も立ち上がる。

「あ、オレ先にトイレに行ってくるから、先に行つてて」

「おい、雨里。もつと言いつてもんがあるだろ。デートに行つてんなこと言つてると引かれるぞ」

「え、デート？……………ええつと、鴨撃ちに行つてきます」

校舎の方へと小走りに向かう背中を見送り、伏黒は目だけを隣の釘崎へと向けた。

「……………お前、雨里とそんな関係だったのか？」

「はあ？いきなり何よ。さっきの事言ってるわけ？あんなの単なる一般論でしょ……………まあ、私が知ってる男連中の中ではマシな方じゃない？」

厚着だけど、と続ける。

もつとも、その男連中というのが、パンダ、語彙がおにぎり、人間性問題ありの二十八歳児、顔立ちは悪くないが不愛想、特級呪物を飲み込むゴリラ、着膨れした穏やかボーイ。呪術師はイカレテなんぼと言われても酷い。

そんな評価など知る由もない雨里はというと、早々にトイレを済ませて先に行ったはずの二人との合流を目指していた。

「……………うん？」

だが、その道すがらで首を傾げることになる。

というのも、伏黒の呪力が大きく揺らいだのだ。ついでに、その近くにはより強い誰かがいるような気配もある。

果たして、雨里の視界に飛び込んできたのは羽の生えたカエルを従えて構える伏黒と、それから文字通りの筋骨隆々強面の男。

とりあえず、雨里が選ぶのは、介入という選択肢。踏み込んだ足を起点に氷の壁を二人の間に挟み込む形で出現させる。

「えっと、伏黒君。どういう状況かな、コレ」

「雨里！」

「氷……？」

「そつちの人は、呪術師、ですよね？高専のアラームが鳴ってませんし」

「お前、一年か？」

「あ、はい」

「俺は、京都三年、東堂葵。好きな女のタイプは、身長タツパと尻ケツがでかい女だ」

「……………はい？」

季節外れの木枯らしでも吹いたような空白。

「え、あの……………女性の、タイプですか？」

「ああ、そうだ。性癖には、そいつの全てが反映されている。それが詰まらん奴は、人間的にもまったくもってつまらん。その伏黒の様な」

堂々と頭のおかしい理を平然と語る東堂に、雨里は無意識のうちに伏黒へと視線を送っていた。逸らされてしまったが。

「さあ、答えろ。男の趣味でも構わんぞ？俺は、性癖で差別する気はないからな」

「……………」

答えを急かしてくる東堂だが、雨里は黙ってしまふ。その眉間には皺が寄っているし、表情は困った、という内心を如実に表していた。

「……………考えたことないですね」

「なんだと？」

「女性、というよりも、何かしらの好みを聞かれるような事なんて少し前までありませんでしたし、そんな事を語り合うような人もいませんでしたから」

天与呪縛と術式。これによって、家族関係すらも希薄であった雨里にしてみれば女性の好みなど考える暇などあるはずもない。そもそも、女性との接触というものだって同級生の釘崎、先輩の真希、保険医の家入位のものであるのだから。

一方で、雨里の返答を受けた東堂は構えを解くと顎に右手をやり領いていた。

「成程な……………一年！」

「はい？」

「お前、名は？」

「……………東京一年、雨里京平です」

「そうか。雨里！お前、一般家庭の出身だな？」

「え？あ、はい……………そうですけど……………」

「やっぱりな」

「ッ!？」

東堂が頷いた直後、雨里は反射的にその場に沈み込んでいた。真上を通過するのは筋肉質な剛腕だ。

「よく躲したな!」

「いきなりなんですか!」

「お前の境遇は察せられる!だが、女の好みがないという事は、お前状況打破に動かなかつただろう?その時点でつまらんという事だ!」

無茶苦茶だ、と雨里は内心で毒づく。その上、目の前の東堂は強い。

まず、肉体の厚み、体格の差がある。でありながら、その純粹な速度に関しては現状の雨里よりも速いかもしれない。ついでに、フィジカルも。

冷静に判断を下した彼は、戦略を決める。

「ふうー……………」

真希にも褒められた目の良さ。これを、雨里は生かしていた。

確かに、東堂のスピードに肉体的に付いていくことは現状難しいかもしれない。だが、彼の動体視力に限ればその差は無いに等しい。

目では追えている。それでも体が最低限度しかついてこない。ならば、最低限度の防御に徹するほかない。

(ほう、少しはできるか)

パーリングという技術がある。サーフィン、ではなくボクシングなどで見られる相手のパンチを叩いて逸らす技術の事だ。

この時、大事なのが叩き過ぎないこと。

強くたたけば、自然と相手の攻撃を大きく逸らすことが出来るかもしれない。だが、それはイコールとして自身のガードを大きく崩してしまう事にも繋がるのだ。そうなってしまえば、劣勢になるのは明白。

雨里自身、この手の知識があつたわけではない。無いが、最低限度の防御を意識するにあたり無意識的に小さく、コンパクトに東堂の攻撃を叩いて逸らし自分の体スレスレに打撃を流していた。

勝てはしない。勝てはしないが、負けもしない。そもそも、勝てな

い負けるは似たように見えてその実別物だ。

断続的な叩く音と風を切る音、この二つによる二重奏が奏でられていく。

ただ、このままでは千日手。いや、最終的にジリ貧になるのは東堂よりもフィジカルに劣る雨里の方だろう。

何故なら、今の彼は格上に対してどうにかこうにかついて行っているようなものだから。

相対している東堂もそれを理解している。それでも短絡的に勝負を決めに行けないのは、偏に目の前の一年の術式があるから。

（氷を出したのは、まず間違いなくこいつ。伏黒の式神が出てブラフの可能性もあるが可能性は低いとみて良いだろう）

東堂の警戒する氷の術式。込められた呪力、発動速度、出力。どれをとっても、一年のレベルではないだろう。

何より、情報が無さすぎる。

見た目筋肉ゴリラで、脳筋パワー馬鹿に見える東堂だが、その実戦闘スタイルは強敵相手の場合搦手を交えたものとなる。

思考。その一瞬の間。その隙を突いたのは、三本の長い舌だった。拘束、というにはあまりにも貧弱すぎる代物だ。だが、瞬きほどの

間と言えども確かにパワー馬鹿の東堂の動きを止めて見せた。

「雨里！」

「ッ！」

伏黒の怒鳴りが発せられるとほぼ同時に、雨里の体は動く。

選択したのは、密着状態ともいえる格好からのドロップキック。より正確に言うならば、東堂の胴体を足場にして斜め後方への跳躍だろうか。

「——悪くない一発だな」

胴体を両足で蹴られた東堂は、しかし吹っ飛ぶことも倒れることも無く、地面を滑って後ろに下げられただけ。ついでに拘束していた舌も千切られてしまう。

雨里とて、底は決して見せてはいない。見せてはいないが、少なくとも体術面での軍配は東堂に挙げられることだろう。

「ぶはっ……………はぁ……………はぁ……………」

「大丈夫か？」

「はぁ……………まあ、ね……………ふう…………………………強いね、東堂先輩は」

「1級術師だからな。去年の夜行で1級呪霊に加えて特級まで扱った人だ。それも、術式を使わずにな」

「それはガセだとさっき言っただろう？特級には使ったぞ」

「1級には使っていないんじゃないですか……………」

「化け物ですか、と雨里は構えなおす。最悪、術式をフルオープンするのにも已む無しそう決めて手に冷気を纏わせ始める。

ただ、ここは高専内だ。

「はいはいはいはい！そこまでそこまでー！うちの後輩虐めてくれるなつての！」

「しやけ」

割り込んできたのは、パンダと狗巻。

「ギリギリセーフって所か？いや、手え出された時点でアウトっちゃアウトか」

「ツナマヨ」

「助かりました……………狗巻先輩、パンダ先輩」

「久しぶりだな、パンダ。今度は、お前が相手してくれるか？」

「なんで交流戦まで我慢できないかね。帰った、帰った」

「……………チィ、それもそうだ。お前らに構う暇は俺にはないんだつた……………上着どこにやったか」

大人しく引き下がった東堂に、キョトンとするのは言った側のパンダ。

東堂という男は、イカレ部分が目立つが、しつこさも一入であるから。そんな人間が大人しく引き下がるなど異質も異質。

「どうやら、退屈し通しつて訳でもなさそうだからな」

意味深に呟く彼が見るのは、一年二人。もっとも、完全に敵となりえるかと問われれば、現状は否だろうか。

「乙骨に伝えとけ。お前も出る、と」

「(めんどくせ)オレ パンダ ニンゲンノコトバ ワカラナイ」

「しゃげ」

適当なことを言うパンダと、おにぎり語彙で顔馴染みぐらいしかその内容を把握できない狗巻の言葉など興味はないのか、東堂は言うだけ言って踵を返してしまう。

その背を見送りながら、雨里は息を大きく吐き出すとその場にへたり込んでしまった。

「はあ……………強い」

ただその一言に集約される。雨里は最初の一発しか術式を使っていないし、伏黒もまた拡張術式の強度諸々に劣る式神しか用いていないため全力とは言えなかったのだが、それを差し引いても強かった。仮に、東堂が最初から殺すつもりで向かってきたならばとつくに二人は死んでいる。

「……………どう思う？」

「術式全開で六割じゃないかな。東堂先輩の術式が分からないから勝率はもつと下がると思うけど」

「そうか」

「おいおい、戦う前から卑屈になるなよお二人さん。交流戦では、お前らのどっちかに東堂ぶつけようって話になってんだからよ」

「しゃげ」

「……………なら、オレですかね。伏黒君は玉犬や鶴で索敵できますし。オレの術式は、集団戦に向いてませんから」

「そこら辺は、追々な。ぶっちゃげ、東堂をどうにかできれば確実に勝てるかって聞かれたら分からねえんだよ。相手の術式も実力もよくわからねえし」

ぼやくパンダだが、術式は術師の生命線。大っぴらにしている方が珍しく、術式開示による威力増加なども加味して味方連中にも伏せていることが珍しくない。

最も、五条含めた御三家などの有名どころの術式は知れ渡っているし、雨里のような見た目が派手で術の発動がそのまま内容の開示になっているような術式ならば話は別だろうが。

暑い日差しは未だ弱まることを知らず照り付けてくる。

燦々日差しの照り付けるとある日。日差しは、肌に当たるだけでも表面をチリチリと焦がしていくような錯覚を覚えるほどに強く、同時に湿気のせいで日本の夏はかなり厳しい。

「……………つぷしー」

しかし、彼にとつては一年通して変わらない。

夏日の日差しの下であろうとも、雨里の外着にはマフラーとコートが手放せないのだから。

今日も今日とて一年面子は二年生に扱かれながら、それぞれの弱点克服、ないしは緩和へと勤しんでいた。

「にゃあああああゝゝゝゝつっつ!?!」

「ほれほれえ、受け身とれよお」

「しゃけ」

パンダに足を掴まれての、ジャイアントスイング。最初の頃よりマシとなった釘崎の受け身だが、それでもやはり完全に威力を殺すには至らないのかべっしやりと潰れるように転がる。狗巻がフオローに入ってはいるものの、それでも成功率は低いと言わざるを得なかった。

少し離れて、そちらの方では真希と、それから野郎二人の組手が行われていた。

「脇締めるー！んな、隙だらけの構えじゃ実戦じゃ役に立たねえぞ！」

「ツー」

大刀代わりの棒を振るう真希と、柳葉刀の様な抜身の片手剣を使う事に決めた伏黒は一見すると渡り合っているようだが、それでも前者に軍配が上がるだろう。

傍らでは、直ぐに代われるように雨里がスタンバイ。彼は、素手だ。

何度か衝突を経て、得物を飛ばされ首筋に棒の先端を突き付けられた伏黒。術式の関係上、両手を空けておくことを求められる彼は、己の影を鞘として呪具を持ち歩くことを選択した。未だ、真希に一本取れるほどではないのだがそれでも確かな手応えを感じている。



「だいぶマシになった、がまだまだだな」

「ッ、はあ……………」

「よし、次は京平……………の前に休憩だな」

そう言った真希が見るのは、パンダに投げ飛ばされて転がっている釘崎だ。

ただ投げるだけではダメなのか、と問われればまあ、ダメだ。そもそも、パンダがぶん回しているのもちゃんと理由があつての事なのだから。

呪術師が受け身が必要とする場合は、大抵大きく吹き飛ばされた時が基本となる。そしてその際には、天地が混ざる様に視界が揺れ動かされるのが珍しくなく、同時に体が錐揉み回転して吹っ飛ぶこともある。

そんな場合を想定しての受け身訓練。その成果は、少しずつ出始めている。

「おえつぶ……………」

「大丈夫、釘崎さん。はい、水」

「ん……………」

芝生の上で突っ伏する釘崎へと、雨里は水の入ったペットボトルを差し出した。

自販機で買ってしばらく経っているのだから、温くなっていそうなものだがペットボトルはキンキンに冷えている。

というのも、雨里の鍛錬の結果。

氷の箱を創り出し。それが、溶け出さないように呪力を供給しながら、その上での組手。疲れないはずはないのだが、それでもその頬に汗が一筋も流れる事はない。

「アンタって、本当に汗かかないわよね」

「え？ああ、まあ……………そうだね。うん、汗かいた覚えはないかな」

「ちよつと袖捲ってみなさいよ」

「う、うん……………これで良いかな？」

釘崎に迫られ、雨里は右手の袖を捲った。

元々、厚着が多く日焼けしない彼の肌は少し心配になる程度には白

い。その癖、細くて折れそうな儂さはないのだから妙にアンバランスだつたりする。

身を起こした釘崎は、差し出された腕を若干睨みながら指で突つつく。

「白いわね……それに、冷たい。ブルー・ブラッドつてやつ？」

「いや、それは中世貴族の事だね。それに、オレの場合は単に日の光に肌が晒されることが極端に少ないだけで、外には出てるから」

「ふーん………そういえば、アンタつて夏場の服とかどうしてる訳？」

「服？ええつと、冬服をそのまま着てるよ。夏場の半袖とか着てたら、凍えて動けなくなるからさ」

「厄介よねえ………あー、私も新しい服欲しい」

「？着れなくなったの？」

「んな訳ないでしょ。ショッピングっていうのは、そういうのじゃないのよ」

ぷにぷにと肉の柔らかさと筋肉としての硬さを程よいバランスで備えた腕を押しながら、釘崎はやれやれと首を振る。

服を多く買う人の心理というのは様々だ。

新しいものが好き。毎日違う服を着たい。服を自慢したい。単純に今持っている服に飽きた。単純にショッピングが楽しくて。

いろんな要因はあれども、まあ楽しいからショッピングに赴くのだろう。逆に楽しくないと感じる者は服に興味がなかったり、服よりもっと興味惹かれるものがあるという事。

「おい、京平！私も、一本貰う………つて、何やってんだ？」

「どうぞ、真希先輩。えつと………なんでしようね？」

「真希さん、真希さん」

「なんだよ、野薔薇」

「雨里の腕、ヤバイですつて。ひんやりプニプニ」

「お前の語彙力の方がヤバイことになってんぞ」

素晴らしいながらも、真希は釘崎に倣うようにして雨里の腕へと手を伸ばす。

柔らかくも、固い感触。それに加えてこの夏日の下でどれだけ触っても熱くならない天然のクーラークッションの様な感じ。

無言でプチプチでも潰すように押され始めた己の腕に、雨里は変な顔。そして、視線で助けてくれと周りにSOSを飛ばす。

「あー、真希、野薔薇もその辺にしてやれよ。京平の奴も困ってるからな」

「……つと、悪いな。いや、思った以上に、思った以上だったわ」

「ねえ、雨里。アンタちよつと、腕切り落としてみない?」

「釘崎さん?!ちよつと、錯乱し過ぎじゃないかな!」

「冗談よ」

(目が本気だったよ……)

袖を戻して立ち上がった雨里は、そそくさとパンダの後ろに隠れそこから二人へと視線を送った。

「おい、京平。パンダ、臭くないか?」

「へ?」

「そいつ、風呂に入れって言っても聞きやしねえからな」

「待て待て、何で俺の風呂問題に発展する?だいたい、俺はお前らと違って汗かかないし、ちゃんと毎日ファブってる。あと、濡れるのが嫌なんだよ」

「まんま、獣臭だろ」

「畜生みたいに扱うんじゃねえ!」

真希に揶揄われる形でたれパンダの様に垂れてしまったパンダ。

そこに鼻を近づけるのは、雨里含めた一年メンバーだ。

「……………うーん?」

「別に臭くは、ないわよね?」

「ああ……………臭いっていうより、お日様のニオイ、みたいだ」

(お・ひ・さ・ま……………!)

女性陣に電流走る。普段、クールというか冷めた印象しかない伏黒の口から、出そうにない単語が出てきたからだ。

一方で、雨里は首を傾げていた。

「パンダ先輩って、濡れるのが嫌なんですな」

「おう」

「中に綿があるからですかね」

「それもある。俺って濡れると、なかなか乾かねえんだよ」

「あー成程、ぬいぐるみの洗濯と同じですね。小さい子が抱えられる大きさでも、乾かすには天気の良い日に半日以上干しておかないと乾きませんし」

「いくら?」

「京平、よくんな事知ってるな」

「ええっと、オレって高専に入るまでは独り暮らしだったんですよ。それで、着てるのが厚手の服ばかりですから洗濯のタイミングをミスすると全く乾かないんですよ」

「言いながら、雨里が思い出すのは昔のとある日。」

厚手のトレーナーやらパーカーを洗うタイミングを逃して溜めてしまい、洗ってみればその日から三日ほど雨続き。結果的に、部屋に室内干しのニオイがこびり付いてしまったのだ。

そんな経験から、彼は洗濯のイロハをネット検索しており、その折にぬいぐるみの項目も流し読みしていた。

「まあ、でも、流石に任務の後は洗いますよね?」

「え?」

「え?」

「言つとくが、京平。パンダは、任務行っても体払うぐらいしかしねえぞ」

「えー……………」

「おっと、雲行きが怪しくなってきたぞ」

味方に引き込めるかと思った雨里からの、若干引いたような目にパンダは己の分の悪さを悟る。もつとも、逃げるとするにはタイミングを逃したと言わざるを得ないが。

「……………せめて、任務の後は表面を拭く程度は必要だと思えますよ、パンダ先輩」

「でも、水沁みるんだよなあ」

「あー、えっと……………ありきたりですけど、防水加工を施す、とかも

ありますよね」

「防水？」

「はい。鳥とかもに見られるんですけど、油分で羽が濡れる事を防ぐものも居ますから」

「却下だ。油まみれのパンダとか、余計に埃やら何やらくつつけてくるだろ」

「まあ、それは……よくよく考えれば、水浴びの回数が増えるのは、パンダ先輩も嫌ですよね」

本末転倒か、と雨里は苦笑い。ちなみに、彼が思い浮かべた鳥というのはインコの事。詳細は省くが、インコは水浴びが好きだが、お湯で水浴びさせてはいけないというのが飼い主の決まり事の一つに挙げられるのだ。

それから、あーでもないこーでもない、と色々と案が出てくるのだが、最終的な帰結というのが不意打ちだというのだから、救いが無い。

そんな暑いとある日。日常的一幕である。

残暑が蔓延る九月の某日。

制服にそれぞれ身を包んだ伏黒と雨里の二人は、手ぶらで集合場所へと向かっていた。

「…………そろそろ、寒くなってくるかな」

「嫌そうだな」

「そりゃあ、嫌だよ。冬はあんまり好きじゃないから。あ、でも、夏日の冷房もあんまり好きじゃないかも」

ピーコートに厚手のマフラーという真冬の格好をした雨里は、穏やかな目で空を見上げた。

穏やかな晴天だ。雲が所々に確認できるが、それも白いもので雨雲ではないだろう。

「東堂先輩の相手、伏黒君がやりたかった？」

「…………それを決めるのは、俺じゃない。交流会は、集団戦だからな。術師同士の戦いよりも、呪霊を祓う方に専念すべきだろ」

「まあ、そうかもね」

話題はもっぱら、交流会について。大まかな作戦は、動きの読めない東堂を雨里が足止めして残りの面々は、感知が得意な伏黒とパンダを主軸にして呪霊狩り。作戦の肝は、狗巻を単独で動かす事。

もつとも、作戦だなんだと言ってもそれぞれの臨機応変さが求められることは否めない。

東堂が速攻で雨里を潰してしまうかもしれないし、京都校全員が呪霊よりも先に術師を潰しに来るかもしれない。最悪、狗巻が呪言を放つ前に戦闘不能にされてしまう可能性もある。

交流戦と呼ばれるものの、結局のところ術師の戦闘だ。生死に関わらなければ、後遺症が残らない程度に呪い合う。

程なく集合場所へと辿り着けば、既に二年生の面々がそろっていった。

「遅いぞ、一年共…………野薔薇はどうした？」

「おはようございます、真希先輩。釘崎さんは一緒に来たんじゃない

「んですか?」

「いや?ちよつと体動かしようと思つて私は早く出たんだよ。時間は教えてるし問題ないだろ」

肩をすくめる真希に、それもそうかと雨里も頷く。

そして、釘崎の話題が出た所でそういえば、と彼は顔を上げた。

「そういうえば、伏黒君。釘崎さんの事なんだけどさ」

「なんだ?」

「いや、この頃彼女と話してて妙に噛み合わないな、と思つたんだ」

「噛み合わない?……そ——」

「何で皆、手ぶらな訳!」

伏黒の言葉を遮つたのは、合流してきた釘崎の悲鳴のような驚きの声だった。

五人が声の主へと目を向ければ、何やら大荷物な、それこそこれから旅行にでも行くのではないかと言わんばかりにスーツケースを引きずつた釘崎の姿が。

「……噛み合わない訳だね」

「だな」

野郎二人が頷いた。代表して、パンダが問う。

「オマエ、なんだその大荷物」

「え、だって……これから京都に行くんじゃないの?」

「えっと、釘崎さん。これから、交流会だよ?」

「だから、京都で姉妹校交流会……」

「京都の姉妹校と交流会、な。東京で。去年勝つた方の学校でやんだよ」

「うそでしょ~~~~!!」

パンダの説明に、ようやく勘違いが解消された釘崎の悲鳴が木霊する。

一方で、ここ最近の疑問が解消されたのは、勘違いしていなかった面々。

「まあ、紛らわしいっちゃ紛らわしいわな」

「日本語って、難しいですよね」

「俺も雨里も勘違いは無かったけどな」

「教えてあげればよかったかな………そういえば、先輩たちは去年は出てないんですか？」

「まあな。元々、交流会は二年、三年のイベントだし」

「つつても、去年は憂太の奴が出た。里香の解呪前だったから、圧勝だったらしい」

「おのれ、乙骨憂太ア！許さんぞオ！」

「釘崎さん、しつかり………それにしても、凄いですね乙骨先輩って。去年つてことは東堂先輩も居たつてことじゃないですか」

四つん這いに絶叫する釘崎の傍でおろおろとしながら、雨里は感服する。

京都の先輩、東堂の実力は実際に戦つて身に沁みつてわかつている。だからこそ、そんな相手のいる京都校に圧勝する乙骨という先輩への驚きがあった。

その後、四つん這いで項垂れる釘崎をどうにかこうにか宥めすかしていれば、真希が来客に気が付く。

遠目にもわかる奇抜な集団。いや、呪術師の格好は大抵どこか奇抜であるのだが。

「来たな」

京都校の面々も、そのパンチは東京校の面々に勝るとも劣らない。

大柄な東堂。見た目平安な加茂憲紀。魔女っ娘な西宮桃。完全口ポツトな究極メカ丸。普通な三輪霞。そして真希の双子の妹である禪院真依。

「お出迎え？気色悪いわね」

「乙骨居ねえじゃん」

煽ってくる真依と、露骨に顔しかめる東堂。

一方で因縁のある、というかどちらかという血の気が多く短気な釘崎が食つて掛かる。

「おう、菓子折りよこせや。はよ出せコラ。八つ橋、葛切り、そばぼうろ」

「しゃけ」



「腹減ってんのか？」

「完璧に、チンピラのカツアゲだよ釘崎さん」

中指立てそうな勢いの釘崎と、そんな彼女を止めない狗巻。

彼女が睨むのは京都側。より正確に言うならば、少し前に一悶着あつた真依に対してだ。

「怖っ……………」

「一年三人、カ。ハンデが過ぎるんじゃないカ？」

「呪術師に歳は関係ないよ。特に伏黒君。彼は、禪院家の血筋だが……宗家の人間よりもよっぽど出来がいい」

「チツ」

「何か？」

「別に。何でもないわよ」

京都校の全員も仲良しこよしではない。というよりも、加茂がナチュラル煽りスト。典型的な空気を読むことが苦手なタイプで、同時に大切なところで言葉が足りない。

纏まりに欠ける面々。そんな彼らの引率はというと、

「はい、そこまで。内輪で喧嘩するんじゃないの」

遅れて階段を上ってきたはかま姿の女性、庵歌姫。彼女は問題児の多い自分の生徒に一つ息を吐く。

「で？あのバカは？」

「悟は遅刻だ」

「あの悟が時間通りに来るわけないだろ」

「誰も、馬鹿が五条先生の事だなんて言つてませんよ」

これだけ見ても、五条悟という呪術師の尊敬とか人徳の値が分かるというもの。少なくとも、その実力などは信用信頼されていても、尊敬されていない。主に、七海と似たようなもの。

ただ、件の彼というのはタイミングを見計らっていると云われてもおかしくないような時に現れる。

今回もそうだ。

「おつまたせー！ー！」

台車を押して、目隠し男悟の登場だ。そして、露骨に庵の表情が歪む。

嫌われた相手にはとことん嫌われる。それが五条という男だった。

「いやー、僕って少し前まで海外出張してましてね。タイミングがタイミングですし、京都校の皆さんにはこうしてお土産を買ってきたわけですよ」

「なんか語りだしたぞ」

「ほらほら、これ見て。どっかの民族が作ってるお守りね。あ、歌姫のは無いから」

「いらねえよー!」

「んで、こっちは東京校のみんなへのお土産となります!」

気炎を上げる庵を無視して、五条は機嫌よく台車に乗った箱を東京校の面々の下へと持ってくる。

ただ、先程のお土産を見たばかりであるからかその期待値は最底辺といったところ。むしろ、ここでそこまで喜べるようなお土産が出てくるなど、少なくとも彼らは期待してはいなかった。

だからこそ、上下動が激しい。

「故人の、虎杖悠仁君でえーす!」

「はい!おっぱっぴー!」

空気が死んだ。楽しそうなのは、サプライズ( )をぶちかました二人のみ。

「……………あれ?」

虎杖、気づく。全く受けてない、と。再会を喜んでくれそうな、同級生三人すらも情報が全く完結しないのか変な顔で固まっている。二年生も言わずもがな。

そして、京都校側へと目を向ければ、そっちはお土産に夢中。誰も彼を見ていなかった。

「……………はあ~~~~……………」

動いたのは、雨里だった。両手で顔を覆って大きく息を吐きだしながら、その場に座り込んでしまう。

キャパオーバーだった。もう色々と精神的につらかった。そして、そんな彼の肩にパンダと狗巻が慰めるように手を置く。

崩れた雨里に代わり、動いたのは釘崎。

少し強めに虎杖の入った箱を蹴る。

「おい、何か言う事があるだろ？」

「え」

言われ、固まる虎杖だが彼女の目には若干の涙の薄い膜が張っており、固く結ばれた口は何かをこらえているように見えた。

自然、その口は言葉を紡ぐ。

「その……生きてるの、黙っててすいませんでした……」

かくして役者は揃う。交流会に波乱を添えて。

呪術高専姉妹校交流会。一日目の競技は団体戦。

これは、一定の区画内に放たれた2級呪霊を討伐することを競うというもの。討伐目標以外にも3級呪霊などが幾つか放たれており、制限時間内に決着がつかなかった場合は、討伐数の多い学校の勝利となる。

「勿論、妨害行為などにはありだ。ただ、あくまで君たちは呪術をもって呪霊を祓う呪術師。ともに轡を並べ戦いに臨むこともあるだろう。交流会は、仲間を知り、力を知ること互いの理解を深めるという目的もある。相手を殺したり、再起不能にするような怪我を負わせる様な事は無いように」

教育者としての立場からの訓戒を述べながら、夜蛾はサプライズ（をかましやがった五条悟へとコブラツイストを極める。

一応、五条自身も黙っていた事には思うところがあるのか甘んじて罰を受けているし、生徒もそして教員も彼らを助けるようには動かない。

そんな中で手が上がる。

「あの、夜蛾学長」

「なんだ、京平」

「いえ、虎杖君が入ると東京は七人で京都校より多くなりますけど。いいんですか？それとも、一人抜けた方が良いですかね？」

雨里の疑問。それは、公平さを加味してのものだった。

人数の差というのは、それだけ出来る事の差が増すという事。呪術師ともなれば、呪霊を祓うにしろ、足止めに徹するにしろ手札が増える。

しかし、

「別に気にすることないよ、京平。呪術師の戦いで公平さがある場合なんてまずゼロなんだから」

技を掛けられる最強教師は、一笑に付した。一段階技のキメが強くなる。

そして、五条が痛めつけられる様を楽しんでいた庵が一步前に出た。

「貴方、名前は？」

「え？あー、えっと、雨里京平です」

「そ……………あの男の教え子の割にかなりマトモよね」

「ええっと、庵先生？」

「まあ、良いわ。雨里、貴方の言いたいことは分かる。でもね、交流会で公平な勝負何て今までも無かったのよ。その男みたいに、どれだけ数が居ても意に介さない奴とか居たからね」

一瞬、五条を睨む目がものすごい鋭さになったのは気のせいではないだろう。

ただ彼女の言うように、術師の術式は千差万別。同じ術式でも、使用者の技量次第でその破壊力も規模も大きく変わる。

何より、後日の個人戦はともかく、団体戦では人数違いのあった試合も過去になかったわけではない。

「ま、その辺は気にしないで」

「はあ…………」

「京平。その辺りは教師の領分だ。お前の気にすることじゃない」

「わ、分かりました」

頷く雨里を確認し、夜蛾は続ける。

「他に質問はないな？では、団体戦開始の正午まで解散」

この一言を皮切りに、生徒たちはそれぞれの学校で纏まり散っていく。

その背を老獪な瞳が鋭く睨んでいた

\*

東京校側ミーティング。

土間に正座させられた虎杖は、その手に黒い額縁を持たされ宛ら遺

影のような恰好を強いられていた。

「あのお……これは、見方によつてはいじめにでも見えるのでは……」

「ウルセエ、しばらくそうしてろ」

「あゝ、雨里？」

「まあ、始まるまでの辛抱だよね」

そっぽ向く釘崎と傍観している伏黒は助けたくない判断しての雨里という選択肢だったが、当の彼には呆れたような笑みを向けられて有耶無耶にされてしまう。

虎杖が生きていたことを、彼らは疎んでいるわけではない。むしろ、生きていたことを喜べる程度には吉報だ。

だがしかし、それはそれ、これはこれ。言えない理由があつたと説明されようとも、それでも一報位は欲しかったというものだ。

一年面々の気持ちは推し量れる。推し量れるが、だからといってギスギスした空気のままではこの後の作戦行動にも支障を来す。

という訳で、割と機微を読み取れるパンダが割つて入ってくる。

「はいはい、そこまでそこまで。野薔薇もその辺にしときなさいって。説明もされたる？ いうに言えない事情があつたって」

「しゃげ」

「今更だけど、パンダが喋ってる……それに、しゃげ？」

「パンダ先輩と狗巻先輩だ。狗巻先輩は呪言師で、言霊の強制・増幅だから安全面を考慮して語彙を絞ってたんだ」

「それって『死ぬ』って言ったら相手も死ぬってこと？ 最強じゃん」

「いやいや、そう上手い話でもねーんだよ。強い言霊は、相応に反動がある。実力差とかもな。だから、語彙を絞るっていうのは棘自身の身を守るためでもあんだよ」

「ふーん」

納得したように頷く虎杖だが、呪術師として見るならばあまりいい顔はされないだろう。それこそ、釘崎などは渋い顔。

「人の術式ペラペラしゃべるってどうなのよ」

「まあ、棘の場合は仕方ねえよ。野薔薇や恵、京平の術式みてえに注意

云々じゃどうにもならねえからな。それよりも、悠仁」

「うっす」

「屠坐魔返せよ。悟に借りたろ?」

言って、右手を出してくる真希。

少しの間を空けて、虎杖の額を冷や汗が伝った。

屠坐魔というのは、最初の実地訓練の折に五条より貸し出された剣鉞の様な呪具の名称だ。そして、彼の頭の中ではとある図式が浮かぶ。

要するに、五条は真希より呪具を借り受け、それを虎杖に貸与。そして呪具は、虎杖が死亡した少年院にて特級呪霊により破壊された。知らなかったとはいえ、破壊の結果を導いてしまったのは虎杖だ。

「ご、五条先生が、持つてるよ……」

選択したのは、矛先をずらす事。思惑通り、真希の矛先は五条に向いた。そして、屠坐魔がどうなったのかを知る伏黒の冷たい視線が虎杖へと向けられる。

だが、虎杖の立場であったならばその場を逃れたいと思う心理も理解できるのではないだろうか。

そうして話題も一段落。本題へと向かう。

「それより、どうする?悠仁が入って数は有利でも、作戦とかは修正だろ?」

「まあな。悠仁お前、何ができる?」

「殴る、蹴る」

「そういうのは間に合ってるんだよなあ」

呪術師の戦闘による肉弾戦が少ない訳では無い。むしろ、呪霊との戦いでフィジカルを求められることは珍しくない。

ただ、今回の場合であると少し毛色が違う。フィジカル面では、真希とパンダが居る。伏黒と雨里も術式との併用になるが、体術面はある程度マシになった。

故に求められるのは、狗巻の様なトリツキーさ。場を攪乱できる手札が増える方がよかったのだ。

しかし、そこに待ったをかけるのは伏黒。

「いや、仮に京都校含めて呪力無しの肉弾戦なら、虎杖が勝ちます。こいつが今まで何してきたのかは分かりませんが、肉体面では東堂よりも上だと思います」

言い切った彼に、真希は眉を上げた。

「へえ、お前がそこまで言うか。なら、京平はどうだ？」

「はい？」

「現状、東堂とやり合ったのは、お前と恵だけだからな。お前はどうか見る？」

「そう、ですね……単純な肉体面なら、多分虎杖君の方が上です」

それは太鼓判、の様に見えてその実含みのある肯定だった。

体術の授業などである程度知る虎杖の身体能力と、これまた全力ではない東堂との手合わせ。雨里にしてみれば中途半端な材料しかない状態での判断だがそう下した。

ただ、その言葉の中には技術という点が抜けている。

手合わせの経験から、雨里は東堂が単なるフィジカルゴリラではないことを知っている。いや、鍛えられた肉体の馬力は無視できないものではあるのだが。

体術は、ただ肉体が強ければ制することが出来るほど温くない。

故に、伏黒の様に勝てる、とは明言しなかった。

言葉の裏が通じたのか、通じていないのか少しの間を置いて、真希は頷く。

「よし、東堂の相手は悠仁、お前に任せる」

「オッス！」

「んで、京平は別動隊。私らの方に入れ。呪霊狩りだ」

「了解です」

それぞれの返答。そして、時計の針は進み正午が近づいてくる。

開始地点へと向かう道すがら、雨里は肩を回していた。正確に言う、関節のメンテナンスと若干の緊張をほぐすためでもある。

本気でなくとも、互いに術式をぶつけ合う事になるだろう交流戦。若干の硬さを覚えても仕方がないだろう。

かくして始まる呪術合戦。だが、暗雲は直ぐそばに迫っていた。



『えー、開始一分前となりましたが、ここで京都校引率の歌姫先生からありがたいお言葉があります』

『はあ!?ちよ、いきなりそんな――』

気の抜けるようなやり取りがスピーカーより響く。その内容は、どこぞの小学生のいたずらの様な子供っぽさが滲む。

「……………五条先生って、割とこういうところあるよね」  
「……………」

「ガキから成長しきれてないのよ」

「てか、五条先生と京都の先生って知り合いなのな」

教え子たちも微妙な表情。一番付き合いの長い伏黒はジト目であるし、釘崎は小学生かよ、と引いている。雨里は苦笑いで、虎杖に関してはそも着眼点が違う。

結局、五条としては単に庵を揶揄いただけらしく、どうにかこうにか詰まり詰まり言葉を紡いでいたのを遮り、スタート合図をします。

始まる団体戦。両校揃って集団で、行動開始。

「ボス呪霊ってどこにいるかな」

「放たれたのは、東京校と京都校のちょうど中間って話だけど、まあその場に留まっちゃいけないだろうな」

一定の区画と言えども、決して狭い範囲ではない団体戦の会場。大規模な術式を発動しても余りある範囲であるのだが、それ以上に見るのが探索能力である。

呪術師の仕事は呪霊を祓う事、呪詛師の捕縛もしくは抹殺。どれも、探索能力が無ければ苦戦するだろうし、不意打ちなども受けやすくなるだろう。

程なくして、前に行く玉犬が一声吠えた。見れば、蜘蛛のような見た目の3級呪霊の姿が。

それぞれが構える、がそれよりも更に無視できない相手が迫っていた。

「——いよおーしッ！全員、居るなア！」

樹木をへし折り現れる東堂。その目に映るのは呪霊、ではなく対戦相手である東京校の面々。

相手は単独。待ち伏せの様子も無ければ、彼らが取るのは作戦通りの行動だ。

真つ先に飛び出したのは、虎杖。前までの彼ならば、掴みかかってその場に縫い留めるか、殴りかかるという選択肢を採った事だろう。だが、今の彼は違う。死線を超え、失ったという経験が変化を与えていた。

繰り出したのは、顔面への膝蹴り。その身体能力をいかに発揮しての加速は、ある程度向上した呪力コントロールのバフも受けて東堂は反応できずに直撃を貰う。

この間に、残りの面々は左右を駆け抜け抜けて森を進む。パンダ、狗巻、釘崎のグループと、伏黒、真希、雨里の組み合わせだ。

「東堂一人でしたね」

「やっば、悠仁に変えて正解だったな」

「容赦の無さも増してたよ。前の虎杖君なら、出会いがしらの顔面膝蹴りの選択は無かったんじゃないかな」

伏黒を先導として駆ける三人はそんなやり取りをしながら先を進む。

現状、1級術師であり、尚且つ特級呪霊討伐の実績がある東堂がこの交流戦において最も強いと言っても過言ではない。少なくとも、一人が足止めに徹さなければ全滅する可能性もあるほど。

そんな相手の足止め役であった雨里は今、呪力を練り上げ両手を組んでいた。

「凍結呪法・凍骸<sup>とうがい</sup>」

駆けながら冷気を纏うその背より並走するように現れるのは四体の氷人形。

「随分と、様になったじゃねえか京平」

「雑魚狩りは人形に任せましょう。一応、1級相手でも早々に壊され

ない事を目指してますから、3級程度の相手なら大丈夫なはずです」  
ニヤリと笑う真希を尻目に、雨里は氷人形へと指示を飛ばす。

無意識の黒閃の経験。そして、先達である夜蛾からの指導を経て完成した氷人形による呪骸に与えられる命令は、呪霊狩り、呪術師の警護など。更に、遠方で破壊されても術者自身が知覚できる点もアドバンテージであった。

虎杖を残して進む三人。だが、ここで両グループの索敵担当が気付く。

「変です」

「伏黒君？」

「京都校が一ヶ所に……虎杖と東堂を残した辺りに集まっています」

「あん？その辺りに、ターゲットが居るって事か？」

「いえ、2級程度なら玉犬が気付きますから、それは無いはずですよ……」

立ち止まり振り返った伏黒の表情は硬い。彼の脳裏をよぎるのは、とある可能性。

「……アイツ等、虎杖殺す気じゃないですかね」

「あり得るな。宿讎の器、上層部は処理したいだろうしな」

「で、でも、京都校の人達が自分からそんな事、しますかね？」

「楽巖寺学長の指示だろ。あの爺さんは、悟が散々に言ってる上層部の一人だからな」

呪術師の世界は腐敗しきっている。特に、権力を持ちその椅子に長年噛り付いている上層部などは顕著だ。

そんな彼らからすれば、自分たちの力が影響しない最強は目の上の五<sup>五条</sup>虎<sup>悟</sup>たん瘤どころか、悪性腫瘍扱い。同時に、彼の庇護した両<sup>虎</sup>面<sup>悠</sup>宿<sup>仁</sup>讎<sup>悠</sup>の器はいつ爆発するか気が気ではない爆弾そのもの。

彼らの保身は留まる事を知らない。

「……戻りますか」

「だな。つっても、私ら全員が戻る必要ねえだろ。京平は、このまま呪霊狩りに行くべきだな」

「え」

「パンダたちも気付いてんだろ。多分、棘を別行動にする。その方が、都合が良いからな」

狗巻の呪言は、その場に居ても居なくても厄介。気を散らせることが出来るからだ。そして同じく、雨里の氷も不意打ちに向いている。死角から相手の首から下を氷漬けにも出来るだろう。

雨里自身も、組み分けをせねばならないことに関しては理解しているし、納得もしている。だが、それでもやはり心配になるというもの。それも、ついさつきまで死亡扱いであった虎杖がターゲットともなれば猶更。

「戻るぞ、恵」

「……………すみません」

「なに謝ってんだ。仲間が死んだら、交流会も何もねえだろ。京平、お前は呪霊狩り任せるぞ」

「……………了解です。真希先輩たちも無茶しないでください」

思うところがあれども、雨里は頷く。

そうして来た道に戻っていく二人を見送り、彼は前を見た。

「とりあえず、別行動した方と合流かな。真希先輩の考え通りなら、単独行動は狗巻先輩だろうし。まあ、一人の方が周りを気にしない点じゃ良いんだろうけど」

右手に冷気を纏わせて、行動開始。

\*

試合は流れ、時計の針は進む。

虎杖と東堂の肉弾戦は、何やら指導の様な流れ。真希は三輪より刀を奪って無力化、真依との姉妹対決も制した。伏黒は加茂とぶつかり交戦中。パンダはメカ丸との戦いを制す。釘崎は西宮を押すも、真依の狙撃により一時気絶にまで追い込まれた。

そして、あぶれる形の狗巻と雨里と言えば呪霊狩りの体を取りなが

らの、牽制の役割もはたしていた。

『眠れ』

玉犬が持つてきた携帯を通して三輪を眠らせる狗巻。その傍らでは、両手で耳を抑えた雨里が居た。

「……………終わりました?」

「しゃけ」

自分の問いに頷きが返ってきたことを確認して、雨里は手を下ろす。

伏黒たちと分かれてから、彼は呪霊搜索をしつつ同じくパンダに呪霊狩りを任された狗巻との合流を果たしていた。

『戻れ』

携帯を持つてきた玉犬へとそう狗巻が声を掛ければ、その体は崩れる。伏黒の下へと戻されたのだろう。

「とりあえず、ターゲットを探しましょうか」

「しゃけ。ツナマヨ?」

「いえ、オレは索敵がそこまで得意じゃないんですよ。ですから、これを使います」

言って、雨里は右手の人差し指を立てる。すると、その先端に霜が降りキラキラと輝く空気がその周りに形成されていく。

これは術式の応用に行き詰った際に、テレビで見た光景をもとにして生み出した術の一つ。

「凍結呪法・銀風<sup>ぎんふう</sup>……………この風に触れた呪霊は、触れた個所を凍結される事になります。この風を撒いて、炙り出していきましょう」

「すじこ、明太子」

「大丈夫です。術師、というよりも人間には効力を発揮しないような縛りで作りましたから。触っても、少し冷たく感じるだけで済む……………筈です」

「高菜?」

「だ、大丈夫ですって。行きますよ」

狗巻へと言葉を返しながら、雨里は指先に集めていた煌めく風を一吹きする。すると、ビー玉程度の大きさからは想像できないほどに、

一気に風は広がっていく。

原理としては、風に凍結の種を混ぜ込んで威力の代わりに広範囲のカバーを目的とした術式だ。

狙った通りに広がっていく風を確認した雨里と、応用の範囲の広い後輩の術式を眺める狗巻。

そんな二人の背に、猛烈な違和感が襲い来る。

ほとんど反射的に構えながら振り返れば、異変の下は一本の木。その後ろの方から発せられているらしい。

「こんぶ………」

「ターゲット、ですかね」

口元のジッパーに手を掛ける狗巻と両手に霜を纏わせて口から吐く息を白く染める雨里。

二人の感じている違和感。それは、明らかに木の裏より発せられる雰囲気が2級呪霊程度の力ではないという点か。

呪術師の階級として、狗巻は準1級、雨里は2級。2級呪霊程度ならば容易く祓えるだろうし、そうでなければこの階級には至らない。

果たして、現れるのは禿げ上がった落ち武者の様な呪霊の頭部。

二人の間に緊張が走る。だが、出現の直後に呪霊は白目を剥くと、その頭は首の一部と一緒に地面に転がり塵へと消えていく。

そして現れるのは、異形の人型。

昆虫の様な頭部の外骨格に、目に相当する部位から生えた二本の木。白い体色に黒いライン状の文様は走り、右腕に相当するであろう場所は大きな布によって包まれていた。

雰囲気からして、格上。何より、その気配は雨里にとって苦い思い出を思い出させるには十分すぎた。

「……………五条先生の言ってた特級、ですね。呪詛師と組んでる筈の」「しゃけ」

「とにかく、撤退が先決。五条先生の所まで下がるか、とにかく連絡を取るしかないですね」

その隙があれば、と雨里は内心で続ける。思い出していたのは、あの日の少年院。

ほとんど遊ばれるだけだったあの時の宿儺よりも、もしかすると上  
かもしれない相手だ。自然と、呼吸も浅くなるというもの。

後輩の変調。敏感に感じ取った狗巻が一步前へと出る。

「しゃげ、いくら、明太子」

」

悪意は既に入り込んでいる。

(鶴が封じられた……………赤血操術。思ったよりも厄介だな)

新たに調伏した式神、万象による放水で広い場所へと飛び出した伏黒は冷静に場の把握に努めていた。

相手取る加茂は、三年であると同時に準1級術師だ。ポテンシャルはどうあれ、経験という面は容易に覆すことが出来る事ではない。

幸いと言わなければならないのは、術式が比較的知られたものである点か。これは伏黒もそうなのだが、御三家の術式はその歴史から広く知られている。

五条家の無下限術式。禪院家の十種影法術。加茂家の赤血操術。資料も比較的多く、その内容も知られている。

一方で、加茂にもまた負けるわけにはいかない理由がある。

いつの時代の話だと言われそうだが、側室の子であり、同時に術式を継いだ彼にとって実家は決して居心地のいい場所ではない。それでも、彼は家督を継ぐための実績が必要だった。

偏にそれは、最愛の母の為。

「私は、負けるわけにはいかないのだ！」

鶴を縛り上げ、着地した加茂は吠える。そして負けるわけにいかないのは、伏黒もまた同じ。

京都校が勝つという事は、それイコール虎杖の死に直結しかねないから。もう二度と、あんな思いはごめんであるから。

三回の高さから飛び降りた二人は、飛び降りた先で正面からぶつかり

「ツッ！」

激突する爆音によりその動きは止められる。

見上げれば、津波のように迫る巨木の群れとそれらを押しとどめる様に展開された巨大な氷の壁が競り合っていた。

「粘りますね」

「くっ……………！」

氷の壁の天辺。前を大きく切り裂かれ下の制服が露となったコー



トを翻した雨里は怒鳴りながら、足元の氷を右足で踏みつける。

「凍結呪法・氷龍<sup>ひょうりゆう</sup>『連門』！」

氷の壁から生えるようにして現れるのは、四体の龍。

人一人軽く呑み込めそうな巨体を蛇のようにくねらせて、その牙をもつて大樹の主へと襲い掛かっていく。

派手な一撃だ。しかし、術を行使する彼の表情に晴れは無い。

すぐさま氷の壁から飛び降りて、距離を稼ぐべく逃走へとシフトを切り替え、

「雨里！」

「！伏黒君！それにえつと………加茂先輩、でしたか」

「ああ……あの氷は、君が？」

「はい………って、そんなこと言ってる場合じゃありません。直ぐに

「すじこー！」

撤退を、と続けようとした雨里の言葉を遮った狗巻。睨む先に居るのは、ほとんど無傷の特級呪霊だ。

ビリビリとした威圧感と、事前情報から伏黒は何が起きたのかを、理解していた。

「襲撃か」

「ターゲットは、あの呪霊にやられてた。五条先生の出くわした呪詛師とつながっている特級だよ」

「未登録の特級か。あの帳に関しては何か情報はあるのか？」

「いえ。ただ、確証はありませんけど、あの呪霊と組んでる呪詛師の張ったものだと思います」

「ツナマヨ」

「そうですね。五条先生に連絡を………雨里、お前のスマホは？」

「壊されたよ。狗巻先輩のも同じくね」

「ちよ、ちよつと待て、君たちは彼が何を言っているのか分かるのか？」

「今はそんな事どうでもいいでしょう。相手が特級なら、領域を使うかもしれない。距離を取って五条先生の所まで撤退——」

言い切る前に、事態は動く。

一瞬で間を潰してきた呪霊。ギリギリで反応する伏黒だが、その手の端末は破壊されてしまう。

『動くな』

そこで狗巻の呪言が呪霊の動きを縛りにかかった。

まるでその空間に縫い付けられたように動きを止めた呪霊。この隙を逃す手はないと、残りの三人が動いていた。

—— 赤血操術 苜蓿!!

輸血パックより操る血液をチャクラムの様な円刃へと変えて投擲する加茂。赤鱗躍動によるバフも上乘せした投擲は、しかし呪霊の表面に傷を刻むことが出来ない。

だが、隙は作った。そこに飛来するのは大きな影。

空を回って勢いをつけ剛翼を叩きつける鶴。その体に纏った紫電が僅かながらの動きの障害をもたらし、勢いによりその場に縫い留める時間を延ばす。

ここで一閃。どこから取り出したのか、柳葉刀のような見た目をした片手剣を振るう伏黒。しかしこちらも、呪霊の表面を撫でるだけ。そして入れ替わる様に突っ込んだのは雨里だ。

「凍結呪法・凍装 〃甲〃」

右手に纏うは、氷の手甲。空手の正拳突きのようにその一発は、呪霊の腹部へと突き刺さり、同時にパイルバンカーとしての機構が作動。衝撃と共にその体を飛ばした。

壁に激突し、舞い上がる粉塵。同時に、氷の手甲も砕け散る。

「……………手応えはどうだ」

「ダメだろうね。手傷を与えたと仮定しても、呪霊は呪力だけで再生できる。特級ともなればその呪力量で冗談みたいに復活してくるはずだよ」

並の呪霊ならば、三人の攻撃で跡形もなく消し飛んでいるだろう。並みでないからこそ特級呪霊と呼ばれるのだから。

案の定、粉塵を踏み分けるようにして現れた呪霊の体には大きなダメージは見受けられなかった。

「…………嫌になるね」

「ぼそりと呟く雨里だが、その言葉は残り三人の内心も表していたりする。」

「1級と特級の間には明確な差が存在する。いや、1級術師の中には特級を討伐できるだけの実力を有した者が居る事には居る。東堂の様な。」

「だが、それはやはりほんの一握りでしかない。」

止めなさい、愚かなる児等よ

「……………」

「……!」

「呪霊の口より発せられる意味の分からない音。だが、直後に四人の頭には直接言葉が響いていた。」

「分からないのに、分かる。」

「呪霊の言葉は続く。」

「【私はただ、この星を守りたいだけ】」

「ざわめく呪力と、呼応するように地面より樹木もまた伸びてくる。」

「【死して賢者となりなさい】」

「ぞつとする気迫。自然と足が一步後ろへと下がりかけ、

「ッ、雨里!」

「雨里京平は前に出た。」

「羽織っていたコートは既に脱ぎ捨て、下に着ていた制服の表面には薄く霜が降りるほどの冷気を全身より放っている。」

「伏黒も加茂も狗巻も、それが自棄になった特攻にしか見えなかった。だが違う。違うのだ。」

「雨里は気付いていた。目の前の呪霊は、確かに特級として1級とは隔絶したような実力を有している。」

「しかし、弱点が無い訳ではない。その一つが、今雨里が実践しようとしている事。」

「シッ!」

「ボクシングの様な構えからの右縦拳。その拳の軌跡には、白い冷気がまるで蒸気のようについてくる。」

「呪霊は、この一発を容易く受け止めた。呪力が込められていようと

も、元々のタフネスが尋常ではないのだ。何より、今目の前の少年が放った拳は、呪力を纏えど素手。氷の手甲などを纏っているわけでもないため問題ない。そう判断を下していた。

だからこそ、見誤る。

「凍結呪法・万結」

「！これは……………」

触れた位置より凍結させる術式。今の雨里の両手は、準1級呪霊程度ならば瞬時に氷像に変えて粉碎することが可能だ。

彼の気付き、それは目の前の呪霊が肉弾戦にそれほど強くない、むしろ距離を取って戦う方が厄介なタイプであるという事。

勿論、直撃を食らえば、呪力で強化していても血反吐ぶちまける事にはなるだろうが、それでも遠中距離から物量で攻め立てられることに比べればよっぽどマシ。

現状、接近戦と術式の併用、並びに相手の削りを両立できるのは雨里だけだ。伏黒の術式は、式神の強さに依存し、加茂はバフで身体能力を上げて殴り合いよりは中距離、遠距離で真価を発揮する技の方が強い。狗巻も、身体能力は高いが呪言という術式に加え、相手が格上であるのも相まって消耗の方が大きすぎる。

唐突に始まった肉弾戦。だが、この場に居るのは恐怖によって足を凍ませて動けなくなってしまうような軟弱者たちではない。

最初に動いたのは、伏黒だ。

「加茂さん！狗巻先輩！雨里の打撃が途切れる瞬間に攻撃お願いします！す！」

「！彼一人で大丈夫なのか？」

「少なくとも、逃げながらジリ貧に追い込まれるようにはマシでしょ」  
懐疑的な加茂だが、狗巻の方は動きが速かった。

すぐさま、口元のジッパーを下ろすと冷静にその一瞬のスキを伺い、

「『動くな』」

硬直する呪霊。その隙を突くように、雨里の右フックが呪霊の左頭部を捕えていた。

拳が着弾した瞬間にその表面は凍り付く。しかしそれは芯には届かず、いまだ仕留めるには至らない。

再び始まる接近戦。驚くべきは、彼の集中力だろう。

「……………」

一切の瞬きがない。その表情は凍り付いたように固まっており、見開かれた目は相手の一挙手一投足を筋一本の動きからでも見逃さない。

当然だ。なんせガードが機能しない。腕や足ではなく氷でガードしようものなら、せつかく詰めた距離が無駄に離されてしまう。

一方で、呪霊もまたその場に縫いとどめられている原因を理解しつつあった。寧ろ、ここまで一方的に縫い留められれば理解しない方が、知能ある存在として問題があるだろう。

失敗は、そもそもの一手段。雨里の突撃を迎撃せず様子見に動いてしまった事。

表面とはいえ、凍結されその都度砕かれればその分の再生に力を食う。言ってしまうえば、鑪で呪力を削られているような状態なのだ。

だがしかし、雨里もまた簡単にこの場を抑えているわけではない。周りからの、狗巻と加茂、伏黒からの援護が入っているがそれでも消耗の度合いは通常の組手とはもはや比べ物にならないだろう。

早晩、潰れる。雨里とてそれは理解しているが、今の彼の思考はクリアだった。

それ故に、黒い閃光は炸裂する。

僅かに大振りとなった、呪霊の右腕の一薙ぎ。そこを彼は潜り込むように躲していた。

構えられるのは左拳。アッパーとフックの境目の様な軌道を沿いながら振るわれる一発は、しかし起死回生であろうとも大振りだ。

狙われるカウンター。だが、雨里は一人ではない。

——百剣 穿血ツ!!

「ツ……………『動くな』……………」

狗巻の呪言と加茂の超圧縮された血の弾丸が呪霊の動きを縛った。問答無用でその場に縫い留め、その上硬い甲殻すらも無視して穿つ

コンビネーションだ。如何に特級と言えども、コンマ一秒完全な停止からは逃れられない。

打撃との誤差、0.000001秒以内に呪力がぶつかることによって空間は歪み、黒い閃光が駆け抜ける。

(これほどか)

赤鱗躍動により開かれた右目に驚愕と、若干の畏怖を織り交せて加茂はそれでも素直な感嘆の気持ちを抱くことが出来ていた。

黒閃。この現象を狙って出せる術師は存在しない。どこぞの最強ならば、もしかするとその限りではないのかもしれないが、それでも滅多にお目にかかれない現象であることは確かだ。

通常の打撃威力を“1”として、呪力を乗せた打撃威力は“2”以上となる。

この後者の打撃破壊力が、黒閃の場合は2.5乗。しかもこれは、平均的な数字であり術者によってはそれ以上の数値を叩きだすことが出来るかもしれない。

雨里の一撃は打撃破壊力だけに留まらない効果をもたらししていた。彼は、進行形で術式を、触れた対象を凍結、粉碎する万結を併用しながら肉弾戦に臨んでいた。

何が起きたかと言えば、黒閃の打撃を受けた呪霊の腹部が一瞬の内に凍り付き、まるで大口を開けた鱈にでも食い千切られたかのように凍結した部分が砕け散っていたのだ。

「がはっ………!?!」

呪霊にしてみれば、このダメージは完全な想定外。相手の術式を警戒していなかった訳ではないが、それでも一瞬でここまで持っていけるなど、思いもなかった。

故に、動く。更なる追撃を貰う前に。

(もう一発——ッ!?!)

次は頭を狙う。右こぶしを握り、狙いを定めていた雨里だが突然の足元の揺れと同時に何か突き出してくるのを、呼吸をするように自然に流れる呪力を通して感じ取った。

反射的にその場を飛び退けば、一瞬でも迷っていれば貫かれていた

であろうタイミングでうねり絡まりながら先端をとがらせた樹木の束が飛び出してくるではないか。

同時に、とりたくなかった距離が開いてしまった。呪霊はこのタイミングで己の足元に出現させた木に自らの体を押し上げさせて近くの校舎の屋根の高さまで上ってしまふ。

空を見上げた加茂が、悔し気に悪態を一つ。

「不味いな、距離を取られた……………」

「直ぐに追います。雨里、行けるか」

「ツ、ふう……………はあ……………加茂先輩、狗巻先輩。押し上げます」

伏黒に言われ、息を整えた雨里は疲労の色濃いままに足元へと意識を向ける。

黒閃による影響か、明らかに精度の増している呪力だが同時に彼の体に走る寒気というものは強くもなっていた。

まるで、全身の骨を氷に置換したような体の内から沸き起こる冷え。それに加えての、疲労がこの場での雨里の注意力散漫を招く。

加茂は別にしても、狗巻は喉がかなりやられていた。あと、一つ二つ呪言を放てば喉が潰れてしまう事だろう。

もつとも、仮に雨里が気付いて狗巻一人を置いていこうとしても無理矢理にでもついてきただろうが。

屋根の上へと逃れた呪霊。後を追ひ、先に辿り着いたのは鶴に自分を運ばせた伏黒だ。その後を追うように三本の氷の柱が空へと伸びていく。

「ツナマヨ？」

「大丈夫です……………少なくとも、術式を使う分には今まで以上にいい感じですから」

屋根に降り立った狗巻が気遣わしげに問うも、雨里自身は止まる気はない。

体力的には辛くとも、呪力的には今までの比ではない心地よさのようなものを感じていた。

一種のトランス。酩酊にも近いかもしれない。

視点代わって、呪霊側もまた方針を決めつつあった。

（狙うべきは、あのマフラーの少年、ではなくその周り。横槍を入れてくる口元に刺青のある少年と、血を扱う少年か）

呪霊の中で、現状の危険度で最も高いのは己に深手を与えた雨里、ではなく呪言により、攻撃と動きを止めてくる狗卷だ。次いで、己の反応速度を超えた攻撃が可能な加茂。

上記二人の横槍が無ければ、残る二人を遠距離から完封できる。少なくとも、呪霊はそう考えた。

そして、行動に移す。

「ッ、加茂さん！」

投げられた三つの木のツタが複雑に絡み合った人の頭部はありそうな球体が加茂へと迫る。

加茂の選択は、回避。中距離からでも攻められるのだから、距離を詰める選択肢はない。

だがそれは、相手は違う。

「なっ……！」（飛び道具は囷か！）

雨里と足を止めて接近戦に興じていた呪霊だが、その身体能力という面は人間とは一線を画す。それに加えて、回避先の限定までされてしまえば追い込まれても仕方がない。

振るわれる右拳を辛うじてガードするも、ガードに回した腕からは鈍い音が響き激痛が加茂を襲う。そしてその体は屋根から飛ばされ近くの建物へと窓枠を突き破っていた。

「加茂さん！くそっ！」

「伏黒君、前！」

とつさに鶴を加茂の回収に回そうとする伏黒。その瞬間にほんの一瞬だったが呪霊から視線が外れてしまう。

半ば悲鳴のように雨里が叫べど、もう遅い。加茂をぶっ飛ばした呪霊が、次の標的として伏黒を狙っていたのだから。

だが、その剛腕が対象を捉える事はない。半ば割り込むような影があったからだ。

「『ぶっ……とべ』……！」

呪言が呪霊の体に作用し、その体が大きく後方へと飛び階段室の屋



根へと叩きつけられる。同時に、血を吐いて崩れ落ちる狗巻。

ただでさえ、反動がある相手というのに、消耗も相まつてもはや彼も動けない。そして、伏黒の胸の内には後悔が過る。

（俺の責任だ……くそっ、何やってんだよ！）

悪態を内心で吐きながら、刃を振るう。

加茂も、狗巻も、雨里も、自分から見れば立派な呪術師だと思う。今回の特級襲撃含めて、自分が一番何も背負っていないのだから。少なくとも、伏黒はそう考えてしまう。

もしも、彼が己の内心を誰かにぶちまけたとしたならば、馬鹿を言うなど頭を叩かれるだろう。

少なくとも今、呪霊の背後より斬りかかり、刀を折られた真希に言えば腹に一発貰う事になりかねない。

「真希先輩……！」

「無茶してんな、お前ら。恵、アレ出せ」

疲弊している後輩二人と、少し離れた屋根の上でうつ伏せに倒れる同輩を横目に不敵に笑いながらも真希は目の前の呪霊を睨む。

術式が無かろうと、呪力が限りなく少なかりとも彼女には身体能力がある。そこに上乗せで呪具があれば呪霊も祓える。

先輩の言葉にこたえる様に、伏黒は己の影へと手を伸ばす。取り出すのは、三節棍型の呪具。

特級呪具、游雲。売れば五億は下らない、特級を冠する最高峰の武器の一つだ。

遠心力が乗せられた一発が呪霊を襲う。腕でガードするが、その破壊力は並み居る呪霊ならば一瞬で撲殺できる破壊力がある。

一瞬の間を置き、その体は大きく後方に、森を縦に割りながら吹き飛ばされていた。

すぐさま追撃に追いかけていく真希とその後を追う伏黒。

二人の後を追おうとした雨里。だが、その足が前に進む前に視界に倒れた狗巻と吹き飛んだ加茂の居るであろう場所が入ってきた。

気付いたら無視などできない。

屋根から飛ばうした足にブレーキをかけて、まず向かうのは加茂の

下だ。

手から冷気を放ちそのまま空中へと身を投げれば、彼の足元に現れるのは氷でできたスライダー。その上を、立ったまま横滑りして進んでいく。

程なくして、二人を回収、屋根の上に横並びで寝かせついでに、脱ぎ捨てていたコートも回収しておく。このコートの内ポケットにある程度の応急処置が可能な道具を詰めていたから。

加茂の両腕に添え木をして包帯を巻き、ついでに薄く冷気を纏わせ必要以上に熱を持たないように処置を施し、狗巻の方は血が喉の奥へと逆流しないように注意する。

「……………これで良いはず。急がないと」

「加茂君!？」

二人の後を追おうとした雨里だったが、空からの声にその動きを止める。

見上げれば、驚いた顔の西宮が屋根に降りてくるところだった。

「えっと、京都校の……………」

「西宮桃よ。東京校の子でしょ」

「雨里京平です」

「そう……………状況は?」

「加茂先輩が両腕の骨折。もしかすると、内臓に傷が入ってるかもしれません。狗巻先輩は格上に対する呪言の跳ね返りで喉が潰れてます。襲撃は特級呪霊なんですけど、今は伏黒君と真希先輩が戦闘中の筈です。オレは、応急処置だけをして合流を考えてたところです」

「……………また、特級と闘うつもり?」

「……………帳の外の状況が分かりませんが、やっぱり足止めは居るべきだと思いますから」

自ら、死ぬかもしれない死地へと突っ込むなど正気の沙汰ではない。だが、呪術師というのは正気ではやっていけない過酷な職業だ。

何より、今も先輩と同級生が命がけで戦っているのだ。雨里には見捨てて逃げる選択肢は採れない。

「西宮先輩、二人を——ツ！」

任せる、と言い切る前に雨里はある方向を勢いよく見やる。

その表情に宿るのは、驚愕とも恐怖とも取れそうに少なくとも、良い感情出ないのは確か。そんな雨里の異変に西宮も気付く。

「雨里君？」

「……………この団体戦が始まってから、オレは四体の氷人形を創って散らしてました。強度的には、現状1級呪霊にも破壊されないことを目標にしたものです」

「……………それで？」

「二体は、三輪先輩の傍につけてます。狗巻先輩の呪言で眠らせてしまいましたから。残りの三体はこの襲撃が始まった時点で散らす範囲を広げて呪霊狩りと術師を守る様にしていました」

「私のカワイイ後輩を守ってくれたのは分かった。けど、本題が――」

「二体壊されました。残り一体も、多分時間の問題です」

「……………それって、他の術師も襲われてるって事？」

「恐らくは。そして、先生たちは他の術師や補助監督を助けない。多分、オレ達生徒を助ける事を主目標で動いているはずです。だから――」

「助けに行く？」

「行くとしても、オレ一人ですけどね。術師や補助監督の襲撃犯を抑えるのも大切ですけど、加茂先輩と狗巻先輩の治療も大切ですから」

少なくとも、学生のやる事ではない。等級を与えられようとも、彼らは未だに子供であるのだから。それでも気付いてしまった以上は、何かやらねば気分も悪い。

「……………無理しない事。そもそも、特級の相手だって私たちじゃ危ないんだから」

「分かっています。では、」

西宮が止めないことを察して、雨里は屋根を駆けそして飛び出した。

先程の加茂を回収した時の様に、空中に氷のラインを引き、その上を滑走していく。

騒動は、まだまだ終わらない。

風の音を聞きながら、雨里は空の下を滑っていく。吐き出す息は白く、指先は震え気を抜けば歯の根が合わなくなる。

西宮は、無理をしないようにと言った。だが、既に雨里の体には無理が積み重なっていた。

呪術は万能ではない。使い続ければ呪力を消費するし、呪力が削れ続ければ疲労と負荷も嵩んでくる。

ただ、それだけではないのだ。無下限術式の長時間行使が、脳を煮溶かせるように。呪霊操術が、ゲロ不味い呪霊を食らわねばならないように。凍結呪法が術者の肉体を凍てつかせるように。

冷えは、体の末端から徐々に徐々に蝕んでいく。ある程度の耐性があるだとか、そんな事は関係なく。

「……………すーっ……………ふっ」

氷上を滑りながら、小さく息を吸い込み、そして短く吐き出す。

雨里は己の体の限界から目を逸らした。自分なんかの事よりも、補助監督や戦闘中であろう術師の救援が先決だと考えたから。

帳を抜け、数多ある寺社仏閣が見えてくる。

その一つの傍に、雨里は飛び降りていた。彼が離れると、氷のスロープも古い部分から空気中に粒子となって消えて、若干のダイヤモンドダストを見せながら跡形もなく消えた。

「この近くの筈……………いったいどこに……………」

彼自身の感覚でしかないのだが、氷人形が破壊されたのがこの周辺だった。

周りを見渡せば、鋭利な刃物によって切り裂かれたのか中身が空の寺社仏閣の残骸がチラホラと確認できる。

破壊跡を撫で、微かな残穢を負いながら雨里は右手に冷気を纏わせていた。

黒閃の経験により、呪力の核心により近づいている今の彼はこの先に待つであろう相手の危険性とでも言うべきか、そんな気配を全身で感じ取っていた。

それこそ、先程まで相手にしていた特級呪霊。それと同格か、誤差程度で劣るそんなレベルの相手。

果たして、最後の氷人形が破壊される。同時に、寺社仏閣の一つを破壊しながら何か雨が雨里の下へと飛んできた。

その飛んでくる何かを視認した瞬間、咄嗟に雨里は受け止めていた。

「大丈夫ですか」

「ッ、あ……………じゅれ、い……………」

口元に手を当てれば細い息。気絶した補助監督を抱えたまま、穴の開いた方を睨めば何かがやって来るのか足音が彼の耳に届く。

「うーん、侵入がバレた訳じゃなさそうだけど。面倒だなあ」

現れるのは、長髪の若い男。ただそれだけならば普通の人間と大差ない見た目だ。

その体には顔も含めて、いくつもの大きすぎる継ぎ目の縫合跡があった。何より、その気配は人間でも呪術師でもない。

「あれ？まだ生き残りが居たんだ。まあ、あの氷？が邪魔してきてちよつと逃がしちゃったんだけどさ」

「……………お前、あの木の呪霊の仲間なのか」

「木？……………ああ、花御と闘ったんだ。よく生きてたね、結構強かった筈だよ」

「何が目的だ。ただの高専襲撃じゃないんだろ？あの、木の呪霊だけなら襲撃だけで片付いただろうけど、お前が居るなら別だ。何が目的だ」

補助監督を抱えたまま、雨里は睨む。

ただの襲撃だと、彼含めた呪術師側の考えがこのタイミングで誘導されていたものだと言ったためだ。

いや、呪術師側を削る事も目的の一つと言って良いかもしれない。だが、本命じゃない。少なくとも、この場において雨里はそう判断を下していた。

「目的、ね。それに関しちゃ、もう終わったよ。術師があんまり殺せなかったけど、そっちは次いでだったからさ」

「……………」

「それじゃ、俺は行く——」

呪霊が言い切る前に、その体を地面から突き上がってくる先端の鋭い氷山が刺し貫いていた。

ノーモーションからの致命技。相手が呪詛師であったならば、この時点で勝負がついていただろう。

もつとも、今回の相手は呪霊であるし。何より相手に、ダメージはない。

「ひどいなあ。ほら、見てよ、服が穴だらけ」

(肉体強度は、そこまでない。けど、何だろうねこの違和感)

「体に穴が開いてるのにダメージが無くて不思議？まあ、そうだよね……………ねえ、アンタはさ、魂と肉体、どっちが先にあると思う？」

「は？」

「ほら、あるでしょ卵が先か、鶏が先か、みたいな質問。肉体に魂が宿るのかな？それとも、魂に肉付けされているのかな？」

「……………前者、じゃないのか。肉体は魂の入れ物だろ」

「ブツブツ、答えは後者。魂はいつだって肉体の先にある。だからさ——」

言いながら、氷の剣山より抜けた呪霊はその体に空いた風穴を簡単に塞いで見せる。

「こんな風に、魂の形さえ保てば俺にとってはどんな攻撃も意味がない」

「……………」

「俺の術式は、魂に触れてその形を変化させる」

こんな風に、と呪霊は距離を詰めてその手を、雨里、ではなく気絶した補助監督へと伸ばし、

「——魂が無ければ、関係ないんだろう？」

その手は、分厚い氷の壁に阻まれていた。

雨里にしてみれば、現状一人抱えたまま接近戦をしようと思えるほど無謀ではない。であるならば、距離を取る様にして動き回るのがベスト。倒せずとも足止めできればいいのだから。

だが、その目論見は、上手く機能することはない。

「あの氷人形も、アンタか。結構面倒だったし、そのレベルの術師を駒に加えるのもいいかもね」

言うなり、呪霊のその右腕の形状が変わっていく。

人体、というよりも生物的な形状ではない。無機物、チエーンソーの刃をそのまま大きくし束にしたような鉤爪の刃。

直感的に、雨里は大きく後方へと下がりつつ足の裏を氷の柱に押しさせて、大きな跳躍を見せていた。直後に、彼の居た地点が氷ごと切り刻まれている。

屋根の上に降り立ち、雨里は冷静に観察を続けていた。いや、観察しなければ、まず間違いなく殺されることになるだろう。

とりあえず、抱えていた補助監督を屋根の上に下ろし、自分自身はそもそも屋根から降りて地面へ。そして、補助監督を寝かせた寺社仏閣を氷の巨大な壁で戦闘地域より区分するようにして区切った。

「やる気になったかな？」

「やる気も何も、術師の仕事は呪霊を祓う事。なら、やる事は一つじゃないかな」

「それもそっか。でもまあ、俺も時間はそんなにかけれないし、何なら見逃しても——」

「凍結呪法・氷龍」

呪霊の言葉を遮る様に、氷の龍が食らいつく。

地面を抉る様にして噛みついたまま押しってくる龍。だが、呪霊はそのまま押し切られるよりも先に、その左腕を刃と変えて振り上げた。

斬撃。氷とは思えない強度の氷ではあるが、一時的に破壊し抜け出すことはそう難しくない。

何より、今の雨里には隠せない疲労がある。無茶の積み重ねで今すぐにも崩れ落ちそうな状態であるのだから、本調子とは言えない。

しかしまあ、

「凍結呪法・氷龍 “大連門”」

それを表に出すほど、彼も馬鹿ではない。



地面より顔をのぞかせるのは八体の龍。巨体をうねらせ、呪霊に迫る。

「確かに派手だ。でも、どれだけ攻撃しても魂に響かなきゃ意味はないよ?」

迫りくる龍の巨体を駆けながら呪霊は嘲笑う。現状で、彼を叩いてダメージを与えられるのは一人。その一人にしたって、やりようによつては完封できると呪霊本人は思っていたり。

その一方で、雨里自身も何も意味も無く大技を放っているわけではない。

確かに、雨里には魂を凍り付かせるような技も力もない。魂と言われても、首を傾げてしまっただろう。

だがそれでも、目の雨の呪霊の言葉が全てが全て正しいと思えなかった。

というのも、呪霊が己にしろ、相手にしろ、魂の形を変えんとするならば術式を使用せねばならない。そして、術式の使用に必要なものが呪力だ。これは、呪霊であろうとも変わらない。

肉体の損傷が無くとも、形を変えれば大なり小なり呪力を消費し、その被害が大きければ大きいほどにその消耗も増していく。少なくとも、雨里はそう仮定付けていた。

無論、周りに気付かせることも大事だ。それは大前提。

粉碎され粉塵を上げる地面と、その空前舞い上がりそうな土煙を突き破って距離を詰めようとしてくる呪霊を見ながら、更に術式を――

「――ばあ」

「ッ!? (何で、後ろに!?)」

何が起きたのか分からないまま、しかし本能的にガードとその上に氷を纏わせる防御を展開する雨里。

そんな彼を、呪霊は一切気にする様子もなく二回りは大きくなった右前腕を振るい、人の頭を容易く包み込めそうな拳でガードごと叩いてくる。

まるで、トレーラーでも突っ込んできたかのような衝撃。不意打ち

であったことも相まって、彼の体は踏ん張ることが出来ず、大きく殴り飛ばされてしまった。

鈍い音がした。同時に、左腕から響く痛み of 信号。

どうにか空中で姿勢制御ができた雨里は、地面に二本の線を引きながら止まる。だが、この時点で左腕が使えなくなつたのは明白。だらりと垂れ下がり、指先に力を入れるだけでも痛みが走る。

「派手な術式だけど、自分で死角増やしてたら世話ないよね。ま、俺も似たような経験あるから分かるんだけどさ」

「……………」

「それじゃあ、続き……………ともいかないか」

呪霊はそう言つて少し離れた場所へと視線を向ける。

そこは、ちょうど帳が張られていた場所だ。それが今、解除されたのか晴れていく。

「じゃあね、呪術師。次はキツチリ殺してあげるから、お楽しみに」

「ッ、待てー！」

氷を走らせる雨里。だが、間一髪間に合わず呪霊は木の根のようなものに包まれて逃げ去つてしまう。

逃がした。同時に、戦闘が終わつたという事に他ならない。

戦いが終われば気も抜ける。膝が震えて、気付いた時にはその体は大の字に地面に転がってしまったていた。

後処理が残っている、と思ひ直せどもそれでも溜まつた疲労と、左腕の骨折、更に術式による凍傷一歩手前の低体温症のトリプルパンチ。もはや限界だった。

「もつと、鍛えない……………」

それだけが口からこぼれ、意識が飛ぶ。

少し離れた場所では氷の壁が碎け散つていた。

\*

交流会の襲撃を乗り越えた呪術高専。

生徒たちは、それぞれの学校で別れ治療の必要な者もまた分かれ、バラバラとなっていたが、一方で教師陣営は一ヶ所に集まっていた。

「——— 続いて、人的被害の報告です。えー、死者は準1級術師一名、補助監督一名、忌庫番二名。そのほか、2級術師二名、補助監督三名が重症ですが家入さんの治療を受けて安定しているという事です。聞き取りをした限りですと、襲撃してきた呪霊は継ぎ接ぎのある人型。七海さんが遭遇した個体と同じ特級かと」

「思ったよりも被害出てないね。2級にそんな強いのも居たっけ」

「いえ、その……氷の人形が加勢してきた、と」

「氷……（京平の術式かな。やっぱり、学長に指導を頼んだのは正解だったかな）」

「この件って、他の術師や学生と共有した方が良いですかね？」

「……………いや」

「特級呪物の流出に関する噂の確信を、呪詛師連中に持たれるわけにはいかない。上で止めておく方が良いだろう。捉えた呪詛師は何か吐いたか？」

「いえ、そちらも要領を得ないものばかりでして」

それから、幾つかのやり取りがあり決定したことはいくつかあれども、交流戦の中止か否かは、生徒たちに委ねられる事となる。

一方、件の生徒たちはというと、それぞれがそれぞれに時間を潰していた。

「まあ、何はともあれ皆無事で、何よりじゃないかな」

「そうね。それはそうと、虎杖。アンタいつの間にあのゴリラとあんなに仲良くなったのよ」

「いや、仲良くなったっ—か……………記憶はあるんだけど、あの時の俺は俺じゃなかったというか」

「なに酔ってるの？」

「釘崎は、俺があの中酒を飲むような奴だと思ってる訳？」

ピザをベッドの上に置き、見舞いの体を取りながら談笑する三人に伏黒の眉間に皺が寄る。

「お前ら、治療は良いのかよ」

「この中じや、アンタが一番の重傷でしょ。アンタもよ、雨里」

「オレ？」

「そーそー、左腕折れてるんだろ？」

「まあ…………でも、綺麗に折れてたから、そんなに完治に時間はかからないって家入先生にも言われたし大丈夫——」

「でもお前、全身凍傷になりかけてたんだろ。それが無けりや、左腕も治してもらえてたはずだ」

「雨里？」

「…………ナンノコトデシヨウカネ。ピザ、オイシー」

「アンタが一番重傷じゃない!? 大人しく寝てなさいよ!」

「いや、大丈夫だから、釘崎さん。本当に」

左腕を三角巾で吊った雨里と、そんな彼に詰め寄る釘崎。

実際のところ、彼の左腕が治っていないのは家入からのちよつとしたお小言の結果であったりする。主に、単騎で特級と戦った事と自分の体にガタが来ていることを理解したうえで術式を行使し続けた件について。

もちろん、任務が入れば治療をしてもらえる。それまでは大人しくしておけ、というお達しでもあった。

大丈夫、とチーズを伸ばしながら笑う雨里とそんな彼の頬を押す釘崎。そして、そんな二人のやり取りを見ながら笑う虎杖。

「……………虎杖」

「んあ？」

「お前、強くなったんだな」

それは、伏黒の率直な感想だった。

交流会襲撃の特級は、少年院に出現した特級より格上だった。それを相手に、特級との交戦経験がある東堂が共に居ようとも五体満足で生き残り、追い込んだ。

快挙だ。少なくとも、あの少年院の頃と比べれば雲泥の差がある。

「あの時、俺もお前もそれぞれの真実が正しいって言ったな。その通りだと思う、そしてその上で、俺たち二人はどっちも間違った」

「答えのない問題だつてあるでしょ。細かいこと気にしていると禿るわよ」

「そうだ、答えなんてない。要は、自分が納得できるかどうかの問題だからな。弱い術師は、我も通せない。強くなるぞ、俺は」

「それは、伏黒君の目標だけじゃないと思うな」

「私抜きで言つてんじゃないわよ」

「それでこそ、ブラザ虎杖の友達だな」

居ない筈の声が聞こえ、四人の目が一ヶ所に集まる。

ゴリラが居た。それも腕を組んで、訳知り顔で頷くゴリラだ。

逃走する虎杖、追う東堂。窓から始まる逃走劇な辺り、脇目も振らずとはこの事か。

離れていく二人の声、残った三人は知らないふり。

「東堂先輩は、忍者か何かなのかな」

「いや、ゴリラでしょ」

「ゴリラだな」

「……………まあ、体格だけの事じゃない、か」

筋骨隆々の見た目と、話類が通人じない相手猿というダブルミーニング。

結局、ピザの残りは三人の腹の中に収まり、虎杖は東堂に捕まったりとだけ報告しておく。

呪術高専姉妹校交流会。例年通りであるならば、一日目は団体戦、二日目は個人戦となる。もつとも、今年は団体戦で襲撃があつた為に一日の休みを置いて、二日目が開催される事となつていた。

「プレイボール！」

「なぜ、野球？」

左手を三角巾で首から吊つたままの雨里はベンチ席の端つこで首を傾げる。

事の発端は、目隠し着けた最強の一声からだつた。

\*

「——つっわけでき。人死にも出てるしどうする？続ける？交流会」

生徒たちを集めた場で、五条はそう切り出していた。

彼の持論ではあるが、教師が一方的に決めるよりも生徒たちの自主性に任せる為の今回の措置。

もつとも、関係ないかな、というような顔している者も居ない訳ではないのだが。

「加茂先輩、大丈夫なんですか？」

「ああ、問題ない。君の応急処置が良かったんだろう、家入さんの治療でほぼ完治したよ」

「なら、良いんですけど……頭の包帯は大丈夫ですか？目のあたりまで覆ってますけど」

「問題ない。寧ろ、私よりも君だろう。その左腕は折れているのかい？」

「折れてますね。綺麗に折れたらしいんで、反転術式で直ぐに治せるらしいんですけど……まあ、無理をした罰らしいです」

「それは、当然だろう。連絡手段が無かったとしても、君は一人で向かうべきじゃなかった。寧ろ、腕の一本で済んだことが奇跡だ。その幸運に感謝すると良い」

「そうですね」

階段の三段目辺りに立って壁に背を預けた雨里は頷く。交流会の二日目でも腕は治さないと家人に既に言われた彼は、個人戦は出ない。いや、術式的に戦えない訳ではないのだが、それでもやはり相手による。東堂などとぶつかれば、左腕を粉碎されかねない。

そんな彼を見下ろすのは、左目のあたりまで頭に包帯を巻いた加茂と若干不貞腐れたようにも見える西宮だ。

加茂の怪我也決して軽くはない。折れた両腕に、建物へと突っ込んだ際に頭を切った。今は、両腕は完治しているし、頭の傷もほとんど塞がっているが割と派手に血の流れる部位である部分も加味して包帯が巻かれていた。

一方で西宮が若干不機嫌なのは、自分のカワイイ判定を下した後輩が無茶して腕を一本折ってきたから。特級相手にこの程度で済み、尚且つ補助監督などを救出したことは褒めるべきであっても、それを飲み下せるかどうかは別の話という事。

それから、東堂が交流会の続行に肯定を告げ他の面々も大なり小なり頷いた。

個人戦のつもりであったのだ。それは両校の学長と生徒も共通認識だった。であるのに、どこぞの最強様の独断により内容変更。

そして、場面は冒頭へ。

\*

術式の補助があれば出来る事の幅が広い雨里だが、今回は見学。元々、東京校の方がメンバーが多い為公平性を保つための措置でもあった。

東京校側は、ピッチャーが真希、キャッチャーは虎杖というフィジカルコンビが担当している。

先攻は京都校。一番バッターの西宮が出塁し、二番バッターは三輪。そして何故だかノリノリで審判をしている五条が二度目のプレイボールをかけていた。

「五条先生、ルールはつきりと理解してないよね、うん」

ダメだこりや、とつぶやく雨里だが彼だった別段野球に詳しい訳ではない。現に三輪が打ち上げフライとなり、その前に走っていた西宮がアウトになった様を見て首を傾げていた。

続く加茂が三振を取られ攻守交替。

「こっちの順番ってどうなってたっけ？」

「私が一番よ！」

バット片手に意気揚々とバッターボックスへ向かうのは釘崎だ。

「東北のマー君とは、私の事よ」

「東北のマー君はマー君だろ」

「つーか、マー君投手だろ」

「釘崎さんなら……：……クーさん？ノーさん？」

「ジューズと、何か拒否してる奴だな」

「くうおら、男どもオ！この、野薔薇様の応援をしやがれ！」

やんややんやとヤジの飛ぶ味方ベンチへとバットを突き付け吠える釘崎。

ぶつくさ文句を垂れながら、バッターボックスに立ち相對するのは、

「——ちよつと待て！ピッチングマシンじゃないのよ！」

ピッチャーメカ丸（ピッチングマシン）の姿だった。手書きで顔が書かれ、その下にメカ丸とマジックで書かれたその見た目はやつつけ感が半端ない。

メットとバットを放り出して詰め寄る釘崎。始まりかける乱闘。相手するのは、煽りストな真依である。

「スペアよ、スペアメカ丸。一昨日、そっちのパンダが壊したから直ぐに用意できなかったのよ。ピッチング……マシン？っていうのはよ



く知らないけど、貴女詳しいのね、オタクなの？」

「よくもまあ、そこまでペラペラ喋れるわね………良いわ、上等よ。かつ飛ばしてやろうじゃない」

反りが合わないというのは確かにあるのかもしれないが、それでも真依に煽られると、釘崎はどうしても乗ってしまう節があった。

試合再開。放たれた一球目に対して、釘崎渾身のフルスイング。

二番は、伏黒。手堅く送りバントで釘崎を次の塁へと進める。三番はパンダ。パワーのある一打で難なく一塁へと到達。

そして、四番を務めるのはピッチャーの真希だ。

弾丸も見切れる彼女にしてみれば、ピッチングマシンからの投球など見極める程度容易い。

バットの芯で捉えてフルスイングすれば、ボールは内野を高々と超えてホームランの軌道を描き、

「……ほいつ」

空を飛んだ西宮によって捕球されてしまう。

というのも、人数の関係上で外野手一名の呪術使用が許された野球なのだ。むしろ、かつ飛ばすよりもヒット性の当たりを量産する方が点につながったりする。

結局、釘崎が塁に戻る前に刺されて攻守交替。打席に入るのは、東堂だ。

「ふっ、キャッチャーとは言わばチームの司令塔。まさに、俺の親友ベストフレンドにふさわしいポジションと言えるだろう」

「東堂……！」

「だが！俺が望むのは、ピッチャーとしてのお前との真剣勝負！」

「………お前がピッチャーすればいいんじゃないやねえか？」

「無理よ。今は、メカ丸がピッチャーしかできないんだから」

「約束してくれ、虎杖ブラザー。俺がここでホームランを打ったなら、次回お前がピッチャー……！？」

グダグダと気障な話し方をしていた東堂の顔面を襲った剛速球。

常の彼ならば、躲すか迎撃できたかもしれないが、意識の大半がキャッチャーである虎杖に向いていたために一切の反応することも

できず左頬に直撃をいただくことになった。

「ナイスピッチー」

「ナイツピー」

「ナイツピー」

「真希さん、ナイツピーー！」

そして、ナイスピッチングのコーラスが敵味方問わず響くという追  
い打ち。

東堂の上体を持ち上げる虎杖も、流石に気付く異常事態だ。

「東堂、お前……嫌われ過ぎじゃね？」

「まあ、東堂先輩はエキセントリックだからね」

「あ、雨里」

「とりあえず、冷やそうか。腫れてるし。東堂先輩、氷です」

いつの間にか寄って来たのか、掌大の氷をハンカチに包んだ雨里が  
そこに居た。

そして、ダウンした東堂を右肩で支える様にして立たせると、向か  
うのは京都校側のベンチ。

「とりあえず、庵先生。東堂先輩の代走お願いします」

「そうね……なら、三輪。お願いできる？」

「は、はい！」

代走の指示を庵が飛ばす傍らで、雨里はてきぱきと片手でありなが  
ら東堂をベンチに寝かせてボールのぶち込まれた顔へと氷嚢を押し  
当てる。

「別に、彼放っておいても良かったんじゃないの？一応、対戦相手よ  
？」

「オレは、今日は何もしてませんから。救護係程度はやるべきでしょ  
う？」

少し突っかかってくる真依を軽くないした雨里。  
彼にしてみれば、この程度は労力のろの字にも当たらない事なのだ  
から。

割と、変人を見るような目で京都校側から見られることになるのだ  
が、彼は知った事ではない。

ちなみに、姉妹校交流会の結果は、東京校の勝利で幕を閉じる事になる。

\*小話\*

『呼び方』

「そういえば雨里って、あのゴリラも先輩って呼ぶわよね。その辺どうなの?」

「うん?何が?」

「ほら、アンタって真希さんの事は、真希先輩って呼ぶじゃない?パンダ先輩たちの事は、パンダ先輩って呼んでるし」

「うーん……オレとしては、京都校とか東京校とか関係なく、呪術高专っていう学校の中で上の学年の人は一括りに先輩って呼んでるだけだから……特別深い意味はないんだけど」

「ふーん」

「あ、でも、オレは多分皆ほど、東堂先輩を嫌ってないっていうのもあるかな。あの人の呪術に関する認識って分かりやすいし」

「はあ!?あのゴリラが!?!」

「うん。ほら、呪術師って呪力を流してるよね?その流すっていう認識を各部位で分けて考えるから呪力の流れに速度の遅延が起きるってさ」

「……………つまり?」

「つまり、実力者ほど呪力の操作が呼吸するように自然なんだって。そんな話を聞いたからかな、オレはあの人嫌いじゃないんだ」

波乱を巻き起こした呪術高専交流会も終わって暫く。今日も今日とて、高専生は任務へと駆り出されている。

「オレ一人だけどね」

現状、東京校一年の四人のうち、伏黒と雨里のみ2級術師だ。虎杖も釘崎も力量と言えば同じ位であるため同階級でもよさそうだが、そこは面倒な呪術師界限。昇級にはそれ相応のプロセスを踏む必要があった。

ちなみに、今回の分配は1:3。雨里は一人でこの任務に送り出された。

場所は、T県某所。廃園となったテーマパーク。

「……………水の腐った二オイだ」

山を穿つようなトンネルの前に立って、鼻を押さえた雨里はこみ上げてきた生唾を無理矢理飲み下して息を吐く。

なかなか面倒な事になりそうな、そんな予感。

「雨里さん。今回の任務は、この廃園となったテーマパークの調査です。何でも、ここを取り壊して新しいリゾート地を建設を行う予定が、その、幽霊が出た、と」

「つまり、既に呪霊は出ている、ってことですよね？」

「ええ、まあ……………」

気まずそうな補助監督の言葉を受けて、雨里は頭を掻く。

調査任務であるが、既に被害が出ているのならば呪霊の討伐は必定。問題は、その相手の等級が雨里一人でどうにかなるような相手であるのかどうか。

「……………もしもの場合は、高専への連絡と他術師への情報提供をお願いします。それから、貴方も直ぐに逃げてくださいいね」

「……………武運を」

トンネルへ足を踏み入れる雨里の背後で帳が下ろされる。

吐き出す息は白に染まっていた。

\*

呪術師としては珍しい少年。補助監督から見ても、雨里京平という呪術師は稀に見る真面目な部類の少年だった。

彼ら彼女ら補助監督の立場は決してよろしくない。呪術師に虐げられることもあるし、上層部と現場の板挟みになる事もある。場合によつては肉盾にされて、その命を落とすこともあった。

だからこそ、珍しい彼の命が散らされないように祈る事しかできない自分に歯噛みしてしまう。

補助監督の中には、最初からその職を志して就いたものだけではない。呪術師になろうとして、様々な要因から挫折し、結果的にそちらに就いた者が居るのだ。

虐げられても、反論できない。そんな相手ばかり。

だから祈ろう。年若い命が失われないように。

補助監督は気付かない。帳の中に、とある物が紛れ込んでいる事など。

\*

補助監督と分かれて、トンネルを進む雨里はこの先にあるであろう廃園となったテーマパークに対して思いを馳せていた。無論、周囲に対する警戒はしたまま。

呪霊が生まれやすいのは、学校や病院だと言われている。だが、それはあくまでも感情の集まりやすい場所がそうであるだけ。

今足を踏み入れているこの廃園となったテーマパークも、その要素としては十分。いや、それどころか人の感情という点では廃園した事も相まって強まっているかもしれない。

呪霊の元となる感情は、言うなればパレットの上に出された複数の絵具だ。二色程度ならば大した事が無くとも、数が増えて、それら全てを掻き混ぜれば、その先に待つのはどす黒い色。この黒が濃ければ濃いほどに、呪霊は強くなっていく。

少なくとも、雨里はそう認識していた。

不気味なほど静かなトンネル。中を通る雨里の足音だけが木霊しているが、不意に視界の先に光が見えた。

果たして襲われても大丈夫なように冷気を放ち始める彼を出迎えたのは、

「……………鳥の羽根？」

羽根が舞う不思議な空間だった。

思わず呆けてしまう雨里だが、それも仕方がない。

そこは、領域だった。術式の付与されていない未完成な、形だけが広がった領域。

少年院以来の遭遇。同時に、事態をどうにか飲み込んだ雨里は成程と内心で頷く。

領域は、閉じた空間だ。傍目から見てもその異常性は確認できず、その場に足を踏み入れて漸く、といったそんな場所。

踏み込まない「窓」ではまず分からない。そして、仮に踏み込めば未完成とはいえ領域。呪霊のテリトリーだ。まず、生きては出られない。

振り返れば、案の定退路を断たれた。まるで別世界にでも紛れ込んでしまったような水面が広がり、トンネルなど見る影もない。

「……………ウユニ塩湖かな？」

そんな感想が、自然と雨里の口からは滑り出る。

いつぞやのテレビで見た光景。綺麗な風景だと彼自身そんな感想を抱いたからか、鮮明に覚えていた。もつとも、ここはそんな綺麗な風景とは違い命の危険を多分に含んでいたが。

もはや逃げる事は不可能。雨里は、腹を括った。

死ぬつもりは毛頭ない。仮に死ぬことになろうとも、相手を道連れにする。そう決めた。同時に、全身から冷気を発し、今立っている水

面の一部が凍り付き始める。

油断なく周囲を見渡した雨里。その彼の上部に影が差した。

見上げれば空を舞う歪な鳥、の様なものが上空を旋回している。

二対の翼と脚部以外を包む極彩色の羽。

何より、その大きさ。

歴史上で最大の飛翔する鳥は、ペラゴルニスと呼ばれるている。その翼開長は六メートルから七メートル。羽ばたかずに、上昇気流を用いてグライダーのように空を舞ったと考えられている。

だが、今空を舞っている鳥？は、翼の幅だけでも優に十メートルは超えているかもしれない。加えて、コンドルやトンビ、アホウドリのように滑空するのではなく、二対の羽を交互に羽ばたかせてゆったりとした余裕さえ感じさせる雄大な姿だ。

思わず、見惚れてしまいそうな光景。しかし、この場は領域で、雨里は領域展開はできない。

であるならば、領域の主であれ、何であれ、空の鳥を落とす事は必要事項。

「凍結呪法・氷龍 “連門”」

雨里の足元を起点にして氷が走り、水面を突き破って四体の氷の龍が空へと伸びる。

二度の黒閃経験は、彼自身の術式の洗練さをより高次元のものへと押し上げていた。地上から何メートルあるのか、空へと伸びる龍の維持にも一切の苦は無。

果たして、龍の牙は鳥の様な何かへと食らいつく。そのまま操作して龍もろとも、鳥を水面へと引きずり落した。

舞い上がる水飛沫と、その下の地面。元々、雨里の足首よりも下程度にしか水は無いのだからこれは不思議ではない。

そんな事よりも、彼は更なる追撃へと移っていた。

「凍結呪法・氷嘴」

創り出すのは、いくつもの氷の円錐。その鋭い先端の全てが粉塵へと向けられており、雨里の手の動きに合わせて宛らミサイルの様に殺到していく。

右手でツララを操作しつつ、雨里は左手を空へと掲げた。

彼の術式は、凍結であるが術式というのは術者本人の解釈次第で広がっていくもの。

掲げられた左手の先。五メートルほどの空中にソフトボールほどの氷の球体が現れていた。

球体は、その場で時計回りに回転を始め、その速度は徐々に徐々に増していく。同時に回転に巻き込まれるようにして周囲の空気が冷やされ、その分が氷を徐々に育てていく。

「凍結呪法・氷天下<sup>ひょうてんか</sup>」

ソフトボールほどの大きさであった氷の塊は、気づけば巨大なガスタンクほどの大きさにまで成長しきっていた。更に未だ回転しているため、徐々にその直径は増していく。

大技だ。そして、この大規模な攻撃こそが自分の持ち味であると雨里は理解していた。無論、接近戦で直接凍結させることも武器と言えるだろう。だがやはり、広域殲滅能力に関しては彼は既に学生の範疇を超えていた。

「行けッ！」

投擲。振り下ろされる左手に連動するように、巨大な氷の塊がツララが何本も殺到した鳥の元へと落ちていく。

その光景は、まるで氷の隕石が空より落ちて来る様。

見た目相応の質量がぶつかれば、その前の氷の龍やツララの連射とは比べ物にならない破壊力を発揮する。

「っ……………」

巻き起こった衝撃と、圧縮された冷気の解放に両腕を顔の前で交差して耐えながら雨里は隙間より落下跡を睨み付ける。

これで倒せたならば、御の字。だが、その可能性は未だに保たれた領域により打ち消される。

「……………コッコッ」

音が聞こえる。いや、鳴き声か。

ゆつくりと両手を下ろした雨里は、舞い上がる粉塵の中に動く何かを視認して警戒の度合いを高めていた。



というのも、粉塵の中の影は小さかったから。少なくとも、雨里よりも大きい程度。二メートルを超える程度か。

だが、それはおかしい。先程まで、粉塵の舞い上がった中に居たのは巨躯の怪鳥であったのだから。

果たして、空気が揺れる。粉塵を突き破って何かが雨里の元へと凄  
い速さで飛んでくる。

とっさに、彼は目の前に氷の壁を出現させることでこれをガード。  
そして、その氷に半ば食い込むものを見て眉を顰めた。

「これは……羽根？それにこの色はさっきの……」

極彩色の羽根。その尖った根の部分を鏃の様にして氷に突き刺  
さっていたのだ。

何が起きているのか分からない雨里を置いていくように、場は更に  
混沌へと歩を進める。

まず、粉塵がまるで突風でも吹いたかのように吹き飛ばされた。そ  
して、その跡地に居たのは巨躯を持った怪鳥、ではなく人型の何か。

鳥人、とでも呼称すべきだろうか。だが、人的要素は二足歩行であ  
る点、それから頭部に嘴が無く、代わりに唇の部分まで羽毛によつて  
覆われた裂けた様な大口がある点。両手足は鳥のそれであるし、その  
背には二対の巨大な翼を背負っている。

鳥人は、ゆつくりと首を回しそしてその蒼玉の様な瞳で真つすぐに  
雨里を視認した。

「コココ……ヒ、ヒト？」

「！」

「アハッ！ヒト、ヒト……食べて、良い？」

言うなり、鳥人の口が大きく開く。その様は、大口開けた蛇のよう。  
そして、警戒がこの場合は功を奏した。

鳥人の翼が大きく広げられたかと思えば、次の瞬間にはその姿は消  
えていたのだから。

それはほとんど直感。虫の知らせ。腕を交差させてガードした雨  
里は次の瞬間には大きく後方へと飛ばされていた。

ガードしても脳天にまで響くような鈍痛。同時に、彼は悟る。

よくないモノを呼び起こしてしまったのだ、と。  
「まづっ——」  
極彩色が、視界を彩る。

「だから、ひゅーんとやって、ひよい、だよ」

「ぐぬぬぬ……………」

分かれぬ、と眉間に皺を寄せて椅子に座り、折れた左腕に右手をかざす雨里とそんな彼を眺めながらコーヒーを啜る家入。

交流会を終えてから、左腕が完治するまでの間彼はこうして保健室を訪れては反転術式の指導を家入に求めていた。

「それにしても、熱心なお前も。さっさと治せ、とは言わないのか」「まあ、腕に関しては自業自得ですし。自然に治るのならそれに越したことはないですからね。それに、出来る事が多いのには、困りませんし」

「……………」

家入の顔を見る事無く、そんな事を言う雨里。再び口で小さく「…ひゅーん」と呟きながらどうにかこうにか反転術式をものにしようと四苦八苦している。

その背中が、どうにも彼女には何かとダブって見えて仕方が無かった。

「……………雨里」

「はい？」

「どうして君は、呪術師をやってる？」

「へ？」

思ってもみない人からの、思ってもみない質問に雨里は腕より顔を上げると振り返る。

彼の印象としては、家入硝子という人は深入りして来ない相手だ。仕事に関しても淡々としており、熱を上げるようなタイプではない、と。

そんな彼女からの質問。

「ええつと……………夜蛾学長や、五条先生からは聞いてないんですか？」

「なに、反転術式の監督報酬という奴さ」

「はあ……………まあ、単純にオレが後悔しない選択を果たすためです

よ…………弱くちや、何もできない」

戦いの場に立つ者にとって、力というのは絶対的だ。弱ければ何もできず、淘汰されるのみ。我を通す事も出来ない。

最初の無力感は、少年院。同級生を救えず、それどころか大事な場面でダウンしてしまった。

次いで交流会。特級に食らいつけこそすれども、それ以上は無理。結局逃がしてしまい、一方的に削られたと言っても良いだろう。

担任である五条も、共闘した加茂や狗卷からも労う言葉はあれども責める言葉は無かった。

それが、何よりも辛い。

もつと戦えた筈なのに。それこそ、自分自身の消耗や、術式の使い過ぎによる低体温症、凍傷を無視して戦い続ければ、少なくとも先輩二人に怪我を負わせることは無かったかもしれない。

傲りと言われればそれまでだが、それでもその事実は雨里の心にささくれとして残っていた。

だからこそその、パワーアップ。その取っ掛かりとして反転術式、というかプラスのエネルギーを作り出す術を身に着けようとしていた。

一方で、家入もまた彼の回答を聞き、頷く。

高い志ではない。呪術師の中には、夢を見て臨んでいる者も居るためだ。だが、同時に終わりのない目標でもある。

人生というのは、選択の繰り返し。医者としての側面の強い家入は特にその場面に遭遇することが多々あった。

「後悔の無い選択は無いぞ？」

「あはは……………そうですね……………うん、オレもそう思いますよ。性格的に、うじうじ悩むとも思いますから。それでも、という奴です」

「そうか……………よし、雨里。少しついて来い」

コーヒーを飲み干して立ち上がった家入は颯爽と、白衣を翻す。

「これから、数人の治療に向かう。お前には、その助手もどきをしてもらおう」

「え、でも……………オレ、片腕ですよ？」

「その分、術式を回せ。五条の方には、私から話を通しておくから」

「あ、はい」

\*

「……………」

沈んでいた意識が、水面を目指して昇る泡のように浮かび上がる、そんな感覚。

目を開けた雨里の視界に、最初に入ってきたのは羽毛の舞う空の色。次いで、耳元に響く水の揺れるような音。

「……………ああ、そっか」

小さく彼の口から、そんな言葉が漏れて体は起き上がる。ふらつきながらもどうにか立ち上がった雨里は、そこで徐にコートの前ボタンへと手を掛けた。

一つ一つ外し、そして脱ぎ捨てる。

「相對するのは、極彩色の鳥人。」

「コココ……………シ、シンデ、ナイ？」

「まあね。オレも存外頑丈だからさ」

首を回し、力を抜いていく。

ただ立つ事に特別力はいらない。寧ろ、余分な力みは次の動作による余分なものとなり、精度を落としてしまう事にも繋がりがねない。

まるで、呼吸をするように自然に循環する己の呪力。その呪力を、雨里は自然と術式へと流していく。

「————術式順転『人氷』」

吐き出す息は、白く染まる。同時に、彼の両手足は蒼い氷へと変換され右の首筋から頬にかけても手足と同じ色合いの氷が這っている。言うなれば、生きた氷。それが今の雨里の肉体だ。

外へと向けていた凍結の力を自分の体の中に圧縮し、バフとする。今の彼は、触れるだけで相手を骨の髄まで凍り付かせることが出来るだろう。

だが、それだけではない。雨里は、右手の人差し指と中指を拳の状態から開いて立たせ上へと動かした。

瞬間、鳥人は何かを感じ取ったのかその場より翼を使い全力で空へと逃れていた。直後に、鳥人の立っていた地点を中心として大きく亀裂が走り何か勢いよく飛び出してくる。

アメリカの小説家、ハーマン・メルヴィルの有名な著書の一つにとある動物を中心とした小説がある。

そのタイトルは、

「白鯨」

純白の巨大なマッコウクジラが宙を舞う。

ブリーチングという行動が、クジラには存在する。ザトウクジラなどが、海面から勢いよく体突き上がらせてそのまま倒れるように海中へと戻る、あの行動。

空を舞う白鯨は、正にそれだった。巨体が宙を一気に突き進み、そして空を飛ぶ鳥人へと向けて倒れたのだ。その様は巨大な白い塔が倒れるかのよう。

ただ、機動力では鳥人に分があつた。その翼を羽ばたかせてその一撃を回避。同時に、大技を無駄打ちに終わったであろう人間を見下ろそうと振り返り、

「やあ」

「キョゲツ!」

目の前に居た。

目を見開く鳥人。その顔面に炎の拳が突き刺さる。

衝撃が、一瞬周囲を静まらせ直後爆散。鳥人の体は、まるで砲弾の様な速度で下へと叩き落され、水面に強かに叩きつけられていた。

「術式反転『焰人』」

氷の反対は、炎。そんな考えから生まれた術式反転。順転が、肉体の氷化であるならば、反転は肉体の炎化こそが最大の特徴。その機動力は、順転の比ではない。

追い込まれたという極限状態と、土壇場で知覚した呪力の流れがこの反転を習得させる鍵だった。



見下ろす。

「今のオレは、人であると同時に炎なんだ。炎の塊に、態々腕を突っ込めばどうなるか、なんて考えなくても分かるよね？」

「ギイイイイ……!?!」

如何に呪霊と言えども、呪力を元とした炎に巻かれれば火傷を負う。元々が、炎をベースにした呪霊などでない限りこれは避けようがない。

焼かれる痛みに悶える鳥人。そこに、雨里はまるで蛇のようにするりと腕をレールに近づいた。

そして、両手を開き鳥人を包み込むように抱き着く。

「———  
『抱結』<sup>ほうけつ</sup>」

「カツ———」

音が消えた。

白目を剥くどころか氷像と化した鳥人。直後砕け散り、氷屑となり果てる。

主が消えれば、領域もお終い。世界に罅が入って端の方より虚空へと溶けるように、解けるように崩壊していった。

「……はぁ…………」

息を吐いた雨里は、その場にへたり込む。疲労の限界。もはやこの場から一步も動けないと思えるほどに今の彼は疲労しきっていた。

元々、目覚める前に鳥人にボコられた後だったのだ。それを無意識の反転術式で回復させ、どうにか目覚めた。そこから更に、ぶっつけ本番の順転と反転のオンパレード。

ランナーズハイではないが、一種のトランス状態から戻ってくれば異常な疲労感が襲い掛かってくる。

だが、倒れる訳にはいかない。これから、自分の足で待たせている補助監督の元へと向かわなければならぬのだから。

呪力不足でぼーっとする頭を無理矢理覚醒させ、足に力を籠める。膝が震えたが、それでも何とか彼は立ち上がった。そのまま時折ぶらつく足を気力で立たせて、少し離れたトンネルへと足を向ける。

そして、そんな彼をあらゆる角度から観察する存在が居た。



「特級なりかけの呪霊を単身、か。交流会でも思ったが、強いな」  
機械の音と水滴の滴る音を聞きながら、眺める誰かは思考する。

特級に対抗できる術師は、そう多くない。況してや、領域にでも引きずり込まれようものならもはやその生存はおろか、死んでも骨も残らないかもしれない。

未完成の領域であろうとも、それは同じ事だ。領域を張れる時点で呪霊としては相当強い。

そんな相手を単身で祓う。その上、反転術式の習得と術式反転の習得。

「アイツなら、任せても良いか」

誰かは、そんな事を勝手に決めてしまう。

地獄は既に、もう目の前。彼らの未来に希望は無いのだ。

刻一刻と寒さの増していく季節。

「便利になったわよね、アンタの術式」

「むしろ、こんな事に術式使うような術師は居ないんじゃないかな」

高専の隅にて、集めた落ち葉を基にして火の弾ける音が響く。

薄く煙を上げる火の傍にしゃがみ込み、両手を翳すのは釘崎だ。その近くでは、アルミホイルで巻いた何かを準備している雨里が居た。

「……お前ら何やってるんだ？」

「あ、伏黒君。ちようど呼びに行こうかと思ってたところだよ。虎杖君はどこに居るか知ってる？」

「焚火よ、焚火」

「焚火？あと、虎杖がどこに居るかは知らねえ。部屋じゃないのか」

「そっか……あ、ちゃんと、夜蛾学長に許可は貰ったから、大丈夫。いや、元々はオレの術式反転の訓練をしようと思ってただけだよ」

「アンタが、サツマイモが美味しいとか言うからでしょ」

「いやだって、本当にサツマイモはこの時期が旬なんだよ。近々味噌汁でも作ろうかと丁度買ったから出ただけだし……」

「ほら、焼くわよ」

「……お前ら、病み上がりじゃないのか？」

伏黒の疑問はそこだ。

彼もそうだが、一年生の面々は少なからず酷い手傷を負っていた。

当然と言えば当然で、特級呪霊と特級呪物の呪肉体を相手にして五体満足でこうして生き残っていること自体が最早奇跡なのだから。どこぞのGLGが、先輩に自慢していたとか、いないとか。

「オレは、大丈夫だよ。術式反転が使えるようになったから、反転術式の方も自分に掛けるだけなら何とかなるし」

「アンタ、本当に便利よね。一家に一人、雨里京平って所かしら？」

「家電とかが便利になった今の時代には必要ないんじゃないかな……さ、そろそろ焼いていくよ」

火の様子を確認した雨里は、そう言うたアルミホイルでキッチリ巻

いたサツマイモを焚火の中へと埋めていく。

「どれ位かかる訳？」

「うーん……一時間ぐらいいかな？焼け頃になったら連絡しようか？」

「……良いわ。待ってるもの」

「そつか……伏黒君は、どうする？焼き上がったなら、連絡しようか」

「……いや、大丈夫だ」

そう答えると、伏黒は近くの木に背を預けて腕を組んだ。

彼が迷うのは、あの時の事を二人に伝えるか、否か。一つ確定しているのは、このことを虎杖には伝えないという事だけ。

左手を炎へと変換して火が消えないように落ち葉を確認する雨里と、一切の躊躇なく炎の中に手を突っ込む同級生に若干引いた目を向ける釘崎。

伏黒の目から見て、二人はまず間違いなく善人といえる。釘崎は苛烈な面があり、気が強すぎる気がしなくてもないが。

伝えておくべき。伏黒恵はそう判断した。

「お前らに話しておくことがある」

「やつとね」

「それは、さつきまでムツツリ考え込んでたことかな」

「……」

「アンタって表情少ない割には分かりやすいのよ。八十八橋の後辺りからずっと考え込んでたでしょ……で？その内容は？」

「……共振は、分かるか？」

「理系の話、って訳じゃないよね？宿儺の指関連？」

「八十八橋の呪霊は、いつ動き出してもおかしくはなかった。ただ――」

「虎杖の受肉が切欠ってこと？」

「呪殺が始まったのは、六月。時期的にもぴったり合う……そもそも、受肉はアイツ自身が望んだことじゃない。俺を助けるための最終手段でしかなかった」

「……オレ達の所で、この話は止めておくべきだと思うな。こんなことが知られたら……」

「俺もそう思う。だから、言うなよ」

「言わねえよ。レディの気遣い舐めんな」

「同じく。虎杖君は納得しないだろうけど……これ以上、追い詰めるような事は起きてほしくないよ、オレは思うよ」

沈黙。しかし、それは避けようのない結果だった。

伏黒も釘崎も雨里も、虎杖悠仁の根明な部分と同時に優しさを知っている。善人であることを知っている。そして、その過酷すぎる運命も。

優しい彼に、世界は優しくない。そして、子供たちには、何かできるだけの力は無い。

少なくとも、今は。

東京校一年面々が、ある種の秘密を共有していた頃、京都では別の問題が浮上していた。

禪院真希、パンダ、雨里京平、釘崎野薔薇、伏黒恵、虎杖悠仁の六名が、冥冥並びに東堂葵の二名による1級術師の推薦が行われるのだった。

\*

術式反転を習得している術師は、そう多くない。これは前提として、反転した呪力であるプラスのエネルギーを生み出す技量が必要となるからだろう。

「ッ……」

左手を指鉄砲で構えその下に右手を添えた雨里が睨むのは、少し離れた窓。

呪霊が出る廃ビルの一棟。その外で、雨里はその瞬間を待っていた。

果たして、窓ガラスを突き破る様にして現れるのは、2級相当の呪霊。瞬間、彼の指先が僅かに光り、放たれるのは炎の弾丸だ。

螺旋回転をしながら直進したソレは、正確に呪霊を捉え焼き尽していった。

「まだまだ制御が甘い、かな」

厳しい評価かもしれないが、雨里にしてみればそれは感覚の話。

使い慣れた氷の術式に対して、炎の術式反転は使い慣れないというのが現状だった。本能的に使い方を近く出来るとは言え、その精度まで初見から完璧とはいかないのだ。

とはいえ、任務はこれにて落着。帳も晴れていく。

少し待てば、建物内に乗り込んでいた三人が出てきた。

「任務完了だね。三人は、これからどうする?」

「帰る」

「私は、買い物かしら。折角、街の方まで来たんだもの。こういう時に買つとかなないと損でしょ」

「あ、俺観たい映画があるわ」

「見事にバラバラ……まあ、オレ達らしいと言えば、らしいかな」

苦笑いする雨里だが、彼も彼で街に来た手前買いたいものがあり、それさえ買えばその後は直帰するつもりであったりする。

という訳で、その場で解散。四人は散り散りとなつて街に紛れ――

「――どういう状況?というか、何でオレ呼ばれたのかな」

「野郎の事なら、野郎に聞くべきでしょ?」

「……伏黒君が居るのなら、オレは要らないんじゃないかと思うんだけど」

呼び出されたファミレスの角席を前にして、雨里は首を傾げて一つ息を吐いていた。

買ったかった本とその他色々を買い込んで、さあ帰ろうと高専へと足を向けていた彼なのだが突然の釘崎からの呼び出しを受けてここまでやって来た。

そして、辿り着いた先で待っていたのは釘崎に伏黒、それから明る

い髪色の見知らぬ同年代程の女性。

「伏黒にも聞いたけど、虎杖って彼女とかいないわよね？」

「え？……まあ、多分？東堂先輩と盛り上がったらしいし……という  
か、状況がよく分からないんだけど」

「あ、そうよね。この子、小沢優子。虎杖と同じ中学だったらしいの」  
「ど、どうも……」

「はあ……えっと、つまりそういう事で良いのかな？」

「察しが良いじゃない。ま、そういう事よ」

「うーん……」

「とりあえず、彼女は居ねえと思う。急に東京に行くって事になつても特に困って無かったし、部屋にグラビアのポスターとかも貼ってたからな。相手とか嫌がるだろ」

「伏黒って女子の前だけでカッコつけてブラック飲むタイプ？」

「俺の話を聞きたいから呼んだんだよな？ツーカー、コーヒーはいつも  
ブラックだ、俺は」

「確かに、伏黒君はそうだね。そういえば、虎杖君の好みって、確か背  
の高い人だったはずだよ。東堂先輩と同じく」

「！それ、本当よね？」

「ほ、本当ですか!？」

「えっ、う、うん……東堂先輩がこの前メールで言ってたから」

「アンタ、あのゴリラとメル友な訳？……まあいいわ。優子！虎杖召  
喚するわよー！」

「はいー！」

盛り上がる女性陣。その一方で、伏黒は興味が失せたのか本を広  
げ、雨里は苦笑いしながら適当なホットスナック系の注文をしてい  
た。

程なくして虎杖がやって来る。パチンコの景品を抱えて。

「あれ？伏黒に雨里も居んじゃない」

「おう」

「さっきぶり、虎杖君……何もってるのさ」

「あ、コレ？換金所探すの面倒だったから、景品交換しちゃった。欲し

いのあつたらやるよ」

虎杖の持ってきた景品の入った紙袋を覗き込む二人。

一方で釘崎は若干焦っていた。

今回出会った小沢の見た目は、半年で大きく変わっていた。そして、彼女は虎杖に対して憎からず思っている。

だがしかし、出来る男虎杖。ここで釘崎の心配を超えてみせる。

「虎杖!!この子は——」

「——小沢じゃん、何してんの？」

挙がる十点札。が、しかし、その一方で小沢の胸中には言いようなない暗い気持ち湧きだしていた。

中学時代から大きく変わった容姿。自信が芽生えた所での、思わぬ再会。

舞い上がっていたのだろう。それこそ、虎杖が気付かずに、「誰？」と聞かれたのならば、寧ろその分を足掛かりにすることも出来たかもしれない。

だが、虎杖は初見で気が付いた。どれだけ見た目が変わっても、小沢優子が小沢優子であると気が付いた。

その事実が、彼女の心に影を落とした。

少女は一つ大人になり、そして戦士たちは羽を休める。

そして、運命の日は直ぐそこにまで迫っていた。

十月三十一日、ハロウィン。その起源は、古代ケルトにあるとされておりその歴史はかなりの物。

もつとも、現代に伝わるようなやり方になったのは、アメリカ大陸で広がった辺りから、というのが通説なのだが。

日本においてもここ数年は、祭りの一つとして認知され。仮装というよりも、コスプレの集まりとでも称されるようなお祭り騒ぎとなっている。

だが、この日のハロウィンはお祭り騒ぎの騒がしさではなく。悲鳴と焦りの、そして血に彩られる事になるなど誰も思いはしなかった。

\*

2018年10月31日午後19時。東京渋谷にて、一般人が帳に閉じ込められる事態が発生していた。

半径凡そ400メートル。通常規模の帳ではない。その上、一般人のみが閉じ込められており、呪術師並びに補助監督は出入り自由。差し引きとしては十分かもしれないが、明らかな罠。

上層部は、この異常事態を五条悟一人に平定を任せる事になった。「実際の所、どうなんですかね。確かに、オレ達が行くよりも五条先生1人で戦った方が強いことは分かるんですけど……」

いつもの通り首にマフラーを巻いて、コートを羽織った雨里は今回査定してくれる日下部篤也へと水を向ける。

今回、1級術師4名が派遣されており、彼らは五条のこぼれ球処理と合わせて推薦を受けた術師たちの昇級査定も行う事になっていた。

七海の下には、伏黒と猪野琢真。

特別1級である禪院直毘人の下に、真希と釘崎。

1級術師冥冥の下には、虎杖。そして彼女の付き添いである憂憂。



そして日下部の下には、パンダと雨里。

現在の時刻は20時14分。事が始まってから一時間以上が経過しているのだが、全てが現状後手に回らざるを得ない嫌な状況が続いていた。

「まあ、五条が強いのは一人の場合だ。アイツの術式、呪力は共に強すぎる。友軍なんて、寧ろハンデにしなければならない。まあ、お前も似たようなもんらしいな?」

「オレは、五条先生ほど強くないです……」

「なあなあ、日下部。被害を最小限に抑えるって話だけど、そりや呪術師側の事だろ?一般人はどうなんだ?」

「まあ、上からしてみれば自分たちの手足の方が大事なのさ。何より去年の百鬼夜行クリスマスとは訳が違う。あの時は向こうから宣戦布告してこつちも準備期間が短くともあった。だが、今回は相手は突発的、いや水面下で事を運んでいたにせよ、こつちは後手に無理矢理にでも回されてる。俺もこれが最善だと思う。何より、帳の中をさつき見て回ったが、平和なもんだぜ?呪霊や呪詛師が跋扈してる訳じゃないしな。どちらかというと、俺達が帳の中で動いて連絡手段を絶たれる方が痛手だ」

日下部自身、仕事へのモチベーションは低いと言わざるを得ないが、それでも術師としての経験はある。この点においては、雨里とパンダは及ばない。

重くなった雰囲気にも雨里が指を立てて話を逸らすべく、口を開いた。

「そういえば、去年もこんな事が?」

「ん?……ああ、そういえばお前は今年からだったな。まあ、面倒な事が、な」

「お前らは会ってないけど、去年のクリスマスに憂太を狙って呪詛師が東京と京都を中心に戦争仕掛けてきたんだ。結果は、首謀者死亡でこつちの勝ち。まあ、俺も棘も真希も、その首謀者にボコボコにされたんだけどな」

「そんな事が……乙骨先輩、でしたっけ。今は海外でしたよね。多い

「んですか？」

「んー、まあ特級ばつかりだな。日下部ー、その辺どうなんだ？」

「あ？あー……任務との相性次第だな。上のメンツ考慮して特級派遣が多いがな。というか、外にも呪術師は居る。そいつらが対処しきれないような相手が出た時に依頼が来るって寸法だ。なら、最低でも1級案件。それも、特級に片足突っ込んでるような奴が相手になる」

海外にも、呪霊を相手にする者たちは居る。

ソレは、シャーマンであったり、エクソシストであったり。名を変えようとも根本的な部分ではそう変わりない。

そんな彼らが居ても任務が来るのは、偏に日本の特級。とりわけ、五条悟が強すぎる点にあった。

彼は、自他ともに認める最強だ。その言葉には偽りなく、特級が相手であろうとも容易く祓う事が出来るだろう。

問題は、現状の全てが彼におんぶに抱っこという事。

同じく特級である、乙骨並びに九十九に関しても、前者は未だ学生。後者はそもそも任務に出ない。

少なくとも、五条悟が機能停止に陥った場合、日本は終わる。ただでさえ特級を相手に出来る術師は少ないというのに、その特級にしても同じ階級であっても力の差が大きく勝つ負けるの領域に落とし込めないものも珍しくないというのに。

それから幾つかの講義が、日下部より行われた。やる気のない彼だが、だからといって教員としての役割を放棄することは無い。

事も無く終わる。それは、ある種のこの場に召集されている呪術師たちの共通認識でもあったのかもしれない。

何故なら、自他共に認めるが居るのだから。特級呪霊が束になろうとも、勝ち目はない。

その筈だった。

遠くより聞こえる同級生の声が、事態の急転を報せる。

「……五条先生が、封印……？」

呆然と声の聞こえた方向を見上げる雨里。だが、それも仕方がない。

呪術的に見て、封印というのは無力化も同然。加えて、五条悟という一種の規格外を封印するという事は相手がそれだけの準備を計画していたことに他ならない。

事態は、最悪へと転がり始めている。そこで、日下部は目を細めながら雨里へと言葉を投げた。

「雨里。お前、空から確認できねえのか？」

「え？……えっと、多分できますけど」

「んじゃ、上から見て回ってくれ。こっちは中を見て回る。んじゃ、行くぞ」

そして、彼らは帳の中へ。

単独行動させる点だけ見れば、日下部の監督責任となるだろう。

だが、雨里は既に黒閃を経験し、術式反転、反転術式を会得済み。既に特級成りたてとはいえ、そんな相手を単騎で撃破。生半可な1級よりも強いと、日下部は判断を下した。

ただその中身と言えば、パンダと雨里の二人を同時に引き連れてこの修羅場をのらりくらり出来るとは思えなかったから、というのもある。

そんな彼の内心など知る由もない雨里はというと、足元から氷柱を出現させて一気に上へと昇っていく。

あつという間に周囲のビルを見下ろすような高さとなった雨里。

眼下に広がる無機質なコンクリートのビル群と、それから少なくとも数回の呪霊、並びに改造人間たち。

交流会の折に見せた空中に氷の斜面を創り出し、雨里はその上を滑走し始める。

右手で氷を創り出し、ある程度距離を作った所で左手を指鉄砲に構えると、その指先に光が灯った。

放たれるのは、炎の弾丸。それらが空より、地上に居る改造人間や下級呪霊に襲い掛かるのだ。

とはいえ、それで全てを守るほど事態は甘くない。そもそも、呪霊は兎も角、六眼を持たない雨里には一般人と改造人間の見分けがつかないのだ。それこそ、改造人間がその正体を露にでもない限り。

故に、一步遅れざるを得ない。空から広い範囲を眺めているのならば、猶の事。

では下りればいいと思われるが、雨里の術式は五条同様に効果が大规模に及んでしまう。下手に人ごみの中に紛れてしまうと、それだけで多数の被害を齎してしまうのだ。

だからこそ、距離を取った上での狙撃に限定していた。

そうして空を滑りつつ、襲われそうな一般人を助けながら進んでいた雨里の目にとある人物が映った。

「七海さんー！」

1級術師七海建人その人である。常に着ているスーツの上着を脱ぎ、拳にネクタイを巻いたその姿は、既に縛りの時間を超過した状態を示していた。

一方の七海も、空から落ちるように滑り降りてくる雨里を確認して足を止める。

「何故、君がここに居るんですか、雨里君。日下部さんと一緒だったのでは？」

「あー……オレの機動力を活かして空から見回ってたんです。で、その……動き過ぎたみたいで」

「ふう……とにかく、君は退避を。近くに、釘崎さんと新田さんも居ます。彼女らの方に——」

「いや、オレはこのまま地下に行きます」

自分の言葉を遮った若い声に、七海の眉が少し動く。

レンズ越しに見下ろせば、年若くともその目には現役術師にも劣らない覚悟の色が見て取れる。

雨里は、言葉が続ける。

「オレの術式は、周りに大勢居たら使い難い。だったら、出来る事をします。このまま引くだけなら、オレは一生後悔する」

「……はあ……そうも言っていられる状態じゃないんですがね……この場の問答している時間も惜しい。ただし、雨里君。ここから先は、私も、そして他の術師も誰かを守る事はまず不可能であると理解してください。自分の身は、自分で。良いですね？」

「はいっ！」

元気のいい返事。七海は再度ため息を吐いた。

雨里の実力に関しては、過去に一度見たのもあるが、加えて少し前に煩い先輩に自慢の様な電話からも聞き及んでいた。

特級相当の未完成の領域を発動させた呪霊の討伐。少なくとも、己が学生の頃ならば無理だっただろうと七海は思う。

そして二人は、渋谷駅へと足を踏み入れて行く。

その先に待つ地獄など、知る由も無かった。

常日頃であるのならば、夜遅くとも人の出入りが激しい渋谷駅。だがしかし、今は違う。不気味な静けさがのさばっており、人の気配はまずしない。

響くのは四つの足音。

「五条悟が封印、か。正に青天の霹靂。狐につままれたような気分だな」

「私もです。ただ、今回の件には偽物だとしても夏油さんが絡んでいる。その辺りに、種がありそうです」

禪院直毘人の言葉に返す七海だが、その眉間の皺は取れそうにない。

地下へと今向かうのは、彼と特別1級術師であり、現禪院家当主の直毘人。それから学生であり、1級査定を受けている真希と雨里の二人。

特別1級とは、高専に所属していないが実力的に1級相当であるという証拠。事実、直毘人は老齢ともいえる年齢でありながら呪術師として第一線で戦える程度には強い。

そんな彼だが、例に漏れず呪術師としての性格の悪さは相当なところがある。

「俺としては、このまま五条が衰退していく様を見ながら一献傾けるのも良いが……」

「やる気がねえなら帰れよ」

ふざけた事を言う直毘人に咬みつく真希。最後方についていく雨里も、恩師を唾う様な口振りは気に入らないのか、その眉間には皺が寄っていた。

だが、直毘人は気にした様子もなく真希を見下ろす。

「帰れ、というならオマエの方だろう、真希。なあ、七海1級術師殿」

「真希さん。私も直毘人さんの言葉に同意します」

厳しい物言いだ、真希は4級術師。

如何に実家からの圧力があれども、彼女自身は天与呪縛によって呪

力は一般人並み。呪具である眼鏡が無ければ呪霊が見えない。

そして、これから向かうのは特級呪霊が跋扈する空間だ。それも地下という密閉空間でそう簡単に逃げ道は存在しないときた。

だがしかし、その点は真希も理解している。無論、直毘人に対する反発心の様なものもあるが、彼女とて覚悟を決めてここに居るのだから。

何より、

「酔っ払いよりは役に立つさ」

「……飲んでるんですか？」

「のんれらいよ……あ、ッ」

げつぶかます酔いどれ爺の言う事を聞く気はない。

七海が二人を連れてきたことに若干の後悔を抱え始めた頃、同じくして直毘人の興味は雨里へと向けられる。

「それで？そっちの小僧は何だ？」

「……雨里京平です」

「オマエも五条悟の教え子か。伏黒恵の同期だな」

「何で、ここで伏黒君の話が出るんですか？」

「あ奴の術式は、俺の相伝禪院。それもここ暫くは受け継いだものが居なかった代物だ。五条の横槍が無ければ、今頃伏黒恵は禪院となっていたものを」

因みに、禪院家の相伝術式は、伏黒の十種影法術だけではない。他御三家と違って複数の相伝が存在するのがこの家なのだ。ただ、その中でも彼の術式は特別視されているだけの事。

その一方で、己の同級生の昔話の片鱗を聞かされることになった雨里はその目を細める。

「……なら、今も貴方達は伏黒君を狙っていると？」

「さあてなあ？だが、よく思っていない奴らは居るぞ。くつくつく

……面白いなあ？」

「何も面白くねえだろ、飲兵衛。それから、私の後輩に変な事吹きこんでんじやねえよ」

酒臭い息で迫ってくる直毘人に顔を歪めていた雨里を、真希が横合

いから回収していく。

呪術師の家は伏魔殿だ。気軽に立ち入って良い場所ではないし、そもそも足を踏み入れるような場所ではないと真希は考える。

少なくとも、比較的感性の真面な後輩を踏み入れさせる気は毛頭なかった。

そんな会話を挟みつつ進む彼ら。

「！七海さん」

「ええ、居ますね」

前を行っていた真希と七海が気付く。

広い空間。本来ならば人々で賑わう筈のその場所に居たのは、一体の呪霊。

柱の陰に隠れるような様子のタコの様な触手が口？に生えたその姿は、言つては何だが強そうには決して見えない。それどころか、駆け込んだ七海達に怯えているようにも見える。

しかし、呪霊は呪霊。見た目に誤魔化されるようでは、呪術師としては落第というもの。

「私が仕掛けます」

得物の鉞を抜いた七海が一步前が出る。

だが、

「——お前たち。ちと、鈍すぎるな」

瞬間、というのは正にこういう事なのだろう。

気付けば、柱の陰に居た呪霊の背後に直毘人が居た。

その右手が呪霊に触れれば、その体は薄い板のようなものに封じ込められていた。大きさは、直毘人の身長、その半分といった所か。

ここに呪力を込めた直毘人の拳が突き刺さる。碎ける板。同時に呪霊の体に拳が着弾し、その体を勢いよく殴り飛ばしていた。

「見えましたか？」

「いいえ」

「……」

呆気にとられる三人。だがその中でも、七海は直毘人の動きを術式であると察していた。



単純な呪力による身体強化とは比べ物にならない超スピード。それも、1級である七海に視界にも映らず、呪霊も反応できないほどの速度。

「ヴー……ぶー……うっ」

意味の無い呼吸音なのか呻き声なのか、殴り飛ばされた呪霊は柱に叩きつけられて落ちた所から動こうとはしなかった。

ただ、呻き声が唐突に止まり、

「うっ……オロロロロロロツツ!!!」

その中身をぶちまける。

吐き出したのは、大量の人骨。肉が残っていないために性別などは分からないのだが、数十或いは百単位で食っていたのかもしれない。無惨な光景に、しかし直毘人は鼻で笑った。

「フツ……貴様、何人喰ったんだ？」

「ぶうー……ふうー……じょうごお……まひとお」

呼ぶのは、仲間の名前。

呪霊に正しいのかは分からないが、この個体は幼い。それこそ、親の後について回る子供のように。

だがしかし、その幼さが今回は仇となった。

「はなみい……う……」

その名を呼ばれた呪霊は、既にこの世に居ない。

幼さと素直さというのは、等号で結ぶ事が出来る。そして素直さというのそのまま感情の志向性に障害が無く、真つすぐとなる。

呪霊が宿したのは、怒り。それは負の感情より生まれる呪霊が発するには、余りにも相性が良すぎるといったものだった。

「はなみい……よくも……」

ざわり、と気配が揺れる。

呪力の源は負の感情。愛ほど重く強力な呪いは無いと言われているが、だからと言ってその他の感情が弱い訳ではない。

特に、怒りは爆発に定評がある。

「……よくも、花御を、殺したなッ!!!」

怒りと共にその姿は変貌する。

古い皮膚を突き破る様にして中身が空へと飛びあがる。

「成程、弱いはずだ。まだ、呪胎だったか」

飛び上がったソレを視認した直毘人は納得したように頷いた。

元の姿の面影を残しながらも、しかしその躯体はより人間の物へと近づきながらも異形としての異質さを失う事の無い見た目。

完成へと至った呪霊は無言で右手を掲げる。その立った指先に、バスケツトボールほどの渦を巻く水の塊が形成されいてく。

振り下ろされる腕。同時に水塊が落下、フロアの床に着弾した直後に人など軽く呑み込めてしまう様な膨大な濁流が出現した。

この異常を前に、呪術師はそれぞれがそれぞれに対処していく。

初動を見た時点で動いていた七海は、そのまま柱を足場に吹き抜けの二階へ。直毘人は術式でガード。真希は持ち込んだ大刀の呪具を壁に刺して足場に。

そして雨里はというと、

「凍結呪法・万結」

白い冷気を放つ右手を突き出し、自身に迫る水全てを一瞬で凍結、同時に砕く事で氷の塵へと変えてみせた。

同時に、駆けだす。

見上げれば、七海が術式を付与した一撃を、呪霊が腕で受けているところ。

押し合いになるが、彼の術式は対象に無理矢理クリティカルポイントを創り出すもの。そこを叩けば、例え特級であろうとも踏ん張りがない場では押されるだけ。

追い込まれて落ちてくる呪霊。そこにタイミングを合わせ、冷気を昇らせる右足による雨里の飛び蹴りが突き刺さった。

助走による加速に加えて、触れた部分から凍結し粉碎する術式の合わせ技だ。蹴り飛ばされる形になった呪霊は、脇腹を凍らせながら勢いよく近くのエスカレーター、その側面へと突っ込んでいく。

粉塵が上がり、床に落ちる形となった呪霊。更なる追撃を真希が掛ける。

振るわれる大刀。だが、その刃が呪霊の肌を捉える前に柄が握られ

止められる。

絶体絶命。だが、動きが止まったのは得物を止められた真希だけではない。

一瞬の隙をついた直毘人が迫っており、その右手が呪霊の体に触れたのだ。瞬間、先程呪胎を殴り飛ばした時のようなプレートが出現。その中に、触れられた呪霊の体が閉じ込められる。

このプレート、触れた対象を強制停止させるだけでなく直毘人自身の手によってある程度動かす事が可能。

ここで迫るのが七海。再度鉈を振り上げて振り下ろす。

しかし、敵もさるもの引つ掻くもの。強制停止からの復帰直後に術式を行使したのか振り下ろされた鉈の刃は高压の水流によって阻まれていた。

物理攻撃殺しの水の壁。それは、鍛え上げられた術師であろうとも突破は容易ではない。

ただ、この場に居るのは物理攻撃だけではない。

「凍結呪法・氷山刺」

踏み込まれた雨里の右足を起点にして床から付き上がってくるのは鋭い先端をした幾つもの氷山だ。

これを呪霊、跳躍して躲す。だが、上に逃げられる事などこの場の歴戦面々にとつてみれば自明の理というもの。

飛んだ先に居たのは、直毘人。蹴りが振るわれ、吹き飛ばされる。

粉塵を上げるエスカレーター。一方的な状況だが、しかし楽観できる雰囲気は彼らには無かった。

「良い術式だな、小僧。どうだ？<sup>禪院</sup>うちに来るか？」

「勧誘なら後にしてください、直毘人さん」

「オレは行く気ありませんよ。それより、どうするんですかここから」  
余裕のある直毘人は別にして、七海、雨里の二人は相手している呪霊の果てしなさを感じていた。

流星は特級というべきか、畳みかけてもピンピンしている。その上、相手はまだまだ底を見せていないのだから。

無論、彼らにも奥の手の様なものは少なからずある。あるが、この

渋谷駅で相手にするのは何も、この呪霊だけではない。余力を残す必要があった。

そんな七海と雨里とはまた別に、この場の紅一点である真希は別の焦りを抱いていた。

(さっきジジイが居なけりや私は……チツ)

無い物ねだりもしたくなる。

直毘人の投射呪法、七海の十劃呪法、雨里の凍結呪法。いずれも強力な術式であり、格上が相手であろうとも食らいついていけるだけのポテンシャルもある。

せめて、呪具のレベルがもつと上であつたならもう少し話は違つただろう。

だがしかし、状況は待つてはくれない。

「小僧、オマエの術式で水を止めろ。後は俺達がやる。あの呪霊を畳むぞ」

「はい」

術式相性の観点から雨里が壁役として前へ。一方、呪霊もまた瓦礫をかき分けて表に戻ってきた。

「呪霊、ではない。私は、陀良。我々にも、名前があるのだ……!」

ソレは、呪霊、陀良の怒り。感情という一つの到達点、その発露であつた。

知能を持ち、感情を持ち、仲間意識が芽生えるからこそ呪霊、と一括りで呼ばれる事は我慢ならぬらしい。

故に、陀良は攻め口を変えた。

組まれる両――

「やせんよ」

「ッ!」

組もうとした両手が蹴り上げられ、同時に一瞬の強制停止。そこに続いた七海が切り込み床へと押さえつけ、陀良の脇腹を真希が切り裂いていた。

「雨里君ッ!」

「凍結呪法・氷龍」

押さえつけていた七海が飛び退くと同時に、氷の龍が天井より突き出て陀良へと食らいついてきた。

ド派手な一撃は容易く床を破壊する。しかし、

「アッ、アッ、アッ、ッ!!!」

鋭い水刃が走り、氷の龍が粉碎されてしまい、そこからほとんど無傷の陀良が現れるではないか。

七海の見立てである、果てしないH P。ヒットポイントそれが今明確に、呪術師に牙を剥いていた。

どれだけ攻撃を重ねても、決定打には程遠い。

それでも、攻めるしかない。例えば果てしない相手であろうとも、そもそも削り続けなければ生き残る術は無いのだから。

だがしかし、ここで想定外な事が起きた。

先陣を切るのは、この場における最速である直毘人だ。

彼は術式を用いる事で圧倒的な加速と、同時に触れれば相手へのほぼ絶対的な攻撃権を持つのだから。

しかし、その速度が問題だった。

直毘人は確かに強く、速く、特別1級としての実力を有している。だからと言って、特級呪霊相手に楽勝であるのかと問われれば、否だ。

彼の速度に陀良はついていけないが、ソレは連れである七海、真希、雨里にも当て嵌まる。

彼らが追撃を加えるには、直毘人が攻撃の機会を与えねばならないのだ。だが、今はその一瞬の隙が惜しい。

領域対策として印を組む陀良の両手を破壊した。しかし、相手は呪霊。如何に人型に近づこうとも、その肉体そのものの形に、それほど意味は無いのだ。

直毘人が、陀良の腹に浮かんだ紋様に気付いた時には遅かった。

「領域展開」

発動されるのは、呪術戦の極致。

人間の文明というものが完全に消え去り、世界を塗り替えるのは穏やかな海と、砂浜。それから、砂浜に接続する南国の森林。

「『蕩蘊平線』たうんへいせん」

特級呪霊が牙を剥く。

呪術戦の極致、領域展開。

術式の必中効果に加えて、展開した者に対するバフが付与されぶつちやけ、引き入れた時点で勝ちが決まると言っても良い。

死地というには余りにも、穏やか。しかし、やはりそこは特級呪霊の領域<sup>テリトリー</sup>。引き込まれた時点で勝ち目は、限りなく下がってしまったている。

腰ほどまで海に浸かっている陀良に対して、呪術師たちは砂浜。まずは、距離を詰めるところから始めなければならない。

だが、

「ツ!?」

気付けば、七海と真希の右肩と左脇腹が喰い千切られていた。

見れば、口元を血で汚した宙を泳ぐ魚がいつの間にかそこに現れているではないか。

七海も真希もここで、相手の術式必中効果が、この式神であると気が付いた。その一方で、陀良もまたこの小手調べで相手への脅威度をより正確に測り直している。

(やはり、あの二人か……)

瞳孔の無い瞳が捉えるのは、二人。

一人は、呪力で全身を包んで必中の式神に対してカウンターを合わせた直毘人。もう一人は、式神が噛み付いた瞬間その体は一瞬で凍結し砕け散らせた雨里。

——秘伝『落花の情』

「術式順転『人氷』」

直毘人の場合は、御三家に伝わる対領域用の術であり全身を呪力で包み、必中の術式が発動した瞬間に呪力によるカウンターを加えるというもの。

一方で雨里は単純に術式の相性。

彼の術式順転は、いわば肉体そのものを生きた氷へと変化させる。その身は極低温で安定しており、触れれば相手をそのまま凍り付かせ

る事も可能だった。

そして、場は動き始める。

「術式展開『死累累湧軍』」

印を組む陀良。出現するのは大量の肉食魚を模した式神たちだ。

これを見た瞬間、七海は一瞬血の気が引いた気がした。

この領域下における式神の必中は、気付いた時には肉を抉られている。それが、視界を埋め尽くすような量で襲い掛かってくるのだ。対処などまず出来るはずもない。

しかしここで、両陣営にとって予想外が起きた。

「！京平ッ！」

真希が気付く。己の後輩の突飛な行動に。

なんと彼は、海へと一気に駆け出し陀良への距離を詰めにかかったのだ。

両者の間には、深さの分からない海が広がっている。そこに駆けこむ事など、肺呼吸であり鰓も水掻きも無い、水中の機動力はかなり低い人間にとっては自殺行為。

だが、彼が一步海に踏み込んだところで、その認識は改められない。なんと踏み込まれる一步一步に合わせて、海面が凍結していくではないか。これにより、即席の足場を形成。雨里は海面を疾走する。

この特攻にも見える突撃には、しかしちゃんとした理由がある。まず、七海と真希はこの領域に対応できない。肉弾戦が基本である彼らは全身を常に防御し続ける方法が無いからだ。

ついで、直毘人。彼の防御法も、呪力を多分に食う。呪霊に対して呪力量で劣る事の多い呪術師では根競べでは分が悪いのだ。何より、直毘人の防御はその場から動けない。

だからこそ、雨里は前に出た。現状、式神は脅威足りえない。であるのならば、自分へと注意を向けさせて場の打開を狙う他ない。

「――蒼ノ月輪」

海面を駆けながら掲げられた右手。掌が偽物の空へと向けられ、そこに現れるのは群青の氷河によって形成された直径二メートルほどの薄い円盤だった。



円盤は回転し、雨里はそれを投擲する。

「速いッ！」

迫る円盤を視認し、陀良は式神を展開。壁にするように何体も差し向けていた。

しかし、この『蒼』を冠する雨里の術式は、既存の凍結呪法とはそもそもレベルが違う。

「なんだとッ!？」

陀良は、その異形の無表情のままに驚きの声をあげた。

壁としようとした式神たち。それらと氷の円盤がぶつかった瞬間、まるで水を切る様に式神たちは上下に寸断され、同時に切り飛ばされた上部は凍結し、粉碎されたのだから。

驚愕する陀良ではあるが、そんな事は雨里には関係ない。

「まだまだ……！」

二つ、三つ、と追加で投擲されていく氷の円盤。

そう、あくまでもこの技は円盤を創り出して投擲するだけというものの。別段、追尾性能など存在しないし、回転させる事で切れ味を上げているが、それはあくまでも雨里自身の操作でしかない。

陀良は歯噛みする。そして同時に、標的を雨里一人に定めてもいた。

故に、邪魔をしかねない周りを封じにかかる。

「死累累湧軍……！」

「行かせない！」

「無駄だ！貴様の凍結は、存在しない式神には意味が無い！」

差し向けられる式神の牙。直毘人に六割、七海に四割。真希には、数体。そして、陀良本体は雨里と相對する。

陀良が選んだのは、肉弾戦だった。そしてそれは、雨里自身も望むところ。

人の頭を容易くつかみ、握り潰せそうな手より放たれる拳と、群青の氷河によって象られた氷の拳が真正面からぶつかり合う。

驚くべきは、領域を展開する特級呪霊相手に、力負けをしていない点だろう。

肉体を氷へと変化させる術式順転。それは、一時的とはいえ人を止めるという事に他ならない。言ってしまったえば、一時的に肉体が呪霊化しているようなものであった。

何より、雨里と陀良では戦闘経験における差が明確だ。

「ふうッ！」

突き出される左拳を胸の前で雨里は受け止める。さらにそこから手首を掴むと、体を反転させながら陀良の懐へと背中から突っ込んでいた。

「オオッ！」

簡略式背負い投げ。相手への配慮など知った事かと、腕を肘関節でへし折りながら一気に背負い、同時に海面を一気に凍結させて、そこに背中から叩きつけた。

硬い氷に叩きつけられ跳ねる陀良。そこに、頭を踏みつけんとする雨里が右足を上げる。

だが、

「舐めるなアああああッ!!」

突き出される陀良の右腕。同時に、雨里の体に海面から付き上がったきた式神が襲い掛かってくる。

如何に触れただけで凍結させ、砕くと言えどもその衝撃までは完全に殺す事は出来ない。腕を交差させて身を守る雨里だったが、その体は一気に偽物の空へと押し上げられていた。

「ッ、くそっ……!」

ダメージは無い。仮に五体を砕かれようとも、今の雨里の体は氷。修復が可能だ。

ただ、ここで間が空いた。少なくとも、陀良の有している情報では空へと吹き飛ばされた雨里が戻って来るには落ちてくるしかないのだから。

陀良が向かったのは直毘人の下。

落花の情によって式神を防いでいるが、際限ない式神の特攻は視界を潰すには十分すぎる威力を有していた。

故に、反応は遅れてしまう。

「……チツ」

殴り飛ばされ、空中で式神に食いつかれた。そして、七海もまた式神に飲み込まれている。

後は真希だが、彼女は彼女で単身特級を相手に出来るような状態ではなかった。

「オマエが一番、弱い」

「ッ……い！」

式神に食いつかれながら大刀でガードすれども、真希は蹴り飛ばされていった。ただし、追撃は出来ない。

「——蒼ノ手」

海面を凍らせて着地した雨里からの攻撃が来たからだ。

先ほどの円盤と同じく、群青の氷河で形どられた人一人容易く包み込めそうな巨大な腕が海面を突き破って二本、陀良へと迫っていた。

「速い……い！」

巨大な見た目に反して、式神に勝るとも劣らない軽快な機動力。

腕はそれぞれ右腕と左腕を形作っており、その二つは陀良を挟むような対極の位置をとって、

「拍手ッ！」

打ち合わされた雨里の両手の動きに合わせて叩き合わされる。

それは宛ら、羽虫を潰すが如し。打ち合わされた氷河の両手が砕けて崩れる中で、陀良は膝から崩れていた。

完全な不意打ち。加えて、全身そのものを粉碎する一撃。如何に特級であろうとも、全身そのものを完全に粉碎されれば、祓われずとも再生には割を食う。

体を修復しながらこの場における一番の脅威に向き直ろうとする陀良。だがその前に、その体を大刀の刃が刺し貫いた。

「貴様ッ……い！」

「余所見すんな！」

真希の大刀は柄を折られてしまったが、呪具となっているのは、その刀身だ。祓うとまではいかずとも、少なからずダメージは与えられる。

ここで陀良は迷った。海面を駆けて砂浜へと向かってくる雨里と、現在進行形で刃を突き立ててくる真希この二人の内、どちらから排除すべきなのか、と。

順当にいけば、手間のかからない真希を殺すのが手っ取り早いだろう。しかし、だからといって雨里から目を離せば再び不意打ちを貰いかねない。

如何に再生できても、限度がある。そう何度も何度も全身を粉碎されてしまえば、例え領域内であろうとも敗北は必至。

故に、隙が生まれてしまった。

——領域展開

響く、外部からの声。直後には海面を突き破る様にして黒が現れる。

——『嵌合暗翳庭』

馴染みのある呪力。その出現、知らずの内に雨里の頬がほころぶ。

「真希さんー雨里ー」

伏黒恵の参戦。同時に、一筋の影が、真希へと伸びる。

影より吐き出されるのは、とある代物。

特級呪具『游雲』顕現。

術師の新たな参戦。その情報は、しかし陀良にとって狙いを変え  
る事にはつながらない。

(私の領域に自ら侵入してきた少年……だが、やはり圧倒的に厄介な  
のはあの氷の少年だ……！)

術式による相性の不利。だからと言って呪力量による勝敗の面で  
見れば、陀良に分がある。

故に、雨里を潰す。その為に手を向けて式神たちに彼を、

「なに……？」

疑問による空白の時間。この隙を、真希は逃さない。

特級呪具『游雲』。三節棍の見た目であるソレは、破壊力は文字通り  
特級相当。

反射的に腕でガードする陀良だが、先程までの真希の攻撃だと考え  
ているのは間違いであった。

容易く腕の一部が抉られ、次いでの一撃はガードした上での吹き飛  
ばされた。

「行ったぞ、京平！」

「分かっています！」

吹き飛んでくる陀良に突っ込むようにして、雨里は走り込みながら  
の右ストリートを合わせていた。

游雲の一撃ほどではないにしても、衝撃と凍結の効果を合わせて発  
揮する一発はその異形の背中へと着弾。大きくその体を弾き海水へ  
と叩き落してみせる。

ここで漸く、陀良は気付いた。

己の術式の必中効果が消えているという事を。そしてその原因が、  
侵入してきた少年によるものであるという事も。

(必中効果を取り戻すには、あの少年を潰す他ないという事……)「容  
易い」

必中効果が消えているというだけで、式神を半永久的に呼び出し続  
ける事が可能な術式まで無効化されている訳ではない。

何より、伏黒は既に限界が近かった。

元々完成していない領域だ。加えて、その未完成の状態で特級呪霊相手に領域の押し合いを、いやこの場合は無理矢理穴を開け続けているような状態なのだ。とてもではないが、長くは持たない。

現に、今の伏黒は領域の維持で精一杯。とてもではないが、式神を呼び出して戦力として参戦する事は愚か、身を守る事すらも怪しいレベル。

陀良は腹より引き出した式神を、伏黒へと喉ける。そしてこの瞬間、雨里は己の失策を悟った。

伏黒が動けない。かといって、位置的に氷を伸ばして式神を防げるような所に、雨里は居なかつたのだ。

咄嗟に反転して壁になろうとすれども届かない。

「伏黒く——」

せめて声だけでも。そんな思いから出た声は、しかしその前に割り込んだ人物によって遮られていた。

残っていた氷と伏黒の領域より頭を出していたカエルの頭を足場に海面を渡ってきた七海だ。だが、その姿は痛々しい。

シャツは破れ、血が滲んでおり何より左目がほぼ完全に潰れてしまっているのだ。それでも、その術式に陰りが見えないのは流石と言う他ない。

七海だけではない。

一瞬で陀良の背後に現れた直毘人。彼もまた、着ていた着物は跡形もなく上半身を晒し、その体には傷が目立ち、何より右腕を二の腕の中ほどから失っていた。

満身創痍。しかしこの二人の登場は、陀良に少なからずの衝撃を与える。

死累累湧軍は無尽蔵に式神を召喚し続け襲わせる術式であるが、そこに時間の縛りを設ける事で威力を高め二人へと仕向けていたのだ。時間にして凡そ一分。それだけあれば、人一人食いつくすには問題ない筈であった。

だがしかし、悔るなかれ。七海も直毘人も一般人ではない。呪術師

においても一握り1級術師であり、その実力もさることながら、肉体強度は一般人を遙かに凌駕する。

七海が伏黒を護衛し、残り三人が攻める。状況は術師側に、僅かにだが傾き始めていた。

もつとも、それはこの状況が続けば、だが。

「ッ……い」

伏黒の鼻から一筋血が流れる。

既に彼は限界だった。しかし、陀良を仕留めるにはまだ掛かる。

真希、直毘人が挟み込むように攻めれば式神を盾に距離を空ければ、その隙を突こうとする雨里には、グソクムシの様な式神が多量に向けられ突破に手間がかかった。

向かってくる式神を振り払いながら、七海は内心で思案する。彼の強みは鍛え上げた肉体からの体術などもあるが、何よりその冷静さにあった。

（伏黒君は、既に限界。直毘人さんは右腕を、私は左目を潰された。真希さんの振るうのは、特級呪具か？……それでも、足りない。雨里君が最も手傷を負っていない……ただ、彼一人には荷が勝ちすぎる）

思わず舌打ちしてしまいそうになるが、七海はそれを飲み込んだ。

状況の打破を狙うのなら、消耗しきった伏黒に代わって誰かしらが領域を展開する事だろう。だが、七海、真希は不可能。直毘人も落花の情で身を守った事から恐らく不可能。雨里も同じく。

その他の可能性としては、黒閃だろうか。七海は、四回という記録を持っており、直撃させれば特級相手でも十分に勝算がある。

問題は、その黒閃を狙って出せる術師は存在しない点。経験者である雨里も極限状態に追い込まれた上で一発が限度だった。

近接戦闘が得意な面々が残っている現状、やはり頼みは黒閃。

そんな七海の内心を知ってか知らずか、ここで雨里がグソクムシの群れを突破、陀良と接敵する。

「オオオオオッ!!」

振り被られた右拳にこの戦いの冷気が纏わりつく。

雨里も気づいていた。この状況が長く続く筈はないという事を。

呪力の消耗のし過ぎは体への多大な負荷となって最悪命に関わると。故に、今ここで祓う。

その気迫を感じ取ったのか、陀良の選択は迎撃、ではなく回避。だが、その方向をミスした。

「さっきも言ったよなあ?」

腰の生えた飛行には向かずとも対空出来る翼を用いた空への逃走ルートは、しかし蓋をするように行き止まりとなる。

足で押さえる直毘人は、馬鹿にしたように陀良を見下ろしていた。そこに間髪入れず、真希が追撃してくる。

遠心力を乗せた上から下への振り下ろし。それが、陀良の脳天を捉え、その体を地へと叩き落したのだ。

「ぐっ……!」

砂浜に叩きつけられ、その体が跳ねる。特級呪具の一撃は、それだけ重かったのだ。

そしてそれが致命的な隙を晒す事へと繋がった。

「舐め、るなアッ!!」

牙を晒し、陀良は吠える。式神を出す暇はない。であるのなら、片腕を犠牲にしても目の前に迫ってくる少年を潰すしかない。

その一心で、陀良は拳を握り、振り抜いて――

「――馬鹿な……」

決死の一撃は、しかし正確に見切られ雨里の右の頬を掠めただけとなった。

繰り出された拳を躲し、懐へと潜り込んだ形となった雨里はその引き絞った右拳を踏み込みと同時に射出する。

群青の氷河によって象られた右拳による一撃。それは一切阻まれる事なく真つすぐに、陀良の胴体の中心へと吸い込まれていき、

「――蒼ノ一擲……ッ!」

黒い閃光が弾け、同時に白い亀裂が駆け巡る。

「カッ――!?!」

呻く事は愚か、断末魔すらも真面に発する事は出来ない。

一瞬の事。陀良の拳を受けた胴がまず白く凍結した。それも、表面



的なものではなくその内側。臓腑の全てに至るまで。

そしてその背より歪な形状の氷山が拳の着弾より一拍置いて一気に突き出してきた。

効果はまだ続く。黒閃発動による打撃の威力は乗算され、加えてその破壊力を凍結してしまった陀良の体は耐えられなかったのだ。

結果、爆散する。この間、僅か数秒。

同時に主が、爆散した事によつて領域に亀裂が走り、まるで布が解れる様に消えていった。

「……ッ、うっ……」

拳を振り抜いた格好で固まっていた雨里は、一つ呻くと口を押さえて蹲ってしまふ。

タイルの床についた手は小刻みに震え、彼の体はまるで冷凍庫にでも突っ込まれていたかのように冷え切っていた。

呪力の消耗もそうだが、彼の術式順転は負荷が大きすぎた。その為に、反転ではあるのだがまだまだ先見えない現状、必要以上に消耗するわけないはいかない為においそれと扱えない。

同じく消耗しきった伏黒には七海が向かい、雨里の下へは真希が来る。

「大丈夫か？」

「ええ……まあ……ふう………直ぐに動けますよ」

「……冷え切ってんな」

霜の降りたコートの肩を撫でた真希は、その手の平より伝わってきた冷たすぎる感覚に眉根を寄せる。

人の体温では、最早ない。少なくとも、ここまで冷え切っていれば内臓系にダメージを与え、最悪心臓麻痺を、四肢の末端が凍傷で腐り落ちてもおかしくないそんな冷え方。

だが、事態は待つてはくれない。

「……何者ですか」

七海が、気付く。

現れたのは、一人の男だった。

右の口角辺りに縦一閃する傷があり、そして一切の呪力が感じられ

ないそんな男。

この場に居る人間の中で、直毘人は気付く、目の前の男がどういう存在であるのか、と。

「……ッ！甚爾か！」

その名は、禪院家において落伍者の証。しかし、同時に恐れられてもいた。

だが、今その名を持っていた男は理性というタガを外され、返事をすることは無い。

ただその黒い瞳が五人の姿を確認し、

「ッ、伏黒君!？」

「恵!!」

瞬間、伏黒と共に男の姿が掻き消え、更にガラスが砕け散る。

全員の目が割れたガラスへと向けられる中、更に事態は混沌へと転げ落ちていく事になる。

ソレは、言うなれば熱気の出現だろうか。先ほどの夏日の日差しのような暑さではなく、火山、マグマの熱気。

陀良の消滅していく亡骸の側に膝をつく小さな姿。火山の様な頭をした単眼の人型。

そして何より、

(おいおいおいおい、冗談だろうか?)

(先ほどの、陀良と名乗った呪霊よりも――)

(格段に、強い……!)

その圧倒的な実力が、煮えたぎる呪力も併せて声高に主張してくる。

陀良相手に、ほぼ全員が相当に追い込まれた。そんな相手よりも、更にも上の実力を有した特級呪霊など最早悪夢以外の何物でもない。

そんな怪物が、振り返った。

(速――)

最初の標的は七海。気付いた時には、目の前にその呪霊がおり、その右手が腹に触れる。

直後、その手より業火が噴き出して、七海の腰から上を一瞬で飲み

込んでいた。

「七——」

次の標的は、真希。游雲を振るう間もなく、接近した呪霊に上半身を炎に包まれた。

彼女が倒れる中、更なる標的は、その傍の雨里。

左手が至近距離で向けられ、先程の七海のように業火が彼の全身を包むようにして一気に焼き焦がす。

そして、最後の標的である直毘人。

彼は、その経験によりすぐさま術式を行使して戦う、いや抗おうと動いていた。

投射呪法を用いる彼を捕える事など、早々できるものではない。だが、それはあくまでも彼の両腕が揃っていた時の事だ。

すぐさま焼かれて——

「むっ」

動こうとした呪霊だったが、急にその体は引き留められていた。

見れば、己の左腕、その手首の辺りが群青の氷河で作られた右手によって掴まれているではないか。

その腕は未だに煙を上げる先ほど焼いたはずの少年がいた位置から伸びていた。

「術式、順転……人、氷……！」

煙を突き破る様にして現れる雨里。その体は、氷河へと変貌を遂げ、業火とのせめぎ合いによって白い蒸気をこれでもかと上げている。

その彼が振り被る左拳。

「アアアアアアアツツツ!!」

気迫と共に振り抜かれた一発が、呪霊の頬を捉え殴り飛ばすと同時に掴まれていた左手首から先が凍結によって脆くなり引き千切れていた。

「禪院1級!!」

肩で息をする雨里が叫ぶ。

「七海さんと真希先輩を救護班の場所にまで運んでください！」

「……なに？」

「これ以上は進めません！仮に進んでも、消耗しきった状態じゃ五条先生は助けられない！なら、次へと繋げるしかない！」

叫びながら、雨里は一瞬だけ直毘人へと左手を振るった。

すると、彼の失われた右腕に冷気が纏わりつき、あつという間に氷で作られた腕が引っ付いているではないか。

「一時的ですけど、呪力を通せば動きます！あとは頼みました！」

一方的だ。返事は聞かない。

拳を握り冷気を全開にして、雨里は殴り飛ばした呪霊へと飛び掛かっていく。

七海と真希は、治療すればまだ助かると彼は判断したのだ。であるのなら、術式の相性が良く、尚且つ現状は五体満足で傷の少ない自分が足止めに回るべき。少なくとも、そう考えた。

決死隊だ。その背を見つめ、直毘人は右腕に目を落とす。

彼が、雨里の言う事を聞く筋合いはない。何故なら一方的な事であつたからだ。

だがしかし、将来有望な術式持ちの術師と渡りを付けられることは、家の繁栄にも一役買う事になるだろう。

そんな理由をつけて、直毘人は倒れた二人を担ぎ上げていた。

もう一度だけ、命懸けの戦場に飛び込んでいった背中を確認して、その姿はその場より掻き消える。

後に残るのは、大気すらも焦がす熱気と、それらと正面から相対する冷気のみ。

「死ぬか、小僧」

「死なせてみる、呪霊」

混沌の夜は、まだまだ明けるとは無い。

死ぬかもしれない。自分よりも小柄な目の前の相手を見ながら、雨里は時間が圧縮されるような感覚を味わっていた。

炎の温度における上限は、現状無い。少なくとも進んだ人間の科学力では観測されていないのが実情だ。

その一方で、冷気の下限は凡そ—273度。分子運動が限りなく停止する温度こそが下限であるとされている。

その戦いは、宛ら真逆の自然災害が真正面からぶつかり合っているようなものだった。

「シャアッ！」

呪霊、漏瑚しゅうこは手を僅かに動かすだけでそこかしこから小型の噴火口のようなものを創り出し、そこから人一人焼き焦がすには過分過ぎる程の業火を放つ事が出来た。

この業火の前に、雨里はと言えば冷気を全開にして壁を逐次築く事に対応。時間にして十秒とかからず突き破られるのだが、回避するには十分役目を果たしている。

融解していく氷の壁を尻目に、雨里の反撃。

「——蒼ノ月輪」

陀良戦でも活躍した氷の円盤が複数漏瑚へと差し向けられる。複数立ち並ぶ柱を、まるで菓子のように切断し迫る円盤。しかし、

「カアッ！」

漏瑚の手より発せられた業火は、まるで極太のビームの様に視界を埋め尽くし瞬く間に円盤群を飲み込み消し飛ばしてしまう。

術式としての相性もあるだろうが、漏瑚のソレは他三体の特級呪霊と比べても圧倒的に破壊力に富んでいた。

ここまでのぶつかり合いで、雨里もその事には気づいている。故に、これは布石だ。

「——接近戦か？ 貴様に勝ち目はないぞ、小僧」

「それを決めるのは、お前じゃない……！」

視界を狭めてしまう業火を掻い潜った雨里の拳と、漏瑚の掌がぶつ

かり合い硬い音を響かせる。

自殺行為にも思える接近戦。事実、漏瑚はそれほど体格に優れているという訳でもないのに、その一発一発はまるで噴石の様な威力を有している。

しかしそれは、雨里も同じくだ。

彼の場合は、術式によって創り出す氷よりも己の体の方が冷え切っている。

故に、こと肉弾戦においてのみ両者はイーブン。同じ土俵で戦う事になるのだ。

殴る、溶ける。殴る、凍る。互いが互いに凍結と融解を繰り返しながらぶつかり合う。

(花御と戦い、陀良を打倒するだけの事はある、か)

漏瑚は迫りくる冷気を放つ拳を逸らしながら、冷静に目の前の少年を測ろうとしていた。

本来ならば、この場に居た術師全員を焼き殺して、その上で宿讎の器である虎杖悠仁を探し出し己の目的を果たして居るところだったのだ。

だがしかし、現実はどうか。氷屑の様な子供一人満足に仕留められず、剩え残りの術師には逃げられる始末。

漏瑚にとつて五条悟以外の術師など塵芥同然。そもそも、この渋谷において、彼に勝てる存在は片手で足りる程度しかいないのだから。

さつさと、打倒する。そう決めて呪力を練り上げ、

「ツ!!」

両者は同時に気付く。

ねっとりとした悪という存在そのものが溢れ出ているようなそんな呪力。それが今この瞬間に、確かに感じ取れたのだ。

「宿讎……!?!」

雨里は動揺が隠せなかった。

忘れもしない少年院の件。その後の特級呪霊と相対する事もあったが、絶望感では未だにトップを独走するそんな経験。

そしてその隙は致命的だ。

「——余所見をするな」

「っ、しま——」

気付いた時にはもう遅い。

足元から全身を包み込むような業火が勢いよく火柱となって噴き出し、雨里の体が飲み込まれたのだ。

一瞬の出来事。火柱が消えれば、天井は融解し大穴が穿たれて空が確認でき、同時に床はドロドロに溶解し蒸発している場所すらも見受けられた。

その中心で、しかし雨里は立っていた。

両腕を顔の前で交差した、なけなしの防御姿勢。その腕の隙間より覗いた瞳は、決して折れることは無い光を宿す。

しかし、漏瑚は既に彼と戦う気が失せていた。

もつと別の要件があるためだ。その為ならば、目の前の術師一人の生死の確認など些事に等しい。

「火礫蟲」

呼び出されるのは、虫のような姿をした大量の呪霊。それらが一斉に、雨里へと襲い掛かってきた。

見た目こそ、4級程度に見える。だが、その本質はまた別の物。

咄嗟に、その鋭い鼻先を氷の壁で防いだ雨里。だが、その直後にこの防御方法が失敗であったと彼は思い知らされることになる。

「ッ、これは……！音？！」

尋常じゃない不協和音が鼓膜を揺らす。

羽音と奇声。これによって敵対象の動きを押しとどめ、そこから二の矢が襲い来る。

爆炎が雨里の視界を一気に染め上げた。

\*

呪詛師菜々子と美々子にとって、夏油傑という存在は己が生きる全

てであった。

どん底から救い上げてくれた恩人。決して綺麗な道ではなかったが、それでも彼なりの愛情をもって育ててくれた。

だからこそ、彼が死に、その亡骸を利用される事になっても唇をかんで協力する事にした。

だがしかし、縛りの結ばれていない口約束など何の意味も無かった。

故に行動を起こす。その頼みの綱は、死蟬と化した呪いの王の指。幸いというべきか、敗北した器は直ぐに見つかった。指に關しても、どうにか飲ませる事には成功した。

しかし、彼女らにとつての想定外も起きてしまう。

そもそも、虎杖悠仁は指一本では宿儺に対して肉体の主導権を与える事はまず無いのだ。例外としては、少年院の件だがこれは彼が入れ替わりの折に色々とミスをしていたから。

その後に関して、指を一本取り込んでも虎杖は正気を保っていた。今回もそうだったのだ。指を飲み込ませて独特の紋様が体に浮かび上がるも、それだけ。

それどころか、宿儺の呪力を感じ取った漏瑚がこの場に乗り込んでくる始末。

「貴様ら！指を何本喰わせた!!」

「い、言わない……………」

「美々子！」

「そうか…………では、死ね」

漏瑚は言うなり、掌より発する業火で少女二人を焼きにかかる。彼にしてみれば、高々人間の一人や二人問題ではない。問題なのは、今現在進行形で壁にもたれて気絶している器の事。

徐に、外套の内側へと手をつ突っ込み、取り出すのは特殊な呪布によって封じる形にした巻物。

留め具のベルトを外し広げれば、そこに収められていたのは十本の指だ。

「起きろ、宿儺」



今回の件の首謀者の談だが、虎杖悠仁は一日一本で二十日かけて指を飲んでも体の主導権を渡すことは無いが、一度に大量に飲ませればその限りではないという。

漏瑚の目的は、宿儺と虎杖の間で縛りを結ばせる事。永劫的に肉体の主導権が取れる、そんな縛りだ。

果たして、十本の指が虎杖の中へと取り込まれた。

同時に、美々子と菜々子の二人も生還してくる。

二人の生存を確認し、再度消し飛ばそうと漏瑚は左手を彼女らへと向け、そして違和感に気が付く。

手首から先の喪失。それから、

「一秒やる………退け」

圧倒的強者の顕現。

漏瑚の手の中、両面宿儺はその姿を現したのだ。

瞬間的にその場から退避する漏瑚と、それから溢れる冷や汗と悪寒が止まらない双子の姉妹。

ソレは、最強である五条悟が内包するものとは根本的に違う、悪意の権化。

敵対関係だとか、そんな事は関係が無い。ありとあらゆる全てが、ただその場に存在しているだけで生殺与奪の権利を本能的に握られる。そんな恐怖の象徴。

息をする事すらも許可を得ねばならないかのような錯覚を、美々子と菜々子の二人が覚える中で反転術式によって傷が完全に消えた宿儺はゆったりとした足取りで三人の下へと向かう。

そして、

「――図が高いな」

小さく、呟かれるような声量だった。だが、その一言を聞いた者たちは、まるで呪言による束縛を受けてしまったかのように頭を下げる。

直後、彼らの首があったであろう位置を斬撃が通過。頭の下げが足りなかった漏瑚の火口のような頭頂部が切り飛ばされる事になった。

溢れる血液に、しかし反抗する気は微塵も湧かない。

それだけの實力差がこの場には確かにあるからだ。そもそも、刃向かおうと僅かにでも体を動かせばその時点でなます切りにされるのが落ち。

圧倒的な恐怖の権化は、その立場のままに言葉を紡ぐ。

「片膝で足りると思ったのか？ 実るほど、という奴だ。よほど頭の中は空であるらしいな」

馬鹿にしたように嘲りながら、宿儺が目を向けるのは未だに頭を下げたままである双子。

「ガキ共、まずはお前たちだ。何か俺に話があるのだろうか？ 指の一本分ぐらいならば聞いてやる。言ってみろ」

「ッ……下に、額に縫い目のある男が居ます………そいつを、殺してください」

「夏油様を、解放してください」

彼女らの願い。

夏油傑が死んだことは、運命であったと受け入れた。その最後は親友である五条悟の手によるものであり、その点も受け入れた。

だがしかし、死後の亡骸を良いように扱われるのは我慢できない。我慢できないが、しかし彼女らに夏油の死体を扱う存在を殺す事は愚か、傷つける事すらも不可能。

故に、縋る。例えそれが、呪いの王であろうとも。

「……フッ……頭を上げろ」

果たして、宿儺は聞き入れるのか。

言われるがままに、顔を上げ――

「――ここで来るか」

直後、冷気が双子の前を突き抜けて宿儺の姿が青い壁の向こうに消えていた。

それは、純度の高い群青の氷河の壁。それは、先程漏瑚が突っ込んできた通路から伸びていた。

一同の目が集まる先、現れたのはボロボロの格好となった少年。

巻いていたマフラーは消し飛び、羽織っていたコートはボロボロになつて脱ぎ捨てた。その下に着ていた呪術高専の制服にしても前面

が大きく消し飛んで宛らジャケツトのよう。

それでも彼、雨里京平はこの場にやって来た。

「両面宿儺。虎杖君の中に、戻ってくれないかな？」

「随分と強気に出るじゃないか、小僧。あの時と比べれば雲泥ではあるが……その程度で俺に向かつてくるか？」

「……その程度でも何でも、お前が出続ければ虎杖君の首が絞まっていくんだ。友人として、そんな事見過ごせるはずが無いだろ。勝てる勝てないの話じゃないんだ。こっちも命懸けで行く」

もしも仮に、この場に雨里以外の術師が居たならば彼を止めただろう。いや、伏黒や釘崎、東堂等ならば隣に並んだかもしれない。

そんな覚悟示す雨里だが、その一方で宿儺は彼を嘲っていた。

「下らん。実に下らんなあ？この小僧ごときに命を懸ける。剩え、呪詛師を救う。くひつ……随分とちぐはぐな事だ」

「そんな事ないさ……少なくとも、彼女たちを庇ったのは虎杖君の為だからね」

「ほう？」

「彼は優しいんだ。それこそ、両面宿儺。お前が手に掛けたとしても、自分のせいだと責める程度には。彼女たちが呪詛師であっても、凄惨に手を下してしまえばそれだけ虎杖君は思い悩む。だから、庇った。それだけさ」

雨里は決して善人ではない。善人ではないが、それでも友人となった者たちを助けよう、守ろうとする心は確かにあった。

とはいえ、どれだけ彼が覚悟を決めていようとも、そんな事は宿儺にとつては些事ではない。

視線を次いで向けるの未だに膝をつく漏瑚だ。

「それで？貴様はどうだ、呪霊。何の用だ」

「ッ、用は……無い」

「何？」

「我々の目的は、宿儺。貴様の完全復活にある。今はまだ、虎杖の適応が追いついていないがために一時的に自由を得ているに過ぎない。それは、貴様自身が一番分かっているのだろうか？であるならば、縛り

を作れ。肉体の主導権を永劫に得るための縛りをな！」

漏瑚は、宿儺が虎杖から主導権を奪わないのは、奪えないからだと考えていた。

呪物による受肉体というのは、基本的に呪物に主導権がある。だが、宿儺の場合は別。その毒性すらも無効化する器としての適性がありすぎる虎杖に受肉してしまった。

しかし、

「必要ない」

宿儺の返答は予想外の物だった。

唾然とする漏瑚であるが、そんな事など彼にとってはどうでもいいらしい。

「俺には俺の計画があるのでな……だが、まあ呪霊も随分とお前たちと必死らしいなあ？」

言いながら、宿儺は漏瑚、並びに雨里へと目を向けた。

「少し、俺の手慰みにつき合え、呪霊、そして呪術師。俺に一発でも入れられたのならば、呪霊。お前ならば俺はそちらの下に付き、手始めに渋谷に居る人間を一人を除いて皆殺しとしてやろう。呪術師、お前ならば大人しく今回は引き下がる」

「……一言は無いな」

「虚言は無しだよ」

圧倒的な強者を前に、呪霊も呪術師も最早関係が無い。

後に渋谷事変と呼ばれるこの夜の中でも、屈指の地獄が始まろうとしていた。

そこに広がるのは、文字通りの地獄だった。

「く、そ……い！」

吹き飛ばされめり込んでいた壁から瓦礫を蹴り飛ばしながら抜け出た雨里は、すぐさま拳を握って向かうのは今まさにズタズタに切り刻まれて殴り飛ばされる漏瑚と、それから嘲る宿儺の下。

最早フロアなど関係ない。地下からビルをぶち抜く勢いで三者は、というよりも雨里と漏瑚は宿儺へと一撃入れるべく挑み続けていた。

少年院の時とは、最早比べ物にならない。ほんの一瞬でも術式順転を解いてしまえば、その時点で雨里は五体を切り刻まれて骸をその場に晒す事になるだろう。

それほどまでに、今の宿儺は強かった。それこそ、これで全盛期ではないのだという事が信じられないほどに。

「ほら、どうした？俺を止めるのだろうか？」

「黙れ！」

あの時よりも向上した体術に加えて、踏み込みと同時に宿儺の足を貫かんと多数の氷に円錐を創り出すが、これらは余裕をもって躲される。加えて飛び上がりながら放たれた跳び回し蹴りが襲い掛かってきて、ガードしてもその上から蹴り飛ばされてしまう。

この蹴りにしたって、ガードした腕がへし折られたのだ。氷に置換していなければ、再起不能は確実だろう。

と、ここで漏瑚が戦線復帰。その掌を赤く光らせて宿儺へと差し向け、

「宿儺アアアアッ!!!」

放たれる熱線は宿儺と、その射線上に居た雨里もろとも消し飛ばさんと突き進んでくる。

「ッ……い！」

宿儺は躲せども、雨里はそんな瞬間移動のような高速移動を可能にするフィジカルなど持ち合わせてはいない。

故に、出来る事をする。

彼は左手を下から上に斜めの軌道で振り抜いたのだ。呼応するよ  
うに分厚い氷の壁が出現しワンフロアを完全に分断してみせた。

そして、激突。

蒼い氷河の向こう側で赤が揺らめく。

熱線が氷河の六割を溶かしきったところで、両者相殺。だが、この  
結果に漏瑚は目を潜める。

(どういうことだ、あの小僧。先ほどと比べて明らかに出力が増して  
いる。力を温存していたのか?……いや、アレはもつと別物か)

今の雨里の呪力出力は、漏瑚に迫るレベルにまで上昇していた。そ  
れでも、宿儺にはまだまだ届かないのだが、彼にはまだ伸び代がある。  
とはいえ、そこを突っ込めるほど現状余裕は彼らにはない。

宿儺は気紛れだ。それこそ、次の瞬間には気が変わって雨里と漏瑚  
を惨殺して、この渋谷中を破壊しつくす可能性もあり、一分でも一秒  
でも気を引くには攻撃し続ける他ないのだから。

雨里と漏瑚が同時に駆け出し、拳を振り被って宿儺を挟み込む形。  
打ち合わせなどは無い。ただ、両者互いに一撃を入れる事だけに一  
意専心し続けていた。

だがしかし、乾坤一擲の勢いで挑みかかったとしてもそこに横たわ  
る純粋な実力差というものはそう簡単にひっくり返ることは無い。

「ぶっ!」

「ぐっ……!」

拳が空を切り、それぞれの顔面が同時に鷲掴みにされる。

「ここは、狭いなあ?もつと広く使おうか」

言うなり、宿儺の口角がつり上がり緩く回転しながら飛び上がるで  
はないか。それもご丁寧にも、掴んだ二人を斜め上に持ち上げて回転  
しながら天井を突き破るために壁とするおまけ付き。

地下から地上七階建てのビルすらも突き破って、夜空へと投げ出さ  
れる三人。

「そんなものか?呪霊、呪術師!!」

「がは……ッ!」

嗤う宿儺。普通ならば、この時点で勝敗は決しそうなものなのだ

が、しかし二人は諦めない。

「まだ……まだアツ！」

業火を放たんとする漏瑚。だが、その前にその両腕は切り刻まれ、組んだ両手がその頭頂部に叩きつけられる。

勢い良く落ちて行く漏瑚だが、雨里はその間に宙に舞っていた瓦礫を足場に宿儺へと接近。その右拳に冷気を一気に纏め振り被り、

「——蒼ノ……ガツ!？」

振り抜く前に体の前面が斜めに引き裂かれて、氷屑が舞った。

白目をむいて体勢を崩す雨里。その隙を逃すことなく、宿儺は彼の左足首を掴むとまるで棒切れでも振り回すようにぶん回し、そして勢いをつけて叩き落した漏瑚へと投げつける。

そのまま勢いを殺すことなく二人は、ビルの屋上へと叩きつけられていた。

粉塵が上がりそこに容赦のかけらもない宿儺の追撃が突き刺さる。

「ぶえっ!？」

「ぶぐっ!？」

うつ伏せの漏瑚の上に仰向けで重なっていた雨里の腹に、飛び込んできた宿儺の蹴りが突き刺さる。

ストンピングの要領でそのまま屋上を突き破り、一フロア、二フロア、三フロア……地上一階まで一気に直通の大穴が開けられた。

「月明かりが通っているな。おかげで、お前たちの醜態も、よく見える」

「げほっ……」

「あふが……!？」

大の字で倒れる雨里と、鉄筋コンクリートにぶつけられすぎて崩れた口元を押さえる漏瑚。そしてそんな彼らを見下ろす宿儺。

戦力差は、圧倒的。漏瑚は、黒幕に宿儺の指八本から九本程度の実力だと評され、今の雨里もそれに迫るものがあつたが、現状の宿儺は取り込んだ指の数が十五本前後。倍近い戦力差に加えて、相手は呪いの王だ。一撃入れるだけでも艱難辛苦を乗り越えてもまだ足りない、途方もない差がそこにはあつた。

「ほら、頑張れ頑張れ。俺が飽きるまで、何度でも付き合うぞ?」  
態々近付いてきた宿儺に、二人は動く。

瞬間、ビルが大きく火を噴き、その直後に一気に凍り付いていた。  
そして飛び出してくる三つの影。

「――極ノ番『隕』!!!」

これぞ漏瑚の領域展開とはまた別の切り札にして、最大の攻撃範囲にして、最上の攻撃の一つ。

極ノ番というのは、術式の所謂ところの奥義のようなもの。因みに、極ノ番以外に技を最大出力で発動したものを載という。

人一人消すには過分と言う他ない隕石の一撃を前に、焦ったのは宿儺ではなくこの渋谷にていまだに戦う者たちだった。

「うっそだろ……!?!」

「く、日下部!流石にヤベーって!」

特級と、それから知っている呪力が混じっているのだから無視できなかったために回避できなかった日下部とパンダの兩名も空を見上げていた。

ソレは、彼らと事をおっぱじめようとしていた呪詛師たちもだ。こちらは、余りの光景に飲まれていたともいえる。

そんな中でも、ソレは現れた。

「――蒼ノ大人<sup>おおひと</sup>」

燃え盛る隕石が空から降ってくるのならば、それは下より現れる。

アスファルトを割り砕いて這い出てきたのは人一人軽く包む事が出来そうな巨大な手。そこから、手首、前腕、肘、二の腕、肩、と続き、

「氷の、巨人……?」

降ってくる隕石と同程度の大きさを誇る、頭の前からつま先まで氷で形成された巨人が渋谷の街に顕現した。

その頭頂部に立ち空を見上げるのは、一人の術師。

「退けい!小童がッ!!」

「そんなもの落とされるのを、むぎむぎ見逃すはずが無いだろ!!それから、宿儺!お前もな!」



雨里は叫べば、巨人の足が動き宿儺を踏み潰さんと動く。

あつさりと避けられるが、彼の体は空中、もとい隕石と巨人の間辺りに浮かぶことになった。

そして、突き上げられる巨人の両手と堕ちてくる隕石。

激突、衝撃。

\*

怪物たちがぶつかり合う渋谷。そこを、二人の少女は駆けていた。

あの瞬間、彼女らは確かに、濃密な死を感じた。

それでもこうして生き残り、自分の足で駆けているのは偏に、敵であつた筈の少年が自分たちの命を救ったからに他ならない。

呪術高専関係者に救われたのは、これで二度目。無論、彼は彼女たちだから救つた訳ではなく、彼女たちを害そうとした同期の心を守るために動いていたことは分かっている。

問題は、その先だ。

彼女らは既に少くない人数をその手に掛けている。それは、非術師であつたり、補助監督であつたり。今回の一件でも間接的にとはいえ、これまた少くない人数の命を奪ってしまった。

もう、どうしたら良いのかが分からない。

呪術師として生きる事など出来ない。非術師に混じる事など吐き気がする。しかし呪詛師として生きるには彼女らの実力はまだまだ足りない。

今は、訳も分からず駆けるばかり。

そして、見た。

天から落ちてくる災厄の星と、大地より這い出た氷河の化身がぶつかり合う様を。

かなりの距離があつたにもかかわらず、周囲のビルは冷気と熱気の衝突によつて弾けた空気の衝撃で粉碎され、攻撃そのものの破壊力も

上乗せされた結果地獄の様相を呈していた。

不意に何か飛んできて、菜々子の腹部に当たった。

「ッ、何か飛んで……」

地面に転がった、何か。

ソレは円形の平べったい物体。手のひらに収まる程度の大きさで、機械人形のような顔が取り付けられている。

その口部が開いた。

『オマエ達、呪詛師の一派だな？ここで何してル』

響いてきたのは機械音声。その声の主は、正確に二人の事を認識していた。

「貴方は……」

『先に、こちらの質問だ……いや、その時間も惜しいな。さつさと、雨里京平の下に戻らないと』

「ッ、その雨里京平って氷の子？」

『呪詛師に語る事じゃない』

「……私らは、そいつに助けられたの。宿儺の前で、アイツだけは飲まれてなかった」

年もそう変わらない筈だが、それでも術師としての格の差とでも言え方がいいのか。戦場に立つ気概というものが違った。

救われた、という事実がその場からただただ逃げる事だけを許さない。

そんな彼女たちの内心を汲み取ったのか、ソレは再度音声を発する。

『オマエ達が居ても無駄死にするだけだゾ。それでも良いのなら、オレを雨里の下にまで連れて行け。』

「連れて行くだけ？」

『あの男の術式は五条悟の様に広範囲だ。監視できる範囲にまで近づければそれでいい。最初は背についていたが、戦闘が激しすぎたナ』

「……ん、分かった」

美々子が頷き、ソレを拾い上げた。そして、二人は再び駆け出す。向かう先に待つもの、ソレを彼女らが知るのはまだ少し先の事だっ

た。

どこかの神話のような光景が出来上がっていた頃と時を同じくして、伏黒は絶体絶命の窮地に陥っていた。

無理な領域展開により疲弊した体のままに、突然現れた呪力の欠片もない男に無理矢理外へと連れて行かれ、流れのままに始まった戦い。

相手は素手だったが、その貫手は容易く人体を貫通し。目晦ましで呼び出した脱兎の式神も飛び蹴りでぶち抜かれる始末。

その最後は、訳の分からないものであったが、男が己の首を己でへし折った事で終わりを告げた。

呪力がカラカラに消耗し、男からの受けそこなった打撃で痛む体に鞭打って、今も戦っているであろう仲間たちの下へと向かおうとしたところで、それは起きた。

呪詛師、重面春太からの不意打ち。背中を深々と切られ、元々疲弊しきった体には、余りにも痛すぎる攻撃だった。

元々、重面自身はそれほど強い呪詛師ではない。少なくとも、正面戦闘で敗れる呪術師はそれほど居ないだろう。

だが、彼の術式はジャイアントキリングが可能なタイプ。純粋な実力が劣れども厄介なタイプなのだ。だからこそ、七海にボコられてもこうして死ななかつた。

「よく動くねえ、その出血で」

「ッ……」

止めようのない出血を抱えて、伏黒はただ只管に歩を進めていた。重面は気付いていないが、そもそも深く考えられる質ではない為気付かないが、彼はただ理由もなく動き回っていた訳ではない。

伏黒は、正確に己の状態を理解していた。理解していたからこそ、今この渋谷で避けておくべき場所から限りなく距離を取ったのだ。

「十種影法術は、最初に二匹の玉犬が与えられる。そこから手持ちの式神を駆使して、十種の式神を調伏していく事で手札を増やす」

「……………」

「調伏の儀式は、複数人でもできるんだ。もつとも、この場合は無効。術師にとつても意味の無い儀式になる。だが――」

出血によつて覚束なくなつた足が絡まり転ぶが、それでも伏黒は完全に倒れる事だけは無い。

どうにか上半身を起こして、しゃがみ込んだまま重面へと向き直つた。

「意味の無い儀式に、使い道が無い訳じゃない」

それは、領域展開とはまた違う伏黒の切り札にして諸刃の剣。

「歴代の十種影法術の使い手でも、この式神を調伏出来た奴は居ない」

「待――」

重面が気付けども、もう遅い。

奔る呪力。紡がれる言の葉。

「――布瑠部由良由良」

影が広がり現れるのは異界の神将。

――八握剣 異戒神将 魔虚羅

影より現れるのは、異形の人型。目算で、その身長は三メートルほどだろうか。

隆々とした体格をしており、特筆すべきはその頭部、それから右腕。

目は無く、その代わりに二対四枚の翼が生え、後頭部からは蛇のように伸びている。そして背負うのは、船の舵輪のような見た目をした法陣。

右腕には、仕込み剣のような刃が手首より手の甲側を通つて指の方へと伸びていた。

伏黒の見立てであるのだが、この魔虚羅の存在こそが五条家と禪院家の確執の一つである江戸時代の天覧試合における両家当主の死亡理由であると彼は考えている。

因みに、その際の両家当主は、禪院家が十種影法術。五条家は六眼持ちの無下限呪術。つまりは、伏黒には五条に届きうるだけのポテンシャルを秘めている可能性があるのだ。

もつとも、

「おい、糞野郎」

既に彼は限界で、

「——先に逝く、精々頑張れ」

言い切るなり、彼の体は呼び出した魔虚羅によって殴り飛ばされ近くのショーウインドウに叩きつけられていたのだが。

これは調伏の儀式なのだ。術者本人すらも制御できない強力過ぎる式神は、その場にいる全てを標的として暴れまわる。

非力な重面にはどうしようもない。そもそも、特級呪霊であったとしても恐らく一方的に祓ってしまえる程度には魔虚羅のポテンシャルは高い。

その剛腕が、重面を捉え——

「——え？え、え？」

気付けば、血塗れで壁に凭れる伏黒の隣にいた。見上げれば、そこ居たのは呪いの王。

「む……」（仮死状態、か）

傷一つ無い宿儺は、片手の重面を下すと徐に伏黒へと手を伸ばした。

施すのは、反転術式。他者への行使は希少であるのだが、彼は呪いの王だ。呪力の扱いに関してはそんなじよそこらの呪術師の比ではない。

「死ぬな。お前には、まだやってもらわねばならない事があるのでな」  
言いながら、目の前の怪物を宿儺は見定める。

呪力の質から、目の前の存在が伏黒の式神であることは理解した。そして、この式神を横やりで倒さねば伏黒が殺される事も。

味見程度で手を出しても良いかもしれないが、しかしここで宿儺は別の道も考えていた。

そろそろここにも来るであろう、とある人物。

噂をすれば影が差す、とはよく言ったもの。不意に、交差点に影が差した。

「宿儺アアアアッ!!!」

常には出す事の無いであろう大声を上げて、その全身から冷気を発しながら雨里は宿儺へと飛び掛かる。

先の戦闘よりその体は更にボロボロとなり、羽織っていた制服の上着は喪失。その下に着ていたシャツも袖が破れボロボロ。

それでも、その目だけは異様なほどにギラついていた。

「ケヒツ、まだ諦めんか」

「当たり前だ……！」

拳を受け止め振り払い、二人は相對する。

漏瑚は既に敗れた。あの爆発の瞬間に、雨里は吹っ飛ばされてしまったために諮らずしもその場からの一時離脱を余儀なくされた為に、結果的にこうして未だに咬みつく事が出来ていた。

「小僧、面白い催しを思いついたぞ」

「あ？」

「貴様、アレの相手をしろ」

言つて宿儺が指で示したのは、魔虚羅。

すわ、相手方の策略かと警戒する雨里だったが、その異形より感じられる呪力が馴染みのあるものであったからか目を見開いた。

慌てて周りを見渡せば、ぐつたりとした伏黒の姿が確認できる。

「察した通り、アレは伏黒恵の式神だ。もつとも、欠片も制御できていないがな」

「……」

「奴を倒さねば、伏黒恵は死ぬだろうな調伏の儀式というものはそういうものだ」

「……ッ、見返りは」

「そんなものは無い……ああ、しかし。奴が強いのであれば、派手に暴れねばなるまいなあ？」

醜悪に嗤う宿儺。対して、雨里には最早選択肢は無くなった。

態々派手に暴れると宿儺は宣言したのだ。その結果に待つのは、この渋谷の焦土化であるだろうことは容易に想像がついたからだ。故に、雨里は結局のところ戦う以外に道は無し。

改めて、件の式神と相對する事になった雨里。そうして分かる、相手の強さ。

(明らかに、あの呪霊より強い……)

この一晩でありえない速度で成長を続けてきた雨里だが、またしても相対するのは格上。

だが、嘆いた所で始まらない。泣いても喚いても事態は好転せず、寧ろ悪化の一途を辿る事になるのは明白。

だから、戦<sup>抗</sup>う。後悔しない為に。

「ッスーーーーー……はあ……」

ありつたけを注ぎ込む。

研ぎ澄まされた呪力は、周囲への影響を与え始め。彼の足元は凍結し始める。

死地はまだまだ続く。

彼の息の根を止める、その瞬間まで。





通用している。そう判断し、雨里は追撃の為に前へと駆けだした。だが、

「ガゴン、と鈍い音を立てて魔虚羅の背後に浮かぶ法陣が回り、同時にその巨体も立ち上がる。」

傷が癒えていた。それこそ、さつきまで膝をついて血塗れであったというのに、今では見る影もないほどに完治している。

何が起きたのか。その思考をする前に、雨里は直感的に上半身を倒していた。

某映画のような体勢となる雨里だが、間髪入れずに先程まで彼の頭があった位置を何かが凄まじいスピードで通り抜け、そして背後にあったビルに斜めの巨大な亀裂を刻んだ。

目だけで確認すれば、魔虚羅が右腕を振り切った姿があった。

呪力を乗せた、斬撃。そこに魔虚羅自身の膂力が上乘せされる事によってその破壊力は鉄筋コンクリートの壁であろうとも豆腐の様に切ってしまう。

この斬撃を回避できたのは、目の良さと只管の運。そして、死線に次ぐ死線を短時間で越え続けた事による一時的な勘の冴え。

しかし、雨里は止まらない。

滑る勢いをそのまま利用して魔虚羅の懐へと潜り込む。

放つのは、左のアップパーカット。体格上、顎は狙えない為、狙うのは腹部だ。

果たして、

「はっ。」

雨里の思考は、空白に染められる。

拳を伝って彼に届けられた、まるで鋼の塊でも殴りつけたかのような硬い手応え。いや、肉としての質感はあるのだ。だが、その先にある感触が鋼板であるだけで。

一瞬の隙だった。しかし、致命的な隙だった。

振るわれる大きな左腕。まるで埃でも払うかのように、しかし握られた左の裏拳が止まった雨里へと叩き込まれる。

「ガッ——!?!」

声も出ないとは正にこの事。彼の体は、宛ら玩具の様に回転しながら近くのビル。その中程の高さに突っ込んでいく。

本来ならばビルの数棟をぶち抜く破壊力を有しているのだが、今回は左腕だったためにこの程度。それでも、常人どころか並大抵の術師ならばこの時点で壁にぶつけたトマトのような染みへと変えられていただろう。

「——蒼ノ千手ッ!!!」

ビルを突き破り現れるのは無数の氷河によって作り上げられた手の大群。

一つ一つが蒼ノ手と同等の大きさであり、その速度も同じく。

大量の手が出現した事により倒壊するビル。そこより一筋の赤い光が飛び出した。

(もう、隠し玉なんて考えてる場合じゃない……!それに、そろそろの筈)

術式反転によって肉体を炎へと変化させた雨里は、今この瞬間に全てを賭ける。

(あの式神は、圧倒的に強い。けれど、それだけじゃない。さつき蒼ノ手で潰した傷が一瞬で再生した。そして、今も手は簡単に切り払われている。おまけに傷一つ付かない。気にするべきはあの背中!)

雨里の強みの一つ。つまり、理屈ではなくその本質をそういうものだろうと受け入れる柔軟性。呪術的足し引きだとかそんな事一切無視して、受け入れるからこそ見えてくるものがあつた。

彼が理解したのは、背中の法陣が動くと魔虚羅が復活するという事。それから、復活の際にはその前に受けたダメージは回復し、加えて耐性を得る事。

だから、雨里の打撃は通用しなかった。その前に、打撃の最上位のような押し潰しを敢行して見事に膝をつかせたのだから。

そういうものだから。雨里は、自身の中でそう結論付けて、そしてその考えに則って動く。

目指すのは、短期決戦。自分の持ちうる最大火力をもって完全に破

壊す事。

何より、そろそろである筈だから。

燃え盛る彗星となつて、雨里は空を駆ける。

術式反転『焰人』。その機動力は、順転の際に扱う氷のスロープとは比べ物にならない。

先行させた蒼ノ千手を目晦ましに、接近。魔虚羅の目の前へと滑り込む。

当然ながら、それを見逃す魔虚羅ではないのだが、雨里の方が僅かに速い。

「壊焰かいえん」

下から上に左腕が振るわれ、紅蓮の業火が魔虚羅の巨体を一飲み込み込む。

魔虚羅だけではない。その体を中心にして、スクランブル交差点の七割が飲み込まれるほどの広範囲大火力である。

だが、この程度で終わるのなら何の苦勞も無い。故に、彼は既に次の手を講じていた。

発想の大本は、赤血操術。血液を圧縮する百剣を参考にした。

もつとも、その危険性と破壊力は血液を圧縮するのとは比べ物にならないのだが。

胸の前で炎を灯し、ソレを両手で包み込むようにして圧縮していく。

最初は揺らめいていた炎だが、全方向から圧縮の圧力を受ける事によつてその形は球状に纏まり、尚且つオレンジから光り輝く白のような色合いへと変化していった。

同時に炎が弱まり、黒焦げとなつた魔虚羅の姿がうつすらと見えなくなった。

ここで、雨里の推測のもう一つが当たる。

即ち、魔虚羅は再生の際に動か無くなるという事。そりゃあ、再生が必要になるほどのダメージなのだから動けなくとも不思議ではないのだが、とにかく魔虚羅は背の法陣が動くまでは動かない。

この隙を逃さない手はない。雨里は、圧縮した炎を解放する。

「——焰閃ツ！」

圧縮した炎に指向性を持たせる。すると、熱線の様に変化するのだ。今回の場合、圧縮した炎を左手の指先へと移動させて手刀を振ると同時に解放。その一刀は、万物を焼き切るのではと思えるほどの破壊力を一瞬だが発揮した。

両手足が切りつけられその傷跡が焼き付く魔虚羅。四つ足をつく形でその場に膝をついた。

瞬間、雨里は前に出る。

「術式順転『人氷』——万結」

蒼い氷河へと変貌する体。その両手で触れた瞬間に、魔虚羅の体は法陣ごと凍り付いていた。

時間との勝負。そして、ここまで手札を切った雨里にもう次のチャンスは訪れない。逃げれば、立ち上がる事は愚か、この世界からサヨナラバイバイとなる事だろう。

故に、禁に触れる。

「術式順転『人氷』……術式反転『焰人』……ぐっ……！！」

領域展開とも、極ノ番とも違う全く別の術式の形。

そして、自身の師である五条に止められていた禁忌でもあり、ぶっつけ本番。上手くいく保証は愚か、彼自身の安全すらも確約されていない博打。

それでも雨里には、これに賭けるしかなかった。もう、手が無いのだ。

冷気を放つ右手と、陽炎を纏った左手。

それらを胸の前で組み合わせ、そして指を相手に見せつけるようにして突き出した。

「——虚式『氷焰』」

一羽の燕が宙を舞う。

五条の扱う虚式『 $\boxtimes$ 』が架空の質量を相手に押し出してぶつけるものならば、雨里の虚式は零エネルギーとも言うべき代物を相手にぶつける。

マイナスの終わりであり、プラスの始まりである、ゼロ。雨里のそ

それは、直撃した対象に対して最初から何も存在していなかったかのよう  
うに、消し飛ばす。

五条のような森を割るような広範囲にわたる破壊力は今の所、無  
い。しかし、事この状況ではそんな事は関係が無かった。

至近距離、もといゼロ距離。そして相手は、回復が間に合っており  
ず凍結によって動けない。

術である半透明の燕が一度羽搏き、その嘴が吸い込まれるように魔  
虚羅の凍てついた顔面へと突き刺さった。

効果は劇的。打撃に対する耐性を得たために鋼の塊のような高度  
であった筈の魔虚羅の体が、まるで空気を入れ過ぎた風船のように大  
きく弾けたのだから。

それだけではない。その背にあった法陣の一部も、術式の余波に  
よって抉り飛ばされ黒い影となって溶けて行く。

そして、

「うおえ……げえ……！」

雨里は、吐いた。

限界だった。いや、そもそも限界を超えて動き過ぎていた。

陀良戦で、そもそも彼の分を超えかけて、そして漏瑚戦で既に限界  
だったはずなのだ。

それでも、彼が戦えたのは様々な要因が重なった末の偶然。

一つは、黒閃。これによって呪力の核心により近づいた事。

一つは、漏瑚戦。実の所、火礫蟲を受けた辺りで、一度彼の体は碎  
けてしまったのだ。つまり棺桶に体半分突っ込んだような状態に  
なっていた。

そこから核心に迫った呪力コントロールで無理矢理体を組み立て  
直して復活。宿儺復活の場に立ち会う事になる。

そして、この二番目の理由。少なくとももう一回、彼の体は大きく  
損傷していた場面があった。

漏瑚との最後の衝突による爆発。ここで再び、彼の体は大きく碎け  
た。

それでも、二度目だ。一度目よりも更に速く体を修復し、宿儺の下

へと向かい、そして魔虚羅との戦闘に陥る。

問題なのは、この死にかけるタイミングが一時間に満たない時間で二度も行われた事。

死という、この世で最も忌むべき存在の一つに短時間で触れた肉体は、飲み込まれない為に出力を増した。

死に際の集中力、火事場の馬鹿力。それが一度だけなら時間経過で収まっただろう。だが、彼はその一時的な状態で、再び死にかけた。

肉体は、枷を取っ払った。同時に、精神的な面も無理矢理引き上げて、ハイにした。

結果生まれたのは、既に限界を迎えて今すぐにも倒れそうな筈なのに、ハイになった精神と、脳から出続けるエンドルフィンで無理くり動かされる疑似ゾンビ。

砕ける↓修復↓ハイになる↓砕ける↓……この流れをどうにかしなければ、早晚彼は壊れる事になっただろう。

そして今、彼は崩れた。もう、立ち上がれない。

無理な順転と反転の同時行使。これによって両腕が使い物にならなくなった。いや、右手は辛うじて動かせるか。だが、左腕は黒ずんで痙攣するばかりで持ち上げる事すらも出来ない。

無理矢理絞り出していた呪力も、もうほとんど残っていない。

元々天与呪縛によって常人よりも多かった呪力だが、この夜に大きくその量を伸ばしていた。伸ばしていたが特級(相当)相手に四連戦。寧ろ、こうして意識と原形を保っているだけ幸運だろう。

「限界、だな」

「はあ……はあ……ま、ただ……」

「その体で、何ができる。それとも、今のお前を見て、俺が手心を加えるとも思おうのか？」

「……はっ……そんな事、思う訳、ないだろ……」

未だに立ち上がれない状態でありながら、雨里は笑う。

そうじゃないのだ。彼が期待したのはそう<sup>手</sup>言う事<sup>減</sup>などではない。

「オレも、限界だ……けど、宿讎。それは、お前もだろ？」

「ほう……オマエ、最初からそのつもりだったか」

「いや……はあ………一撃を入れる事は諦めてない……でも、あらゆる可能性を模索するのは大切な事じゃないか」

両面宿儺には、未だに完全な肉体の主導権が無い。今も、大量の指を一度に取り込んだために入れ替わっているだけでそろそろ虎杖に主導権が戻る。

何より、今回は心臓を修復させるなどの条件も無い。雨里はただ、虎杖へと戻るのを待つだけでよかったのだ。

もつとも、現実はもつと厳しい。宿儺の気が引けなければ、今頃術師のみならず避難した人々にまでその被害が襲い掛かっていただろうから。

ただ、

「この程度の幕引きでは、詰まらんなあ？」

宿儺  
悪意は未だ満足していなかった。そして、雨里もまた、だろいな、と思っていた。

時間切れで終わればそれが一番良かったのだが、宿儺がソレを許さずもない。この僅かな時間であろうとも、彼が一度領域展開でもしてしまえば、それだけで百単位の間人が死滅しかねないのだから。

故に雨里も、最早手段を択ばない。

うずくまっただまま立ち上がれない彼の体に氷が這っていく。

氷による外骨格。それは、身を守るためではなく肉体の補助の為のもの。裏を返せば、そこまでしなければ立ち上がれないという事。

使えるのは、右手一本。

「冥土の土産だ。お前に褒美をくれてやろう」

言うなり、宿儺は嗤った。

「■■……開」  
フーガ

「ッ………炎？」

「何だ、お前たちの側でも伝わっておらんのか？……まあ、良い。生き残れるかはお前次第だ。精々、抗え」

それ以上の会話をする気はないのか、宿儺は左手で呼び出した炎を構え、まるで右手で弓を引くように引き絞った。

対して、雨里は唯一動く右手に残った呪力の全てを込める。



この戦いの、いや人生最後であるという覚悟をもって臨む。

「——蒼ノ……波濤はとうツ……！」

下から上へと振り上げられる右手。

起きたのは、巨大な氷河の津波だった。

周囲の地形もろとも、対象を轢殺する大技。が、もう雨里には相手がどうなっているのか確認する事は出来ない。

ブラックアウト。膝が崩れて座り込み、項垂れる。

そこに迫るのは、氷河の津波とぶつかり大きくはじけさせた炎の矢。

そして——

焦土。少なくとも、日本有数の繁華街の様相は、完全に変わり果てていた。

「……くひつ……くははは……」

倒壊し、粉碎されたビル。めくれ上がったアスファルト。

ソコは最早街としての機能の一切を失った場所。

荒廃しきったその場所で、悪鬼は一人啜う。

「暇潰し程度にはなった、か。噛み締めるがいい、小僧」

それだけを言うと、宿儺の体より浮かび上がっていた紋様が薄れて消えていく。

代わって表に出てくるのは、虎杖だ。

眠っていた、もとい気絶よりの目覚め。敵方である呪胎九相図の受肉体、脹相に敗れてから今の今まで意識が無かったのだから、頭が追いつかない。

だが、意識回復の直後に己の体を使って宿儺がやって来たことが鮮明に再生されていた。同時に、目の前の惨状に対する理解も追いついてくる。

宿儺の顕現。呪詛師であった少女二人を殺しかけるが、間一髪で氷の壁がソレを阻む。

そこから始まった、同期と呪霊の二人がかりを相手に完封。両者の大技を完璧に見切り、呪霊はそのまま祓われた。

そして、宿儺が執心する伏黒の呼び出した式神と、これまた同期の戦い。それが終わる直後に、呪詛師の一人を殺害、伏黒は仮設医療テナントへ。

最後は、

「雨里……」

既に立つ事すらも儘ならなかった同期渾身の一撃を前にほとんど拮抗させる事なく打ち砕いた宿儺自分の姿。

結果として、今立っている場所を中心とした扇状に巨大な破壊痕が広がり、ビルの残骸と捲れたアスファルトなどが残れども、ほとんど

は荒廃した更地のようになってしまっていた。

「あ、ああ……」

膝が抜けたと錯覚するほど、虎杖はストーンとその場に崩れていた。現状、五条悟の居ない今、誰かがこの貧乏くじを引かなければならなかった。仮に無視すれば、この渋谷の人的被害は計り知れないものになっていた筈だからだ。

それは少なくとも、伏黒、釘崎、雨里の三名ならば誰でもありえた事で、今回偶々その中の一人が戦っただけ。

だがしかし、事はそう簡単に割り切れるものではない。

「……行かないと」

地面を掻き毟り、呪詛を垂れてもどうしようもない。

真つ暗ともいえるほどに黒く濁った目をした虎杖は、幽鬼の様に立ち上がると最初の目的地であつた渋谷駅の地下へと足を向ける。

同期を手に掛けた。その事実が体全体を重くするが、しかし虎杖には立ち止まる事は許されない。少なくとも、彼自身が自分自身に対して許さない。

駆ける、駆ける、駆ける。罪の意識と、己への自罰的意識を抱えて、それら全てから少しでも目を逸らすように走り抜ける。

地下へと足を踏み入れた虎杖を出迎えるのは、数多の改造人間たち。

呪霊と見分けがつかないほどに改造を施され、最早助かる見込みのない者たち。その無機質なガラス玉のような目が駆け込んできた虎杖を捉えた。

「ッ、退けエッ!!」

それは、血を吐くような叫びでもあつた。

最初の遭遇の折に、家人は改造人間の死はショック死であると言つた。体を異形に改造された結果によるものだと。

だが、虎杖も馬鹿ではない。少なくとも、己の手で奪つた命に関して分からないほど鈍感ではなかった。

呪力で強化し、加えて元のフィジカルが天与呪縛持ちと同等か、それ以上の彼の拳は呪霊のレベルで表すと3級から準2級程度の改造

人間の肉体を容易に破壊していく。

肉を打つ感触。皮膚を貫く感触。骨を砕く感触。

生々しいそれらは、濃密なまでの血の二オイも相まって虎杖の精神をまるで鑢でもかけるかのように削っていった。

「はあ……………はあ……………」

人一倍どころではない体力の持ち主である筈の虎杖の肩が、呼吸で大きくなる。精神的負荷はそれだけ、肉体に大きな影響を与えるのだ。

血だまりの中に立つ虎杖。そんな彼の元に、一つの拍手が届いた。

「いやー、なかなかやるじゃん。結構な数ここに置いといたんだけど」

「真人……………」

因縁の相手。人の負の感情により発生した継ぎ接ぎの呪霊、真人。

「お友達を手に掛けた割には、元気そうじゃん」

「ツ、オマエ……………」

「まあ、元気じゃなきゃ俺としても殺し甲斐が無いしさ」

呪霊  
真人は嗤う。

人間同士が恐れ憎むような感情から生まれた彼は、殊更人間が苦しむ様というのが愉しいらしい。

特に、数ヶ月前の一件から因縁の生れた虎杖悠仁という存在が執着の対象となっており、彼を苦しめて殺す事を目的として行動している節があった。

「それにしても、アイツも馬鹿だよな？勝てる訳も無いのに、無駄に命張るとか…………ぷふつ、思い出ただけでも嗤えてくる」

「……………」

虎杖の目が血走った。

宿讎がやった事とはいえ、だからといって割り切れる問題でもない。

何より、

「オマエが、兩里アイツを語るんじゃねえよツ!!真人!!」

友人を語られる筋合いはない。

駆け出した虎杖に対して、真人もまた迎え撃つ構えだ。

真人の術式、無為転変は触れた対象の魂を自由に変える事が出来る。相当強力であるし、特級呪霊としてのポテンシャルも相まって並大抵の術師は瞬殺。1級以上であろうとも相性次第もあれども完封できるだろう。

だがしかし、体の内に両面宿儺という別の魂を抱える虎杖には通じない。彼は、自身の魂を無意識的にも把握しており魂の形を保ててしまふから。

一応、その他の攻撃が無意味な訳ではない。訳ではないが、変形は広げ過ぎると的を広げるだけとなり、同時に強度も落ちてしまう。

だからこそその改造人間。真人の手が動き、指で弾ける程度にまで圧縮変形させられたソレが虎杖へと向けて弾かれた。

地下鉄の床につく前に変形。`つ`に似た形に変形させ、長い方の出っ張りは突っ込んでくる虎杖の顔を刺し貫かんと伸びた。

勢いはある。だが、所詮は伸びるだけだ。身体能力と動体視力に優れた虎杖にとってはその程度は躲す事に難儀はしない。滑り込む様にして突起を躲し、同時に突起部分より下へと伸びてきた無数の追撃を躲す。

しかし、この間に真人は移動済み。変形させた改造人間を足場にして、滑り抜けた虎杖とは反対側へと降り立っていた。

その手には、二つの改造人間が。

「——多重魂『撥体』」

二つの魂を無理矢理合わせ、その時に発生する拒絶反応によって魂の質量を無理矢理跳ね上げて敵への攻撃へと転化するこの技。

速度と攻撃範囲に優れ、宛ら乗用車が突っ込んでくるようなものだ。

が、これを虎杖、正面から押し留める。若干押し込まれたものの、呪力で強化されているとはいえその身体能力は流石と言えるだろう。

だが、

「——ばあ」

「ッ、ぶっ!?!」

その止めた改造人間の口より現れた真人によってその顔面が殴り

抜かれる。ご丁寧にも、振るった拳には剣のような突起が作られ、虎杖の顔には大きな切り傷が刻まれていた。

「もうちよつと踏ん張りがきけば、顔面貫けたかな？」

「ッ……」

「あ、これ？んーと……ほら、磁石つてあるじゃん？同じ極同士だと反発しあう、アレ。魂も似たもんで無理矢理合わせると弾ける訳。んで、これはその応用。ま、使えるものは使っていないとさ」

「……どうして、オマエは笑ってそんな事が出来るんだ」

「あん？」

「何度も、何人も……！人の命、弄びやがって……!!」

「……ふはっ」

憤る虎杖に、しかし真人は嗤う。

「それじゃあ、指折り数えて、苦悶の表情でも浮かべて殺せば満足？なら、今度からはそうしようかな。それにしても——」

ニタリ、そんな音が鳴るような醜悪な笑み。

「——オマエつて本当にペラッペラだな、虎杖悠仁。本当に、ウスッペラだ」

「あ？」

「オマエは俺だよ」

呪霊は嗤う、嘲う。

そもそも、根本的な思考回路が違うのだ。人間と呪霊が、同じ尺度で会話を交わそうとすれどもそこには決定的な差異がある。

何より、虎杖悠仁は弱っていた。それが魂を見る真人には手に取るようにわかる。

その毒牙は、この渋谷で未だに戦う者へと向けられていた。

真人と虎杖がぶつかり合うのと時を同じくして、釘崎もまた戦闘状態にあった。

相手は、真人。負傷した新田を救急隊員に受け渡した後に、遭遇したのだが如何せん相性が悪い。いや、そもそも真人と相性のいい術師など普通は居ないのだが。

釘崎の攻撃は、基本的に五寸釘と金槌による殴打。釘自体も弾いてある程度の距離に対処可能だが、残弾管理に問題があり、弾切れすれば後は殴るしかない。

決して体術が得意とは言えない彼女。対して相手は、自由自在にその姿を変える事が可能でただ殴り合うだけでも異常にトリッキー。「チツ……」(虎杖や真希さん程じゃなくても、もう少し鍛えとくべきかしら)

釘崎自身も己の接近戦での弱みは理解している。今も放った釘は刺されども、効果はほぼゼロ。

呪力で肉体を強化すれば、常人には不可能な挙動も可能であるとはいえ、それは相手も同じ事。寧ろ、呪霊との押し合いになれば大抵の場合術師が負ける事は珍しくない。

頭を回す釘崎の一方で、真人は己の計画の為に彼女と相対したのだ。

別段、釘崎でなくともよかった。虎杖の精神<sup>魂のHP</sup>をへし折れるだけの痛みを与えられるのなら誰でも良かった。

(現状、虎杖の魂のHPは半分以下。あの氷の術師を宿儺が吹っ飛ばしたのが相当効いてる。そして、この女をダメ押しに使う)

肉体の欠損は、宿儺が最悪治してしまう。だが、へし折れた精神はそう簡単にはいかない。

折れた者は戦えない。それは古今東西の真理でもあった。そして、場は動く。

真人の足元には幾つもの釘が転がっていた。これは、釘崎が何度となく放って転がった釘たちである。

彼女の術式である芻霊呪法は、金槌、釘や藁人形などを用いて対象の相手に呪力を流し込むという比較的シンプルなものだ。

ただ、シンプル故にその幅が広いともいえる。

釘崎が主に使うのは、『簪』と呼ばれる一定の動作をトリガーに対象に打ち込んだ釘を媒体にして呪力を流し込み破壊するというもの。これは、術者自身のタイミングで発動を任意に指定する事が出来る。もつとも、今この状況では真人の体に穴を開ける事は出来ても、その魂を傷つける事は出来ない。

何度目かの衝突、しかし傷を負って血を流すのは一方的に釘崎の方ばかり。

それは、真人も分かっている。分かっているからこそ、出来るだけ無惨に殺そうとする。

そこが、付け目だった。

(上)

自身目掛けて飛んでくる釘を躲しながら、真人は上を見る。

通気ダクトの上に飛び乗った釘崎は、そこで更に一つの釘を落としていた。

「簪」

スナツプと同時に呪力が溢れ、真人の足元が揺れた。同時に、釘崎はダクトより飛び降りてくる。

真人は訝しむ。この場の彼は、術式が使えない。使えないが、肉体の変形は可能なのだ。それこそ、ヤマアラシやハリネズミのように全身を針達磨のようにして自分目掛けて落ちてくる釘崎の全身を刺し貫く事だつて可能なのだから。

だが、

「もういつちよ、簪」

落ちてきながら再度発動される術式。その釘より伸びた呪力が真人の足を貫いてその場に縫いとどめてみせた。

しかし、ここまで来ても真人には釘崎の狙いが分からない。

彼女の手札では、真人を傷つけるには至らないからだ。

だがそれも、彼女が全ての手札を見せていれば、の話だったのだが。



「アンタの術式聞いた時から、コレは効くんじやないか、つてさ」

真人の眉間に据えられた五寸釘。そして構えられる金槌。

ここで漸く、相手の狙いを悟った真人。だが、如何に肉体を変形させる事が可能とはいえ、簪によって縫い留められた状態からラグ無しで逃れられる訳ではない。

そんな行動よりも、確実に釘崎の方が速いのみだから。

—— 共鳴りッ!!

振るわれた金槌によつて、釘が深々突き刺さり、同時に釘崎の呪力が大きくはじける。

この共鳴り。媒体とする部位が希少であればあるほど、その破壊力を増す。血液等はそうでもないが、片腕などになれば、例え特級相当の相手でも致命傷になりかねない破壊力を有する。

そして、今。この場に居る真人は、本体より切り分けた魂による分身体。

魂という唯一無二の希少性。そして、その希少な部位を正確に穿ち、呪力を炸裂させてその威力をフィードバックさせる共鳴りの効果。

「ぶっ……!?!」

真人は、本体分身揃つて盛大な吐血。

釘崎の狙いとしては、共鳴りによつて相手の魂を撃ち抜くつもりであつた。

だが、この場に居る真人は魂を切り分けた分身。彼女の狙いは、ある意味で成立し、しかし意図しない副産物も齎していた。

「妙だな。私の呪力が少し離れた場所で弾けるのを感じた……成程なあ? さつきから妙に一発で決めに来ないと思つたら、オマエ分身かなんかで術式使えねえんだろ?」

「……正解」

五寸釘を引き抜きながら、真人は嗤う。

状況は悪い。相手に分身であることを看破され、尚且つ術式が使えないことまで見破られた現状、相手は恐れずに突っ込んでくるだろう。

この状況で、真人は嗤った。

「上手くいかないもんだね。もつと改良していかない」と

「あん？次なんかねえよ。アンタは今ここで、私が祓う」

「でも、俺はこれから先アンタの攻撃は食らう気無いしねえ……あの、水の術師が居たら別かもしれないけど」

「あ？」

「あ、無理かあ。だってアイツ、死んじやったみたいだし」

思わぬ情報に、釘崎は目を剥く。脳が情報の処理に手間取り、思考は空白に染まった。

「何、言ってるの……」

「宿儺がやつちやっただみたいでさあ。俺も殺りたかったのに、残念ってやつ」

今度こそ、釘崎は完全に止まる。同時に、何故そんな状況になったのか彼女の頭は答えを弾き出していた。

何らかの理由で宿儺が暴走。居合わせた雨里が交戦。そんな流れだろう、と。

そして、彼は負けた。あの、呪いの王相手の敗北だ。結果など予想するまでも無く一つしかない。

ぐらりと足場が崩れるような感覚が、釘崎を襲う。

同期の死。虎杖の時とは訳が違う。

いや、彼が死んだと聞かされた時は、泣くのを我慢しなければならぬ程度には傷ついたが、それでも彼は戻ってきた。

だが、今回は違う。

雨里京平に死から戻ってくるような素養は無い。腹の中に呪いの王など飼っていないし、そもそも彼は純粋な人間なのだから。

この隙を、真人が逃す道理はない。

本体より合流の旨を伝えられていたが、その前に軽く甚振ろうかとその体の形を変える。

カマキリの鎌のような形状へと左腕を変え、勢いよく釘崎目掛けて振るう。

狙うは、首。刎ねれば上々、そうでなくとも血管の集中する首を切

りつければ失血死も狙う事が可能なのだから。

だがしかし、釘崎とて伊達に修羅場を潜ってはいない。

迫る攻撃に対して、咄嗟に金槌を防御へと回す。しかし、体勢は不十分。

「ッ……！」

「逸らされちゃったか……んじゃ、逃げまーす！」

追撃ナシの突然の逃走に、釘崎も当然ながら追いかけてようとする。だが、

「——えっ?！」

唐突な腹部の圧迫感と、同時に後ろへと勢いよく引つ張られる感覚に釘崎は混乱する。

見れば、太い縄のようなものが彼女の胸にいつの間にか絡みついているではないか。そして、外そうと手を回せどもピッタリと体のラインに合わさっているせいで外せない。

そのまま引つ張られる事暫く。

「ッだあ!?……何なのよ」

唐突に縄が外れ、強かに腰を強打した釘崎はぶつけた箇所を擦りながら辺りを見渡す。

ソコは、更地のようなになったスクランブル交差点周辺より少し外れ、倒壊したビルなどが転がった地点だった。

そして、

「こいつで良いの?」

『ああ。こと、打ち込む事に長けた術師はこいつ以外に居ない』

機械音声と、それから遊んでそうな見た目の見知らぬ二人組がそこに居た。

咄嗟に警戒態勢をとった釘崎。そこに待ったをかけたのは、機械音声。

『待て、釘崎野薔薇。お前には、やってもらいたいことがある』

「何で私の名前……アンタ、どっかで聞いた声ね」

『京都校のメカ丸だ。交流戦でも会っただろう』

「メカ丸……あー! ペツパー君じゃない!」

『誰が……いや、この問答をしている時間も惜しい。本題に入らせてもらおう』

「待ちなさいよ!? こっちは何が何だか……それに、あの呪霊逃がしちゃったじゃない!」

『追った所で無駄だ。それよりも、急げ。手遅れになる』

「だから—— ツ、これって」

更に言い募ろうとした釘崎だが、その光景に言葉を失うしかない。漂ってくる冷気が頬を撫でる。

運命の分岐点が、そこには広がっていた。

虎杖と真人。その戦闘は、この渋谷においても一、二を争う激しさと、それから尋常ではない成長速度を持ったものとなった。

途中、血に濡れて折れた釘と同期の件という要因、加えて脹相戦での敗北などが重なって折れかけた虎杖だったが、参戦した東堂によってどうにか戦線復帰。

その最後は、全力の黒閃。進化した真人であろうとも、それは致命傷。

これにて落着——とはいかない。

現れる、今回の黒幕。

「助けてあげようか、真人」

「夏油！」

瀕死の真人の逃げ道を塞ぐように現れた額に縫い目のある袈裟姿の一人の男。

夏油傑の皮を被った、誰か。

その出現に、虎杖は駆け出す。

「返せ……五条先生を返せッ!!」

既に肉体のダメージは、限界を超過しているのだが目の前にある目標が、虎杖の痛みを無視させた。

だが、どれだけ死ぬ気で走ろうとも彼の拳が届くことは無い。

精神論云々の話ではなく、単純な実力差。如何に常人離れた身体能力を有し、その上黒閃を多数経験しようとも、相手は特級術師の肉体を有し、その体に刻まれた術式も行使してくるのだから。

「君、歴史は好きかい？ 鯨が地震と結び付けられて考えられるようになったのは、江戸の中期。地中の大鯨が身動きをする事で地震が起きると考えられていたんだ」

行使される術式は、呪霊操術。

何が起きたのか分からないが、虎杖は駆ける己の足元の地面が消えて大穴が開いたように感じた。

反射的に踏み込もうとした足を振り上げれば、駆けていた勢いも

あつて後ろへとひっくり返る事になる。その上、彼の足元に大穴などは一切ない。

「なっ……」（何が……!?）

「落ちた、と思っただろう？ 傍から見れば、君は勝手にひっくり返っただけなんだけどね」

歩み寄りながら、偽夏油は言葉を続ける。

「呪霊操術の強みは、その手数之多さにある。準一級以上の呪霊を複数体使役し、術式が解明・攻略されようとも矢継ぎ早に次の一手を送り込み続ける。もちろん、そんな間を与えずに物量で押し潰すのも一つの手だ」

語りながら放たれる黒い液体のような大群。それは、虎杖に着弾すると同時に巨大なムカデの群れへとその姿を変える。

虎杖には、毒が効かない。宿讎の指という劇物の塊のような代物を食べて無事なのだから、並大抵の毒は機能しない。

故に、多数のムカデに絡まれようともその足や牙による細かな傷ばかりで振り払える。

だが、

「ごん——ッ!?」

絡みついてくるムカデを振り払おうと踏ん張ろうとする虎杖。だが、その直後に先ほどの大穴が開いたような感覚が足を襲い、踏ん張れない。

間髪入れず、今度は上から黒いものが降ってきて、虎杖の体をムカデの群れが押し潰していた。

一方的。少なくとも、突っ込むしかない虎杖にはどうしようもない。

血塗れになって這いつくばり、それでもその目だけは諦めを知らない。

「返せ……!」

「我ながら流石と言うべきか……タフだね」

怪しげにほほ笑みながら、偽夏油は横合いから伸びてきた手を避ける。

突っ込んできたのは、真人だった。

触ればほぼ必殺の無為転変。だがそれは、触れなければ意味が無い。

空を切る両手。そして、真人を見下ろす偽夏油の目は、愉悦が浮かんでいた。

協力関係、ではなかった。互いが互いに利用し合う様なそんな関係でもなかった。

そもそも、偽夏油がその肉体を手に入れた時点で特級呪霊だろうと手駒でしかない。特に、破壊力に富んだ漏瑚や、計画の要であった真人は単なる素材でしかなく、花御や陀良に至っては相手の戦力を削ぐような壁代わりでしかなかった。

そして、

「——知ってたさ。だって俺は、人間お前らから生まれたんだから」

調伏の儀式は必要ない。疲弊しきった真人と、万全な状態の偽夏油が対峙すれば軍配が挙がるのは後者なのだから。

黒い手のひら大の球体へと変えられる真人。この時点で、偽夏油の計画は初期段階をほぼ終えたも同然。

球体を手には、偽夏油は虎杖へと再び向き直る。

「さて、続きといこうか。これからの、世界についての話だ」

何が愉しいのか、男の語り口はまるでどこかの舞台のよう。或いは、歌劇か。

「極ノ番、というものを知っているかな？ “領域”を除いた術式による奥義のようなものでね。呪霊操術の極ノ番は『うずまき』。使役した呪霊を高密度の呪力の塊へと纏めて相手へとぶつけるものなんだが……ふっ」

「……………何かおかしいんだよ」

「いや、すまない。急にらしい事を始めてしまったと思ってね」

偽夏油の言葉は続く。

『うずまき』は強力だ。だが、その代わりに呪霊操術の強みである手数の多さが失われてしまう。だから、最初はそそれなかつたんだがね。ただの低級呪霊の再利用だと思っていたから。しかし——」

呪霊珠を弄びながら、偽夏油は視線を動かす。

「違った。この極ノ番の真価は、準1級以上の呪霊を用いた時に起きるもの。術式の抽出にある」

飲み込む。そうしなければ取り込めないから。生前の肉体の持ち主が精神的に擦り減るほどのソレを、偽物は何の抵抗も無く？み下してみせた。

隙。少なくとも、そう見える。

「——馬鹿だな。君が気付く気配に、私が気付かないとも思っただのかい？」

偽夏油の見上げる上空。かなりの高さに、火が灯っていた。

京都よりやって来た西宮が箒に乗ってその場に浮かんでいたのだ。愛用の箒には、激しく火を揺らすランプが提げられていた。

攻撃性は無い。これは合図であり、目印。直後に、偽夏油目掛けて三本の矢が襲い掛かる。

通常の矢の軌道ではない、のだがそれは当たらない。だが、二の矢は既に迫っていた。

「やるね。私としても、術師が相手なら通常兵器は積極的に用いるべきだと思うよ」

螺旋を描きながら呼び出した呪霊を突き破ろうとする銃弾だが、偽夏油に届く前にその威力は完全に殺された。

弾丸は、真依。矢は、加茂。そして、

——シン・陰流

全てを乗せた剣士が居る。

覚悟は決めた。思いも載せた。それこそ、己の一振りに全てを懸けた。

だが、気持ちだけでは埋まらない差というものがこの世界には存在する。

相手は特級、一方で三輪は3級。等級だけが全てではないし、下の階級が上の階級を打倒する事も少なからずある、のだがこの場合はジャイアントキリングはあり得ない。

——『抜刀』ッ!!



鞘の中で加速された刃が抜き放たれ、しかし止められ砕かれた。これが、現実。そして実力差というもの。

「極ノ番『うずまき』」

三輪に向き直りながら術式を発動する偽夏油。

咄嗟に西宮と虎杖が動くが、距離の問題もあり間に合わない。

しかし、ここで新たに援軍が駆け付けた。

日下部、庵、パンダ。そして、脹相。

特に最後の彼によって明かされる偽夏油の中身。その情報の一部。

呪術界御三家である、加茂家の汚点。加茂憲倫。呪胎九相図を生み出した存在であり、脹相の含めた九相図たちに怨敵として恨まれる存在。

偽夏油へと挑みかかる脹相。だが、疲労と加えての相手の方が実力的に数段上。術式、肉弾戦、共に勝ち目は殆どない。

加えて、相手にはもう一人呪詛師が介入してきていた。

裏梅と呼ばれるおかつぱ頭の新手。初見でありながら、脹相の穿血を受け止めるだけの実力はある。

同時に、他の面々も偽夏油へ。

狙いは、彼の持つ獄門疆。五条を封印している呪物であり、これを取り戻せたならば少なくとも勝ちの目は見えてくる。

だが、

「——氷凝呪法『霜凧』」

絶対零度の寒波が迫る。触れるモノ全てを凍結させ——

「——焰幕」  
えんまく

その直前に業火の幕が、寒波を阻んでいた。

すわ、第三者の参戦か、と緊張が走るがそんな中で虎杖は気が付いた。いや、気付かない方がおかしい。

幕が途切れ、彼はその場へと降り立った。

「おや、君か。陀良に漏瑚、魔虚羅に宿儺と相手にして、よくもまあ生き残れたね」

「ふう……生憎と、オレだけ休んでる訳にはいかないんでね」

感心するような、しかし馬鹿にするような雰囲気も残す偽夏油に対

して、雨里は毅然とそう返す。

だが、彼は決して無事とは言えない。それは、向かい合う偽夏油達のみならず、雨里の背を見る形となった呪術師側にも一目瞭然だった。

そして、その姿に虎杖は泣きそうな表情を浮かべる。

「雨里、それ……」

「君のせいじゃないさ、虎杖君。今は、敵に集中して」

雨里は振り返らない。

確かに彼は、生きています。生きていますが、五体満足ではない。

シャツと制服のズボンという恰好。何れもボロボロであり、左腕は袖が肘の辺りから無くなり、その下の腕はケロイドの様にズタズタ。腕の機能は果たしているが、その見てくれは酷いと言う他ない。

問題は、右腕だった。

彼の、雨里京平の右腕は最早存在しない。肩口より先は袖事完全に消滅。出血は反転術式によって傷が塞がれた事により起きることは無いが、腕を生やし直す事は彼にはできなかつた。

それでも彼は、ここに来た。その為に、死の淵より戻ってきたのだから。

背後の動揺を感じながら、雨里は構える。同時に、彼の右の肩口に冷気が集まり形成するのは群青の義手。

雨里京平は止まらない。腕の一本など、彼にとって止まる理由にはなりえないのだから。

ここで、時計の針を少し戻そう。場面は、釘崎が真人に相對し、そして後ろに引かれて戦線を離脱したところ。

彼女を結果的に救ったのは、メカ丸とそれから美々子と菜々子の双子であった。

縄によって引かれた先。そこは、粉碎された路地の一角であり少し離れれば焦土となったスクランブル交差点周辺につくような場所。

そこに、雨里が居た。だが、その姿は酷いなんてものではない。

仰向け、大の字に倒れた彼の格好はズタボロになったシャツと制服のズボン。格好もそうだが、服の下は更に酷い。

左腕は酷い火傷によってボロボロ。腕としての形を保っているだけで、機能はほぼ死んでいるようなもの。左腕だけではない。顔や首元、シャツのボタンが外れた胸元などにも火傷が刻まれていた。

そして、右腕。これに至っては、肩口から千切れ止血は施されているが、宛がわれた布は今も赤く染まり続けている。

「ッ、雨里!?! どういう事よ、コレ!」

『見たままダ。両面宿儺含めた特級と戦って右腕一本失うだけで済んだのは、運がイイ』

「運が良いって、アンタねえ——」  
『だが、今のこいつは心停止を起こしている。数分経たずに死ぬ事になるゾ』

噛み付く釘崎を、メカ丸の補足が黙らせる。

絶句する彼女だが、寧ろ現在進行形で死に切れていない雨里がこの場合異常であるのだ。

『今回は、雨里の術式が役に立った。肉体そのものを氷へと変換する順転の結果、体は極低温で安定し術式が途切れている今も常人とは比べ物にならないほどに冷え切っている。だが、外気温に晒され続ければ、十一月直前の夜であろうとも氷は融ける。時間が無いんだ』

「……………どうするってのよ」

『これから、美々子と菜々子の呪力をオレを媒体にして電流に変換す

る。その変換した電気を釘崎、オマエが雨里の心臓へと打ち込め」  
「分かった」

釘崎、即決。

やり方も、双子が何者なのかも、あらゆる全てをすつ飛ばして彼女は了承の意を返したのだ。

何も考えていない訳ではない。二人への不信感もあれば、メカ丸の言葉をそっくりそのまま飲み込んでいる訳でもない。

ただ目の前で、同期は死の淵にある。その事実だけを認識し、どうすれば助けられるのか、彼女なりに頭の中で考えた結果の即決。

予想外のとんとん拍子、しかしメカ丸も美々子、菜々子も突っ込みはしない。彼らにも、雨里には生きて貰わなければならない理由があるからだ。

『タイミングはこちらで指示する。逃すなヨ？生憎と、オレもそろそろ消える。この一度しかチャンスは無いと思え』

「ぐちやぐちや言ってるんじゃないわよ。さっさと始めましょ。そっち二人も、ミスるんじゃないわよ」

「分かってるっての……いくよ、美々子」  
「ん」

倒れる雨里を囲むようにして、左腕側に美々子、右腕側に菜々子、頭側に釘崎。そして、美々子と菜々子がそれぞれの手で支えるようにメカ丸の端末を雨里の胸の中心部、その上で持つ形。

込められる、呪力。二種類の呪力は、双子の類似性をもって端末の中で緩やかに混ざり合い、高密度に圧縮されていく。

そして、

『——今ダツ!!』

「オラアツ!!」

メカ丸の声と同時に、釘崎が端末を拳槌でぶつ叩いた。

呪力を乗せられた一発を撃鉄として、一筋の電光が走り雨里の胸の中心を貫く。

大きく跳ねる満身創痍の体。

筋肉を動かすのは、電気信号。そして、心臓は筋肉の塊だ。

電光が消え、同時に大きな脈動が一つ。

「——カッ……！はあ………」

喉の奥に詰まっていたかのような空気の塊を吐き出して、弱弱しくも雨里の心臓は再び一定のリズムを刻み始めた。滞っていた血流が加速し始め、笛のような音を立てながら喉が空気を吸う。

『これで、良いはずだ。雨里は反転術式が使える。意識が戻れば、傷もある程度は治せるだろう』

「……で？何がどうして、こうなってる訳？あの継ぎ接ぎ呪霊は、雨里が死んだとか言ってたんだけど？」

『悪いが、俺は時間切れだ。詳しい事はそっちの二人に聞いてくれ』  
「アンタは？」

『言っただろう時間切れだ。俺は、三十一日以前の時点で既に死んでいる。これは、最悪の場合に備えていた保険に過ぎない』

「はあ!？」

『ではな、釘崎野薔薇。雨里にもよろしく伝えておいてくれ』

一方的に、それだけ言うと本当に端末は沈黙してしまった。

双子からひったくられる様に奪い取った釘崎が揺するが、うんともすんとも言わない。

メカ丸の込めていた呪力は、既に途切れた。そもそも、術者本人が死亡した上でここまで自由性を残した術式が稼働している事がそもそも奇跡であったのだから。

だが、奇跡は長くは続かない。彼の残していた保険は既に使い切られている。

動く気配の無い端末。釘崎は、じっとそれを眺めると、無言で腰のポーチへとそれを直した。

そして、二人へと目を向ける。

「……で？アンタらは？」

「……」

「まあ、何となくは分かるわよ。アンタらはこっち側の人間で、それで呪詛師かなんかなんでしょ。一般人な筈ないものね」

そう言いながらも、釘崎は警戒を見せない。

呪詛師と呪術師は敵対関係にある。が、だからと言って見敵必殺という訳ではない。場合によっては互いの利を考えて引き下がる事もある。

何より、釘崎の勘に二人が引つ掛からなかったのだ。

沈黙。その間を破ったのは、意外にも美々子であった。

「……その人に、助けてもらったの」

「ちよつと、美々子……」

「大好きな人を、殺して助けて貰えるように宿儺に頼ろうとした……でも——」

「——殺されそうになった、って訳ね？……何本、飲ませたのよ」  
「私たちが一本……その後に、火山頭の呪霊が来て、何本か飲ませたわ」

「……はあ」

二人の話を、釘崎は頭痛を覚える気分だ。

少年院の時、宿儺が復活時に宿していたのは三本の指。受肉の際の一本、その後五条が実験に渡した一本。そして、少年院の呪霊の体に埋まっていた一本。

この少年院の時ですらも、伏黒と雨里の二人が掛かりですら圧倒された。

それから、八十八橋での一本、今回の双子の一本、そして漏瑚からの十本。

十五本、つまり少年院の時より五倍は最低でも強いという事になる。もちろん、指の数イコール強さではないかもしれないが、最初から宿儺が本気で殺しに来たならば漏瑚も雨里も一切抗う事など出来ずに殺されていただろう。

(ホント、馬鹿じゃないのかしら……)

魔されるようにして顔を顰める雨里の額を、釘崎は軽く叩く。

逃げ出したとしても、仕方が無かったはずだ。宿儺など、学生が相手に出来るような存在ではないのだから。いや、1級術師でも持て余すかもしれない。

それでも戦い、そして右腕を失った。

そして彼は、目を覚ます。

「……………ツ、く、ぎさきさん……………う？ぐつ……………！」

「やっと起きたわね。早速で悪いんだけど、外にアンタを連れて行くわ」

「外……………伏黒君と、虎杖君は……………」

「伏黒は分からないわ。でも、虎杖はあの継ぎ接ぎの呪霊が居たからそっちじゃないかしら」

「そっか……………」

そこまで会話したところで、雨里は再び目を閉じる。

また気絶したのかと釘崎が再度起こそうと手を伸ばすが、その前に彼の体に呪力が走った。

時間にして、数秒。気付けば、体のいたるところについていた擦り傷などがほぼ治り、左腕の酷い火傷もケロイドのような状態へと変わり、右肩の出血も止まる。

そして、彼は起き上がった。

「ふう……………右腕は、ダメか」

「アンタそれ、反転術式？」

「そうだよ。家入先生みたいに誰かに施したりは出来ないけど、体の傷はある程度治せるかな。動く分には、もう支障ないよ」

言いながら立ち上がる彼は、血の少なさに少しふらつけども倒れることは無い。

「ちよつと、まだ戦うつもり？」

「少なくとも、まだ戦ってる人が居るからね。なら、やるべき事をやらないと」

この場合、反転術式の習得が悪い方向へと働いていた。すなわち、戦線離脱のタイミングが無いのだ。

少なくとも今回の場合は、彼が気絶している間に運んでしまう方が正しかった。出血は酷かったが止血は施していた為運べたはずなのだから。

だが、時間は巻き戻らない。彼は立ち上がり、そして戦う意思も折れてはいない。

「片腕で、どうするつもりよ」

「オレは、釘崎さんや伏黒君みたいに両手から必ずしも術式を発動するわけじゃないからね。それに、義手なら造った事があるから」

「そういう問題じゃないでしょ!?!」

「今は、問答してる場合じゃないんだよ、釘崎さん。五条先生をどうにか取り返す。そして、取り返せなかったとしたら一人でも多く、術師を助けて戦力を確保しなくちゃならない」

「だからって……!」

釘崎はもう、彼に戦つてほしくは無かった。

誰かがやらなければならぬ事は、分かる。分かるが、だからといって送り出す事を許容できるかと問われれば否だ。

今は、こうして生きている。だが、ついさっきまで雨里の心臓は完全に止まっていたのだ。それこそ、体が冷え切っていなければ直ぐにでも腐敗が始まってしまいそうなほどに。

今回はこうして生き残れた。しかし次はどうだろうか。その次は。一度考えだせば止まらない。

「そっちの二人も、ありがとう。お陰で助かったよ」

「……アンタ、死ぬ気?」

「さて、そんなつもりは——」

「敵には、夏油様の体を奪った奴も居る。アンタが勝てるような相手じゃないじゃん」

菜々子の指摘は、実際その通り。

相手は、未だに消耗は愚か手の内もほとんど見せていない。一方で、雨里は相当に疲弊しており、先程なけなしの呪力も反転術式にぶっ込んでしまった。

しかし、

「——勝てる、勝てないの話じゃないんだよ」

静かに、雨里はそう返す。

「このまま、五条先生を相手方に渡したままになると、まず間違いなく地獄が来る。虎杖君の秘匿死刑の無期限延長は確実に取り消し。それだけじゃない、あの人が居たからこそ大人しくしていた呪詛師や呪



霊も動き出す。五条先生が居たからこそ成立していたバランスが崩れるんだ、それは確定だろうね」

自他共に認める最強が居なくなる。力無き者は淘汰されるような弱肉強食の地獄が始まる事は、余程の馬鹿でもない限り気付かない方がおかしいというもの。

「きつと、色んな人が死ぬ。そんな未来が待ってるのに、止まってはいいられないかな」

「……それで、猿を助けるって言うの」

「猿？」

「非術師<sup>猿</sup>は、非術師<sup>猿</sup>よ。あんなもの、助けるって言うの？」

問う、菜々子の言葉の端々には怒気が滲み、傍らの美々子も鋭い目を雨里へと向けてくる。

彼女らにとって非術師にいい思い出などまるでない。憎悪していると云っても良い。

それは過去の経験と、育ての親から与えられた教育によるものなのだが、兎にも角にも彼女らにとっての非術師は地雷そのものであった。

もつとも、雨里としてはそんな事を言ったつもりはない。

「呪霊や呪詛師が活発になれば、駆り出されるのは呪術師だからね。オレは、知り合いを死地に向かわせたくないだけだよ」

あつさりと言つてのける雨里。彼は決して、博愛主義者の善人ではなかった。

呪霊との戦闘も、呪詛師との戦闘も凄惨だ。加えて、指示を出すばかりの上層部は術師を使い捨てる事を厭わない。自分達の保身の為ならば、階級違いの任務に送り込むことも平気でやる。

非術師が居なくなれば、次に割を食うのは呪術師となるだろう。いや、そもそもそんな括りは無くなってしまうか。

雨里は言葉では止まらない。であるのならば、物理的に止めるしかないが、それをしようにも彼の實力はこの場で止められるほど温くはない。

結局、釘崎は彼を止めきる事は出来なかった。

そして、場面は元の時間へ。

雨里の参戦は、しかしこの戦局を打破するには足りえないものであった。

何故なら、相手には呪霊操術がある。術師に数は勝つても一瞬で押し潰されるような物量が相手にはあった。その上、偽夏油並びに裏梅の実力は特級相当。質でも劣る。

「はっ……はっ……」

「随分と辛そうじゃないか。その体で、後どれだけ動けるのかな？」

偽夏油は、嘲う。

死に体の術師が一人やって来たところで、逆転はあり得ない。彼の計画は止められない。

それでも一息に殺そうとしないのは、水面で藻掻く蟻を嘲うような嗜虐心があるからだろうか。それとも、もっと別の理由があるのか。

不意に、ふらりと雨里の体が揺れた。それがこの場の火蓋を再点火、切る事へと繋がる。

迫るのは極寒の冷氣。対応するのは、紅蓮の業火。

「……チッ」

術式の相性ゆえに押される裏梅は舌打ちを一つ零し、目の前の光景に目を細める。

自然と、雨里が裏梅を抑える形となり、残りの面々は偽夏油へと向かう事になる。

虎杖、パンダ、日下部、加茂、西宮、脹相。武器を喪失した三輪と、術式的に後方担当である庵は別にしても、これだけの面々が居るのだ。特級相当の相手であろうとも対応できる……筈もない。

特級とは、特別であるから、1級術師とは比べ物にならない実力を有しているからこそ、特級と呼称されるのだ。

走る者たちには唐突な浮遊感が襲い、飛ぶ西宮には黒い液体によるムカデの群れ。

「呪霊操術の利点は、数の多さ。一、二体の2級以下じゃ足止めにもならないかもしれないが……そこに数の暴力を合わせるとどうなると

思う?」

偽夏油の言葉に、一同の血の気が引く。

2級どころか、準1級、1級相当の呪霊であろうとも祓える可能性が十分にある面子ではあるが、だからと言って2級以下の呪霊に揃いも揃って噛み付かれて無事で済むわけではない。

咄嗟に離れようとすれども、その瞬間には足元には浮遊感。何度も喰らえば対応できそうなものだが、如何せん相手は意識の間隙を縫うのがかなり上手い。

相手からの全体攻撃。対応できるとすれば同じく範囲攻撃が得意な雨里なのだが、こちらもまた激戦。

—— 氷凝呪法 直瀑

「—— 蒼ノ天蓋」

氷の散弾と、蒼い氷河の天蓋が真っ向からぶつかり合っていた。

炎での迎撃を雨里が止めたのは、視界を潰してしまうデメリットがあったから。具体的には、裏梅の攻撃を迎撃すれば氷が一気に蒸発して水蒸気となり、視界を真っ白にしてしまう。

だからこそ、氷同士による相殺劇が続き、辺りの空気は急激に冷やされていった。

「ッ、フツ……フツ……」

「……」

消耗の度合いで言えば圧倒的に雨里なのだが、しかし裏梅もまた余裕がある訳ではない。

押し切れない、というよりも相手が徐々にだが対応力を増している。加えて、呪力の出力がおかしい。

「死に体が……」

「その死に体一人、真面に殺せないのは貴方だ」

言葉もそこそこに、再びぶつかり合う氷の群れ。が、数分と持たずに両者の攻撃は唐突に崩れ、砕けていた。

「こ、れは……!」

「ハア……ハア……ッ……」

裏梅の膝を折ったのは、先の脹相からの一撃を受けてその体に、毒

を含んだ血液が混じってしまったから。雨里が崩れ落ちたのは、偏に限界突破のツケ。寧ろ、地獄の淵から蘇った直後に術式全開で稼働させている時点で頭がおかしい。

そこにやって来る、偽夏油。

「戻るよ、裏梅」

「ッ……………」

「君も、また会おうじゃないか、雨里京平」

「逃がすとしても……………」

去ろうとする偽夏油に向けて、雨里は両手を組んでその指を見せつけるように差し向ける。

「虚式か。だが、未完成のそれじゃあ、私には届かないよ」

ジャイアントキリングすらも可能な雨里の虚式ではあるが、しかし完成には程遠い。

破壊力は目を見張れども、その攻撃対象は一発に付き、一つ。呪霊操術を相手にするには、相性は最悪だった。

そして、呪霊は放たれた。同時に新たななる地獄もやって来る事になる。

\*

東京二十三区の壊滅。五条悟の呪術界からの永久追放。夜蛾正道の死刑。虎杖悠仁の執行猶予撤回。

最悪が、起きてしまった東京は、最早世界有数の主要都市としての機能を完全に失ってしまった。

「……………何がしたいんだろうね、上は」

「さあな……………ただ、五条先生が上の目の上のたん瘤だったのは確かだ」

荒れ果てた東京を行くのは、伏黒と雨里の二人組。

修羅場を超えたからか、今も道すがらに襲い掛かってくる呪霊を凍結させて粉碎し、鋭い爪や牙が切り裂き穿っていく。

「虎杖との合流は必須だ。今は乙骨先輩が傍にいる」

「とにかく、戦力を集めないかね。全体的に傷が深いのは厄介だけど」

「……俺からすれば、お前も十分重傷だけだな」

そう言っ伏黒が見るのは、雨里の右腕。

高専の制服に、コート、マフラーのいつものスタイルへと戻った雨里だが、その右袖は中身が無く風に揺れている。

だが、当人は気にした素振りも無い。

「こんな職業なんだ、遅かれ早かれ五体満足で居続けられるとは思ってなかったよ。それに、腕の一本や二本、術式で補えるからね」

「……そういう問題じゃねえだろ。腕だぞ？ 擦り傷や、切り傷じゃねえ。左腕にも大火傷刻んで……お前一人に戦わせちゃった」

「気にするな、っって言っても気にするよね。それが伏黒君だからさ。それでも、敢えて言うよ。気にしないで、伏黒君。これは、オレが自分で決めた事だから。あの選択に後悔は無いし、もしもあの場で戦ってなかったらもっと酷い事になってたかもしれないんだからさ」

雨里のその言葉も、強ち的外れではない。

完全復活していないとはいえ、宿儺はそれだけの事が出来た。それも、大した労力を有する事なく、だ。

誰かがやらなければいけない事だった。それが偶々、雨里だった。ただそれだけ。

重くなった空気。話題を変えるように、雨里が口を開く。

「それよりも、今後だよ。死滅回游。随分と質が悪い」

「……雨里、お前はこの件をどう見てる？」

「……………言い方は悪いけど、オレは蠱毒に思えて仕方が無いよ。要は、選別だ。極限状態での人間の行動を唆してる」

あの瞬間を、雨里は後悔している。後悔しない為に駆けずり回っていた彼の唯一の後悔。

自惚れている訳ではないが、あの場において特級である九十九由基を除けば、呪霊操術に最も対応できたのは広域攻撃が可能な雨里だっただろう。

だが、彼は肝心なところでガス欠を起こしていた。

悔しくない筈が無い。腕を失ったこと以上に、雨里はその事を気に病んでいた。

「……言葉を返すけどな。それこそ、お前のせいじゃないだろ。少なくとも、お前が居なくちゃ、七海さんも真希さんも危なかった。傷が残っても、生き残れたのはお前の活躍だろ」

「そう、かな……そうだね。そういう事にしよう。このままだと穴掘って埋まりそうだし」

子供であつても、彼らは呪術師。割り切らねばならない事がある事を同年代は愚か、そんじよそこの大人よりもよく知っていた。

そうこう歩いているうちに、夜の暗闇の中で火が燃えるのが見える。

そして、探し人も。

「虎杖」

「ッ！伏黒……雨里……！」

「こんばんは、虎杖君。そして、初めまして乙骨先輩。東京校一年、雨里京平と言います。宜しくお願いします」

「あ、うん。初めまして、二年の乙骨憂太です。宜しくね、雨里君」

初対面の二人があいさつを交わす隣で、伏黒と虎杖の間には緊張が走っていた。

「何してんだ、帰るぞ高専に。今は結界が緩んでるからな、お前でも直接顔を見られなけりや問題ない。まずは先輩たちと——」

「止める……！」

淡々と帰還を促す伏黒の言葉を遮った虎杖の一声には、どうしようもない苛立ちにも似た切羽詰まった空気があった。

「当たり前のように受け入れんな……！無かったことにするんじやねえ……！」

そこにあるのは、恐怖。自分がいつたいたいどうなっており、そして最悪の結果はいついかなる時にも起こりえるという事実が虎杖を蝕んでいた。

同じく、過去に秘匿死刑の対象になっていた乙骨にも覚えのある、自己嫌悪と自己恐怖の板挟み。

明確な違いとするならば、実害を出してしまったのか、否か。

「俺が、雨里の腕を吹き飛ばしたんだ!!それだけじゃねえ、あの時雨里が止めてくれなかったら大勢の人間を殺してた!!俺は——」

「——俺達のせいだ」

今度は、伏黒が遮る。

「オマエ一人で、勝手に諦めるな。少なくとも——」

「——オレは、後悔してないよ虎杖君。君にとっては聞きたくない事かもしれないけど、それでもこれだけは分かってほしい。君一人が悪い訳じゃない」

責める気は二人には、一切ない。伏黒も、そして実際の被害者でもある雨里にも、そして高専に居るであろう者たちも。

誰一人として、虎杖を責めることは無い。だが、その優しさが今の彼にとつては胸の内を切り裂かれる刃ともなっていた。

(そうじゃない……そうじゃないんだ……!俺が傍に居るだけで、お前らを苦しめ続ける事になるんだぞ……!)

虎杖の後悔は止まらない。

あの時、と思い返せばその黒く濁ったような感情はとめどなく溢れてくる。

その迷いを、伏黒は読み取っていた。というか、同期として共に死線を超えてきた上に、割とわかりやすい虎杖の表情を見落とすという方が難しい。

一つため息を吐いて、伏黒は彼を見た。

「まずは、俺を助ける、虎杖」

「……」

「呪詛師、加茂憲倫が仕組んだ術式を与えられた者たちの殺し合い、死滅回遊。これに、津美紀も巻き込まれてる。頼む、虎杖。お前の力が必要だ」

迷っているのだから、一つの解を示す。

幸いというべきか、今の虎杖は執行猶予が取り消されているものの、呪詛師としての指名手配ではない。そこは、雨里の死力を尽くした行動が実を結んだと言えるだろう。



例え、雨里の腕を理由に指名手配しようとしても、消し飛ばされた  
当人が止めに入る。少なくとも、雨里自身はその行動を躊躇うことは  
無い。

時は、光陰矢の如し。世界は破滅への道を転がり始めていた。

人を助ける。それが、虎杖悠仁の行動理由。その根幹を担っている場所。

だが、渋谷の一件で彼のここには亀裂が刻まれていた。しかしそれでも進まねばならない。

乙骨へと改めてもしもの時、自分を殺してくれるように頼み、改めて伏黒へと向き直る。

「俺は、何をすればいい？」

「まずは、高専に戻って天元様と接触する」

「一つは、獄門疆の封印の解き方を聞く事。もう一つは加茂憲倫がいったい何を企んでいるのか。そして、今後の出方だね」

「ああ。死滅回游は大規模な、呪術テロだ。事態の収拾には、この二つを熟するのが一番のマスト。何より——」

「オレ達は、常に渋谷よりも前から、敵の後手に回り続けているのは現状。だから、東京壊滅なんて事態になっちゃったんだ。情報収集は必須で、オレ達には全てを知ってるかもしれない天元様が居たからね」

「じゃああの……九十九さん、だっけ？あの人は知らないのかな」

「その、九十九さんの案だ。あの人も、今は高専に潜伏してる」

「潜伏？」

「上層部が嫌なんだって。オレも……嫌いになりそうだよ」

上層部に対して良い感情を抱けと言う方が、今までの経験踏まえて不可能というもの。

少年院での虎杖の死。交流会での虎杖狙い。そして、今回の五条の呪術界追放と、夜蛾学長に対する死刑。

ヘイトは溜まり切っているとんでもない。場合によっては、雨里も九十九の様に上層部に反発しまくるような立場になるかもしれない。

話を戻そう。頭に？を浮かべる虎杖に助け舟を出したのは、乙骨だった。

「天元様の結界の効果だよ。何かから守るといっても、隠すように

特化した結界が高専には張られているんだ。そして、今ある問題の一つもその結界なんだよね」

「問題？」

「天元様の居る場所は、薨星宮と呼ばれる場所でそこに通じる扉は高専にある千以上ある扉の内の一つだけ。その一つに関しても、シャツフルが繰り返されていて——」

「その一つを引き当てなきゃ、天元……様には会えねえ訳か」

日本呪術界の要であるため、そこまでの防衛が施されるのは仕方がない事ではある。

だが、今回はその事がマイナスに働いていた。

ただ、虎杖が気にしていたのは、それだけではない。

「……なあ、伏黒、雨里」

「？」

「なに？」

「釘崎は、どうなった？」

「……」

「彼女は、別行動中だよ。この状況だからね。動かせる人員には動いてもらってるんだ。七海さんも付いてるから、大丈夫」

「！ナナミンも無事なのか？」

「家入先生のお陰でね」

雨里のその言葉は、どん底の気分であった虎杖にとっては朗報も朗報。

同期の生存と、大人の中でも純粋に尊敬できる大人の生存はそれだけで彼の表情を柔らかいものへと変えていた。

もつとも、その内容を詳しく雨里が語ることは無い。

今回の渋谷の一件は、術師側の死者が補助監督ばかりであったとはいえ、決して軽いものではないからだ。無論、虎杖が原因となった分は雨里の一件ぐらいであるのだが、それでも伝えればどうなるかわからない。

だからこそ、伏黒は黙り、代わりに言葉遣いの柔らかい雨里が答えていた。

空気が良い方向へと変わっていく中で、暗闇から顔を覗かせる脹相。

「その、隠す結界とやら。何とかなるかもしれないぞ」

「どういう事だ、脹相」

「というか、聞いてたんですね」

「……いつからそこに？」

各々が問う中で、脹相は指を立てた。

「以前真人が呪胎<sup>術</sup>九相<sup>達</sup>図や宿儺の指を盗み出しただろう？それと同じことをする」

\*

夜が明けた。どれだけ地獄が起きようとも、朝日はいつだって知らぬ存ぜぬと世界を照らす。

呪術高専は、その敷地面積と建物の数やその秘匿性から誰も足を踏み入れられないような場所も珍しくない。

だからこそ、少年院の後、虎杖を匿う事が出来た。情報統制さえしてしまえば、その秘匿性はそんじよそこらの施設とは一線を画す。

その地下の一室。そこに、九十九そして痛々しい火傷の痕を残した真希が居た。

「久しぶり、って訳でもねえか」

「真希先輩!？」

「真希さん!……もう動いても大丈夫なの？」

「おう、問題ねえよ」

驚く虎杖と、それから同期である乙骨は真希の下へと駆け寄る。

特級呪霊に直火焼きされ、尚且つ彼女は自分の体を呪力で守る事が出来ないのだ。痛々しい火傷の痕が残るだけで済んだことは、奇跡に近い事だった。

その説明をするように、九十九が口を開く。

「天与呪縛のフィジカルギフト。火傷の痕に関しては仕方がない。反転術式でも痕は残るからね。寧ろ彼女の場合、呪いへの耐性ではなく、生来の肉体強度が最後の生死を分けた。私としては、君も気になるんだけどね」

「……オレは別に……単純に術式の相性が良かっただけですし」  
「だが、肉体の構造全てを別の物質へと置換してしまう術式というのは珍しい。君のソレは、一種の呪霊への変化、と言っても過言ではないんだからね」

九十九の指摘に、部屋にはちよつとした沈黙が下りてくる。  
そんな空気を換えたのは、後輩を庇うように二人の間に割って入った真希だった。

「今は知的好奇心を満たすよりもやる事がありますよね？……恵、天元様の結界の件、どうなってる？」

「それは——」

「——俺から話そう」

一歩踏み出してくるのは、脹相だ。

「少し前、真人は両面宿儺の封印の内側に自分の呪力を仕込むことで忌庫への道を割り出した。そして、薨星宮への道すがらに忌庫はある。忌庫には俺の呪胎<sup>弟</sup>九相<sup>達</sup>凶の亡骸がある。一人一人の力は弱いけど、六人も集まれば俺の術式の副次効果で気配位は追う事が出来るはずだ」

「Good！いい案だね」

「……それはいいとして、コイツは誰だ？」

賛同する九十九であるが、同時に真希の疑問ももつともというものの。

「……とりあえず、俺の……兄貴って事で」

「!!悠仁————ッ!!」

脹相大興奮。とはいえ、方針は決まった。

ぞろぞろと地下室を出ていく中で、するりと真希が雨里の背後に付く。

「京平。ジジイがお前を呼び出してる」

「オレを、ですか？」

「ああ。借りを返せ、とよ」

「……呼び出しに応じるだけで良いんですかね？」

「さあな。だが、この機に私も本家の方に戻ったん戻る。呪具の回収だな。游雲は、恵の影の中。私としても得物が幾つかほしい」

「分かりました」

真希の言う、借り。それは、仕方が無かったとはいえ借りた相手が悪すぎた。

少なくとも、五条が居れば苦言を呈しただろうし、加茂が居たならば眉間に皺が寄った事だろう。それほどまでに、御三家の取り分け禪院という家は質が悪かった。

だが、雨里には後悔はない。あの瞬間、漏瑚が現れた時、仮に雨里が七海と真希の二人を直毘人へと託していなければ、二人は死んでいただかもしれないのだから。

真希自身もその事は分かっている。反転術式で火傷が癒され、意識が戻った時に理解させられたから。

そして一同は、脹相の案内の下に一つの扉の前へと辿り着いていた。

「ここだな」

押し開かれた扉。その先に広がっていたのは、生い茂る木々が下から生えているという異様な光景。

「降りようか。この先に、薨星宮に通じる昇降機があるんだ」

この場を知っている九十九が促し、一同は下へ。

「凄いな……」

室内のような、屋外のような場所。きよろきよろと当たりを見渡す雨里だが、そんな彼の揺れる袖を真希が掴んで引っ張る。

「行くぞ。流石に、迷子捜索に時間は割けねえ」

「あ、すいません……」

「まあ、目を引く場所ではあるけどな」

そうしてしばらく進み、この異様な光景とは似ても似つかない機械的な昇降機で降りた先は石造りの建造物のような場所。

それから、

「血の跡？何かあったのかな」

「かなり、古いね。ここ最近の物、じゃなさそうだ」

「十二年前のものだよ……今思えば、全ての歪はあの時に生まれたのかもかもしれない」

「「？」」

意味深な九十九の言葉に、しかし彼らには分からない。それ以上の説明も彼女からは無く、一同は本殿へと踏み入れ、

「……なんもねえ」

「これが、本殿？」

虎杖と伏黒が困惑するのも無理はない。

そこに広がっていたのは、只管に真つ白な空間。入ってきた通路のみがぼつかりと開き、それ以外は上下左右の間隔を殺してしまいそうな真つ白の実が広がっていた。

「クソツ……私たちを、拒絶してるな」(いや、拒絶されているのは、私か……?)

「拒絶ってどういうことですか？」

「天元は、現に干渉しない……が、今は六眼が封印される異常事態なんだ。今なら接触も可能と踏んだんだが……見通しが甘かった」

「……」

「なら、戻ろうか。津美紀さんには時間が無い」

希望が断たれたような状況で、伏黒の焦りを汲んだのか乙骨がそう切り出す。情報と同程度には今の彼らには時間が惜しかったからだ。

だが、

「——帰るのか？」

踵を返そうとした彼らを引き留める声が響く。

振り返れば、そこに居たのは人型をしているが、人としての元の形状を逸脱したナニか。

そのナニかは真つすぐに、その瞳孔の無い瞳で来訪者たちを見つめ、口を開いた。

「初めまして、禪院の子、道真の血、呪胎九相図、特異点、そして宿讎

の器」

名乗られずともわかる、探し人。  
天元その人が、そこに居た。



自然と、緊張感が漂う。

「私への挨拶……の前に、特異点っていうのは誰の事だい？天元」

「彼の事だよ、九十九由基」

そう言つて、天元が指をさすのは雨里の事だった。

「オレ？」

「そう、君だ。雨里京平。君には運命を歪曲させる力がある。如何に天与呪縛によつて力を得ようとも、血筋も無く、先祖返りでもない純粹な突然変異。それでありながら、今の君は既に特級相当の力を有している。とある少年の様にね」

「そ、それは……悪い事なんですか？」

「良し悪しではないんだよ。良くも悪くも、君は運命を歪ませてきた、という事。だが、忘れない事だ。君は決して、万能の存在じゃない。大いなる変化には、大いなる代償が付き物。もしも次があるのならはその時は……片腕だけでは済まされない」

重苦しい天元の言葉に、無意識のうちに雨里は左手で右の肩口辺りを服の上から掴んでいた。

もうそこに、腕は無い。慣れたかと言われればまだまだ。幻肢痛も傷痕が無くとも響いているのが実情であり、これから先の戦いでもっと大きなものを失うかもしれない、という暗示。

だが、

「——後悔は、してません。歪んで曲がった運命は、それだけの価値があったと、オレは思います」

真つすぐと天元の四つの目を見返して、雨里はキツパリと言いつつ切つた。

利き腕を失つたが、だからと言つて死んだわけじゃない。まだ戦える、それどころかその力の成長度合いは、恐らく呪術師としての歴史上でも間違いなくトップクラスであるのだから。

そして、年若い術師のハツキリとした、青いともいえる返答に九十九は笑みを浮かべ、改めて天元へと向き直つた。

「良い返事も聞けたところで、話の続きだよ天元。何故、薨星宮を閉じた？」

「……九十九由基。君が、縋索に同調している事を警戒した。私は、人の心まで分らないのでね」

「縋索？」

「かつての加茂憲倫、今は夏油傑の肉体に宿っている術師の事だ」

「慈悲の縋索に、救済の索か……皮肉にもなっていないね」

意味深な九十九の言葉だが、この場には天元を除き知識溢れるようなメンツが揃っている訳ではない。

彼女に追求する者も現れず、代わりに虎杖が手を上げた。

「天元様は、何でそんな感じなの？」

明らかにこの場でやるような質問ではない、のだがガス抜きにはちょうどいい。

現に、天元の方も快く答えてくれていた。

「私は、不死であって不老ではない。五百年も老いれば君もこうなるよ」

「マジでか」

程よく、場が緩みそして本題へ。

題は二つ。一つは、縋索の目的について。もう一つは、獄門疆の封印解除。

だがその前に、天元からも条件が挙げられた。

「乙骨憂太、九十九由基、呪胎九相図。そのいずれかの内、二人に私の護衛をしてもらう」

重苦しい言葉に、しかし湧き上がるのは疑問だ。

「護衛……？？不死なんですすよね？」

「封印、とかを危惧してるんですか？」

「フェアじゃないなあ。護衛の期間も理由も明かさず、特級の力が居るのなら、彼も含まれるべきだろう？」

乙骨、真希、九十九からの言葉は尤も。そして、天元としてもそちらを濁すつもりはないらしい。

「……では、縋索について語ろうか。あの子の目的は、日本全土を対象

とした国民すべての進化の強制だ」

「それは、聞きました。具体的には何をするつもりなんですか？あの時。羅索は天元様の結界を使って無為転変によって全ての人間を術師にしなかつたんです？」

「それをやるには、純粋に呪力が足りないからだ。うずまきによって生成された呪力は術者には還元できない。かといって、術式で一人一人改造していくには、余りにも手間がかかりすぎてしまう。そこで、あの子は別の手段を採った」

「それは、いったい？」

「人類と天元<sup>私</sup>の同化だ」

「！」

驚きが挙がる、が同時に彼らの中には疑問も、

「あれ？でも同化つて、ほら…あの…」

「星獎体にしかできないはずだ」

「以前の私ならば、ね。十二年前より進化を始めた今の私なら、星獎体以外との同化も出来なくもない」

「出来なくも…それつて、可能性はあっても、確実じゃないってことですよ？いや、そもそも——」

「天元<sup>オマエ</sup>は一人だろう？どうやって複数と同化するんだ？」

「そこに、私の進化が関わって来るんだ」

一拍。

「今の君たちの前に居る私は、私であつて私ではない。進化した私の魂は至る所にあり、天地そのものが自我なんだ。そして、私と同化した術師は、今の私と同じように、そこに居てそこに居ない別次元の存在へと変貌する」

「な、なんだかシュレインガーの猫みたいですね…まるで虚数の塊だ…」

「言い得て妙だな。いわば、今の私は結界術によって無数の私の中から汲み取った形と理性といった所か。だがもし、進化した後の人類が一人でも暴走すれば世界は、終わる」

「何故？」

「個としての境目が無いからだ。言ってしまうえば、透明な水槽の中に無限に広がり続ける黒い墨を一滴たらすようなもの。墨は徐々に水を染め上げ、最終的には水槽の中身を真っ黒にしてしまう。人の悪意の伝播は一瞬だ。そして、世界に一億人分の穢れが溢れる。東京と同じ事が世界規模で起きるだろう」

途方もない規模の話。だがしかし、この場に居るのは呪術師であつてヒーローではない。

伏黒は津美紀の為に、乙骨は友達の為に、真希は己の目標の為に、雨里は後悔しない為に、九十九は未来の為に、脹相は弟たちの為に。各々が各々で目的あつて動く。

その中でも善性である虎杖が問う。

「いったい、何のためにそんな事すんだよ」

「さあね。先ほども言ったように、私に人の心までは分からない、と。羅索が何を思うのかは、不明のままだ」

「……さっきの同化の件、天元様が拒否すればいいだけじゃないっすか？」

「確かに、十二年前以前の私であつたのなら、その選択肢もあつた。だが、進化を果たした今の私は組成としては、人間よりも呪霊に近い

——つまり、私は呪霊操術の術式対象だ」

この日一番の衝撃が突き抜ける。

呪霊操術の凶悪さは、この場のメンツは特に虎杖、雨里、脹相、乙骨、真希の面々はよく知っていた。

圧倒的なまでの手数。一人師団とも言うべき兵力を携え、その上、格下が相手ならば問答無用で取り込める上に、特級呪霊であろうとも支配下に置く。

加えて発覚した、極ノ番による術式の抽出。

だからこそ、天元の本体は薨星宮を閉じていた。閉じてどうにか羅索を拒絶し、その上で護衛として特級相当の戦力を求めていたのだ。

「特異点、雨里京平を省いたのは、君が未だ発展途上だからだ。術師の成長は死地にこそある。その力は、護衛では育まれない」

羅索が攻め寄せればその限りではないかもしれないが、現状の最も

な死地は死滅回游への参加となる事だろう。

「……この子を護衛に選ばない理由は分かった……だが、なぜ今なんだ？」

九十九が問う。

「星獎体の同化阻止、天元を進化させ支配下に置くための呪霊操術の獲得。縞索は、宿讎とも面識があるようだった。つまり、千年単位で術師をやっている中で、何故、今なんだ」

「それには、天元、<sup>私</sup>星獎体、六眼の因果的繋がりが関係している」

天元は語る。過去に二度、縞索は六眼に敗れているという事を。そして、一度目の敗北を糧に二度目は徹底して六眼、並びに星獎体を生後一か月以内に殺してきたことを。

それでも、因果は絶えず、結果的に縞索は二度目の敗北を味わった。そして、三度目。イレギュラーの介入。

「天与呪縛のフィジカルギフト。その中でも特異な呪力からの完全な脱却を果たした存在、禪院甚爾の介入によって、十二年前のあの日私たちの因果は破壊された。そして、その場には呪霊操術の使い手もまた居合わせていた」

「フィジカルギフト……真希先輩みたいな人が居たんですね」

「私の、完成系だな」

「完成系……」

話の中で、何かが引つ掛かったのか雨里は考え込む様に左手を顎に添える。

そして、この間にも話は進む。

曰く、その場には獄門疆以外のピースが揃っていた。同時に、縞索は二度の敗北を経て六眼を殺すのではなく、封印へと指針変更をしていた。

「……じゃあ、死滅回游は何のために行われるんですか」

「慣らし、だよ。死滅回游に参加した術者の呪力と、コロニーを結んで形成した境界を利用してこの国の人間を彼岸に渡す儀式だ。要は、同化の前に人々に呪いをかけて、私との同化をよりスムーズに行うための下準備でもある」

死滅回游は止まらない。首謀者であろう繙索を殺そうとも、そもそも死滅回游のゲームマスターが繙索ではないからだ。

明かされていく情報の数々だが何れも厄介。ただ単に首謀者をぶちのめせば終わる代物でもなく、加えて八つのルールがより一層ことを複雑化させていた。

幸いなのは、これ以上繙索に対して呪術的に有利に働く事が無い点。これは天元からのお墨付きだ。

しかし、こうなってくると、この場の面々も護衛を残して死滅回游に参加せざるを得なくなる。

そして、護衛として立候補したのは、九十九と脹相。対価として取り出されたのは、獄門疆の「裏」。

カギを握るのは天使の存在だ。

死滅回游の総則<sup>ルール</sup>。要は、呪術を用いた大規模な、デスゲーム。一種の蠱毒的な要素もはらんでいるかもしれない。

「四番目のルールも、単純ですけど、厄介ですね」

「殺しだからか？」

「いえ、それだけじゃなく……」

それぞれが死滅回游の総則を確認する中で、雨里が示すのは四つ目の生命を絶つことで点を得るというもの。

だが、彼が気にするのは殺しという点ではない。

「……オレは、人の行動には経験と状況が重要だと考えてます。一歩目が億劫でも、二歩目、三歩目は流れでいけますから」

「つまり、君は結界内<sup>コロニー</sup>ではすでに殺しが行われている、と？」

「オレ達呪術師は、法の外に居ると言っても過言じゃない。元は非術師で虐げられていた人が、急に力を得て、その上警察機構が役に立たないとしたら……」

「——復讐に走る」

善悪問わず、人間の突発的な行動というものは感情に直結している。

今、罫索によつてばらまかれた術師には、自分が生き残るための、という免罪符と警察すらも自分を縛る事が出来ないという、事実の二つがある。

第一の殺人を自分が助かるため、と行い。結果成し遂げ、ポイントを獲得し、同時に法的機関が自分を縛る事が出来なかったならば、第二、第三と続くにつれてその難易度は劇的に下がっていつてしまう。

そしてこれは、あくまでも一般人に当てはめた場合だ。より利己的な人間や、自尊心の塊、サイコパス等ならばそれら一切を苦にせず、只管己の目的のために邁進する事だろう。

雨里が懸念するのは、そこだ。人の理性は簡単に投げ捨てられる。

「……全員がそうじゃねえだろ」

「確かに、そうかもしれない。でも、結界<sup>コロニー</sup>の中で何が起きてるのか分か

らない現状、最悪の状況は常に想定しておく必要があると思う」

雨里とて、こんな事は言いたくない。言いたくないが、渋谷では諸にその楽観的な部分が悪手となって表に現れていた。

自他共に認める最強が敗れるなど想定もして<sup>封印される</sup>いなかった結果が、あの惨状。

それからも幾つかの情報交換、並びに意見交換が行われる事になるがその到着は、結局のところ死滅回遊への参加に他ならない。

だが、それに際しても全員が全員同じ行動をとる訳ではなかった。

「私と、京平は禪院家に行ってくる。ジジイからの呼び出しでな。まあ、本題は呪具の回収だけだな」

「どうにか、有用そうな物を見繕えるようにするよ」

「……大丈夫ですか、ソレ」

「ぶつちやけ、大丈夫じゃねえな。ジジイも厄介だが、アイツはアイツで京平と面識がある。問題は、その他の屑どもだよ。あの家に、話を通じる人間は居ねえ」

「ダメじゃないですか……」

あんまりな物言いに、げんなりと眉を顰める伏黒。彼もまた、五条の横槍が無ければそんな伏魔殿に放り込まれていたのだから他人事とは言えなかった。

その一方で、雨里もまた先程から考えていた事を知識人二人に問う。

「そういうえば、さっきお話で出てきた禪院……甚爾さん？は禪院家の人なんですよね。真希先輩と同じフィジカルギフテッドの」

「ああ。だが、彼は彼女とは違い、完全に呪力が0だった。その代わりに、生半可な呪力で肉体を強化した術師以上のフィジカルに加えて、鋭敏過ぎる五感はそれだけで呪霊を捉えてみせたんだ。もちろん、呪力が無いから祓う事は不可能だったけれどね。呪具があればその問題も解決。特級呪具があれば、同じく特級の呪霊だろうと討伐出来ただろう」

「はあ……」

「私の完成系だからな」



真希が話に混じってくる。そこで、雨里には新たな疑問が湧いてきた。

「……さつきも聞きましたけど、天与呪縛って変わるものなんですかね？」

「勿論さ。その一つに、魂の形を変えるところがある。想像してみてくれ。呪術師、非術師問わず、正常なのが、完全な円だとする。天与呪縛はこの円の一部分が欠ける、或いは凹んでいる状態。この凹みや欠けの分だけ何処かが尖り、その尖った部分が呪縛の代償、恩恵となる。君ならば、温感、この場合は冷感、それから発汗作用。代わりに、術式の精度と呪力の出力が増しているだろうか？」

「そう、ですね……前に資料で見たんですけど、呪術的に双子は一人の人間として見るんですよね？」

「急に飛んだな……まあ、私らも凶兆だとか何とかさんざん言われてきたけどよ」

「ふむ……」

「要領を得ない雨里だが、その当人は何が気になるのか再び考え込んでしまう。

首を傾げる真希。気になるところではあるのだろうが、今は一分一秒が惜しいのもまた事実。

「さつきから、どうした」

「……いえ、まあ……少し思いついたというか……気になったとか……」

「いったい何が気になるんだい？」

「いや、真希先輩の場合は呪力が非術師レベルで残ってるんですよ？で、真依先輩の場合は術師として最低限ギリギリの呪力だけでしたよね？」

「おう」

「……それって、おかしいんじゃないかと思ったんです」

「おかしい？」

「は？」

頷く雨里。

興味をひかれたのか九十九は、彼の言葉の続きを促した。

「いったい、何がおかしいんだい？」

「いえ、呪術的に見て、双子は一人として見るんですよね？なら、この場合だと真希先輩と真依先輩は二人で一人という事になります。なら、術師としても二人で一人として成立しませんか？」

彼のその言葉に、別の意味でこの場に沈黙が起きた。

目線で更につきを促されれば、雨里は両手で先ほど九十九が示したように円を作ってみせる。

「ええっと、つまりこの円が真希先輩と真依先輩になります。それで、現状から考えると、真希先輩はフィジカル面を、真依先輩は術師面をそれぞれ担っていると思うんですよね」

「……続けて」

「あ、はい……それですね。先輩たちがいまいち本領発揮が出来ていないのは、不完全だからじゃないか、と思うんですよ」

「不完全？」

「はい。太極図つてあるじゃないですか。あれと同じ形で、真希先輩には僅かな呪力が、一方で真依先輩には僅かなフィジカル面が、それぞれに残っているからこそ完成しないんじゃないか、と……いや、すみません。こんな時間の無い時に」

今更ながら注目を浴びて語っていた事が恥ずかしくなったのか、左手を挙げて雨里は目を逸らした。

が、聞いていた側はそうではないらしい。

「天元。確か、そういう呪具があつた様に思うんだけど」

「橋渡しだね……これがそうだ」

獄門疆の裏を取り出した時の様に、天元が取り出したのは二つの腕輪。

「これはその昔に存在した呪具、そのレプリカだ。本体はある術師の亡骸と共に永久に失われている」

「橋渡し、とは言ったがこれは二人で扱う呪具だね。『親』を着けた術者に対して、『子』を着けた術師の呪力を供給し続けるというものなんだ。橋渡しという名でありながら、その実態は一方的な搾取とな

る。全盛期には、複数の「子」が存在し「親」を着けた術師は相当な力を誇ったらしい」

呪具の等級としては、オリジナルならば特級相当であるのだが、レプリカのこれらは1級と少々格落ち品となる。

流星に、ここまで真面に取り合ってもらえるとは思わなかったのが、雨里だ。

彼は止めようと一步前へと踏み出して、その前に天元の手より呪具が火傷を負った手に回収されていた。

「ッ、真希先輩……」

「京平が言った通りなら、私も願ったり叶ったりだ」

「……でも、机上の空論です。オレには、その手の知識は、無い……」  
「呪術なんて物自体、非術師のつつちや机上の空論だろ。もしくはお伽噺の産物じゃねえか。それに、折角頼りになる後輩からの提案だ。無下にはしねえよ」

言って、真希は空いた方の手で、未だに不安そうに眉間を歪める雨里の髪を掻きまわした。

彼女自身、己の力不足は理解していた。それは、陀良戦でより明確に浮き彫りとなった事でもある。加えて、漏瑚相手には即戦線離脱してしまった。

最後まで残って自分に何が出来たかは分からない。分からないが、結果として目の前の後輩は最後まで戦い抜いて、その結果として腕を失う事になる。

虎杖だけではない、あの時渋谷の一件に参加した東京校の面々はかなり小なり、雨里の腕の事を気に病んでいるのだ。

呪術師を続ける以上、五体満足でいられない可能性が常について回る事は分かっている。しかし、だからといって見て見ぬ振りが出来る程彼らは薄情ではない。

それぞれがそれぞれで、事態解決へと動く中、その裏でもまた様々な事が起きていた。

総力戦にもなりかねない現状、味方は多い方が良いのだから。

上層部の目の上のたん瘤であった五条悟。

実力で排除できない相手に対して、彼らのとった手段は遠回しな嫌がらせばかりであった。

その情勢が変化したのは、彼が封印されたからだろう。

獄門疆は、そのプロセスと希少性、並びに定員一名という制限を幾つも有しており、その結果として並大抵の手段では封印の解除は愚か、破壊する事も不可能という代物。

そして、彼の封印による影響は様々な場所へと波及していた。

その一つ、突然変異呪骸の生みの親、夜蛾正道もまた危機的状况に瀕していると言っても過言ではない。

彼が上層部に危険視される理由は、上記の呪骸を、つまりはパンダを生み出してしまったから。

本来呪骸は、その多様性のある動きの代わりに、動く際に必要な呪力は術師からの供給によって行われる。

だが、パンダは違う。彼は、彼自身が発した呪力によって行動し、自我を持ち、一人の術師として成立してしまっていた。

それはイコールとして、呪術師という存在の人工的な生産に他ならない。

上が危惧するのは、この突然変異呪骸を大量生産できるのか、という点。出来る場合は、そのまま術師の軍隊を作れることへと繋がり、上にも牙を剥きかねないから。

彼らは、己の座る権力の椅子こそが最も大切であり、脅かす相手には容赦しない。だから救いようが無く、場合によっては皆殺しにされる事も普通にあり得る程度には恨みを買っているのだが、耄碌した老人たちはその事実を直視しない。

ついでに、この突然変異呪骸を制作方法が判明すれば、最低でも2級以上の実力を持つ術師レベルの存在を大量に戦力として保持できることにも繋がる。

なまじ、権力を持った老害ほど厄介な存在は居らず。加えて、周囲

もそれを容認し、剩え甘い汁を啜るものばかりであるのだから余計に腐敗は加速するばかり。

話を戻すと、夜蛾は今まさに危機的状況にあった。いや、彼自身覚悟をした上でこの場に居るのだが、その覚悟と状況は等号では結ばれない。

総監部使いに加えて、楽巖寺学長という刺客の登場。一方で、夜蛾の術式は傀儡操術。呪骸を創り出して戦わせるというものなのだが、今の彼はその肝心の呪骸を連れていない。

1級術師であり、危険性から特級認定を受ける事になった彼だが、勿論素手でも戦えない訳ではない。その恵まれた体格に加えて鍛えているから。

だがしかし、相手は老齢に至るまで前線に立つ現役バリバリの術師だ。術式の使えない状況では勝ち目は薄いと言う他ない。

いや、九分九厘殺されるだろう。少なくとも、このままならば。

遠く響く、エンジン音。甲高いそれは、合間にブレーキ音を挟みながら三者の下へと近づいてくるようだった。

程なくして、月明かりや街灯とはまた違う光源が割り込んでくる。

「この車は……！」

夜蛾はサングラスの下でその目を見開いていた。見覚えがあったからだ。

止まったスポーツカーより降りてくるのは、顔の左側含めて酷い火傷痕が残り、加えて左目には眼帯を着けた白いスーツに金髪のがたいのいい男。

「お迎えに上がりました、夜蛾学長」

「七海……!?なぜ、お前がここに居る?」

困惑する夜蛾に対して、1級術師七海建人は揺らがない。

隻眼となった彼は、その残った右目で楽巖寺と総監部の使いへと視線を送る。

「お久しぶりです、楽巖寺学長」

「……いったい何の真似じゃ、七海1級術師。夜蛾は既に死刑が決まっておるぞ」

「ええ、その死刑に待ったを掛けさせてもらいます」

既に臨戦態勢である楽巖寺に対して、七海は得物である鉈を抜く事もせずただ見返すばかり。しかし、その行動には彼らしい合理性のよくな部分が欠けているようにも見えた。

得物であるギターを構えながら、楽巖寺はその目を細める。

「言っておくが、既に総監部による通達によって決まった事じゃぞ。」

1級術師程度の言葉で止まるようなものではない」

「ええ、それも存じています。ですので、既に総監部の方にも私よりも上の階級の方が差し止めを行っていると看做す」

「上、じゃと……?」

「九十九特級、並びに乙骨特級兩名に加えて数人の1級術師の名を連名として、夜蛾正道特級の死罪の一時保留。監視を付けた上で、死滅回遊並びにその後の指揮権を委譲。私がここに居るのは、単なるメツセンジャーでしかありません」

その一手は、総監部としても決して無視できるものではない。

五条悟が特筆して睨まれているだけで、特級術師の戦力というのは決して彼らにとって無視できるものではないからだ。

過去に楽巖寺は、特級という存在を呪術師の階級の内斜めに外れた存在であると称したが、言ってしまうえばその実力は通常の術師が二次元ならば、特級は三次元とでも言うべき差でもある。

乙骨憂太はまだ良い。まだ制御が効く(と、上層部は思っている)。

だが、九十九由基はダメだ。彼女は五条以上にいう事を聞かず、手元に置く事も不可能。実力は特級でその上、弱みが握れない。

そんな二人に加えて、1級術師数名の上奏ともなれば、上も無視はできない。

「……何故、そ奴らが出てくる? 何故、今?」

「今だからこそ、ですよ。現状、我々呪術師は全てが後手に回され続けている。最終的に祓えればいい、と上は考えているかもしれませんが、その最終的に、の段階で国そのものが終わりがねないのが実情です」

淡々と語る七海の言葉には、それだけの凄味がある。

なぜ彼がこの場に送り込まれたのか。それは、感情と理性を切り離す事が出来るから。少なくとも、熱くなつて乱れるという事はない。だからこそ、選ばれた。淡々と語るその言葉と態度こそ、事態の重みを表してくれるから。

「戦力はどれだけいても、足りません。その中でも、夜蛾学長の傀儡操術は素敵、戦鬪、誘導と熟せる幅が広い。突然変異呪骸を危険視する事は、私としても分からない話ではありませんが、彼は五条悟の様に制御の利かない存在でしょうか？」

「……七海1級術師。お主も渋谷に居たのであろう？何を見た」

「地獄を。特級呪霊が跋扈し、1級術師を一蹴するような怪物が複数。渋谷で補助監督以上の被害が少なく済んだのは、偏に運が良かった、そして残った者たちが文字通り死力を尽くしたからに他なりません」  
実際の所、七海が覚えているのは陀良を打倒し、そして気付けば漏瑚に焼かれたところまで。

気付けばベッドに転がされ処置が終わり、渋谷事変は術師側の敗北と新たな騒乱の幕開けが彼に告げられた。

情けない、と言えば情けない。何故なら、あの事変の最後まで立ち会った大人は、日下部や途中参戦の庵、九十九位のものであり、大半は高専生であったのだから。如何に階級を持つとも、子供は子供。彼の内心は複雑だった。

一方で、楽巖寺としても先の言葉を無視することはできない。

彼は上層部の一角であると同時に、教育者でもある。保守派であるども、だからといって現実に対して目を閉じて情報を遮断し、現実逃避をするようなタイプでもない。

故に、考える。この場の最善を。

「……学長殿」

「総監部からの通達に変更はあったか？」

「はっ……」

「そうか。ならば、今回は退くとしよう」

「……御意」

踵を返した楽巖寺。総監部の使いも夜蛾と七海を相手に出来るよ

うな実力は無いため、引き下がるしかない。

二人の姿が闇に消えたことを確認して、七海は一つ息を吐き出した。

「はあ……とにかく、行きましようか夜蛾学長」

「……何がどうなっている?」

「さつきも言った通りです。貴方にはこれから、高専に戻って陣頭指揮を執ってもらう事になるでしょう」

「それが解せない……乙骨は兎も角、何故九十九由基まで……」

「絵図を描いたのは、渋谷の功労者たちだと、私は聞いています。彼ら彼女らに、貴方を見捨てるような選択肢を採れるとでも?」

「……」

呪術師の選択としては、甘すぎる。だが、同時に納得する事でもあった。

覚悟を決めたとはいえ、夜蛾とて死にたくて死ぬわけではない。故にそれ以上の言葉を重ねることは無い。

沈黙。だがそれは長くは続かなかつた。

「まさみち……!!」

「パンダ……」

白と黒のカラーリングで全速力で駆けこんできたパンダの姿。

「無事だったか……」

「日下部が、助けてくれた。正道も怪我ないな?」

「ああ、問題ない……高専では何が起きています?」

「……再会を邪魔するようでも申し訳ありませんが、まずは場所を移しましょう。パンダ君。君は、後部座席に押し込む形になると思います。大丈夫ですか?」

「おう……というか、七海さんが正道助けてくれたんだな」

「私ではなく、九十九さんたちにお礼をどうぞ。私はただのメッセンジャーでしかありませんから」

眉間を揉む七海は、いつも通りで変わらない。左目を失ってはいるが、呪術師としての貫禄というか、箔というか、雰囲気は満ち満ちているようにも見える。



かくして、一人は救われた。運命は更に歪曲していく事になる。

いつから、こうなったのだろうか。真希はふと、考える。

公共交通機関が軒並み死んだ東京から、車で京都を目指す道すがら、窓の外に映るのは山道を通っているからか、木々ばかりだ。

天与呪縛として、フィジカルギフトではあつたが、そのポテンシャルは決して抜きんでたようなものではない。妹である真依は呪霊が見えていたが、自分は見えず気配で探る事なども出来はしない。

呪具の眼鏡が無ければ見えない。だが、過去を思い返していた彼女が思い出したのはその手に残る感触。

ふと、自分の左隣の席に座る雨里へと横目に視線を送る。

彼は窓枠に左腕で頬杖をついて、ウトウトと舟を漕いでいた。

渋谷事変から数日経っているとはいえ、あの場で最も死力を尽くして動いていたのだ。肉体的な疲労が抜けても精神的な疲労はその限りではないらしい。

真希が見るのは、車の揺れに合わせて揺れる右袖だ。

徐にその先端を摘まめば、その中にはやはり何も無い。何度確認したってそれは変わらない。

当人は氷で義手を作ると言っていたが、それは戦闘や右腕が必要な時に限つての話。基本はそのまま放置であり、既に利き手として左手の訓練を始めている始末だ。

この後輩は、どんな状況でも、意地で前へと進んでいく。

そんな相手からの今回の提案。真希は服の上からポケットに捻じ込んでいた、天元より渡された呪具へと触れてみる。

雨里自身は、強くなれる確証など無い、と言っていたが着眼点としては悪くなかった。呪術師として染まり切っていないからこそその発想でもあつたが、何より真希としても真依を失う様な選択をしたいなどとは思わない。

左手をさらに伸ばして、本格的に寝入っている雨里の髪に触れる。

ダメージはあるが手入れをしていない割には指通りは悪くない。

しばらく弄っていれば、運転している新田明とバックミラー越しに

目があった。

「真希さんは眠らないんすか？」

「私は、別に……寧ろ、明さんの方がキツイだろ。補助監督も渋谷でだいぶ削られたって話だし」

「まあ確かに、ごたごたしてるのは事実っすけど……だからって、自分達よりも年下の子が命懸けてるのを黙ってみてられる訳無いっすから」

新田の言葉に嘘はない。彼女としても、弟と同年代の子たちが戦う姿に何も思わないような性格ではないし、寧ろ熱くなるタイプでもある。

現状、上層部は権力集中に腐心している節がある。

五条悟が封印されたのだから当たり前前の行動……ではあるが、だからといって状況の理解が出来ていなさすぎる。

羅索が平安の時代の呪術的弱肉強食世界に戻そうとしているのならば、か弱い老人たちにいったいどれほどの事が出来るだろうか。

話を戻し、真希が新田を気に掛けるのは、何も補助監督がごたごたしているからだけではない。

東京から京都への移動だ。それも、交通の要であった東京駅など含めて、東京は壊滅状態であり、交通機関は崩壊。その崩壊を立て直す筈の政治家も軒並み吹っ飛んでおり、政治的な空白状態。

そんな状態で数時間のドライブだ。きつくない筈がない。

だが、新田はそんな真希からの心配を否定する。

「働かせてほしいっす。渋谷じゃ、足引っ張っちゃいましたし私ら補助監督は基本的に戦えないっすから」

「……京都に着いたら、離れろよ？ 駅周辺なら未だしも、御三家や総監部の近くには寄るな。あそこは、女は真面な扱いしてもらえねえから」

「前から思ってたっすけど……何で呪術師ってそうなんすかね」

「さあな。前時代的だからだろ。とにかく、明さん。気を付けてくれよっ。」

「了解っす」

会話が途切れ、真希は再び窓の外を見る。

新田に言われて思い出したのだ。なぜ自分が禪院家の当主にならなかったのかを。

自分を馬鹿にする者たちを見返したかったから。それもあるだろう。あの家では、呪力、術式の有無のみならず性差であっても人権が無くなってしまふのだから。

言ってしまうえば、負けん気。根性。反骨精神。

だが、それだけではない。それだけではなかったのだ。

忘れていた訳ではない。ただ、大切なものが増えすぎて見えにくくなっていただけ。

彼女の原点は最初から、その手の中にあっただけだから。

\*

京都某所。そこは家、などという範疇に収まる事の無い巨大さと荘厳さ、そして薄気味悪さが同居する場所だった。

「……でっか」

呆然と階段上っていくを雨里の感想はその一言に集約される。

彼を先導するのは真希とそれから道中で合流した真依の二人。

「高専も似たようなもんだろ」

「いや、これは……城じゃないですか。高専はまだ、寺社仏閣ですけどこれは……」

「それよりも、コレ。本当に使う気？」

真依が見せるのは、件の呪具橋渡し。

彼女への説明は、既に電話越しで真希と雨里が済ませている。済ませているが、ハイそうですか、と納得できるほど真依は単純な性格をしてはいなかった。

「彼の説明……というよりも、推測は分かるわ。でも、それって机上の空論じゃない。天元様と特級術師も明言しなかったんでしょ？ ソレ

を――」

「だからって、何もしない訳にはいかねえだろ。ここから先、今の私じゃやっていけねえ。お前も分かかってるだろ」

「……………だったら、辞めればいいじゃない。呪術師なんて」

俯くように目を逸らす真依と、真つすぐにそんな妹を見る真希。

雨里は言葉を挟むことなく背景に徹していたが、何となく二人の間に横たわる問題というものが見えた気がした。ついでに、自分の推測も強ち外れていないのでは、とも。

彼は、目の前の姉妹を太極図と称した。

太極図というのは、単なる白黒のマークではない。

陰陽を表しており、陰は女性を、陽は男性をそれぞれ表すともされている。

詳細は省くが、雨里の目からは、真希は陽を示し、真依は陰を示すのだろうと思える。どちらも女性だが、真希は男性的で、真依は女性的であるから余計に。

雨里の考察が進む中でも、真依の不満は溢れ出る。

「私は……………呪術師なんかになりたくなかった……………！でも、アンタは――」

「……………」

無言で、真希はその手を伸ばし、真依の手をとった。

女性らしい細さの残る手。それでも鍛錬を積んで硬さの残る掌には、何度も銃を握った末に出来たであろう擦れがあった。

そして、思い出す。なぜ自分は、禪院家当主になりたかったのか。

「……………落ちぶれてちや、私らは何れ死んでた」

俯くようにして、真希は真依の手を撫でながら呟く。

禪院家は、いや呪術師の大家というのは才能が無ければ、そして男でなければ地獄しか存在しない。

もしも、真希が出奔しなければ、そして続くように真依もまた呪術高専へと放り込まれていなかったならば、胎として飼い殺しにされていたかもしれない。

「どれだけ否定しても、私らの生まれは呪術師だ。それも、本家の血

筋。どこにも逃げられたもんじゃねえ」

「だったら——」

「それでも、可能性があつたのが術師になって禪院家の当主になる事だ。私が当主になれば、真依。お前だって、どん底に……いや、それ以下に落ちる事も無い」

一人であつたのなら、真希は諦めがついたのかもしれない。一人であつたのなら、真依はどこまでも落ちて行ったのかもしれない。

けれど、彼女らは二人だった。

真希は諦める事無く突き進み、真依は引き摺られるようにしてその後続いた。

真依の目が赤く、そして潤んでくる。

「……私は、強くなつてなりたくない……傷つくのだから……呪霊も怖い……」

「それでも、私はお前と二人で生きていきたい」

そこで初めて、姉妹の視線が交わった。

「真依は頭が良いから、考えすぎんだよ」

「……でも、双子の——」

「そういうのも、抜きだ。第一、んなもん周りが言ってるだけだろ？なら、都合の良い方を解釈する方がマシだ」

「マシって……」

豪放磊落というべきか、大雑把というべきか色々雑な真希のその言葉に、真依の涙も引つ込むというもの。

それでもやっぱり、不安の種というものは尽きない。

「………もしも、失敗したらどうする気？」

「あん？そりゃ——」

「——オレが二人を連れて逃げますから、大丈夫ですよ」

ここで漸く、雨里が声を上げる。ついでに、この後輩にも泣きそうだった所を見られたことに気付いた真依の耳が赤く染まるが、そこを突っ込むのは野暮というもの。

天下の禪院家を前にしてこの物言いに、真希の表情は楽し気に変わる。

「頼りにしてんぞ、京平。ジジイに顔合わせたら速攻で呪具もつてとんずらするからな」

「出来ますかね？あの人、本当に早いんですけど」

「私らを逃がしてくれるんだろ？」

「それは、勿論。命懸けで」

不謹慎な事を言う後輩の脇腹を肘でついて、真希は再び階段を上り始める。

その背を見上げる真依に、雨里が声を掛けた。

「真依先輩」

「……………何よ」

「術師は解釈次第。だったら、真希先輩みたいに都合のいい解釈をするのもまた正しいんじゃないやありませんか？」

「……………よくもまあ、あそこまで都合の良い事言えるわね」

「双子の解釈ですか？それとも、天与呪縛ですかね？」

「どっちも、よ。そこまでして、私たちを戦わせたいの？」

「いえ？別に、そんな事は思ってますせんよ。戦う事から離れる事も、才レはありだと思ってますから」

並んで階段をのぼりながら、雨里はそんな事をあっさりと言う。

「強制なんてしませんよ。だって、真依先輩は真依先輩。真希先輩は真希先輩じゃないですか」

「……………双子でも？」

「呪術的に見ても、生物的には二人ですからね。そもそも、双子じゃ差し引きが成立しないと云いますけど、それは少し考えすぎです」

「……………どういう事？」

「誰だって、傷つく事は恐ろしいでしょうし、呪霊を怖がるのだって無理ないんですから。だって、彼らはこつちを簡単に殺せるだけの力を持つてる。そんな相手を恐れるな、と言う方が無理な話じゃないですか」

「でも、真希も貴方も戦えてるじゃない」

「戦えることと、怖がらない事はイコールで結べませんよ」

それは、呪術師としては思いつかない思考かもしれない。彼らは、

イカレて何ぼであるから。

だがしかし、真依にとつてはその言葉はストンと入ってきた。

「……アンタも、怖いの?」

「少なくとも、渋谷では何度か死にかけましたし……というか、完全に一回心停止まで行きましましたからね。そりや、怖いですよ……でも、ここで立ち止まってたら何もできませんから」

「……強いじゃない」

「<sup>強弱</sup>それこそ、解釈次第じゃありませんかね。オレが強いのなら、真依先輩だって強さがありますよ」

「私に……?」

「陳腐な物言いですけど、強さなんてものは千差万別じゃないですか。肉体的な物、精神的な物、呪術的な物。それに、強さ関係なく真希先輩にとつて貴方は大切な存在ですよ。それだけじゃない。少なくとも、貴方の周りに居た人たちにとつてはかけがえのない存在に違いないんですし」

事も無げに雨里は、そう言い切った。しかし、これまた真依にとつては目から鱗。

実家は別にしても、彼女の周囲は恵まれている方だろう。

同期も、先輩も、後輩も、担任も彼女の事を少なからず大切にしている。それが、行動に出るのかは別として。

自分の周りに思い至ったのか、再び顔が赤くなる真依。その恥ずかしさをはぐらかすように、彼女は話題を変えにかかった。

「………んんっ、そういえば何で急に私まで先輩呼びなのかしら? アンタの先輩になった覚えはないわよ?」

「ええっと、禪院家の知り合いが二人に増えたから、と言うのと高専に通う上級生は基本的に先輩呼びだから、ですかね」

「………東堂も先輩なの?」

「はい」

「……アレを?」

「いや、まあ……術師としては強いですし」

「目え逸らしてるじゃない……ふっ、アンタも十分にイカレてるわ」



「そりゃあ、死地に自分から突っ込むような馬鹿ですからねえ」

肩を竦める雨里に、真依はため息を一つ。ただ、その口角は僅かに  
だが上がっていた。

そして、三人は巨大な門の前へと辿り着く。雰囲気の禍々しさは言  
わずもがな、一歩下がりがりたくなるような威圧感もある辺り、流石は  
腐っても御三家といった所か。

「京平、そっち頼むぞ」

「自力で開けるんですね、コレ。了解です」

押し開かれる大門。魔窟への一歩である。

御三家の本家の敷地面積は基本的に、頭おかしい。

「……純粹和風建築かと思つたら、そうでもないんですね」

「歴史だけは無駄に長いからな。増改築を繰り返してんだよ。こつちだ、逸れるなよ」

周囲を囲む外壁の規模から相当な屋敷であると見当をつけていた雨里だったが、彼が考えていたのは武家屋敷や平安時代の寝殿造りのようなものだった。

だが、実際の禪院家の屋敷は、見た目こそ日本家屋のソレだが細部には所々に洋風が取り入れられており、和洋が入り混じっている事が確認できる。

お上りさんの様にキョロキョロと周囲を見渡す雨里だが、そんな彼の頭を真依は軽く叩くと左手を掴んで無理やり引つ張っていく。

彼女にしてみれば、ここ禪院家は魔窟同然。当主直々に呼ばれていたとしても決して安心出来る場所ではないのだから。

旅館の入り口のような玄関を潜り、屋敷の中へ。

「靴は、脱がないんですか？」

「ここはまだ、母屋じゃねえからな。こつちだ」

先導する真希は、すたすたと中を進んでいく。

途中明らかに屋内では？と雨里が首を傾げる場所もあったのだが、二人は靴を脱がなかったために突っ込むことも出来ず、流れのままにそのまま迷いそうな屋敷の中を進む。

そして、とある一室に辿り着いた時、漸く屋敷の住人と顔を合わせる事になった。

「——あれえ？帰ってきたんや……酷い面やな、ソレ。もう戻らんのやろ。どうすんの？真希ちゃん」

「女を顔で判別出来たんだな。尻ケツしか見てねえと思つたぜ」

「こつちは質問しとるんやけど？どうするか言えや、カス」

完全に相手を見下したその言葉に、自然と真希の後をついてきていた雨里の眉間に皺が寄る。だが、踏み出す前に真依にその一步を袖を

摘ままれる事で止められてしまう。

「真依先輩……！」

「今は押さえて。真希だって、何も言わないでしょ。この家の人間ならいつもの事だもの」

「ッ……だからって——」

「相手は、禪院家の次期当主候補筆頭なの。お願いだから、事を荒立てないで」

小声で止めてくる真依に、雨里も言葉をどうにかこうにか飲み込む。だが、その腸は決して穏やかな状況ではなかった。

彼に対して、呪術界の権力というのはいまいち効きが悪い。ぶっちゃけ、彼の担任に似始めているのだ。

故に御三家だとか上層部だとかに従う理由は周りに被害を出さない為、というのが最も大きな理由であり、その枷がなければ平気で反旗を翻していた事だろう。

一方の御三家特有の傲慢さと男尊女卑の考え方から、周りを下に見る男、禪院直哉はと言えば更に真希を扱き下ろしていた。

「呪術も使えん、呪霊も見えん、おまけに取り柄やったお顔はぐずぐず。もう誰も君の事、眼中に無いで」

「……」

「惨めやなあ。また、昔みたいに遊イジメんだろか？」

「……」

「何とか言えや、カス」

舌打ちを一つ零した直哉は、そのまま流れで真希の後ろに控える形の雨里や真依へと目を向ける。

「なんや、乙骨君、恵君ときて、次はその子かい。ホンマ、尻の軽い女やなあ？」

「ッ、オレを呼んだのは、直毘人さんです。真希先輩は関係ありません」

嘲てくる直哉に対して、いい加減我慢の限界だったのか真依の制止を振り切って、雨里は一步前へと踏み出して真希を庇うように乗り出していた。

睨み合う形となるのだが、揺れる右袖を確認した直哉はそんな彼を鼻で嗤う。

「ハンツ、その年で隻腕とは、ホント難儀やなあ？それに、ご当主様ももう終わりや。高々呪霊の討伐で腕一本落として、義手で補つとるよに見えて全盛期にはもう程遠い。隠居させたらな。君も、そう思うやろ？」

「……生憎と、オレは困ってませんから。何より、さつきも言ったようにオレを呼び出したのは現当主ですのぞ」

暗にお前など知らない、という含みを持たせた雨里の言葉に、直哉の目線は鋭く、冷たく変化していった。

両者の感想と言えば、面白くない。

直哉からすれば、雨里は得体のしれないガキであり、同時に自分にも噛み付いてくるような生意気な輩。

雨里からすれば、直哉は感じの悪い金髪。真依なども割と憎まれ口をたたくが、彼女よりも圧倒的に可愛げが無く、内側の汚さが滲み出ている分質が悪い。

要するに、相性が悪いのだ。ハッキリ言って相容れない、反りが合わない。

流石に、この場でおっぱじめる気は無いらしいが、それでも険悪な空気が部屋に満ちていく。

「——行くぞ」

その空気を絶ったのは、真希だった。彼女は、雨里の手を掴むと引き摺る様にして部屋を後にする。

この場で事が起こらなかったのが、幸運なのか不運なのか。少なくとも、今は誰にも分からない。

\*

呪術界において、御三家は特別格式ある存在として扱われている。

だが、一括りに御三家と言ってもその中身は大きく異なっていた。

無下限呪術に六眼を持つ五条悟がワンマンであった五条家。上層部と密接な関係で、家格と格式を重んじる加茂家。

そして、強力な術式を持つ術師を多く輩出し、戦闘系に特化していた禪院家。

過去形であるのは、相伝術式である十種影法術は外に流れており、今いる術者の大半が1級未満の者ばかりであるから。特別1級の術者に関しても数える程度。分家に関しては2級程度が居れば良い方で話にならない。

故に、強力な術式持ちにはアクションを掛けるのだ。

「数日ぶりだな、小僧」

「ええ、まあ……義手、着けたんですね」

「無いよりは、マシ。程度のものだがな」

着流し姿で、一段高くなった上座に腰掛ける直毘人を前にして、雨里には緊張の様子は見られない。

「早速だが本題だ、小僧。お前、嫁を貰う気はあるか？」

「……………は？」

「別段珍しい話でもあるまい。どうだ？そこの、真希、真依のどっちか片方でも——」

直毘人がそこまで言った所で、思考の追いついていなかった雨里の蟬谷にビキリ、と青筋が浮かぶ。

「——お断りします」

きっぱりと言い切った雨里のその目には、傍目から見ても分かるような怒りの色が見て取れた。

事実、彼は虫の居所が悪い。先ほどの直哉とのやり取りも尾を引いている事は確かだが、何よりこの僅かな時間で呪術師の家における女性の扱いというのが分かってしまった、というのもあった。

だが、敵もさるもの引つ掻くもの。古狸の様な老獪さを有した直毘人にしてみれば、年若い青い怒りなど受け流せるものでしかない。

「なんだ？こいつらじゃ、不満か？なら——」

「そうじゃありません。真希先輩にも真依先輩にも、相手を選ぶ権利

があります。いくら身内でも、勝手に決めて良い事じゃない」

「……フツ、青いな」

「青かろうと何だろうと、ここは譲れません。古臭い考えに巻き込まれるのは、ごめんですから」

呪術師の大家。それも御三家の当主に対して、お前らの考えは古臭い、と面と向かって批判できるようなものなどどれだけいるだろうか。大抵の場合は、腹の内に抱えるばかりで吐き出す事など出来ずに腐っていくものだが。

そして、直毘人は目の前の少年があの日渋谷で初めて見た時より大幅にレベルアップしている事にも気が付いていた。

協力した上ではいえ、特級呪霊を最終的に祓つたのは彼だ。その上で、祓つた呪霊よりも数段強い呪霊と真正面から戦い、右腕を失えども地獄となった渋谷を最後まで戦い抜いた。

反転術式が使える事、術式反転が可能であることは既に調べがついている。その上、宿した術式そのものも強力であり、何より彼は一種の天涯孤独の身でもあった。

一般家庭に生まれた突然変異。調べた範囲では先祖にも術師は居らず、天与呪縛を理由にしても何故ここまで者が生まれたのか説明がつかないほど。

果たして、直毘人は怒らなかつた。それどころか、上機嫌に酒を飲み始める始末。

「……ぶはっ……くくっ、面白いなあ小僧。普通は、御三家に取り入れると喜んで領くというのに」

「生憎と、権力闘争には興味が無いんです。そもそも、どうしてそうまでして権力が欲しいんですかね」

「さあてなあ……お前も、権力の甘い汁を啜れば分かるのではないか？」

「興味湧きませんね……それはそうと、お話はそれだけですか？」  
「まあな」

「——なら、私らの話だ」

直毘人が頷いた所で、真希が切り込む。取り出したのは、天元に渡

された橋渡し。

「ジジイ、アンタが見届け人だ」

「その呪具がお前たちの隠し玉か？」

「私と真依の分だ。この冴えてる後輩の発案でな」

「ほう……」

興味が向いたのか、直毘人の目が再び雨里へと向けられる。

雨里自身も頭を掻くと、真希と真依に視線で説明すべきか問い、そして改めて前に向き直って口を開いた。

「真希先輩の不完全な天与呪縛を完全にできるかもしれない方法です。机上の空論の域を出ていませんけど」

「天与呪縛の完成、か」

「はい。その呪具を使って、真希先輩の呪力を根底から全て、真依先輩へと譲渡します。いや、返還でしょうか……とにかく、呪力を完全にゼロにします」

「それが、呪縛の完成、か。成功率は？」

「分かりません。何分、前例がありませんから」

「実験か……面白い。見せて見ろ」

もつと突っ込むところがあつた筈なのだが、直毘人が示したのは知的好奇心。

そも、彼は別段血に固執している訳ではない。根底にあるのは、強い事。ただ、それだけだ。

そうして、歴史的な一歩がここに刻まれる。

真依の右手首と、真希の左手首にそれぞれ呪具が取り付けられる。その瞬間、二人だけが感じ取れた繋がりのようなものがそこに形成された。

同時に、二人は成程と内心で頷く。呪力が非術師並みの真希ですから、自分の根底から全てを引き抜かれるような感覚を覚え、同時に真依もまた何かが自分の内へと流れ込んでくる感覚を感じ取っていたから。

程なくして、外野の雨里と直毘人にも明確な変化を感じ取る事が出来た。

(この雰囲気、あの時の……………)

(甚爾と同じ、か……………!)

それは、術師としての立ち昇る呪力の様な威圧感ではなく、純粹な生物としての格の違いとでも言うべきか。

これにて、『陽』か完成に至る。人間の持ちうるポテンシャルを逸脱した存在へ。

そして、その完成に合わせて『陰』もまた完成へと至った。

「……………これ、本当に私の呪力……………?」

自分の両手を見つめる真依は己の内側に渦巻くような呪力に目を見開いていた。

彼女の考えとしては、ただ真希の持つ呪力を貰うだけ、の筈だった。その総量にしたって非術師並みである。であるのなら、仮にその分が増えても精々が呪術師としての平均か或いはそこよりも僅かに低い程度になると考えていた。

だが、今の彼女の内にあるのは平均値よりも更に上の呪力。

呪術は足し引きが存在する。帳などの結界系が分かりやすいが、要は利を得る為には、相応の対価が必要になるという事。

ただ今回の場合は特殊。双子であるという事がこの結果を齎していた。

呪術的に見て、双子は一人の人間とされる。そして今、片割れである真希はフィジカルギフトの完成系として成立した。

その真希の完成に釣り合うようにして、真依もまた完成したのだ。今の彼女は、弾丸一発で鼻血が出る程の貧弱な呪術師ではない。寧ろ、弾丸ならば給弾ベルトをマシンガンで射撃しながら補給し続けることも出来るだろう。

これは、純粹に呪力が増しただけではない、呪術師としてのセンスもまた真希のフィジカルに引張られるようにして増した結果。

ニヤリ、と真希は頬を歪める。

「改めて、今ここで宣言するぜジジイ。私は……………いや、私らは禪院家当主になる」

「……………ぶっはっはっは!面白い、女だてらに当主になるか!それも、二



人揃って！ぶっはっはっは!!こりや、面白い！」

「はんっ！呪術的に見て、双子は一人なんだろう？なら、何も間違っちゃいねえよ」

不敵に笑う真希に対して、直毘人は更に呵呵大笑。

とある男には芽生える事の無かった反骨精神。苦境であろうとも這い上がろうとする精神性。これこそが、真希の何よりも強みであった。

一頻り大笑いした直毘人は、やがて頷く。

「良いだろう。今の貴様を見れば……くくつ、奴を思い出すな」

「それって、禪院甚爾さんですか？」

「知っていたか……いや、真希の結果を見れば知っていて当然か」

「その人は、今どこに？」

「さて、な。あ奴は、心が弱かった」

「それは……直毘人さんたちがへし折ったのでは……」

「その程度で折れるのならば、そもそも術師としてはやっていけん」

「……………」

度合いはどうあれ、そういわれてしまえば雨里もそれ以上は言えない。

呪霊との戦い、呪詛師との戦い、呪術師としての在り方。心が弱くはとでもではないが、進んでいく事など出来はしない。

無論、禪院のやり方が正しいかと問われれば否だ。呪力の無い人間を呪具も持たせずに呪霊の群れに放り込むなど鬼畜畜生のやり口でしかないのだから。

とはいえ、真希と真依が当主戦争に名乗りを上げた現状、そしてここは魔窟の禪院家だ。

壁に耳あり障子に目あり、とはよく言ったもの。

「ジジイ、格納の呪霊は残ってるか？」

「忌庫の中だろう。残っていれば、な。なんだ、欲しいのか」

「無いよりは、ある方がマシだからな。んじゃ、忌庫の鍵くれよ」

「それは——お前たちが、勝てば、の話だな」

「は？」

嗔う直毘人。その姿に疑問を覚えた直後、真希は二人の首根っこを掴んで部屋から飛び出していった。

直後、家屋を突き破る様にして地面から突き出すのは巨大な岩石で構成された二本の腕。同時に庭に降り立って靴を履き直した三人を取り囲む黒い面頬で顔の下半分を隠した揃い姿の男たち。

「……嵌められましたかね」

「いや、ジジイのやり口じゃねえ。多分、他の奴らだ」

多勢に無勢でありながら、雨里と真希は冷静に場を把握していく。自然と真依を守るような立ち位置になるのは、彼女が戦いを恐れているから。

禪院直毘人は知っていた。どうにも周りが何やら画策している事を。

自分を当主から引きずり降ろそうとする動きも把握したうえで放置していた。その上で、雨里を呼び寄せ、彼が来るのならば真希も来るだろうという事も織り込み済み。

割と気に入っている少年を家に取り込むため。その下準備としてこの流れを利用するつもりだった。

真希と真依の件は完全に予想外であったが、計画にはそれほど支障は無し。何より、二人が当主となれば、自然と呪術高専の面々ともつながりができ、禪院にとつても利点になるのだから。

呪術師は手段を選ばない。結果さえよければそれで良いのだから。

禪院家は独自の戦闘集団を有している。

一つは、軀俱留隊。術式を持たない、禪院家男児が入隊を義務付けられ、日夜鍛えている隊だ。因みに、真希も過去にこの隊に籍を置いていた。

もう一つは、炳。こちらは、高専資格条件で準1級以上の実力を持つとされる術師たちで構成されており、その戦闘力は中々の物。

更に、上記の炳の条件を満たしていないが術式を持つ者たちを灯と呼ぶ。

それぞれが得物を握り取り囲む軀？留隊の隊員たち。そして、炳の面々は屋根の上からその状況を見下ろす形をとっていた。

「どうします、真希先輩」

「忌庫の中に用がある。全員ぶちのめすのが早いだろ」

危機的状况に見えるこの場において、しかし囲まれている真希と雨里には一切の緊張は無かった。

単純な話だ。囲まれているだけで、危険だとは二人揃って思っていないから。これは油断などではなく、純粹な事実。

「……でも、あの金髪の人は真希先輩にロックオンみたいですけど」

「なら、ちようどいいだろ。私は、直哉を潰す。そうすりゃ、当主候補の筆頭は私になって、ついでに力も示せる」

「それじゃあ、露払いは任せてください。真依先輩にも、指一本触れさせませんから」

明らかに舐め腐った態度。直後に場が動き出す。

真希の姿がその場から掻き消えたかと思えば、現れるのは屋根から彼女を睨むようにして見下ろしていた直哉の前。

目を見開く彼だが、直ぐに術式を行使して二人の姿はその場からすさまじい勢いで移動していった。

一方で残った雨里と言えば、彼は着ていたコートを脱いでいるところ。そして、脱いだそれをその場に座り込んでいる真依に羽織らせ

「着ておいってください、真依先輩。冷えますからね」

「ッ、大丈夫なの？」

「真希先輩にも約束しましたからね。まあ、見ていてくださいよ」

制服の右袖を風に揺らす雨里は、そう言つて改めて囲む者たちへと向き直る。

真希と直哉を追つたものはどうやら居ないらしい。もつとも、追つた所で直哉の術式は投射呪法。加勢するどころか置いて行かれるのが関の山。真希にしたつて、現状の彼女のフィジカルに追いつけるものなどまず居ない。

とはいえ、この場に残つたからといって、勝てる見込みは0なのだ。が。

「とりあえず、場を作らせてもらいますね」

言うなり、雨里はその場で右足を軽く持ち上げると真下へと振り下ろした。

瞬間、踏みつけられた地面は一瞬の内に凍り付き、同時に彼の周りを囲んでいた軀？留隊の隊員たちの体、首から下を氷の中へと閉じ込めてしまう。

あまりの光景に真依は、羽織らされたコートの前襟を掴んで抱き込む様に縮こまる。

この時点で、軀？留隊の隊長を除いて隊はほぼ壊滅している。呪力を持っていようと術式が無ければ精々が3級から準2級程度の実力だ。そもそも雨里の敵じゃない。

だが、凍り付いた庭の光景に柄の面々は動いていた。

凍った庭に降り立ち、両手を地面につけるのは、禪院長寿郎。初撃の岩石の手は彼の術式による攻撃だ。

しかし、

「ッ……!?」（岩盤まで凍り付いておるのか!?!）

その対策を、既に雨里は終えていた。

彼の凍結は地中深くにまで到達しており、どれだけ長寿郎が動かさうとしても凍り付いた岩盤はピクリとも動かない。

この間に、雨里はというと周りを囲む形で凍り付いた？留隊の隊員

たちを氷漬けのまま、これまた氷の巨大な手でつかんで摘み取り遠くへと放り投げていた。

彼には殺意はない。そも、禪院家には呼び出されてきただけなのだ。無益な殺生を楽しめるような性格ではなかった。

しかし、これを隙と見たのか、禪院蘭太が動く。

彼の術式は、見ている対象をその場に縫い止め、動きを封じるというもの。

そして攻撃を仕掛けるのは、禪院甚壺。彼の術式は、体術などの打撃に合わせて呪力による拳などを形成し、雨あられの様に降らせたりすることが可能な物。創り出される拳などもかなり大きく、上から下へと放てば隕石が降り注いだかのようなありさまとなる。

1級呪霊は愚か、そこらの特級すらも祓える、ないしは手傷を負わせる事が可能なコンボだ。

だが、彼らは勘違いをしている。

「——蒼ノ天蓋」

第一に、雨里の術式にはモーションが必要ない。

その場に突っ立ったままの雨里の右手がいつの間にか蒼い氷河で形成されており、同時に真依含めた二人の頭上を覆うようにして氷河の天蓋が形成される。

ぶつかり合う拳と氷。派手な衝撃音と、粉塵が舞った。

「ッ、まだだ！甚壺さん！ぐあっ!？」

その派手な惨状の中で、蘭太の悲鳴。

気付けば、彼の足に氷が這っており、それは文字通り瞬く間に彼の全身を覆ってしまう。時を同じくして粉塵が晴れば、そこにあるのは無傷の氷の天蓋。

雨里は一步もその場から動いてはいない。動く必要が無い。

そこに迫る黒い影。

——術式解放 焦眉之赳

炎をちらつかせる鯉口を切った刀を構えた状態からの懐に飛び込んでの居合。直毘人の弟であり、真希と真依の父親である禪院扇が突っ込んできていた。

最速の居合。同時に撒き散らす炎は容易に対象を焼き尽――

「――温い火ですね」

聞こえた声。そして目の前の光景に、扇はその目を見開いた。

彼には、自負がある。ある一点を除いて、兄である禪院直毘人に劣った事など一度も無い、と。

その一点とは、即ち子の出来。

片や相伝の術式を継ぎ、当主候補筆頭に挙げられる直哉。片や忌み子である双子の上に女子。加えて片や呪霊も見えない出来損ないのフィジカルギフトと呪力が術師の最低限レベル。

扇の語る、自らの唯一の汚点。裏を返せば、彼は自分自身にそれだけの自信と自負があったという事。

事実、特別1級術師でありその術式のみならず、剣技なども含めて術師として高水準で纏まっている事だろう。

故に目の前の光景に理解が追いつかない。

扇の見立てでは、居合のままに雨里の首を刎ね飛ばし、続く二の太刀で真依を切り殺すつもりであった。が、その一手目。彼の居合は、至極あっさりとして雨里の右手に受け止められていたのだ。

特別な事は何もない。ただ単に、扇の一振りが雨里の動体視力に劣っていた、それだけの事。

それだけではない。

「こ、れは……!?!」

異変は刀身から。

なんと扇の発する炎ごと、その体は氷へと包み込まれていくではないか。気付けば、首から下は完全に氷の中。

瞠目する扇だが、雨里にしてみればこの程度の炎などぬるま湯に等しい。特級呪霊の炎に巻かれたのは伊達ではない。

そして、雨里は気が付いた。どうにも、扇は真依を気にしている。更に、その気に掛け方は恨みのような感情が募ったものであるという無視のしようが無いもの。

「……真依先輩のお知合いですか？」

「……父親よ」

「は？……今、オレだけじゃなくて、真依先輩まで斬ろうとしたま  
したよね？」

剣呑な色が、雨里の目に宿った。それこそ、先程までは無かった殺  
意のようなものが見え隠れしている。

だが、自尊心と同時に劣等感の塊のような男である扇は怯まない。  
「汚点を拭って何が悪い。ソレらさえ居なければ、私が当主となつて  
おったのだ……！」

八つ当たりともいえる怒りを吐き出す扇。

しかし、彼とは別に周りの空気は一気に冷え切り始めていた。感じ  
ていないのは、真依を睨みつける扇のみであり今この場で動ける者た  
ちは全員がその寒気を感じ取っている。

その原因は、雨里。軋むのではないかと思えるほどに握りしめられ  
た左拳と、キュツと絞られた瞳孔、僅かに逆立った髪がその内面の荒  
れようを表していた。

「貴方が、当主……？ハッ！笑わせないで下さいよ」

普段の彼らしくない嘲笑を多分に含んだその嗤い方。だが、その目  
は、表情は、一切笑ってはいない。

「他人を見下して、その上肉親の、自分の娘すらも汚点呼ばわりする器  
の小さいお前が、当主？笑わせるなよ、ド三流」

ドスの利いた地を這う様な低い声。そこで初めて、扇は目の前のク  
ソ生意気な子供の目を見て、昔覚えた恐怖を呼び起こされる事とな  
る。

それは、この家に居たフィジカルギフトとはまた別の物。数百  
年に一人の逸材にして、現最強の呪術師に覚えた恐怖と同じもの。

無論、今の雨里と彼は雲泥の実力差が存在している。存在している  
が、その片鱗は既にあつた。

そして、ソレは始まった。

氷で拘束されていた蘭太、長寿郎、そして扇が解放される。同時に、  
昂る呪力の奔流。

両手の薬指と小指を噛み合わせ、親指人差し指中指のそれぞれ指の  
腹を合わせ印を組む。

その姿に、甚壺が阻止に動くが、距離もあり、何より遅すぎた。

「領域展開」

世界は一気に塗り替えられる。

「零下八寒大極殿」  
れいかはつかんだいごくでん

染め上げるのは一面の銀世界。

白、白、白。そして、群青。

領域の主である雨里の背後にそびえるのは、氷河によって形成された巨大な大極殿。

呪術戦の極致とされる領域展開。その莫大な呪力消費と、領域使用後一時的に術式が焼き切れてしまうというデメリットが存在するが、引き入れればまず勝ちが確定する。

対応するには同じく領域を展開するか、術者本人を潰す、或いは御三家秘伝の落花の情位の物か。

そして、雨里の領域は引き入れた時点で勝敗が決するタイプのものだった。

領域に引きずり込まれた瞬間、焔の面々は落花の情を発動していた。

だが、

「な、に……!?!」

「無駄ですよ。ここでは、あらゆる全てが凍結していく。そも、その技は既に見ました。高々、その程度の呪力で体を覆う位で防げると思わない方が良い」

現実は無情だった。

どれだけ呪力を纏っても体の末端から凍結が徐々に徐々に、まるで真綿で首を締めるかのように這い上がって来るのだ。それどころか呪力そのものすらも凍結し始めている。

恐ろしいのが、未だに雨里の後方で座り込んでいる真依は、少し肌寒い程度で凍結の一つも受けていない事だろうか。

何より、雨里はこの領域の真骨頂を未だ発揮していない。裏を返せば、ただ領域を展開するだけで禪院の精鋭（笑）に勝てるという事。「殺しはしません。ですが、少なくとも、貴方は術師として終わっても



らう」

雨里が指さすのは、扇。

今も炎によつてどうにかこうにか凍結に抗おうとしているのだが、その炎そのものが凍らされるという現状、既に体の六割は氷像と化していた。

そして、向けられた氷河の指先。

直後、扇の両手足が付け根近くより粉々に砕け散った。

「内臓、各種器官を生存できる最低限度まで機能を低下させる。今のお前は、人でも呪術師でもない、強いて挙げればミノムシだな」

淡々と語る今の彼には、一切の慈悲が存在しない。

殺しはしない。しないが、しかし生き地獄を味合わせる。

首から下を氷像にされた甚吾は、恐らく今生でもつとも強い恐怖を植え付けられていた。それは、蘭太、長寿郎も同じくだ。

凍り付いた体は、領域の主である少年のちよつとした気まぐれで粉砕される事になる。その上、主要な内臓器官の機能を冷却して低下させ、治癒不可にもしてしまうオマケ付き。

加えて、それら全てが術式解放を行わずに行われているのだから、恐怖も一入だ。

強者に対する、恐怖。それを年端もいかない子供に植え付けられたという事実。

覆す事が出来ない現実。

この日、御三家の<sup>神</sup>一角は一人の少年に敗北を喫した。

禪院の精銳が白い地獄に沈んでいた頃、少し時計の針を巻き戻せば長寿郎が組み上げた鍛錬場にて高速と剛力がぶつかり合っていた。

いや、それは正確ではないか。

(偽物が……！)

(やっぱり、種があるタイプの高速移動か)

手数で押そうとする直哉と、ソレを真正面から捌いていく真希。

投射呪法は、一秒間を二十四分割し、視界を画角としてコマ打ちの要領で動きを作り、その作った動きを後追いさせるというもの。相伝の術式とされているが、その歴史はそれほど古いものではない。精々がアニメなどが日本で放映され始めた辺り程度からの物。

制約としては、過度に物理法則や軌道が無視した動きは作れない。

特筆すべきは、やはりその圧倒的なまでの速度だろう。

予め作った動きを後から修正する事は出来ないとはいえ、一秒間に事が行われるのだ。発生する速度は常人の目に留まるものではない。

一方で、完全に呪力から脱却した真希はといえば、端的に言って超人と化していた。

肉体強度は文字通りの“鋼”。更に馬力は前とは比べ物にならないほどに上がっており、動体視力に反射神経、五感含めて完全に振り切れていた。

故に、見切れる。相手がどれだけ速かろうとも、真希も真希で万全だ。

何より、

「！」

止められ、その瞬間に吹き飛ばされようともその体の痛痒は蚊に刺された程度。

如何に直哉が速度を増しても、真希の積み重なるダメージは大したことが無い。それどころか、徐々にだが対応し始める始末。

しかし、直哉は気付かない。その目には、過去への憧憬というフィルターと、散々見下してきた女という存在の二重のフィルターが掛け

られているから。

投射呪法は、一度に出せる速度には上限がある。だが、重ね続ければその速度は増していくのだ。

要は、ゲームで言うところの加速し続けるダッシュ板に乗り続けているようなもの。その速度は亜音速にも到達する。

直哉も直毘人も、速度を重視する術師だ。彼らにとって速度こそが、力。亜音速から繰り出される打撃は、容易く人体を破壊できる。

だがしかし、直毘人には有って、直哉には無いものが今回の勝敗を分ける事になる。

仮に、直毘人が今の真希と戦う事になったならば、最大限の警戒をもって特級呪具でも使ってその首を術式に慣れる前に刎ね飛ばしていた事だろう。彼は、直哉の様に素手への拘り等無いのだから。

そも、得物を見えるように持ち運ぶ者たちを馬鹿にする直哉ではあるが、それはどんな相手でも一瞬で倒せる者が言うべき事だ。主に、五条悟。

一部の者しか知らないが、直哉は一度油断が祟って東京で脹相に敗れている。

彼自身は、油断しているつもりはない。つもりはないが、フィジカルギフテッド相手に術式有りとはいえ素手で戦うなど無謀も良いところ。

仮に、直哉と同じ手段で戦おうとするならば、五条の無下限術式の様な、突破が基本不可能なもの。或いは雨里や漏瑚の様に、人体など一瞬で炭化させるような火力をもって焼き払う、もしくは宿儺レベルの切断能力のある一撃で首を刎ねる位か。

まあ、つまり――

「偽も、っ」

「知るか。私は、私だ。重ねてんじやねえよ」

カウンターのパンチ一発で、直哉は沈んだ。

顔の右半分を潰されるような形で岩盤に叩きつけられる事となったそんな彼にしゃがみ込み、真希は首筋に指を這わせる。

幸いというべきか、手心を加えたつもりはなかったが弱い脈拍が伝

わってきた。

勝敗の要因は、目の前の戦闘に集中していたかどうか。

直哉は、彼女を通して憧れた存在を見ており自尊心が膨れ過ぎていた。一方で、真希は目の前の術式の攻略に執心。結果的に見切った上で一発KO勝ち。

ただ、一発で終わらせた真希の方は若干の消化不良気味でもあったりする。

彼女は過去に、直哉にボコられていた。いや、そもそも禪院家の面々には昔から酷い扱いを受けてきた。

そんな相手が一発。強くなり過ぎたと実感するには、彼女は傲慢ではなかった。

仕方なく、伸びた直哉を肩に担ぎ上げた真希は帰路に就く。

後輩が負けるなどとは思っていない。寧ろ、今の自分以上に得体のしれない存在というのが件の後輩であるのだ。

もつとも、だからといって排除するつもりは毛頭ない。寧ろ、感謝すらしている。

「……派手にやってるな」

一際強くなった冷気を遠く感じ取りながら、真希は薄く笑みを浮かべる。

事態は深刻だが、しかし戦力としては悪くない。

後は忌庫の中を漁るのみ。

\*

「……ふう……この、呪力消費は疲れますね」

左腕を回して伸びをする雨里は、言葉の内容とは裏腹にそれほど疲れしている様子は見られない。

ただ、

「くっぴんっー」

寒そうに体を震わせるぐらいか。

この時期は、雨里にとつて本当に地獄であつた。冷える体に加えて、外気温が低すぎるのだ。

そんな震える彼の肩に、コートが掛けられる。

「終わったのなら、返すわ」

「あ、ありがとうございます、真依先輩」

「別に……それにしても、貴方領域展開なんてできたのね」

「あー……まあ、何度か未完成の領域には会いましたし、渋谷で完全な領域展開にも巻き込まれましたから」

「……普通、そこまで巻き込まれたら、生きてないんじゃないかしら」

呆れる真依だが、実際問題彼と同じような目に遭えば、九分九厘の術師は生き残れない。

少年院の特級、交流会での襲撃、廃遊園地での特級相当、そして渋谷の特級四連戦。寧ろ何で生き残っているのか、と言われてしまいうな内容。

それでも彼は生き残つて、そしてここに居る。腕一本の犠牲を払つたが、裏を返せば命を落とさずに済んだのだ。

和やかに会話する二人の一方で、氷に閉じ込められた状態の禪院家の炳の面々と言えば呪力の供給が途切れてただの水へと戻つた氷河の中でどうにか抜け出そうと四苦八苦していた。

高々氷、と思われそうだが、そうではない。雨里の創り出す氷というのは、基本的に空気などの不純物がほとんど含まれる事のない高純度のものだ。

不純物が少なく高純度であるという事は、それだけその氷は中身が詰まっているという事。中身が詰まっているという事は、それだけ硬いという事。

呪力を使えるのならば、容易く割れそうな物だが氷は完全に体に密着している。密着しているという事は、指先に至るまで体を動かせる余地は0という事になる。余地がゼロなら、反動や助走と言った、自力とは違う力に頼る事も出来ない。そして、自分を中心として厚さ一メートルもありそんな純度の高い氷を身動きで壊せる者などどれだ

けるだろうか。

そんな中で、一人絶望の淵に立っている者が居た。

「……」

禪院扇だ。

結論で言えば、彼は精神の支柱をポツキリと折られてしまっていた。

高々子供一人。それも腕を失ったような者。敵はおろか、路傍の石も同然な歯牙にもかけない存在である筈だった。

だが、蓋を開けてみればどうだろうか。見切られる筈の無かった居合は一手目であっさりと止められ、鍛えてきた筈の術式は、相性的に勝てそうな氷の前に敗北。逆に氷漬けにされ、加えて手足を砕かれ、今では息をする事すらも苦しい始末。

呪力を練ろうとすれども、呪術師として成立できるだけの呪力が逆に体を蝕んでくる。

呪術師として、完全に終わった。それどころか、人としても。

「ぶっはっはっは、終わったな扇」

黒目がちな目が影を落とす中、彼に声を掛けたのはついぞ追いつけることのなかった兄だった。

禪院直毘人が見るのは、隻腕の少年。

渋谷での初体面からの、特級との戦闘の際にも年の割にかなり洗練された術師だとは思っていたのだ。術式の強力さのみならず、術式をフル稼働し続けてもなかなかガス欠しない呪力量。

加えて今回。領域展開すらもモノにしているというのなら、身内に引き抜きたいというのも当然だった。それも、今はライバル五条家が沈黙状態。もう片方の御三家である加茂家にしたって、基本は上層部と懇ろ。強力な術式持ちが現れても手を伸ばすのが遅い。

一方で、禪院家というのは、強力な術式をとりこむ事に抵抗がない。何なら、強ければ相伝となる。

幸いと言うべきか、雨里と双子が友好的な繋がりを有している。

直毘人が心算で算盤を弾いていけば、役者の一人もこの場に帰ってきた。

「よお、京平。真依にケガさせて無いだろうな？」

「おかえりなさい、真希先輩。ええ、勿論。擦り傷の一つもありませんよ。それで……そちらは？」

「ん？ああ、忘れてた」

ニヒルに頬を歪めていた真希は、まるで荷物でも放るように肩に担いでいた書生姿の男、直哉を庭へと投げ捨てた。

ぞんざいな扱いではあるが、小さく呻き声が聞こえる事から、生きている事が雨里にも分かった。

「それじゃあ、行くぞ。柄の奴らは片付けたんだろ？」

「全員、か分かりませんが。少なくとも向かってきた人たちは撃退しましたよ」

「よし。なら……おい、酔っ払い。忌庫を開けるぞ。直哉に勝ったんだ。文句ないだろ？」

「ああ。好きにしろ」

酒瓶から直飲みする直毘人。彼の機嫌が良いのは、口先だけの柄含めた戦闘部隊（○）引き締めが出来たから、と言うのもある。

再三再四ではあるが、御三家と言うのは傲慢だ。

五条悟ワンマンの五条家。上層部と懇ろな加茂家。そして、戦力という点で抜きんでいた禪院家。

歴史の長さというのは、腐敗を生む。それも、なまじ権力というものを持ってしまうば猶の事。

現在の禪院家、のみならず、御三家には五条悟を除いて特級呪霊に對抗できる術師はまず居ない。それどころか、1級としての術師の実力に到達しているのか微妙な者も珍しくなかった。であるのに、権威意識だけは甚大で、そこに実力がついてこない。

禪院家で言うのなら、扇や直哉がここに該当するだろう。なまじ才覚が中途半端にあるせいで、自分が強いと勘違いしてしまうのだ。

そういう人間は、向上意識というものに欠け、更なる組織の腐敗を呼び込んでくる。

この敗北は、必然だった。

足掻いても、無様でも、只管に進む者たちに、停滞した輩に負

ける道理など無いのだから。